

『徒然草』の漢籍受容と漢訳・継承

黄 昱

博士（文学）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

日本文学研究専攻

平成27（2015）年度

平成二十七年博士學位申請論文

『徒然草』の漢籍受容と漢訳・継承

黄
昱

目次

序章	1
第一部 『徒然草』の漢籍受容―間接的な受容方法―	8
第一章 『徒然草』における漢籍受容の方法―『白氏文集』を例に―	9
第二章 『徒然草』における漢籍受容の方法―第二十五段「桃李もの言はねば」をめぐって―	45
第三章 灯下読書の和と漢―『徒然草』第十三段をめぐって―	70
第二部 異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳	91
第一章 前期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳	92
第二章 後期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳	118
第三章 漢訳される『徒然草』の方法―近世期兼好伝との関わり―	133
第三部 近現代中国における『徒然草』の中国語訳	149
第一章 近現代中国における『徒然草』の中国語訳	150
附章 資料：周作人「『徒然草』抄」と郁達夫「『徒然草』選訳」	172
終章	181

序章

鎌倉時代に兼好法師によって著された『徒然草』は、和文脈で書かれた随想的文章ではあるが、中に『文選』『白氏文集』といった漢籍の書名が見え、その文章表現が引用されるとともに、記される感情や思想などにも漢籍からの影響が指摘されている。作者の兼好法師が「ひとり、灯のもとに」（『徒然草』第十三段）ひもとくとき、親しんだ書籍の中、つまり、兼好法師の教養の基盤に漢籍があったことは、江戸時代に多く著された『徒然草』の古注釈書に指摘されている。

たとえば、『徒然草』最初の注釈書である、慶長九年（一六〇四）刊行の『徒然草寿命院抄』（以下『寿命院抄』と略す）に、「兼好得道ノ大意ハ、儒釈道ノ三ヲ兼備スル者歟。草子ノ大体ハ、清少納言枕草子ヲ模シ、多クハ源氏物語ノ詞ヲ用。作意ハ、老仏ヲ本トシテ、無常ヲ観シ名聞ヲ離レ、専ラ無為ヲ樂ン事ヲ勸メ、傍ラ節序ノ風景ヲ翫ヒ、物ノ情ヲ知ラシムル者乎」と、『徒然草』は『枕草子』『源氏物語』の形式と表現を用いながら、その作意のもと老仏にあると述べている。

また、林羅山による『徒然草』の注釈書である、元和七年（一六二一）成立の『野槌』に「此草紙の言葉大かた枕草紙。源氏

物語の躰をうつせり。兼好は。天台の教を学ひて。又老荘の道をもうかかふと見えたり」と、『寿命院抄』と同じように、『徒然草』の思想は老荘によるところがあると述べている。

これらの古注釈は思想面の影響関係を指摘しただけではなく、『徒然草』が依拠した漢籍の典拠についても詳細な分析作業を行った。このような出典分析の作業は近代以降も継続されている。日本古典文学大系（西尾実校注 一九五七）、新日本古典文学大系（久保田淳校注 一九八九）、日本古典文学全集（永積安明校注・訳 一九七一）、新編日本古典文学全集（永積安明校注・訳 一九九五）などの古典全集類に『徒然草』の全文に対する注釈が見られるほか、安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店 一九六七）、三木紀人『徒然草全訳注』（講談社 一九八二）、久保田淳「徒然草評釈一〜三四三」（『国文学解釈と教材の研究』二三・六〜五四・九 一九七八・五〜二〇〇九・六）といった集大成的なものもある。また、川口久雄「徒然草の源泉―漢籍」（『徒然草講座』第四巻 有精堂出版 一九七四）、古沢未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」（『日本漢文学史論考』岩波書店 一九七四）のような総論的な論文もあり、出典の指摘が詳細

に行なわれてきた。これらの研究は、『徒然草』の文章表現の拠
つて立つ出典を検出する基本作業を行い、出典研究の第一歩と
して重要な意義を有している。しかしながら、従来行われてき
た典拠の指摘や受容方法の分類だけでは、『徒然草』における漢籍受
容の意図や効果、また作者である兼好法師の知的基盤を探るの
には不十分であり、漢籍との影響関係が認められる箇所につい
てより詳細に考察を行う必要がある。

そのほかに、『徒然草』に大きな影響を与えた『文選』『白氏
文集』『莊子』など、個々の漢籍を取り上げた論考も少なからず
見られる。例えば、金文峰『徒然草』の研究―『白氏文集』
受容考(一)―(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』十二 二
〇〇一・十一)、同『徒然草』の研究―『白氏文集』受容考(二)―
(『岡大國文論稿』三十 二〇〇二・三)、同『徒然草』におけ
る『文選』引用の諸問題―(『岡大國文論稿』三十六 二〇〇八
・三)、陳秉珊『徒然草』第七段と『莊子』再考―「夏の蟬」
をめぐって―(『詞林』三十八 二〇〇五・十)、同『徒然草』
第三十八段における「莊子」受容考―「智」を手懸りとして―(『語
文』八十七 二〇〇六・十二)、同『徒然草』第九十七段にお
ける「莊子」再考―(『詞林』四十一 二〇〇七・四)といった
論文である。これらの先行論文において、『徒然草』の漢籍受容

の具体例を考察したが、『徒然草』に取り入れられた漢籍の文章
表現は分散しており、その中に原典に辿り着けることが難しい
ものも多く含まれている。このような状況の中で、原出典だ
けに焦点を当てて出典研究を行うのは、『徒然草』の文章表現の
形成過程を明らかにするには不十分であり、本書の漢籍受容
を考える上で方法論をまとめる総論的な研究は必要と考える。
よって、本論文は江戸時代以来の研究によって指摘された漢籍
と『徒然草』の関係について再検討を行い、書物としての漢籍
が舶載された後の日本における受容の形態とその過程における
変容の状況をも視野に入れ、『徒然草』が先行する作品を受容す
る方法とその表現効果を分析し、『徒然草』という書物の内部世
界の解明を試みた。

『徒然草』の漢籍受容について、このような日本において変
容した漢籍の表現に注目した研究は村上美登志の『徒然草』と
和製類書―もう一つの漢籍受容―(『伝承文学研究』四十 一九
九一・十二)と『徒然草と類書』(『国文学解釈と鑑賞』六十二
・十一 一九九七・十一)が見られる。氏は和製類書は『徒然
草』の漢籍受容を考える際に看過できない存在であると指摘し
ている。また、『徒然草』と和文脈の先行作品との影響関係につ
いて論じた研究として、稲田利徳の一連の研究が見られる。例

えば、『徒然草』と『宝物集』（『徒然草論』 笠間書院 二〇〇八）に、氏は兼好法師の「見聞しうる可能性のある情報網を整理し、その表現背後に揺曳する精神や意図」、つまり、『徒然草』がどのような文学作品を背景に形成されているかを解明する研究を試み、その方法が作品の形成の内実を認識する上で十分に有意義なものであると述べた。本論文はこのような方法論を踏まえて、『徒然草』の文章表現の出典になる漢籍の原文とともに、これらの表現の日本における受容と変容の様態を考察し、『徒然草』の作者兼好法師がこれら和漢の先行古典作品をどう享受・消化して、『徒然草』に取り入れたのかを明らかにするものである。

また、『徒然草』は中世に成立した作品であるが、中世においてはわずかに正徹・心敬の作品に言及された程度で、ほぼ読まれた形跡はなかった。近世に入ってから古典作品として発見されたものであると言っても過言ではない。前述したように、近世の古注釈は『徒然草』の表現と思想に漢籍の影響を大いに認めた。近世期以降に、このような漢籍受容を通して漢籍的な性格を獲得したともいえる『徒然草』の一部を漢文に翻訳した作品が現れる。この『徒然草』の漢訳の問題について、川平敏文「徒然草の漢訳」（『文彩』六 二〇一〇・三）に岡西惟中の『真字

寂寞草』（元禄二年刊）、服部南郭の『大東世語』（寛延三年刊）、宇野明霞の『明霞先生遺稿』（寛延元年刊）と山本北山の『作文率』（寛政十年刊）という四つの作品を紹介したが、そのほかに、『徒然草』を漢訳したものはまだ様々な形で存在しており、本論文では、そうした『徒然草』の漢訳を収める書物の中で重要な一群をなす異種『蒙求』（唐時代に成立し、漢学啓蒙書として大きな影響力のあった『蒙求』の意匠に倣った作品群）を対象として江戸時代以降の『徒然草』受容の注目すべき形態のひとつである漢訳という問題を考えた。

近世期以降の『徒然草』受容は『徒然草』研究において看過されがちな存在であったが、近年、学界において見直される傾向が見られる。島内裕子『徒然草文化圏の生成と展開』（笠間書院 二〇〇九）一書に、「徒然草文化圏」という概念が提唱された。つまり、注釈書だけではなく、兼好の人物伝記、近世文壇における『徒然草』の伝授、絵画化された『徒然草』、近代文学との関係、翻訳された『徒然草』など、『徒然草』受容研究の範囲は大きく広げることとなった。

本論文はこれらの先行研究を踏まえて、受容と影響という二つの視点から、『徒然草』と漢籍の関係という問題を三部八章に分けて考えた。第一部は、『徒然草』が漢籍を受容する時に用い

た方法論を考察する。漢籍の原典のみではなく、日本の古典作品に受容され、日本化した漢籍の文章表現にも焦点を当て、こういう中間的な媒体を通して間接的・重層的に漢籍を受容した方法とその表現効果について考察した。第二部は、近世期に盛んに編纂された『徒然草』と兼好法師の伝記資料と関わらせながら、和文脈の『徒然草』を敢えて漢文に翻訳した異種『蒙求』作品群という今まであまり顧みられなかった資料を取り上げ、その漢訳の特徴と背景および『徒然草』が漢訳される意義を考察した。

具体的に、第一部においては、三章に分けて『徒然草』の漢籍受容について論じた。第一章では、表現と思想の両面で『徒然草』に多大な影響を与えた『白氏文集』を取り上げ、『徒然草』が漢籍を受容する際に用いた重層的な方法を分析した。『徒然草』は『千載佳句』『和漢朗詠集』といった平安時代に撰述された秀句撰、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学、「文集百首」をはじめとする和歌の世界といった中間的媒体を通して間接的・重層的に『白氏文集』を理解・享受している。つまり、原典『白氏文集』にとどまらず、『徒然草』に先行してそれを受容した古典作品の中で変容し日本化した表現や理解を踏まえているのである。本章では『徒然草』が漢籍や、漢詩文表現を日本化した

もの等を重層的に享受した様相を中心に論じた。第二章では、『徒然草』第二十五段を例に重層的な漢籍受容の具体例について分析した。第二十五段において旧邸懐旧のテーマを語る際に用いられた「桃李の言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章は『史記』李將軍伝を出典とする故事「桃李不言」によるが、この故事は、「徳のある人には自然に人が心服する」という原典の意味から離れて、中国・日本の漢詩文、さらには和歌においても懐旧の思いが詠まれたことを明らかにした。『徒然草』に到るまでの「桃李不言」の理解の変遷を述べることによって、『徒然草』がそうした変容した理解を取り入れていることを指摘した。第三章では、兼好法師が『文選』『白氏文集』『老子』『莊子』を漢籍の代表としてあげ、長い夜にひとり灯のもとで読書することを通して古人を心の友として懂れたことが描かれた第十三段に焦点を当てた。前述したように、近世期に『徒然草』は盛んに読まれ、一種のブームといえるほどの読者を獲得したが、作者の兼好法師の肖像画はほぼ灯のもとで読書する姿で描かれている。俳諧付合集である『類船集』（延宝四年刊）に「物の本」と「灯のもと」が付合のことばとしてあげられたほど、「灯のもと」で読書する兼好像が定着していた。本章は、中国と日本の漢詩・和歌における「灯下読書」の詠まれ方と関わらせな

がら、『徒然草』第十三段は和文の古典作品に見られる「灯のも」との類型ではなく、これらの漢詩に詠まれた「灯下読書」の場面から影響を受け、兼好独自の美意識が作り上げたことを考察した。以上のように、本論文は第一部において、『徒然草』は漢籍を受容する際に、漢籍の原典とともに、日本の古典作品に受容され、変容し日本化した文章表現という中間的媒体を経由した間接的・重層的な受容方法とその表現効果について考察した。

第二部は、和文脈の『徒然草』を漢文に翻訳した上で受容する異種『蒙求』作品群を取り上げ、近世期に盛んに編纂された兼好法師の伝記資料と関わらせながら、『徒然草』の漢訳という問題を考えた。異種『蒙求』は江戸時代を通じて出版され続けたが、『徒然草』の漢訳が異種『蒙求』に取り入れられた数量や内容には年代的な変遷が認められる。第一章ではそのターニングポイントとなる安政五年（一八五八）刊行の『皇朝蒙求』までを対象として、その『徒然草』の漢訳の方法について考えた。『皇朝蒙求』以前に刊行された異種『蒙求』には主として奇話が選択されることが多く、漢訳する際の文章表現にも独自性が目立つ。その中、『皇朝蒙求』は『徒然草』から十話を取材し漢訳しており、『徒然草』の説話を漢訳した異種『蒙求』の中で一

番多い作品である。その背景には、川平敏文『徒然草の十七世紀―近世文芸思潮の形成』（岩波書店 二〇一五）が述べた十七世紀頃まで『徒然草』が記す思想的側面への関心の高まりとそれ以降こういう関心の衰退³とは無関係ではないと思う。つまり、十七世紀は『徒然草』自体の注釈書が多く作成されるようになり、本書の思想的側面への関心も高かったが、その後に啓蒙書である異種『蒙求』に『徒然草』の多くの逸話に取り込まれるようになったと考えられるのである。第二章では、『皇朝蒙求』以降、幕末から明治期にかけて制作された異種『蒙求』を対象とした。この時期の異種『蒙求』に漢訳される『徒然草』の部分は『徒然草』に由来する表現や思想、『徒然草』を引用する『大日本史』や先行する異種『蒙求』からの再引用が多く、受容される内容も松下禅尼（第百八十四段）と北条時頼（第二百十五段）の儉約の美德、及び兼好法師の読書・尚友の美德の話だけに集中する。この時代の異種『蒙求』では『徒然草』由来の逸話が引用される例も一話二話程度に激減し、その内容も教訓性の強いものに限定されるようになる。第三章では、異種『蒙求』の人物の対偶について考えた。異種『蒙求』は原典『蒙求』にない人名二文字と事跡二文字の四文字を対にした八文字の成句（韻文）で標題が記されるが、その組み合わせには、江戸時

代に作られた兼好法師の伝記に見える人物像が影響を与えている。江戸時代の兼好法師伝記には、世を逃れた隠遁者である兼好、南朝と深い関わりを持つ兼好、好色法師である兼好、という現在の兼好法師とは隔たった兼好像が描かれるが、異種『蒙求』の対句はこうしたイメージを背景として構成されていると考えられる。以上のように、第二部では、啓蒙的書物である異種『蒙求』の中に『徒然草』を出典とする逸話が引用され、その説く思想や教訓が受容されることを新たに指摘し、漢訳された上で受容されるという、従来あまり注目されなかった『徒然草』の受容の様態とその意義を明らかにした。

第三部においては、中華民国時代以降、『徒然草』が中国語に翻訳される過程を辿り、近現代中国語訳と第二部で検討した江戸時代日本における漢訳とを比較し、それぞれの特質を分析し、古典のみではなく、現代の問題にも視野を広げて本書の漢籍的な性格を考えた。

以上のような作業を通して、『徒然草』と漢籍の関係を受容と影響という二つの視点から考えた。『徒然草』は、漢籍由来の知識を原典から受容するとともに先行する古典文学作品の中で日本化された表現なども重層的に受容している。こうした漢籍受容を通して獲得した一種の准漢籍的な地位を背景に江戸時代

には漢訳されて享受される事例のあったことを指摘し、そうした享受の方法を考える際に重要な作品群であった異種『蒙求』の歴史の変遷とその内容について考察した。三部を併せて、和から漢へ、漢から和へという「和」と「漢」の往還を通して権威化される『徒然草』という書物の古典としての性格の一端を明らかにした。

本論文における『徒然草』本文の引用は近世期に広く流布した烏丸本を底本とした『徒然草全注釈』（安良岡康作 一九七六）による。必要に応じて現在確認できる最古本の正徹本を底本とした新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』（佐竹昭広・久保田淳校注 一九八九）を参照する。

*1 『徒然草』第十三段に、「ひとり、灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は、文選

のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇」と、漢籍を代表する書物を列挙している。

*2 『寿命院抄』『野槌』『なぐさみ草』の本文は吉澤貞人『徒然草古注釈集成』（勉誠出版 一九九六年）に拠る。

*3 川平敏文氏はこの著書に「徒然草注釈史における十七世紀と十八世紀との温度差」を強調した。例えば、「徒然草をめぐる儒
仏論争―中世的学知の再編」（『徒然草の十七世紀―近世文芸思潮の形成』岩波書店 二〇一五年）に「無論、一般教養書・文芸書と
しての徒然草受容はこれ以降も続き、徒然草は『古典』としての星霜を着実に積み重ねていったのであるが、十七世紀の人々が示し
た、徒然草の『思想』への狂熱とも言えるような感情の昂ぶりは、そこにはもう、ほとんど見られなくなるのである」と論じられた。

第一部

『徒然草』の漢籍受容―間接的な受容方法―

第一章 『徒然草』における漢籍受容の方法―『白氏文集』を例に―

一、はじめに

『徒然草』第十三段に、「文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事多かり」と述べられるように、兼好法師は『文選』『白氏文集』『老子』『莊子』を漢籍の代表としてあげている。『徒然草』に見られる『白氏文集』の影響の大ききについてはすでにいくつかの先行研究があるが、その受容の実態についてはまだ諸説あり、未だ定説を見ない。

早くに、久保田淳氏、川口久雄氏は、『徒然草』に引用された『白氏文集』の詩句の多くは『和漢朗詠集』や『千載佳句』『源氏物語』などの先行古典作品に見られるものであり、直接に古典を『文集』に仰ぐかどうかは疑問とした。また同時に、久保田氏は「兼好の教養を考えれば、直接『文集』から出た表現が多いのではないか」と、兼好の漢学教養を考慮した考え方を示しているが、戸谷三都江氏、金文峰氏は、久保田氏の示した後者の考えを進め、『徒然草』の『文集』の受容は詩句の引用に止まらず、章段全体の主題や構想までその影響が見られると、『白氏文集』の直接的影響を大いに想定している。

村上美登志氏は、『徒然草』の漢籍受容に中世の和製類書を中心に置いたものが多々見られることを指摘した。これら中世に成立した和製類書にも『白氏文集』が取り上げられており、『徒然草』が受容した『文集』の文章と重なる部分が三箇所確認できる。『徒然草』の『白氏文集』受容を考える上には重要な指摘であるが、後述するように、『徒然草』には、明らかに『白氏文集』を受容したと認められる部分が二箇所あり、『白氏文集』の受容に関しては、原典或いは別の受容媒体を考慮に入れて考える必要がある。

これらの先行研究は『徒然草』が直接に『白氏文集』を受容したか否かに焦点を当てたもので、典拠を洗い出した基礎的な研究として有益ではあるが、『徒然草』における『白氏文集』受容に関して、部分的な引用、或いは全体の構想に関わる引用との区別を考えるよりは、『徒然草』が『白氏文集』の受容を通して獲得した表現効果など、その受容の方法を全面的に把握できない恐れがあると考える。

さらに、『徒然草』の『白氏文集』受容を考える時、『源氏物語』は重要な中間的媒体となるが、『徒然草』の『源氏物語』受

容について、稲田利徳氏が「自己の関心のある体験を、生活次元の生のままの描写せず、その対象を一度、自己の美的理念、思想、あるいは古典文学の世界を通過させて、再創造を試みるやりかたである」⁴、「『源氏』の珍しい語句や印象鮮明な場面を借用しながら、それから少し離陸し、兼好なりの新しい美意識や場面状況、人物造形を目論んでいたのではなからうか」と指摘されたように、兼好が先行の古典作品を受容する時、それを媒体に独自性を持つ文章表現を目指す意匠が見られる。『徒然草』の『白氏文集』受容も、その典拠や中間的資料を特定するのが難しいほど、こなれた引用方法をしている。

そこで、本章では『徒然草』における『白氏文集』の受容例を指摘したこれらの先行研究の例を改めて検討し、その受容の方法と表現効果について考える。兼好が『千載佳句』『和漢朗詠集』の秀句撰や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学、「文集百首」など和歌の世界を経由して『白氏文集』を撰取した重層的な方法とその作意を考察し、『徒然草』はこれらの中間的媒体を通して『白氏文集』を理解している傾向を分析する。

二、『白氏文集』と日本における受容

『白氏文集』は中国の中唐（七六六～八三五）を代表する文

人である白居易の作品集であり、今日流布している諸本は凡そ諷諭詩・閑適詩・感傷詩・律詩・格詩と詩賦銘贊碑誌などの散文を順に収められている、いわゆる前詩後文形式のものである。

実は、このような順番に改められたのは、宋代に刊行された宋刊本からであり、白居易自身が編集した順番は編年形式であったという。まず、先行研究によって明らかにされた本書の成立と伝本について簡単に紹介したい。⁶白居易の親友の元稹が長慶四年（八二四）に『白氏長慶集』五十巻を編集した後、白居易自身が積極的に自分の文集の編集作業を重ねてきた。自ら自分の文集を編集するというのは、文学史上ではむしろ珍しいことであり、このような作業から白居易が自分の作品に込めた意欲が読み取れるのであろう。こういう作業を通して、大和二年（八二八）に、『長慶集』ができ、大和九年（八三五）に『後集』十巻が纏められ、先の『長慶集』と合わせて『白氏文集』と名付けられた。この『白氏文集』は廬山の麓にある江州（現在の江西省九江市）の東林寺に納められた。翌年の開成元年（八三六）に、六十五巻本が編集され、洛陽の聖善寺に、開成四年（八三九）に六十七巻本が編集され、蘇州の南禅寺に納められた。さらに、翌開成五年（八四〇）には『白氏洛中集』十巻を洛陽の香山寺に納められ、会昌二年（八四二）に白居易は『長慶集』

以降の作品を纏めて『後集』二十巻を成した。そして会昌五年（八四五）、白居易が没する前の年に、さらに『続後集』五巻を加えて、七十五巻の大集を完成させたが、その後四巻が散佚し、現存するのは七十一巻である。今現在中国における最古の善本は「紹興本」といわれる南宋紹興年間（一一三一年～一一六二年）に刊行された宋刊本であり、ほかに主要な伝本は明の万曆三十四年（一六〇六）に馬元調が刊行した『白氏長慶集』（馬本）と、清の康熙四十一年（一七〇二）に汪立名が編訂した『白香山詩集』（汪本）である。これらの刊本はいずれも前詩後文の刊本の形を伝えたものである。それに対して、日本には、旧鈔本と称される唐鈔本の旧態を比較的によく伝えたものが現存しており、その中の有名なものに、平安時代書写の神田喜一郎旧蔵本（神田本）は卷三・卷四を存し、鎌倉時代に書写され、部分的に北宋刊本の面影を伝えた金沢文庫本などがある。さらに、朝鮮にも年代順の旧編成形式のものが伝わり、現在は完本としてよく用いられている江戸時代刊行の那波本はこのような朝鮮本を底本としたものである。本論文では、『白氏文集』の本文と詩番号は那波本を底本とした平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（同朋舎 一九八九）により、南宋紹興本を底本とした謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局 二〇〇九）を参考した。訓

読は神田本（太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』勉誠社 一九八二）、金澤文庫本（『白氏文集・金澤文庫本』勉誠社 一九八三）、万治元年刊立野春節訓点本（長澤規矩也編『和刻本漢詩集成九』汲古書院 一九七七）を参考した。

『白氏文集』は白居易生前から、大集或いは選抄の形で日本に伝わってきた。例えば、承和五年（八三八）に大宰少弐であった藤原岳守が唐の商人の荷物から「元白詩筆」を見付け、仁明天皇に献上した記事が『文徳実録』卷三・仁寿元年九月条に見られることや、承和十一年（八四四）には留学僧惠萼により六十七巻本の『白氏文集』が書写され伝来されたことなどがよく知られている。寛平三年（八九一）以前の成立と推定されている『日本国見在書目録』にも『白氏文集』の書名が見られる。『白氏文集』が早い段階で日本に伝わって、平安時代からよく読まれ、日本の古典文学に大きな影響を与えたことは言うまでもない。『本朝麗藻』『都氏文集』『江吏部集』などの漢詩文集だけではなく、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学からもその引用が見られる。さらに、『和漢朗詠集』に収められている計二百三十四首の中国詩人の漢詩の中、白楽天の詩句が百三十九首も占めていることから、『白氏文集』が当時の知識人に愛読されていたことが窺われる。このように、『白氏文集』は平安貴族

社会においては一種の教養書として広く読まれていたが、『枕草子』と同じ、『白氏文集』を漢籍の代表として列挙した『徒然草』の時代は、『白氏文集』の読まれ方はいかなるものであるか、次節から考えたいと思う。

三、先行古典作品を中間媒体としての受容方法

『徒然草』に『白氏文集』の文章表現を受容したと思われる部分は凡そ次の二十一箇所である。

第七段、第八段（二箇所）、第十九段（二箇所）、第二十九段、第三十段、第三十八段（三箇所）、第四十一段、第四十三段、第五十四段（二箇所）、第一百五段、第一百三十七段、第一百四十二段、第一百七十二段、第一百七十四段、第一百八十八段、第二百三十五段。計十六章段。

その内容を見ると、諷諭詩（巻一〜巻四）が九首、感傷詩（巻九〜巻十二）が一首、律詩（巻十四〜巻二十・巻五十一〜巻七十一）が十一首であり、閑適詩（巻五〜巻八）の直接な受容は見られない。これらの例の中には、第七段「夕の陽に子孫を愛して」というように、『白氏文集』の詩句「夕陽愛子孫」を訓読した形で取り入れた場合もあり、『白氏文集』の中でも広く親しまれた「上陽白髮人」の一句「秋夜長、夜長無寐天不明」を第二

十九段「人しづまりて後、長き夜のすさびに」に取り込むように、一見して『白氏文集』の文章が直接の典拠だと気づかれなほいほど『文集』の漢詩文を和文化して文章を綴った場合もある。こうした例は、前述する久保田淳氏（一九七〇）、川口久雄氏（一九七四）が『徒然草』の『白氏文集』の直接的な受容を疑問視するように、そのほとんどが『源氏物語』や『和漢朗詠集』などの先行古典作品に見えるものである。つまり、第七段・第二十九段の例は先行する日本の古典作品を経由して『文集』を典拠とする表現を受容した可能性が高い。本章はまず、前述した金文峰氏（二〇〇一）の論文を踏まえ、中間的媒体と関わらせながら、『徒然草』が受容した『白氏文集』の例を考察したい。その受容の主な中間的媒体は『千載佳句』『和漢朗詠集』といった秀句撰、『源氏物語』、『文集百首』などの和歌とその他、主に四つの節に分けて考える。

（一）『千載佳句』『和漢朗詠集』などの秀句撰の場合

先に示した『白氏文集』の影響が指摘できる二十一箇所のうち、『千載佳句』に取られた詩句は九箇所、『和漢朗詠集』に取られた詩句は十二箇所見られる。『徒然草』の『文集』受容を考える際には、こういう秀句撰の影響は看過できない。本節では

まず、先行研究で指摘されたこれら秀句撰に見られる『白氏文集』と、『徒然草』と重なる部分について、その用例を分析する。

(1) 句ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ句ひには、必ず心ときめきするものなり。(『徒然草』第八段)。

為_レ君_二薰_二衣裳_一、君_二聞_二蘭麝_一不_二馨_二香_一。為_レ君_二盛_二容飾_一、君_二看_二金翠_一無_二顔色_一。(『白氏文集』卷三・諷諭三「新樂府・太行路」0134)

778 為_レ君_二薰_二衣裳_一、君_二聞_二蘭麝_一不_二馨_二香_一。為_レ君_二事_二容飾_一、君_二見_二金翠_一無_二顔色_一。(『和漢朗詠集』卷下・恋)

『徒然草』第八段は人の心を惑わす色欲について説いた章段である。句ひは一時的なものと知りながら、思わず魅力される人間の愚かさを描く時、「しばらく衣裳に薰物すと知りながら」という表現を用いた。これは『徒然草』最古の注釈書『寿命院抄』から指摘されてきたように、『白氏文集』「新樂府・太行路」の一句「為_レ君_二薰_二衣裳_一」を踏まえている。『文集』の中でも新樂府は平安時代からとくに愛好された部分で、この詩句は『和漢朗詠集』にも採られて、人口に膾炙したものと思われる。ただし、「太行路」は「借_二夫婦_一以_二諷_二君臣之不_レ終也_一」と題目の注にあるように、本来的には夫婦のこと以て人の定まらない心、

そして君臣の関係を諷諭した詩であるが、『徒然草』はその中の「為_レ君_二薰_二衣裳_一、君_二聞_二蘭麝_一不_二馨_二香_一」、君のために衣裳に香をたきしめても、愛情が薄くなった君がこの蘭麝の匂いをよい香りとしないう部分だけを借用し、白詩の意味とは逆に、衣服のよい匂いに惑わされる愚かな人間を描いている。これは、白詩の本意、さらに、『和漢朗詠集』の句の意味ともかけ離れた使い方であると言えよう。『徒然草』における『白氏文集』の受容はこのように、原典の意味と用法から離陸して、日本に伝来した後、『和漢朗詠集』に取り入れられる程人口に膾炙するようになった『文集』の表現を自然に文章に溶け込ませ、独自の文章を作り上げる傾向が見られる。

(2) 「もののははれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。(『徒然草』第十九段)

黄昏独立_二仏堂前_一、満_レ地_二槐花_一満_レ樹_二蟬_一。大_二抵_二四_二時_一心_二惣_二苦_一、就_二中_二腸_一断_二是_二秋_一天。(『白氏文集』卷十四・律詩「暮立」0790)

177 大_二底_二四_二時_一心_二惣_二苦_一、就_二中_二腸_一断_二是_二秋_一天。(『千載佳句』卷上・秋興)

223 大_二底_二四_二時_一心_二惣_二苦_一、就_二中_二腸_一断_二是_二秋_一天。(『和漢朗詠集』卷上・秋興)

『徒然草』第十九段は四季の風物についての随想を述べた章段である。その美意識は和歌や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学の流れを汲むものであるが、傍線部の「もののあはれは秋こそまされ」という部分について、『野槌』などの古注は『白氏文集』『暮に立つ』を典故として指摘している。この白詩は『千載佳句』『和漢朗詠集』『源氏物語』にも採られて、著名な詩句であるが、現代の『徒然草』諸注にも指摘されるように、秋はものの哀れを感じやすい季節という美意識は、『古今和歌集』に収められた「いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事の限りなりける」（巻四・秋歌上¹⁸⁹）に端的に表れた和歌の世界でも好まれた意趣である。注意されるのは、白詩は「苦」「腸断」という言葉を用いて、秋の哀愁な雰囲気詠んだが、『千載佳句』『和漢朗詠集』はこの句を「秋興」に配置している。古注では、書陵部本『朗詠抄』（書陵部本系甲本）に「大底四一、此モ、遊覧ノ詩也。四季ニ随テ、心ヲ慰ムルコト、取リノ也。（中略）取分、秋ハ興勝リ」と注を付しており、『和漢朗詠集仮名注』（書陵部本系乙本）に「物題合セ、春花^ハ苦^ニ心、夏^ハ郭公^ヲ待^リ心、冬^ハ雪^ニ乗^リ、何^{レモ}面白^キコトアレトモ、取^リ分、秋^ノ天^ニ、秋風^ノ落葉^ニ昆^{シテ}、管弦^ヲ成^ス感情、面白^ト也。但^シ又、此義^{テハ}、腸断^ツコト、不^レ聞^{トモ}。然^{トモ}、面白^キ紅葉^{ナト}チル^{ニハ}、ハラワタ断^ル歟也」と記さ

れている。書陵部本系が特にこの問題に注目して、四季の慰みや面白みを説明している。朗詠古注の大概な系図は次頁の図一で示したとおり、書陵部本系朗詠注は室町初期以前の成立とされ、『徒然草』との前後関係は必ずしも明らかではないが、四季のとりどりの風情を述べていく『徒然草』第十九段の冒頭にこの秋に関する記述が置かれたことは、こういう四季の情緒を以てこの白詩を解説する朗詠古注の発想と軌を一にするものである。

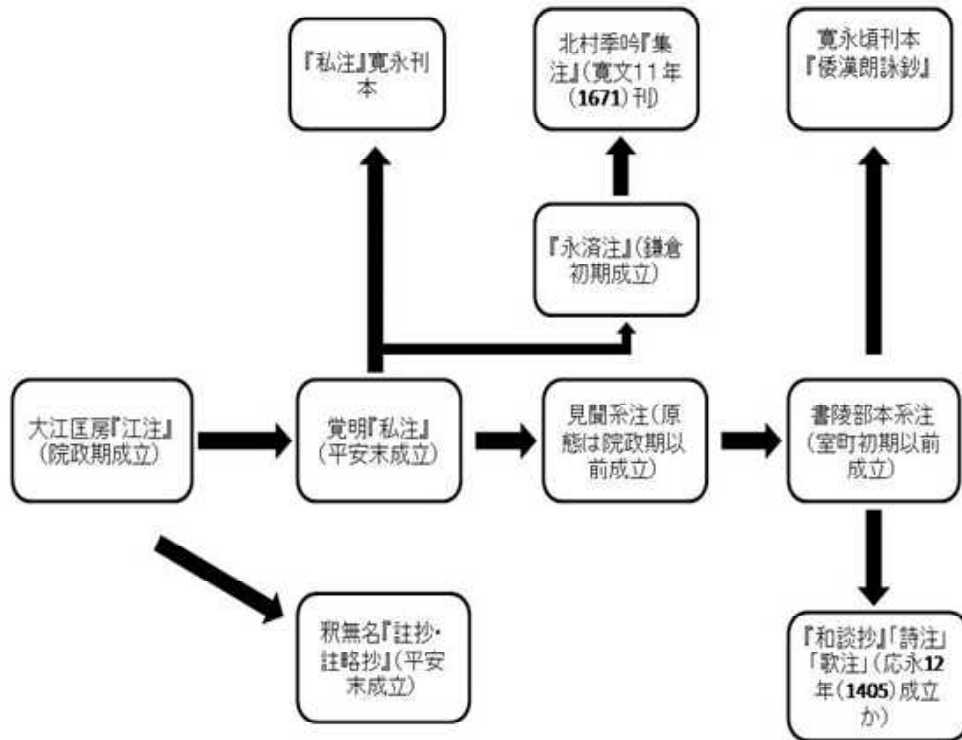
(3) 人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたゝめ、残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。（『徒然草』第二十九段）

妬令^ニ潜配^ニ上陽宮、一生遂向^ニ空房^一宿。秋夜長、夜長無^レ寐天不明。耿耿残灯背^レ壁影、蕭蕭暗雨打^レ窓声。（『白氏文集』巻三・諷諭三「新樂府・上陽白髮人」⁰¹³¹）

285 歌々残灯背壁影、蕭々暗雨打窓声。（『千載佳句』巻上・雨夜）

233 秋夜長、夜長無^レ眠天不明。歌々残灯背壁影、蕭々暗雨打^レ窓声。（『和漢朗詠集』巻上・秋夜）

234 遲遲鐘漏初長夜、耿耿星河欲^レ曙天。（『和漢朗詠集』巻



上・秋夜)

235 燕子楼中霜月夜、秋来只為一人長。(『和漢朗詠集』

卷上・秋夜)

236 蔓草露深人定後、終宵雲尽月明前。(『和漢朗詠集』卷

上・秋夜)

『徒然草』第二十九段は古い手紙などを整理する時に催した懐旧の思いを述べた章段である。冒頭の文章について、三木紀人氏『徒然草全訳注』(一九九二)は『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られている『白氏文集』「上陽白髮人」の一句「秋夜長、夜長無眠天不明」と、同じ『和漢朗詠集』卷上・秋夜の小野篁の詩句「蔓草露深人定後」の影響を指摘しているが、ほかのほとんどの注釈書がこの部分について典拠を挙げていない。しかし、右であげた²³³から始まる『和漢朗詠集』秋夜の部の詩文は、「人しづまりて後、長き夜」と続く『徒然草』本文の「秋夜長」、「人定後」といった要素が含まれているだけではなく、長い秋の夜という、稲田利徳氏が指摘した「孤寂のなかに我が身を深く沈潜させ、現在おかれている自己をとりまく状況の一切を捨象した時間帯」¹が持つ哀愁な情緒も一致している。ちなみに、『狭衣物語』に、「文のけしきなども、ただおほかたに思はせたるなつかしさをば、おろかならぬさまにいひなさせ給へる

さまなども、さし向ひ聞えさせたる心地のみせさせ給ひて、いとど御とのごもるべうもなければ、「燕子楼の中」とひとりごたれ給ひつつ、丑四つと申すまでになりにけり」という、秋の長い夜に、狭衣帝が源氏の宮からの手紙を読んでしみじみと懐かしさと恋しさを覚えた場面がある。手紙を読むことで相手と対面するような気持ちになれるという『徒然草』第二十九段と近似する状況に「燕子楼中霜月夜」の一句が引用されており、王朝文学にすでに寂しい秋夜に一人で手紙を読み、寂寥たる情緒に沈む文脈と『和漢朗詠集』秋夜の漢詩文の接点が見られた。第二十九段は『白氏文集』「上陽白髮人」および『和漢朗詠集』「秋夜」の一連の詩文を下敷きにして、秋の夜の寂しい雰囲気を引き立てるが、もとの漢詩文の形がわからなくなる程、自然に和文化的に取り入れている。

(4) 埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。(『徒然草』第三十八段)

遺文三十軸、軸軸金玉声。龍門原上土、埋骨不埋名。

(『白氏文集』卷五十一・格詩歌行雜体「題」故元少尹集

後二首その二(2217)

471 遺文三十軸、軸軸金玉声。龍門原上土、埋骨不埋名。

(『和漢朗詠集』卷下・文詞付遺文)

『徒然草』第三十八段は人生における名利はすべて空しいものだと説く章段である。「埋骨不埋名」という『白氏文集』の一句を取り入れているが、これは『和漢朗詠集』に採られ、和歌にも多く詠まれて歌語として定着した表現でもあり、詳しい分析は後節の和歌について述べる部分に譲るが、白詩の「名」というのは文才を指すのに対して、『徒然草』では名声と解して否定的な意味で使われている。ここも原詩の意味から離れて受容した一例である。

(5) 春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、皆おろしてさびしげなるに、東に向きて妻戸のよきほどにあきたる。(『徒然草』第四十三段)

貌隨年老欲何如、興遇春牽尚有餘。遙見人家花便入、不論貴賤與親疎。(『白氏文集』卷六十六・律

詩「又題」一絶(3244)

664 遙見人家花便入、不論貴賤與親疎。(『千載佳句』

卷下・雜花)

115 遙見人家花便入、不論貴賤與親疎。(『和漢朗詠集』卷上・花)

『徒然草』第四十三段は趣ある家で風情ある若い男性を垣間見た話である。『寿命院抄』などの諸古注が『千載佳句』『和漢朗詠集』にも見られる『白氏文集』の一句「遙見人家花便入」を典拠としてあげたが、現代の諸注には受け継がれていないようである。前述した金文峰氏論文(二〇〇二)はこの白詩とその前の一首「尋春題諸家園林」の詩句「聞健朝朝出、乘春处处尋。天供閑日月、人借好園林」をあげ、第四十三段全体の発想にこの両首の白詩の影響が見られると指摘している。表現上に相違が見られるものの、春のどこかで優艶なひよりに、賤しからぬ家の庭に散り敷く花に魅力されて、つい人の家に入ってしまったという設定の一致性から見て、金氏の指摘は的を射たものと言える。第四十三段は、『源氏物語』などの王朝文学に散見する表現と美意識を用いながらも、『白氏文集』の漢詩のストーリー性を読み取り、物語的な一段に作り上げた。なお、左であげたように、『和漢朗詠集』の諸古注はこの詩句について、白居易と師礼石という人物の逸話を取り上げて注を付けている。

裏書云、或注曰、白居易乍乘馬致師礼石之家。師礼石

見之大怒云、汝作詩方免此過云。随言作此詩、成親昵

之契云々。(『和漢朗詠集私注』書陵部蔵甲本)

有云、此詩師礼石家櫻花盛時、白居易興之乍乘馬、打入其門于時師雷石云、我雖隱居、其身公卿而年八十有餘也。汝下官人也。又年若少。何無礼、乍乘馬、入門。云白居易答云、我見花忘礼、入門。尤怠矣。尔時石云、若然者其過作詩云々。居易乍立作此詩。石自下馬口取付成親昵云々。(『和漢朗詠註抄』東北大学本)

師礼石の名前の漢字表記に差異が見られるが、白居易は花に気を取られて、馬に乗りながら師礼石という身分も年齢も上の人の家に入ってしまったところ、この詩を詠んで咎めを逃れたという説話である。永済注に「文集ニハ、コノヨシミエズ。タツヌベシ」とあるように、この話はほかに見られないものであり、その出所が確認できていないが、『白氏文集』のこの漢詩はこのような説話が附会される程、有名な一句であり、広く知られているものである。『徒然草』第四十三段は漢詩を自然に和文に溶け込むように文章を綴ったが、「賤しからぬ」、「花」、「見過しがたき」、「さし入りて」という白詩を暗示する表現を用いることで文章の深みを増し、読者にこの白詩を思い出させながら、物語的な一段を作り上げた。

(6) 風流の破子やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情の物にしたため入れて、双の岡の便よき所に埋み置

きて、^①紅葉散らしかけなど、思ひ寄らぬさまにして、御所へ参りて、児をそのかし出でにけり。うれしと思ひて、ここかしこ遊びめぐりて、^①ありつる苔のむしろに並みゐて、「いたうこそこうじにたれ。^②あはれ紅葉を焼かん人もがな。験あらん僧たち、祈りこころみられよ」など言ひしろひて。（『徒然草』第五十四段）

①不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。莫恠独吟秋思苦、比君校近二毛年。（『白氏文集』卷十三・律詩「秋雨中贈元九」0620）

201不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。（『千載佳句』卷上・暮秋）

301不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。（『和漢朗詠集』卷上・紅葉）

②林間煖酒繞紅葉、石上題詩掃綠苔。惆悵旧遊無復到、菊花時節羨君迴。（『白氏文集』卷十四・律詩「送王十八歸山寄題仙遊寺」0715）

799林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。（『千載佳句』卷下・詩酒）

221林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。（『和漢朗詠集』卷上・秋興）

『徒然草』第五十四段は仁和寺の法師たちが稚児を喜ばそうとして、『白氏文集』の「林間煖酒燒紅葉」の風情を習って、野遊びを計画したが失敗した滑稽譚である。この章段では二箇所『白氏文集』の表現の影響が認められる。傍線①の「紅葉散らしかけなど」と「ありつる苔のむしろ」という、紅葉を散らかし、苔が生えている計画の舞台は『千載佳句』『和漢朗詠集』などに見られる白詩「不堪紅葉青苔地」を下敷きにした風景であり、傍線②の「あはれ紅葉を焼かん人もがな」は同じ『千載佳句』『和漢朗詠集』に見られる白詩「林間煖酒燒紅葉」を踏まえた表現である。この両句はいずれも著名な詩句であるが、『徒然草』第五十四段はこれらの詩句を用いて、笑いのおかしみを引き出すものである。①の白詩「秋雨中贈元九」は秋の寂寥たる風景とともに老年の憂いを嘆いた詩である。『徒然草』はこのような白詩を仁和寺の法師の滑稽譚に用いたのは、原詩からかけ離れた修辭的な受容方法であるが、その背景に、「不堪者、紅葉、青苔上チリカ、ルハ、不堪、面白也」という白詩が描いた景色に注目した国会図書館本『和漢朗詠注』などの朗詠古注の存在が想起される。このように、『徒然草』は『白氏文集』を受容する時、読者が知っていると思定できる極めて有名な部分を取り入れながらも、原典から離陸して自在に用い、

独自の文章を作り上げた。

(7) 人事多かる中に、道を楽しぶより気味深きはなし。これ、

実の大事なり。一たび道を聞きて、これにこころざさん人、いづれのわざか廃れざらん。(『徒然草』第七十四段)

老来生計君看取、白日遊行夜醉吟。陶令有田唯種秫、鄧家無子不留金。人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深。煩慮漸銷虚白長、一年心勝一年心。(『白氏文集』卷十六・律詩「老来生計」³²⁴⁸)

1015 人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深。(『千載佳句』卷下・幽居)

617 人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深。(『和漢朗詠集』卷下・閑居)

『徒然草』第七十四段は仏道に志すことを勧めた章段である。「道を楽しぶより気味深きはなし」の一文は老年の生活を描いた『白氏文集』「老来生計」の詩句「林下幽閑気味深」を踏まえた表現である。白詩は「因縁」などの仏教用語も見られるが、「虚白」というような『莊子』のことばも詠み込まれており、必ずしも仏教的な意味合いが強いのではなく、「白日遊行夜醉吟」というような自由な老後の閑居生活を描いている。しかし、

『和漢朗詠集』の諸古注はこの詩句を仏教的な文脈で解釈している。

406 人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深 白

事親^ニ為^ル因^ト、仕君^ニ為^ル縁^ト、声名^ヲ為^ス榮^ト。実^ニ是^ニ如^ク浮雲^ト也。林下^ニ求^ム道果^ト者、浄心^ニ為^ル因^ト、善友^ヲ為^ス縁^ト、仏身^ヲ為^ス期^ト。誠^ニ是^ニ気味深^ト云也。(黒木文庫本『和漢朗詠集註抄』)

484 617 人間者、人間榮樂、皆是レ、電光朝露、如クニ、アタナル果報ナレハ、因縁淺云也。林下幽閑者、背代、山林入人、後世菩提心カクル故、是レ、実ノツトメナレハ、気味深云也。(後略)(国会図書館本『和漢朗詠注』見聞系丙本)

440 617 人間一、(中略)下句、林下ニ坐禅ナトスレハ、万慮、一時ニ収リ、チ、ノ乱、刹那ニ滅ス。故ニ、禅居コトナリ。是、出離覚悟ノ要路也。故ニ、気味深ト云。白居易作。(書陵部本『朗詠抄』書陵部本系甲本)

479 人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深香呂炉峯下新ト山居白楽天

(中略)下句、林下ナント、独草庵カマヘ、座禅ナントシツレハ、万慮一時ヲサマリ、チ、ノ乱、刹那ニ滅。故、散心定、覚悟心進、決定菩提指南、出

離生死、掟、気味深、云也。(後略)(『和漢朗詠集仮名注』)

書陵部本系乙本)

439 人間榮耀因縁淺、林下幽閑気味深、白

(中略) 下句ハ、イマハ、ヤマ、ハヤシニ、コモリキタルコトノミヲ、コノミニオヘルワサニテアルト云也。(『和漢朗詠集永濟注』)

前述した第十九段・四十三段・五十四段と本段はいずれも朗詠古注の解釈に近い理解の仕方を示しており、兼好がこの一句を仏道を勧める文章として取り入れたのは、このような朗詠古注の影響が想定できよう。また、本論文の第一部第二章に『徒然草』第二十五段「桃李もの言はねば」の表現と漢故事「桃李不言、下自成蹊」との受容関係について永濟注の影響を論じた。このように、『徒然草』が『白氏文集』を撰取した際、原典よりも、『和漢朗詠集』の古注など、日本における『文集』の受容と近い理解を示していることが注目される。

(8) 世をのどかに思ひて打ち怠りつつ、まづさしあたりたる
目の前の事にのみまぎれて月日を送れば、事々成す事な
くして、身は老いぬ。(『徒然草』第百八十八段)

空王百法学未得、姪女丹砂焼即飛。事無成身老也、
醉郷不去欲何帰。(『白氏文集』卷十七・律詩「醉吟二

首その一 1064

756 事無成身也老、醉郷不知欲何之。(『和漢朗詠集』
卷下・述懐)

『徒然草』第百八十八段も一大事の仏道に専念すべきと述べた章段である。『和漢朗詠集』にも見られる『白氏文集』「醉吟二首その一」の一句「事無成身老也」を訓読した形で取り入れた。しかし、白詩は仏教も道教もどちらの道にも進めない身として、ひたすらに酔郷に耽るのが良いと述べたものであるが、『徒然草』はこの詩句の表現を借りて、すべてを放下して仏道へ進むべしという文脈で用いた。この部分も原詩の意味とは異なり、『白氏文集』の表現を自由に取り込んだ受容方法と言える。なお、この白詩の一句と『和漢朗詠集』とは本文の異同が見られる。底本として使った那波本と南宋刊本はいずれも「身老也」と作るところ、管見抄本(内閣文庫蔵『重鈔管見抄』)と『和漢朗詠集』諸本は「身也老」と作る。『徒然草』が「また」という言葉を用いていないところは刊本の表現に近いが、ほかの引用箇所から見て、『徒然草』が『白氏文集』などの漢籍から引用する際、自然に和文化的して文章を作り直したところがほとんどであり、必ずしも原本通りではない。この一ヶ所ではどちらかの系統によったかは判断しがたい。

以上、『千載佳句』『和漢朗詠集』といった秀句撰に取り入れられた『白氏文集』と『徒然草』が受容した『白氏文集』と重なる部分について見てきた。『徒然草』が受容した『白氏文集』の巻数を見ると、巻一から巻六十六まで及び、広い範囲を受容している印象が残るが、前述した久保田淳氏（一九七〇）、川口久雄氏（一九七四）、金文峰氏（二〇〇一・二〇〇二）の論文に指摘されたように、その半分以上がこれらの秀句撰によって人口に膾炙している詩句を撰取していると考えられる。このような秀句撰に取り入れられたほど著名な『白氏文集』の詩文を用いて『徒然草』の文章の深みを増やしながらも、その受容態度は、『白氏文集』の原典から離陸して、朗詠古注の理解に近いもの、或いは、『徒然草』の本文の文脈に沿うように白詩の表現だけを借用し、独自の文章を作り上げた。

（二）『源氏物語』の場合

『徒然草』に受容された『白氏文集』の中、『源氏物語』に受容された『白氏文集』と重なるものは八箇所見られる。本節はこれらの例を取り上げ、『徒然草』が『源氏物語』の世界を通して『白氏文集』を受容する様相を考察する。

（1）そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出

でまじらはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、もののはれも知らずなりゆくなん、あさましき。（『徒然草』第七段）

可_レ 怜_レ 八九十、齒_レ 墮_レ 双眸昏。朝露貪_二 名利_一、夕陽憂_二 子孫_一。掛_レ 冠_レ 顧_二 翠綉_一、懸_レ 車_レ 惜_二 朱輪_一。金草腰_レ 不_レ 勝_二 軀_一。儂_レ 入_二 君門_一。誰_レ 不_レ 愛_二 富貴_一、誰_レ 不_レ 恋_二 君恩_一。年高須_レ 請_レ 老、名遂合_レ 退_レ 身。（『白氏文集』卷二・諷諭二「秦中吟・不致仕」⁰⁰⁷⁹）

明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえて、御岳精進にやあらん、ただ翁びたる声に頼づくぞ聞こゆる。起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露にことならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞き給ふ。（『源氏物語』夕顔）

「齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき」など聞えたまふ。（『源氏物語』行幸）

太政大臣、致仕の表奉りて、籠りゐたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬる

に、年ふかき身の冠を掛けむ、何か惜しからん」と思し
のたまふべし。(中略) 院の御齡足りたまふ年なり、人
よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕
の大臣思ひおよび申されしを、冠を掛け、車を惜まず棄
ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし。(『源氏
物語』若菜下)

『徒然草』第七段は無常を述べた章段である。『寿命院抄』以
降諸注に指摘されてきたように、生に執着する醜い老人の姿を
描いた文脈で、同じ趣旨の『白氏文集』「不致仕」の詩句を引用
している。ただし、直線で示したように、白詩では「夕陽憂^二子
孫^一」とある部分を、『徒然草』は「ゆうべの日に子孫を愛す^二
としており、「憂」と「愛」という本文のゆれが見られる。『白
氏文集』に「愛」と作る本文は確認できないので、ここは兼好
の記憶間違いか、ほかに「愛」と作る本文があるのかがまず問
題となる。『徒然草全注釈』¹には『観心略要集』に「朝露之底貪^二
名利、夕陽之前愛^二子孫^一」とする例があると指摘されており、
日本における変容にも注意する必要がある。

例えば、『源氏物語』夕顔の巻の一文「朝の露にことならぬ世
を、何をむさぼる身」は「不致仕」の「朝露貪^二名利^一」を受容
したものであるが、この一文について、『源氏物語』の古注釈は、

『紫明抄』あたりから「不致仕」の詩句を典拠としてあげてお
り、『紫明抄』が引用する白詩の本文は「朝露貪^二名利^一、夕陽愛^二
子孫^一」¹となっている。本文中に波線で示したように、『文集』「不
致仕」はほかに、『源氏物語』の行幸と若菜下の二巻にも引用さ
れ、行幸の巻では、源氏は大宮を見舞いに行った時、自分より
年上の人が腰が折れそうなほど曲げていながらもお勤めしてい
る例は昔も今も多いけれども、自分は無精な性格で政事を怠っ
ていると話している中に、「不致仕」の文章を逆の意味で政事に
勤める勤勉な臣下を描く表現として引用されている。若菜下の
巻は、まさに太政大臣が致仕の時のことばに引用されている。
この二箇所とも年老いてもなお官職にしがみついている人の醜
さを諷諭するという白詩の主旨をよく理解する上での引用であ
る。前述する戸谷三都江氏(一九七四)や金文峰氏(二〇〇二)
の論文は『徒然草』第七段全体に『文集』「不致仕」の影響を強
調するが、夕顔の例を入れて、『源氏物語』に三回も本詩を引用
しており、さらに、『紫明抄』などの古注釈書にも言及されてい
る。『源氏物語』を书写したこともある兼好の目には止めた可能
性が大きいではなからうか。とくに、『文集』「不致仕」は官職
にしがみつく老人について描いているが、『徒然草』第七段は命
を「むさぼる」人を話題にしている。『源氏物語』夕顔の巻は、

御岳精進する老人を描く時、「朝露貪^二名利^一」を朝露のようにはない世に何を貪るのかと世の無常に言及し、「この世とのみは思はざりけり」と命・後世のことにも触れており、『徒然草』第七段と主題の一致性が認められる。兼好がここで用いたのは、『源氏物語』本文には採らなかつた一句であり、『源氏物語』およびその古注を通過させて、『白氏文集』原典の世界もここに投影させるという重層的な受容方法に『徒然草』の文学的オリジナリティが認められる。

(2) 世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。

句ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ句ひには、必ず心ときめきするものなり。(『徒然草』第八段)

假色迷^レ人猶若^レ是、真色迷^レ人応^レ過^レ此。彼真此假俱迷^レ人、人心惡^レ假貴^二重真^一。狐假^二女妖^一害猶淺、一朝一夕迷^二人眼^一。女為^二狐媚^一害即深、日長月長溺^二人心^一。(『白氏文集』卷四・諷諭四「新樂府・古塚狐」0169)

「げに、いづれか狐なるらん。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。(『源氏物語』夕顔)

いと若ううつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。(中略)身にもし疵などやあらむとて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、あさましくかなしく、まことに、人の心まどはさむとて出で来たる仮の物にやと疑ふ。(中略) 閨のつま近き紅梅の色も香も変わらぬを、春や昔のと、こと花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし句ひのしみにけるにや。(『源氏物語』手習)

『徒然草』第八段は前節にも述べたが、ここでは、『源氏物語』に引用された『白氏文集』の関係で別の箇所を取り上げる。この部分について、『寿命院抄』からの諸注が『白氏文集』「古塚狐」の影響を指摘しており、『源氏物語』夕顔と手習の二巻に「古塚狐」の影響が見られることが『紫明抄』など『源氏物語』の古注釈に指摘されている。先述した金文峰氏の論文(二〇〇二)は『徒然草』第八段全体に『白氏文集』「古塚狐」の影響が見られると強調するが、第八段は「古塚狐」に見られない「句い」を取り上げている。手習の巻に、「香はいみじうかうばしくて」という浮舟の姿や、梅の花の香りで「飽かざりしにおひ」を衣服に焚きしめた昔の恋人を思い出した浮舟の心情を描いている。

何より、浮舟と薫、匂宮三人の悲恋を物語った手習の巻は、二人の男性の名前にも表しているように、「匂い」がキーワードになっている。『徒然草』第八段は女性を対象としているが、この章段が『白氏文集』「古塚狐」を用いて色欲が仮のものに過ぎないと戒めた際、「匂い」を例としてあげたのは、『源氏物語』手習の巻の世界を連想させる。ここも『徒然草』が『源氏物語』を中間的媒介に『白氏文集』を重層的に受容した好例である。

(3)「もののははれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。(『徒然草』第十九段)

黄昏独立仏堂前、満地槐花満樹蟬。大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天。(『白氏文集』卷十四・律詩「暮立」⁰⁷⁹⁰)

もののみあはれなるに、「中に就いて腸断ゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦しつつつゐたまへり。(『源氏物語』蜻蛉)

『徒然草』第十九段も前出したものであるが、傍線部の『白氏文集』「暮立」の一句は『千載佳句』『和漢朗詠集』に取られる程有名な詩句であり、『源氏物語』蜻蛉の巻に薫が口ずさむ形で引用されている。『源氏物語』に人物が『文集』の名句を吟誦する場面はしばしばあり、興味深いことに、『徒然草』が受容し

た『白氏文集』の詩句と、これら『源氏物語』の作中人物が口ずさむ詩句とかなり重なるものが見られる。つまり、『徒然草』は日本において人口に膾炙する『白氏文集』の詩句を文章に取り入れる傾向が見られる。ここもその一例である。

(4)人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたゝめ、残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき、いと悲し。(『徒然草』第二十九段)

秋夜長、夜長無寐天不明。耿耿残灯背壁影、蕭蕭暗雨打窓声。春日遲、日遲独坐天難暮。(『白氏文集』卷三・諷諭三「新樂府・上陽白髮人」⁰¹³¹)

おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。「いみじうも積りにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさび

しきも、いふ方なく悲し。(中略)落ちとまりてかたはなるべき人の御文なども、「破れば惜し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、かの須磨のころほひ所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。みづからしておきたまひけることなれど、久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ。(『源氏物語』幻)

『徒然草』第二十九段も前節で取り上げたものであるが、『千載佳句』『和漢朗詠集』に見られる『文集』の秀句を『源氏物語』幻の巻に源氏が口ずさむこととなる。紫上を失った源氏が俗世を捨てる時期が近づいたことを覚悟して、昔の手紙などを処理している時、亡くなった紫上を思い出して悲しんでいる場面である。「破れば惜し」と思って残しておいた手紙を破って捨てる時、手紙をもらった当初の気持ちを思い出すという発想は、『徒然草』第二十九段の「残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただ

その折のこちすれ」とまさに一致している。そして、亡くなった故人の遺品だけではなく、久しく会っていない友人の手紙などを見ても、あはれ・悲しみの気持ちが湧いてくるという発想とその文章表現とも『枕草子』や『無名草子』などの王朝文学からの投影が見られる。その背後にさらに「上陽白髮人」のストーリー、及び『和漢朗詠集』秋夜の漢詩文を連想させることで、寂寥たる長い秋の夜の情緒を引き出す働きがある。『徒然草』第二十九段が享受したのは『源氏物語』幻の巻や、『枕草子』『無名草子』、そして前節であげた『狭衣物語』というような王朝文学の世界によって発展させ、定着した『白氏文集』の美意識であり、白詩、『和漢朗詠集』と物語の世界の重層的な受容方法となっている。

(5) かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬこちして、胸に当りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。(『徒然草』第四十一段)

生亦惑、死亦惑、*尤物惑、人忘不得。人非木石皆有情、不如不遇傾城色。(『白氏文集』卷四・諷諭四「新樂府・李夫人」⁰¹⁶⁰)

*「尤物惑人」…神田本等抄本作「尤物惑人」

見もてゆくままに、あはれなる御心さまを、岩木ならねば思ほし知る。(『源氏物語』「東屋」)

さまざまに思ひ乱れて、「人木石にあらざればみな情あり」と、うち誦して臥したまへり。(『源氏物語』「蜻蛉」)

『徒然草』第四十一段は有名な賀茂の競べ馬の説話である。

競べ馬の見物の時、無常についての認識を述べて、観客を関心させたという兼好の体験談であるが、一段の最後に『白氏文集』

「李夫人」の一句が引用されている。「人非木石皆有情」と

いう白詩は、『源氏物語』東屋に見られ、蜻蛉の巻に薫が口ずさむことばである。さらに、『伊勢物語』『唐物語』『平治物語』『十

訓抄』など『徒然草』に先行する古典作品に散見する表現でもある。しかし、これら物語の文脈では、この「情け」は、白詩

と同じく、男女の愛情を指しているが、『徒然草』では無常の理の意味で用いられた。むしろ、『往生講式』「第一菩提心者、欲

往浄土、必発道心。人非木石、好自発心」というような仏教經典の文脈に近く、白詩の原意からは遠いものである。自

慢話のようなこの第四十一段は、日本に伝わった後、説話や物語に用いられ、広く知られたこの『文集』の一句を引用して、

また、宋刊本の本文は「尤物惑人」となっている所、神田本などの旧抄本系は「尤物惑人」と作る。前節には、『徒然草』の

引用本文は刊本系に近い箇所があったが、ここでは『徒然草』の文章「物に感ずる事なきにあらざ」は逆に旧抄本系統に近い。前節でも述べたが、『徒然草』が『白氏文集』を受容する際、ほとんどの場合は原典の漢詩文を自然な和文に織り成して文章に綴り込んでいる。そのため、引用本文の系統を判断するのはかなり難しいが、この二例と当時『白氏文集』の流布状況を考えて、兼好が接した『白氏文集』は旧抄本系の可能性が大きいではなからうか。

(6) 北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。

かぶし・かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ句ひの、さと薫りたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はづれはづれ聞こえたるも、ゆかし。(『徒然草』第百五段)

独憑朱檻立凌晨、山色初明水色新。竹霧晓籠衙嶺月、蘋風暖送過江春。子城陰処猶殘雪、衙鼓声前

未^レ有^レ塵。三百年來庾楼上、曾經^二多少望郷人^一。(『白氏文集』卷十六・律詩「庾樓曉望」0911)

明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。なごりまでとまれる御句ひ、「闇はあやなし」と独りごたる。雪は所どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うち叩きたまふも、久しうかかることなかりつるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせたてまつりて引き上げたり。(『源氏物語』若菜上)

『徒然草』第百五段は寒い夜、御堂の廊で語り合う男女の姿を垣間見た物語的な章段である。「北の屋かげに消え残りたる雪」という一句は、『千載佳句』にも見られる『白氏文集』「庾樓曉望」の詩句を踏まえていると『徒然草』の諸注釈に見えるが、『源氏物語』¹若菜上の世界がその背後にあることが稲田氏に指摘されている。²氏はさらにこの章段と、下記『兼好法師集』の和歌とその詞書きとの近似性を指摘した。

冬の夜、あれたる所にすのこにしりかけて、木だ
かき松のこのまよりくまなくもりたる月を見て、あ
かつきまで物がたりし侍りける人に

33 おもひいづやのきのしのぶに霜さへて松の葉わけの月
を見し夜は

この和歌が詠んだ冬の夜に、女性と床に座って一夜語り合うという経験は第百五段の話の発想の源となったことが考えられるが、『源氏物語』と『徒然草』本文で波線で示した句いという要素の近似性などから考えると、『源氏物語』若菜上が『徒然草』第百五段に影響を与えたことが認められる。『徒然草』は源氏が口ずさむ『文集』の有名な一句を自然に和文化して取り入れ、『源氏物語』を中間的媒介に、重層的に『白氏文集』を受容した一例である。

(7) 望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉ち
かくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、青みたるや
うにて、ふかき山の杉の梢に見えたる、木の間の影、う
ちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。
椎柴・白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきた
るこそ、身にしてみても、心あらん友もがなと、都恋しう覚
ゆれ。(『徒然草』第百三十七段)

銀台金闕夕沈沈、独宿相思在^二翰林^一。三五夜中新月色、二
千里外故人心。渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深。猶恐
清光不^二同見^一、江陵卑濕足^二秋陰^一。(『白氏文集』卷十四

・律詩「八月十五日夜禁中独直对¹月憶²元九³」0724

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。（『源氏物語』須磨）

『徒然草』第三百三十七段は物の見方と美意識及び無常の認識について論じた長文である。山里の月夜の風景を描く文章に『白氏文集』の有名な一句「三五夜中新月色、二千里外故人心」を和文化して取り入れて²いる。この一句は『和漢朗詠集』や『平家物語』『増鏡』にも採られた名句であるが、『源氏物語』須磨の巻に源氏が口ずさむ一句としてあげられている。次節に和歌に詠み込むこの白詩についても考察するが、『徒然草』は「心あらん友もがな」という『源氏物語』須磨に見られない友を思う、つまり元九を思う白詩の要素が見られる一方、「都恋しう覚ゆれ」という「禁中」で詠まれた白詩とは逆に、『源氏物語』に見られる要素を両方織り込んでおり、重層的な受容方法の好例と言える。

（8）ぬしある家には、すずろなる人、心のままに入り来る事なし。あるじなき所には、道行人みだりに立ち入り、狐

・ふくろふやうの物も、人げに塞がれねば、所得顔に入りすみ、木霊などいふ、けしからぬかたちもあらはるものなり。（『徒然草』第二百三十五段）

長安多²大宅¹、列在²街西東¹。往往朱門内、房廊相对空。鼻鳴²松桂枝¹、狐藏²蘭菊叢¹。蒼苔黄葉地、日暮多²旋風¹。（『白氏文集』卷一・諷諭一「凶宅詩」0004）

こはなぞ、あなものの狂ほしもの怖ぢや、荒れたる所は、狐などやうのもののおびやかさんとて、け恐しう思はするならん。（中略）夜中も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞えて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、鼻はこれにやとおぼゆ。（『源氏物語』夕顔）

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましうけ遠き木立に、鼻の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、こ木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、ものわびしき事のみ数知らぬに。（『源氏物語』蓬生）

『徒然草』第二百三十五段は心の実体の有無について論じた章段である。狐・鼻が住む荒れた家を描くために、本文中に直

線で示した『白氏文集』「凶宅」の一句を引用している。『源氏物語』夕顔と蓬生の巻にこの詩句を踏まえた表現が見られることが『紫明抄』『河海抄』などの古注釈に指摘されている。また、戸谷三都江氏（一九七四）と金文峰氏（二〇〇二）が前掲論文において論じたように、波線で示した『徒然草』第二百三十五段のほかの部分にも『源氏物語』の影響が見られるなど、ここも『徒然草』が『源氏物語』の世界を通して、重層的に『白氏文集』を受容した一例である。なお、戸谷氏と金氏は「人凶非宅凶」という『文集』「凶宅詩」の主題に注目して、第二百三十五段全体の構想にこの白詩の影響が認められると指摘したが、戸谷氏も言及したように、第二百三十五段は家を例として心の問題を論じた仏教思想の影響が強い章段である。自己の内奥である心を問題とした『徒然草』第二百三十五段と、「人凶」が国を滅ぼす原因にもなると諷諭した『白氏文集』「凶宅詩」とは主題・構想の一致性を認めてよいだろうか。むしろ、『源氏物語』にも引用された『白氏文集』の有名な表現を用いて、『徒然草』独自の思想を述べたものと位置づけたほうが妥当ではなからうか。

『源氏物語』には、『白氏文集』が多く引用されており、その諷諭性といった思想を摂取した部分も見られるが、『徒然草』に受容された『白氏文集』と『源氏物語』に受容された『白氏文集』が重なる八例を見ると、思想性の受容が見られず、八例の中の五例は『源氏物語』の作中人物が口ずさんだ『文集』の有名な詩句である。つまり、『源氏物語』の場面を想起させる白詩を受容する本歌取りの方法である。このように、『徒然草』の『文集』受容は、『源氏物語』の世界を通して、原典だけではなく、その中間的媒体である『源氏物語』などの王朝文学も投影させて、重層的な受容方法を示している。

(三) 和歌の場合

前述したように、『徒然草』が受容した『白氏文集』の詩句中、『徒然草』に先行する和歌にもよく詠まれたものが少なからず見られる。本節は金文峰氏（二〇〇一）の前掲論文を踏まえながら、『徒然草』が受容した『白氏文集』の文章表現と和歌に詠まれた『白氏文集』との関係について考察する。

(1) 「もののははれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、牆根の草もえいづるころより、やゝ春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけし

きだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて心あわたしく散り過ぎぬ。(中略)「灌仏のころ、祭のころ、^②若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふくころ、早苗とるころ、水鶏のたゞくなど、心ぼそからぬかは。六月のころ、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月被またをかし。(『徒然草』第十九段)

①黄昏独立佛堂前、满地槐花滿樹蟬。大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天。(『白氏文集』卷十四・律詩「暮立」079)

○「文集百首」秋

大底四時心惣苦、就中腸断是秋天

1934 あだに思ふうれへは秋の空ながら雲に心やなびき行くらむ(『拾玉集』)

大底四時心惣苦、就中腸断是秋天

434 さくら花山郭公雪はあれどおもひをかぎる秋はきにけり(『拾遺愚草員外』)

②閑有老僧立、静無凡客過。殘鶯意思尽、新葉陰涼多。(『白氏文集』卷九・感傷一「青竜寺早夏」041)

○「文集百首」夏

殘鶯意思尽、新葉陰涼多

1923 鶯の夏のはつねをそめかへてしげき梢にかへるころかな(『拾玉集』)

新葉陰涼多

423 陰しげきならの葉がしは日にそへてまどより西の空ぞ少き(『拾遺愚草員外』)

①の傍線部は前述したものであるが、四季の中に秋が最もあはれな心情を引き出す季節であるという美意識は『古今和歌集』卷四・秋上の歌「187いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける」などからよく知られるものである。さらに『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られた白詩の一句「大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天」は「文集百首」に句題として選ばれている。「文集百首」は建保六年(一一二八)に慈円・定家・寂身が『白氏文集』の詩句を句題に詠んだ百首であり、②の傍線も同じ「文集百首」に詠まれた『白氏文集』「青竜寺早夏」の一句を踏まえている。「早夏」という季節や、「梢」「しげき」などの表現の一致性から、この部分は『文集』の原典と、「文集百首」の表現と両方を重層的に受容したと認められる。

(2) さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと

見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年を待たで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。(『徒然草』第三十段)

古墓何代人、不知姓與名。化作路傍土、年年春草生。感彼忽自悟、今我何營營。(『白氏文集』卷二

・諷諭二「続古詩十首その二(0066)」

○「文集百首」無常

古墓何代人、不知姓与名、化作道旁土、年年春草生

2001 うづもれぬ名をだにきかぬ苔のうへにいくたび草のお

ひかはるらむ(『拾玉集』)

古墓何代人

501 つかふりてそのよもしらぬ春の草さらぬ別と誰したひ

けん(『拾遺愚草員外』)

『徒然草』第三十段は人の死後の悲しさや寂しさを描いた章段である。その文章表現と全体の趣旨の近似性から、第三十段は『寿命院抄』などの諸注があげた『白詩文集』「続古詩十首その二」を下敷きにして書かれたことが明らかである。なお、白詩のこの部分は、「文集百首」にも詠まれ、『続本朝往生伝』をはじめ、『袋草紙』『古事談』『発心集』『撰集抄』『十訓抄』など

に取り上げられた顕基説話にも見られる名句である。無常観を説いた第三十段の背後には、白詩と白詩を受容したこれら日本の古典作品の世界の重層的な影響が認められる。

(3) 埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。(『徒然草』第三十八段)

遺文三十軸、軸軸金玉声。龍門原上土、埋骨不埋名。

(『白氏文集』卷五十一・格詩歌行雜体「題故元少尹集

後二首その二(2217)」

○『金葉集』卷第十・雜部下

小式部内侍うせて後、上東門院より年ごろ賜はり

ける衣を亡き後にも遣はしたりけるに、小式部と書

き付けられて侍りけるを見てよめる 和泉式部

620 もろともに苔の下には朽ちらずして埋もれぬ名をみるぞ

悲しき

○『新勅撰集』卷第十七・雜歌二

文治の頃ほひ、父の千載集撰び侍りし時、定家が

もとに遣はすとてよみ侍りける 尊円法師

1192 わがふかくこけのしたまでおもひおくうづもれぬ名は

きみやのこさむ

○『拾玉集』「歳暮舍利報恩会聴講分別品和歌」

4260 としをへて暮行くとしはつもれどもうづもれぬ名はまたとまりつつ

○『拾遺愚草』「詠百首和歌」

天

707 見ず知らぬうづもれぬ名の跡やこれたなびきわたる夕暮の雲

『徒然草』第三十八段の「埋もれぬ名」は『和漢朗詠集』にも採られた『白氏文集』「題^二故元少尹集後^一二首その二」の一句「埋^レ骨不^レ埋^レ名^一」を踏まえながらも、白詩の用法とはズレが看られることは本章の第一節にすでに述べたが、「埋もれぬ名」という言葉は『金葉集』に見られる小式部の死を悲しむ和泉式部の和歌が詠まれて以来、右であげた『新勅撰集』尊円法師の和歌や、『拾玉集』『拾遺愚草』といった和歌の世界に散見するものであり、歌語として定型化している。『徒然草』が受容した『文集』の表現の中、こういう和歌に多く詠まれ、歌語として定着したものは少なくない。

(4) 庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、皆おろしてさびしげなるに。(『徒然

草』第四十三段)

貌随^レ年老欲^二何如^一、興遇^レ春牽尚有^レ餘。遙見^二人家^一花

便入、不^レ論^三貴賤與^二親疎^一。(『白氏文集』卷六十六・律

詩「又題^二一絶^一」3244)

○『千里集』

遙見人家花便入

84 よそにても花をあはれとみるからにしらぬ宿にそまづ入りにける

○『道濟集』

卯花をたづぬ

34 うのはなのさけるあたりをたづぬればしらぬやどをもしりぬべきかな

○『嘉言集』

うのはなをたづぬ

91 うの花を尋ぬるほどに山がつのあひしる人になりけるかな

○『文集百首』春

遙見人家花便入、不^レ論^三貴賤與^二親疎^一

1914 花をやどのあるじとたのむ春なれと見にくる友をきらふ物かは(『拾玉集』)

遙見人家花便入、不^レ論^三貴賤與^二親疎^一

414 はるかなる花のあるじのやどとへばゆかりもしらぬの
べの若草（『拾遺愚草員外』）

『徒然草』第四十三段も前述したものであるが、その表現の典拠とされる『白氏文集』の一句「遙見^二人家^一花便入^二」ははやく大江千里の『句題和歌』に詠まれ、源道濟・大江嘉言など撰関期の歌人や、慈円・定家の「文集百首」にも句題として選ばれている。人の家に咲く美しい花を見過し難く、ついにその家に入ってしまうという情景は和歌の世界の美意識として定型化してたものであり、兼好はこの章段の物語を描く時、前述した『白氏文集』の原典と『和漢朗詠集』古注の説話だけではなく、こういう和歌の審美世界も念頭にあったではなかるうか。なお、『徒然草』は物語を作り上げる時、これら漢詩・和歌のように、花がある人の家に入ったのではなく、その家の主の風情をひそかに覗くという独自の設定をしている。

（5）箱風情の物にしたため入れて、双の岡の便よき所に埋み置きて、紅葉散らしかけなど、思ひ寄らぬさまにして、御所へ参りて、児をそそのかし出でにけり。

うれしと思ひて、ここかしこ遊びめぐりて、ありつる苔のむしろに並みあて、「いたうこそこうじにたれ。」（『徒

然草』第五十四段）

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。莫恠独吟秋思苦、比君校近二毛年。（『白氏文集』卷十三・律詩「秋雨中贈元九」0620）

○「文集百首」秋

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天

1944 やどはいづく空のけしきに苔むして秋くれ方の松かぜのこゑ（『拾玉集』）

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天

444 こけむしろもみぢふきしく夕時雨心もたつぬ長月のくれ（『拾遺愚草員外』）

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天

14 紅葉ちるこけの緑をあかずとや夕をそむる嶺のむら雲（『寂身法師集』）

○『万葉集』卷七・雑

詠蘿

124 ミヨシルノ アヲネガミネノ コケムシロ
三芳野之 青根我峰之 蘿 席 誰 將 織
夕テヌキナシニ 経 緯 無 二 二

○『千載和歌集』卷十七・雑中

おほみねとほり侍りける時、笙のいはやといふ宿にてよみ侍りける 前大僧正覚忠

1109 やどりするいはやのとこのこけむしろいくよになりぬ
ねこそいられね

○『風雅和歌集』卷十六・雑歌中

題しらず

前大納言家雅

1762 おく山のいはほのまくらこけむしろかくてもへなむあ
はれ世の中

『徒然草』第五十四段も前出したものである。この仁和寺の法師の滑稽譚の舞台設定に使われた『白氏文集』「秋雨中贈元九」の一句「不堪紅葉青苔地」は、『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られたが、『徒然草』が用いた「こけのむしろ」という言葉は右であげたように、『万葉集』に初出して、三代集の時代は歌例が少ないが、院政期から特に私家集、歌合に散見する歌語である。

(6) 望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁ち
かくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、青みたるや
うにて、ふかき山の杉の梢に見えたる、木の間の影、う
ちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。
椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきた
るこそ、身にしてみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚
ゆれ。(『徒然草』第三百三十七段)

銀台金闕夕沉沉、独宿相思在翰林。三五夜中新月色、二

千里外故人心。渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深。猶恐

清光不同見、江陵卑濕足秋陰。(『白氏文集』卷十四

・律詩「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」0724)

○『玉葉和歌集』卷第五・秋歌下

賀茂社へたてまつりける百首歌の中に擣衣を

皇太后宮大夫俊成

759 月きよみちさとの外に雲つきて宮このかたにころもう
つなり

○『清輔集』秋

月

126 ゆくこまのつめのかくれぬ白雪や千里の外にすめる月
影

○『石清水若宮歌合正治二年』三十一番

右勝

雅經朝臣

194 あくがるるこころの程は月もみよ千里の外あり明の
そら

『徒然草』第三百三十七段は第二節で取り上げ、物語によく引
用された白詩の一句「三五夜中新月色、二千里外故人心」を踏
まえた論じたが、右であげた和歌の用例と較べればわかるよ

うに、物語では白詩原文と同じ「二千里」になっているところ、歌語では和文化して「千里」となっている。これは和歌の字数と関係があると思われるが、字数の制限がない『徒然草』も原典の「二千里」ではなく、変容した形の「千里」を用いた。これは『徒然草』の文章が和歌を中間的媒介に『白氏文集』を受容した好例といえよう。

(7) 人事多かる中に、道を楽しぶより気味深きはなし。これ、実の大事なり。(『徒然草』第七十四段)

人間栄耀因縁浅、林下幽閑気味深。煩慮漸銷虚白長、一年心勝_二一年心_一。(『白氏文集』卷六十六・律詩「老来生計_二48_一」)

○「文集百首」山家

人間栄耀因縁浅、林下幽閑気味深

1965 山かげや秋のこのもと色ふかみあさくも花を思ける哉
(『拾玉集』)

人間栄耀因縁浅、林下幽閑気味深

465 あらしをく田のものは草しげりつつ世のいとなみのほ
かや住うき(『拾遺愚草員外』)

『徒然草』第七十四段も第一節で取り上げた例である。本章段は『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られた白詩の一句「林

下幽閑気味深」を踏まえて文章を綴ったが、この白詩はまた「文集百首」に句題として選ばれたものである。

以上のように、『徒然草』が受容した『白氏文集』の詩句が和歌にも詠まれた例を見てきた。中には、『白氏文集』の表現が和歌に多く詠まれて定型化した歌語になっている言葉や美意識を取り入れたものや、白詩の原典ではなく和歌に詠まれた変容した形の表現を用いたものが少なからず確認できる。『徒然草』はこういう和歌の世界のプリズムを通して重層的に『白氏文集』を受容したことが認められる。

(四) その他

『徒然草』は『千載佳句』『和漢朗詠集』などの秀句撰や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学、和歌の世界を通して『白氏文集』を受容した用例を分析してきた。本節はその他として、いくつかこの三者に網羅できない用例について考察する。

たとえば、前にすでに取り上げた『徒然草』第五十四段の文章「あはれ紅葉を焼かん人もがな」であるが、これは『白氏文集』「送_二王十八帰_一山_二寄_二題仙遊寺_一」の一句「林間煖_レ酒焼_二紅葉_一」を下敷きにした表現である。紅葉を焼いて酒を暖めた話は『平家物語』にも見られ、高倉天皇の仁徳を讃えた説話として

有名である。第五十四段の仁和寺の法師の滑稽談に、稚児を喜ばそうとして埋めた破子を掘り出すきっかけを作る言葉としてこの表現を用いたのは、『平家物語』の説話も投影させ、風流の雰囲気を作りあげて、逆に笑いの面白みを引き出す効果がある。

(1) 財多ければ、身を守るに貧し。害を賈ひ、累ひを招く媒なり。① 身の後には金をして北斗をさふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよるこぼしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて愚かなりとぞ見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とはいふべき。② 愚かにつたなき人も、家に生れ、時にあへば、高き位に登り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬる、また多し。ひとへに高き官・位を望むも、次に愚かなり。(『徒然草』第三十八段)

① 天地迢迢自長久、白兔赤鳥相趣走。身後堆_レ金柱_レ北斗_レ、不如_レ生前一樽酒_レ。君不見_レ、春明門外天欲_レ明、喧喧

歌哭半死生。遊人駐_レ馬出不_レ得、白輿紫車爭_レ路行。帰去来、頭已白、典_レ錢將_レ用買_レ酒喫_レ。(『白氏文集』卷五十一・律詩「勸酒」2239)

② 有_レ松百尺大十圍、生在_レ澗底_レ寒且卑。澗深山險人路絶、老死不_レ逢_レ工度_レ之。天子明堂欠_レ梁木_レ、此求彼有_レ兩不知。誰論蒼蒼造物意、但與_レ之材_レ不_レ與_レ地。金張世祿原憲貧、牛衣寒賤貂蟬貴。牛衣高下雖_レ有_レ殊。高者未必賢、下者未必愚。君不見_レ沈沈海底生_レ珊瑚、歷歷天上種_レ白榆。(『白氏文集』卷四・諷諭四「新樂府・澗底松」0151)

『徒然草』第三十八段については前節でほかの部分述べたが、ここで取り上げるのは『徒然草』の『白氏文集』受容例の中に、先行の古典作品に取り上げられていない独自のものである。第三十八段は人生の無常を詠んだ同じ趣旨の『白氏文集』「勸酒」と「新樂府・澗底松」の詩句を文章に取り入れている。「勸酒」は人がいつ死ぬのかは予測できないもので、お金を貯めても死んだら全部無意味なものになるから、そのお金で酒を買ってことを勧めた詩である。財宝を貯める行為のはかなさを述べた『徒然草』第三十八段と表現だけではなく、発想も類似している。また、『徒然草』本文中に傍線②で示した、高位にいる愚か

な人と賤位にいる賢人・聖人という対比は、戸谷三都江氏（一九七四）も指摘したように、「新樂府・潤底松」の発想と表現を踏まえている。なお、村上美登志氏の前掲論文（一九九一）に、第三十八段の文章「いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にはあはずしてやみぬる、また多し」について、藤原良経撰と伝える鎌倉時代の類書『玉函秘抄』中巻に見られる『白氏文集』の文章「位高則惜其位、身貴則愛其身」を典拠として指摘している。これは『白氏文集』巻四十一に収められた有名な奏状「初授拾遺献書」の一文で、『旧唐書』の白居易伝や、中国宋代の類書『文苑英華』『冊府元龜』にも取られているが、表現上に、「新樂府・潤底松」の詩句「高者未必賢、下者未必愚」のほうがより近いと思われる。ちなみに、「新樂府・潤底松」の一句も『玉函秘抄』下巻（尊経閣文庫蔵本613）に見られるものである。村上氏の論文にも指摘されたように、第三十八段は所々に和製類書に見られる金句と近似する表現があり、従来漢籍と深い関係にあると考えられた第三十八段の表現は、和製類書を経由して漢籍を撰取した可能性が看過できない。

(2) 世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望み深きを見て、

むげに思ひくたすは僻事なり。（『徒然草』第四百十二段）

眼下有衣兼有食、心中無喜亦無憂。匹如身後有何事、応向人間無所求。（『白氏文集』巻五十七・律詩

「偶吟二首その一」²⁷⁷⁵）

故明禅法印、止観の談義の座に、ある遁世入道臨みて聴聞しけり。法門の次に、楽天の詞を引ききて、「匹如の身の後には何事か有らむ。応向世間には求むる所無し」と云ふ事、その沙汰あり。云ふ心は、人は一物持たずして手うちふりたるを、するすみと云ふ。また杖つくほどの地も持たぬを、足ふみたてぬ世間と云ふ。身を捨てやりぬれば、求むる所も少なく、煩ひもなく、欲もなく、心安しと云ふ事なり。（『沙石集』巻第四ノ七「道に入りては執着を棄つべき事」）

『徒然草』第四百十二段は慈悲の情けを肯定し、為政者に善政を唱えたものである。『徒然草』の中に珍しい儒教的な思想が見える章段であるが、禅的な趣向を詠んだ白詩の詩句を用いたことが興味深い。「匹如」は『類聚名義抄』に「スルツミ」と訓があり、諸注に指摘されたように、『沙石集』にも「人は一物持たずして手うちふりたるを、するすみと云ふ」と解説がある。

(3) 色にふけり情けにめで、行ひをいさぎよくして百年の身

を誤り、命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからん事をば思はず。好ける方に心引きて、ながき世語りともなる。身を誤つ事は、若き時のしわざなり。〔徒然草〕第一百七十二段〕

為^二君一日恩、悞^二妾百年身^一。寄^二言痴小人家女、慎勿^二将^レ身輕許^レ人^一。〔白氏文集〕卷四・諷諭四「新樂府・井底引^二銀瓶^一」(0164)

里へ帰り、うちふす事五六日して、つひにはかなくなりにけり。「君が一日の恩のために、妾が百年の身をあやまつ」とも、かやうの事をや申すべき。〔平家物語〕卷六・葵前)

ゆゑに、白居易は、「井の底の瓶」のたとへを引きて、少人の家の女、慎みて身をもて、軽々しくゆるすことなかれといひおかれ。〔十訓抄〕第五「朋友を撰ぶべき事」(五ノ八)

『徒然草』第一百七十二段は若者と老人の長所と短所を比較した評論である。傍線のように、趣旨が全く相違する、乱れた恋愛を戒めた『白氏文集』「井底引^二銀瓶^一」の一句「悞^二妾百年身^一」を踏まえた表現が見られる。この白詩の一句は『平家物語』『十訓抄』にも引用されているが、いずれも『白氏文集』と同じ、

男女の情愛を戒めた意味で使われている。このように、『徒然草』は白詩の主題から離れて、『文集』の著名な詩句だけを借用して独自の趣旨を述べる方法は注意されよう。

四、まとめ

以上のように、『徒然草』に受容された『白氏文集』の用例二十一箇所を分析した。その中、『千載佳句』『和漢朗詠集』などの秀句撰の『文集』受容と重なるものが十二例、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学の『文集』受容と重なるものが八例、和歌の『文集』受容と重なるものは同じ八例あり、いずれも大きな比率を示している。このように、『徒然草』の『白氏文集』受容は、先行の古典作品に大いに依拠していることがわかる。また、『白氏文集』の原典の意味や用法から離れて、白詩の文章表現だけを借用して独自の趣旨を述べる方法や、和歌において定着した歌語或いは変容した表現を取り入れる方法が目立つ。そして、『徒然草』の『白氏文集』受容例を分析すると、『和漢朗詠集』とその古注や、『源氏物語』とその古注の『文集』理解に近いものが確認できる。つまり、『徒然草』はこれら『白氏文集』を受容した日本の古典世界を中間的媒体として、『白氏文集』を理解している傾向が見られる。兼好が『徒然草』の文章を執筆

する際、稲田利徳氏が指摘したように、²⁶ 先行の古典作品を取り入れながらも、独自の意匠を凝らす傾向がある。『白氏文集』を受容する時も、引用箇所は先行する日本の古典作品とほぼ重なるが、『白氏文集』の原典だけではなく、それを受容した先行の古典文学作品の世界も投影させて、重層的な引用・享受方法となっている。そして、漢文脈の『白氏文集』の文章表現を和文脈に自然に織り成し、『白氏文集』の名句を持つ深みを文章に取り入れながら、『徒然草』本文の意趣に沿うように新たな文章を作り出したところに、『徒然草』のオリジナリティが認められよう。

さらに、『徒然草』の『白氏文集』受容例を見ると、二十一箇所のうち、諷諭詩を九首撰取しているが、白詩の諷諭的な性格が見られず、美意識を現す叙情表現としてなど、その表現だけを受容するものがほとんどである。『白氏文集』、特に新楽府は平安時代以来盛んに読まれてきたが、主にその美しい文章とストーリーが愛好された。鎌倉時代に入ると、その諷諭性・教訓性が重視する動きがあった。例えば、永仁三年（一二九五）写の『管見抄』奥書に「古今之間、緇素之類、抄出此集、雖多其人、皆為春花而抄出之、為秋実而不抄之。於今抄者、指帰異之。先抽治政之要、是依可補私務也。次採吝物

之詞、是依可養己志也。後拾風月之章、是依可悦我目也」とあり、²⁷ 太田次男氏も指摘したように、「新楽府は唐代に於ては勿論のこと、わが国に伝来しては、平安以来異常なまでの盛行をみたが、それは主として美的側面の愛好によるものであり、白氏の諷諭の精神を為政者への教訓として受け取り、²⁸ 謂わば教訓物語ともいふべきものに作り上げているのである」。『徒然草』の『白氏文集』受容とこれら中世の『文集』に対する新たな解釈傾向との差異をどう理解するかは今後考えなければならぬ課題である。

テキスト

- 川口久雄・志田延義校注日本古典文学大系『和漢朗詠集』岩波書店 一九七三年
- 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著『和漢朗詠集古注集成』大学堂書店 一九八九年
- 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳新編日本古典文学全集『狭衣物語』小学館 一九九九年
- 和歌はすべて『新編国歌大観』（角川書店 一九八三年）による。私意によって清濁・表記を改めたところがある。
- 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句

研究篇』培風社 一九五五年

○阿倍秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳新編日本
古典文学全集『源氏物語』小学館 一九九六年

○小島孝之校注・訳新編日本古典文学全集『沙石集』小学館 二
〇〇一年

○市古貞次校注・訳新編日本古典文学全集『平家物語』小学館
一九九四年

○浅見和彦校注・訳新編日本古典文学全集『十訓抄』小学館 一
九九七年

1 久保田淳「出典・源泉・先蹤」『諸説一覽徒然草』明治書院 一九七〇年

川口久雄「徒然草の源泉―漢籍」『徒然草講座四』有精堂 一九七四年

2 戸谷三都江「徒然草の方法―『白氏文集』受容における―」『学苑』四〇九号 一九七四年一月

金文峰「『徒然草』の研究―『白氏文集』受容考（一）―」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』一二卷一号 二〇〇一
年十一月

金文峰「『徒然草』の研究―『白氏文集』受容考（二）―」『岡大國文論稿』三〇号 二〇〇二年三月

3 村上美登志「『徒然草』と和製類書―もう一つの漢籍受容―」『伝承文学研究』四〇号 一九九一年十二月
村上美登志「徒然草と類書」『国文学解釈と鑑賞』六二号 一九九七年十一月

4 稲田利徳「『徒然草』の虚構性」『徒然草論』笠間書院 二〇〇八年

- 5 稲田利徳『徒然草』と『源氏物語』『徒然草論』笠間書院 二〇〇八年
- 6 『白氏文集』の本文と編纂問題については花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店 一九七四年）、太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（勉誠出版 一九九七年）など詳細な先行研究があげられる。
- 7 金文峰『徒然草』における『白氏文集』の受容について『徒然草受中日古典文学的影響』上海交通大学出版社 二〇〇九年
- 8 伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』（大学堂書店 一九八九年）によると、東大本『和漢朗詠集私注』が「君が為に衣裳を薰すれども」と訓読しているが、国会図書館本『和漢朗詠集仮名注』と『和漢朗詠集永済注』が「君が為に衣裳に薰すれども」と訓読している。
- 9 『徒然草』第十九段に「言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず」とある。
- 10 相田満「朗詠注釈の和漢—朗詠注釈開題考—」『和漢古典学のオントロジ』勉誠出版 二〇〇七年。系図の作成も相田氏の論文にある系図を参考した。
- 1 2 1 1 稲田利徳『徒然草』と『無名草子』『徒然草論』笠間書院 二〇〇八年
- ほかに天理図書館本『和漢朗詠集見聞』に「芝靈錫」、国会図書館本『和漢朗詠注』に「子令石」、書陵部本『朗詠抄』に「尸靈石」、国会図書館本『和漢朗詠集仮名注』に「師靈石」、『和漢朗詠集永済注』に「師礼石」、『和漢朗詠集和談鈔』に「師靈石」と、花が生えた家の主人の名前の漢字表記はそれぞれ違うが、音読みでは同じ発音の名前であり、類似する注釈は聞書の形で継承されていることがわかる。
- 1 3 伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』（大学堂書店 一九八九年）第二巻上の解題、注10の相田氏論文によると、国会図書館本『和漢朗詠注』は見聞系朗詠注に属するもので、その書写は寛永二十二年（一六四四）であるが、見聞系朗詠注の成立は院政期以前に遡れるとされている。
- 1 4 安良岡康作『徒然草全注釈』角川書店 一九七六年。なお、西村岡紹・末木文美士『観心略要集の新研究』（百華苑 一九九二

年)によると、『観心略要集』現存三本の中、寛文十一年刊本は「夕陽之前愛子孫」と作るが、残る寛永三年刊本と無刊記刊本は「夕陽之前愛子孫」と作る。

15 玉上琢彌『紫明抄・河海抄』角川書店 一九七八年。なお、『紫明抄』が大いに依拠した『光源氏物語抄』(『異本紫明抄』)も同じ箇所¹に白詩を用いて注しているが、「夕陽愛子孫」となっている(源氏物語古註釈叢刊『源氏積・奥入・光源氏物語抄』武蔵野書院 二〇〇九年)。

16 池田亀鑑「青表紙本の形態と性格」『源氏物語大成巻七』(中央公論社 一九五三年)に見られる宮内庁書陵部蔵『源氏物語』桐壺巻の巻末奥書に「延元々年三月廿一日申出青表紙御本京極入道中納言家御自筆候、一條猪熊旅所終写功御子左黄門御入筆所々有之可為重宝歟康永二年七月廿八日校合訖兼好宣名」とある。

17 『枕草子』(田中重太郎『校本枕草子』古典文庫 一九五六年)能因本第二百二十一一段に「はるかなるせかいにある人の、いみじくおぼつかなくいかならんとおもふに、文をみればただいまさしむかひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし」とある。『無名草子』(新潮日本古典集成『無名草子』新潮社 一九九二年)に「つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたる物など見るは、いみじくあはれに、歳月の多く積りたるも、只今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。たださし向ひたるほどの情けばかりにてこそ侍れ、これは、昔ながらつゆ変ることなきも、めでたきことなり」とある。注11稲田氏の論文に詳しい。

18 『伊勢物語』九十六(新編日本古典文学全集『伊勢物語』小学館 一九九四年)に「むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しと思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり」とある。『唐物語』第十八話「玄宗と楊貴妃」(小林保治『唐物語全釈』笠間書院 一九九八年)に「これひとりきみのみにあらず。人むまれて木石ならねばみなをのづからなさけあり」とある。『平治物語』下「常葉六波羅に参る事」(山下宏明『平治物語』三弥井書店 二〇一〇年)に「木石にあらず。しかし傾城の色に相ざらんにはと、文集の文也」とある。『十訓抄』第九「懇望を停むべき事」九ノ五(新編日本古典文学全集『十訓抄』小学館 一九九七年)に「これひとへに、愛着生死の業なれども、木石ならぬ身の習ひに

て、この恨みにしづむたぐひ、古今数を知らず」とある。

浄土宗全書『往生講式』 浄土宗典刊行会 一九三〇年

この問題に関して、神鷹徳治氏「紫式部が読んだ『文集』のテキスト―旧鈔本と版本」（日向一雅編『源氏物語と漢詩の世界―

『白氏文集』を中心に』青簡舎 二〇〇九年）に、『文集』と『白氏文集』という二種の書名を通して、旧鈔本と版本とのテキストが区別されていたと指摘され、『徒然草』十三段に「白氏文集」と見え、室町期に流布した宋版本系に由来している書名を指しているというご意見もある。

同注4。

2 2 2 1

『平家物語』巻七「青山の沙汰」（新編日本古典文学全集『平家物語』小学館 一九九四年）に「村上の聖代応和のころほひ、三五夜中新月の色、白くさえ、涼風颯々たりし夜牛に、帝清涼殿にして玄象をぞ遊ばされける時に影の如くなる者御前に参じて優にけだかき声を以て唱歌をめだたうつかまつるとある。『増鏡』「新島守」（井上宗雄『増鏡全訳注』講談社 一九七九年）に「松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりことそぎたり云々はるばると、見やらるる海の眺望、二千里の外も、のこりなき心地するいまさらめきたり」とある。

歌合・定数歌全釈叢書八『文集百首全釈』風間書房 二〇〇七年

近藤みゆき「撰関期和歌と白居易」『白居易研究講座三』勉誠出版 一九九三年

『平家物語』巻六・紅葉（新編日本古典文学全集『平家物語』小学館 一九九四年）に「かしこへ行幸なッて紅葉を覧なるに、なかりければ、「いかに」と御たづねあるに、蔵人奏すべき方はなし。ありのままに奏聞す。天氣ことに御心よげにうちゑませ給ひて、『林間煖酒焼紅葉』といふ詩の心をば、それらにははたがをしへけるぞや、やさしうも仕りたる物かな」とて、かへッて叡感に預ッしうへは、あへて勅勘なかりけり」とある。

同注4と5。

2 7 2 6

太田次男「国立公文館内閣文庫蔵『管見抄』『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究中巻』勉誠出版 一九九七年

2 5 2 4 2 3

太田次男 「真福寺蔵新樂府注に見える教訓と武家社会」 『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究下巻』 勉誠出版 一九九七年

第二章 『徒然草』における漢籍受容の方法―第二十五段「桃李もの言はねば」をめぐって―

一、はじめに

前章では、表現面と思想面で『徒然草』に多大な影響を与えた『白氏文集』を例に取り上げ、『徒然草』が漢籍を受容する際に用いた重層的な方法を分析した。つまり、『徒然草』は『千載佳句』『和漢朗詠集』の秀句撰や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学、「文集百首」など和歌の世界といった中間的媒体を経由して『白氏文集』を受容している傾向という、『白氏文集』原典だけではなく、それを受容した先行の古典文学作品の世界も投影させて、重層的な引用・享受方法である。本章では、『徒然草』第二十五段を取り上げ、このような重層的な漢籍受容法の具体例を分析する。第二十五段において旧邸懐旧のテーマを語る際に用いた「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章は漢籍の故事「桃李不言」を出典とするが、原典の意味から離れて、中国と日本の漢詩文、さらに和歌においても、懐旧・懐古の思いを詠む用法が現れ、複雑な変遷の経緯を辿ったことを明らかにしたい。

二、『平家物語』と『永濟注』の影響

「飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば」から始まる『徒然草』第二十五段は、藤原道長の京極殿と法成寺を例にあげて、無常を説く章段である。それほど奢侈を極めた邸宅も今は見るだけでも悲しくなるほどに荒れ果てていることから、死後のことまで心を尽くして配慮するのは、むなしいことだと兼好は語っている。少し長くなるが、第二十五段の本文を引用しておきたいと思う。

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、樂しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬすみかは人改まりぬ。桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやんごとなかりけん跡のみぞ、いとほかなき。京極殿・法成寺など見るこそ、志とゞまり、事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の作りみが、せ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかなら

ん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和のころ、南門は焼けぬ。金堂は、そののち倒れふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、いまだ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、よろづに見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。

建築物の無常から世の無常を連想するのがこの章段の発想である。無常を説く文章は古来おびただしく存在しているが、その中でもこの章段は印象に残る美文である。たとえば、富倉徳次郎氏は「人生無常を描いたエッセイとしてわが文学中の第一流の文章といえるであろう」と絶賛している¹⁾。『寿命院抄』からの諸注釈に言われたように、冒頭の「飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば」の一句は、『古今集』読人しらずの歌「世中はなにかつねなるあすかがはきのふの淵ぞけふは瀬になる」(巻第

十八・雑歌下・題知らず)、「あすかがは淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ」(巻第十四・恋歌四・題しらず)、伊勢の歌「あすかがは淵にもあらぬわが宿も瀬にかはりゆく物にぞ有りける」(巻第十八・雑歌下・家をうりてよめる)などと、『枕草子』の「河は」の条「河は飛鳥川、淵瀬も定めなく、いかならんとあはれ也」を想起させるなど、この章段はさまざまな古歌や古詩といった先行の古典作品を踏まえて書かれたものである。就中、傍線部の文章「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」があるが、これはよく知られている漢籍の故事「桃李不言、下自成蹊」を借りて、旧邸懐旧の思いを述べたものである。「桃李不言、下自成蹊」というのは、『史記』、『漢書』に出てくる李広將軍に関する故事である。桃李はものを言わないが、美しい花と美味しい実があるために、その木の下には自然に人が集まってきたり小道ができるという意味で、無口だが、人徳があるために、人々に敬愛されている李広將軍を讃えることばとして知られている。しかし、この故事とそれを踏まえた第二十五段の文章とは必ずしもダイレクトにはつながっていない。そこで、本章では、この典故を例に『徒然草』の漢籍受容の方法について考察する。

第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」

という文章の出典について、『壽命院抄』は「桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖」という『和漢朗詠集』巻下・仙家に見られる菅原文時の漢詩をあげており、『野槌』は同じ秀句をあげたほか、『史記』李広伝賛。桃李不言。言下自成蹊」と前述した李広伝の故事を引用している。『慰草』は『野槌』と同じように、両方をあげている。

『盤斎抄』は「これは古事をもちてかく也。松もむかしの友ならぬなどいひふるしたるに。かく書事おもしろき筆法。一転語奇妙なりといへり」と述べたほか、李広伝の記事は『漢書』にもあると指摘し、『野槌』があげた『史記』の故事と菅三品の詩を併記した。「松もむかしの友ならぬ」というのは、『百人一首』にも入る『古今集』巻第十七・雑歌上の藤原興風の歌「誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」を踏まえた指摘である。この歌は『徒然草』第二十五段の文章との直接な影響関係は認められないが、植物を擬人的に取り上げ、友人に喩える発想は通じ合っている所が見られる。『盤斎抄』はまた「李カ詩是故桃李樹、吐花遂不言。山カ詩桃李不言一梅風」と、李白と黄庭堅の詩をあげた。しかし、李白の詩「古風五十九首其二十五世道」は「所以桃李樹、吐花竟不言」となっており、黄庭堅の「寺齋睡起二首其二」は「桃李無言一再風、黄鸝惟見

緑葱葱」となっている。いずれも『盤斎抄』があげた詩句の表現と異なり、管見の限りでは『盤斎抄』の表現通りのものは見当たらない。しかも、この二首の詩は「桃李不言」故事を踏まえているものの、『徒然草』第二十五段の、懐旧の思いを表す用法とは明らかに異なる。そして、その後に『盤斎抄』はこの句についての解釈を続けている。李広「將軍の生まれつきものいはぬ人なれど。心中にまことの徳あれば人の信じて。あつまる事。桃李人にこびといはねども花見事にさけば。人のあつまるにたとへて。いひたることはざより桃李ものいはずとつかひつたり。桃李人のすまぬ家にのこりてあるを見てむかしよりあるものゝのこるはこればかりなるが。これはものいはず。さていかゞせんとなげきたる心也」と述べ、「世尊寺の桃花をよめる古郷の花のものいふよなりせばいかむかしのことをとはまじ」という『後拾遺和歌集』巻第二・春下の出羽弁の和歌を引用している。

北村季吟の『徒然草文段抄』は、「旧跡にのこれる桃李ものはねば、むかしをかたりあはせん友もなくなりてはかなき心地也。文意奇妙にや」と述べ、『野槌』があげた二つの出典を引用した。『盤斎抄』と『文段抄』は、廃れた旧邸に残された桃李はものを言わないので、昔のことを語り合う友もいないというむ

なしさ・はかなさがこの文章に含まれていることを指摘している。

黒川由純の『徒然草拾遺抄』は同じ『野槌』の記述を引用して、また、「ミヌイニシヘノ」の注に、「人ノウヘニテイニシヘノタメシヲ見キクニモ、イケルカキリノ世ニコ、ロヲト、メテ、ツクリシメタル人ノ家居ナコリナクウチステラレテ、世ノナラヒトツネナクミユル、イト哀ニハカナサシラル、ヲ」と『源氏物語』の匂宮の巻の文章をあげた。これは源氏が亡くなり、六條院は人が少なくなつて寂しくなつた時に夕霧の歎きのことばであり、主人が亡くなる後に廃れた邸宅に世の常なさを見る発想は第二十五段とよく通じ合つていと言えらる部分である。

近代以降の注釈書が指摘した出典は大体これら近世諸注があげたものによつてゐるが、田辺爵氏は新たに「この部分は、平家物語を出典と考えるべきである」と指摘している。つまり、寛一本系『平家物語』巻三「少将都還」の部分では以下の通り、前述した文時の漢詩と出羽弁の和歌を並べてあげている。

三月中の六日なれば、花は未だ名残あり。楊梅、桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや。

少将花のもとに立寄つて、

桃李不言、春幾暮。煙霞無跡、昔誰栖。

ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことを問はまし。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も、をりふしあはれにおぼえて、墨染の袖をぞぬらしける。³

丹波成経が鬼界島から帰り、亡くなつた父成親の邸宅の荒れ果てた様子を見て悲しんでいる部分である。確かに、『平家物語』の該当部分では、文時の句と出羽弁の和歌を並べ、「桃李不言」の表現を懐旧の意味で使う意匠と、桃の花とともに昔のことを語る意匠をともに述べて統合している。その意味で、ものを言わない桃李と昔のことを語るといふ両方の要素が見られる『徒然草』第二十五段は、『和漢朗詠集』と『後拾遺和歌集』を直接の出典として考えることができる点で、旧邸懐旧の情景を描いた『平家物語』のこの部分の影響も否定できないだろう。しかも、周知の通り、『徒然草』には『平家物語』の作者信濃前司行長について言及する章段⁴が見られることから、なおさらである。『平家物語』の成立は長期にわたつて複雑な過程を経て形成されたものであり、この行長説についても多くの問題が残つてゐるが、その書かれた年代の古さと話の詳しさで『徒然草』は『平家物語』研究でもとくに重要視されてきた資料である⁵。兼

好は『平家物語』の詞章・本文の全体を読み得て、その全体を総合的に把握していたと安良岡氏が推測したこともあった。ように、『徒然草』における『平家物語』の影響は看過できない。ただし、この「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」の文章に影響を与えた先行作品としてもうひとつ想定したいのは『和漢朗詠集永濟注』である。少し長くなるが、この文時の詩についての注の該当部分をあげておきたいと思う。

桃李不言^{スモノイハ} 春幾^{クカ} 暮^{タル} 煙霞無跡^{シアト} 昔誰棲^{シレカスムシ}

(中略) 大和国ノ竜門寺ハ、昔、仙人ノスミカ也。弁ノ乳^{メノト}、母云女房、彼寺ニマイリタリケルニ、モ、ノ花ノ、サキタリケルヲミテ、フルサトノ花ノモノイフヨナリセハイカニムカシノコトヲトハマシ、トヨミケルモ、此心也。

『永濟注』では、この「ふるさとの」の歌は「弁ノ乳母云女房」の作としてあげられており、詠歌の場所ももと貞純親王の桃園第として知られ、桃に縁の深い^キ世尊寺ではなく、竜門寺になっっているが、竜門寺で桃の花を詠んだ弁の乳母の歌として、同じ『後拾遺集』卷十八の雑四の部に見られる。

やよひの月りう門にまゐりてたきのもとにてかのかみ義忠がものはなのほりけるをいかか

みるといひ侍りければよめる

弁のめのと

1056 物いはばとふべきものを桃の花いくよかへたるたきのしらいと

おそらく『永濟注』は何かの間違いでこのように記したのではないかと思うが、或いは、この仙家の漢詩を考える時に、『懷風藻』以来仙境に捉えられ^キ、『徒然草』第八段にも「久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失」ふと名前が見られる久米仙人の住処として知られている^キ。竜門寺のイメージが働いたのであろうか。ちなみに、漢詩注に『永濟注』を引く北村季吟の『和漢朗詠集註』においても、この箇所を直さずにそのまま記している。いずれにせよ、文時の漢詩の注として出羽弁の和歌があげられていることが確認できる。

また、この文時の漢詩についての各系統の朗詠古注を表にまとめてみると、表一のようになる^キ。表一を見るとわかるように、文時の漢詩の注として、李広伝の「桃李不言、下自成蹊」という故事を引いた注釈は『私注』、『註抄』、『永濟注』と『和談鈔』であるが、『後拾遺集』の出羽弁の歌について言及したのは『永濟注』だけである。『朗詠江注』は、「桃李不言」と「煙霞無跡」の対句は淳茂の願文に見られるもので、「如此事不避敷」と述べられており、この指摘は『私注』、『註抄』、『永濟注』に

も受け継がれている。ただし、ここに指摘された淳茂の願文は今未詳とされている¹¹。なお、近似する対句表現は『菅家文草』巻五の「三月三日同賦¹²花時天似¹³醉¹⁴」にも「煙霞遠近応¹⁵同戸¹⁶、桃李浅深似¹⁷勸盃¹⁸」と見られ、文時の漢詩は道真の詩の影響も受けていると考えられる。そのほか、桃花を仙人と関係の深い花として取り上げた注釈は見聞系、書陵部本系、『永濟注』と『和談鈔』である。その中に、『書陵部本朗詠抄』は「仙ニ、必ス桃

表一

敦茂願文の事	○	江注				
李広伝の事	○	私注	○			
仙家桃花の事	○	註抄	○			
『後拾遺集』「ふるちの歌」の事	○	見聞系	○			
		書陵部本系	○			
	○	永濟注	○			
	○	和談鈔	○			

花アリ。阮肇等カ仙家ニ入テ、桃花ヲ見ルカ如シ」と述べ、『幽明録』に見られる阮肇の名前をあげている¹⁹。阮肇は友人の劉晨と一緒に山に入ったが、道に迷って食料もなくなり、飢え死になりそうなところに、桃の樹を発見し、その実を食べて体力を取り戻した。その後、二人は仙女と思われる女性と出会い、山の中に半年間一緒に過ごしたが、桃の実はまだその仙女の食べ物として宴会の場に登場する。この話では、桃李の花ではなく、桃の実が仙界の食べ物として描かれているが、このように、桃は漢籍において、仙人と関係の深い植物であることが確認できる。『和漢朗詠集』仙家の部のこの漢詩は、桃李をもって仙人の住む旧家の風景を描写するのは、こういう漢籍の故事が背景にあることが考えられる。ここまで見てきたように、懐旧の意味で「桃李不言」という表現を使った『和漢朗詠集』文時の漢詩と、桃の花と一緒に昔を語るところを詠んだ『後拾遺集』出羽弁の和歌と両方が見られるものとして、『和漢朗詠集永濟注』と『平家物語』があげられる。田辺氏は『平家物語』を『徒然草』第二十五段のこの部分の直接の出典とした²⁰が、『永濟注』のこの記述も看過できないと思う。『永濟注』の成立は平安末期から鎌倉中後期の間に遡ることができ、『平家物語』の伝本の一つの『源平盛衰記』には『永濟注』の影響が少なからず見られ

ることは黒田彰氏の研究によつて明らかにされたことである¹⁴。
『平家物語』は『永濟注』の影響を受け、更に『徒然草』に影響を与えたことも想定できるが、或いは『徒然草』は直接に『和漢朗詠集』及びその古注の『永濟注』によつたことも考えられないわけではない。このように、典拠あるいは表現の基層はさまざまに求めることができることが判明してきており、今はどちらかに限定する決め手はないが、このように漢詩文と和歌をつなぐ朗詠古注や『平家物語』の世界が『徒然草』に投影していることは、『徒然草』の表現形成を考える上で重要なことである。

三、漢詩に詠まれる「桃李不言」

前述したように、この第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という表現は、廃れた邸宅に昔の樹木だけが残っている情景を見て、懐旧の思いを述べたものである。しかし、この有名な文句は漢籍において、もともと全く違う意味で用いられたものである。そこで、「桃李不言」という表現の意味と用法の変遷について考察することにした。

「桃李不言」というのは、『史記』、『漢書』に出てくる李広將軍に関する故事で、『蒙求』にも取り入れられて、人口に膾炙す

る話である。

余睹李將軍俊俊如鄙人、口不能道辭。及死之日、天下知與不知、皆為尽哀。彼其忠實心誠信於士大夫也。諺曰、桃李不言、下自成蹊。此言雖小、可以論大也。（『史記』卷百九「李將軍列傳」）

贊曰、李將軍恂恂如鄙人、口不能出辭。及死之日、天下知與不知皆為流涕。彼其中心誠信於士大夫也。諺曰、桃李不言、下自成蹊。此言雖小、可以喻大。（『漢書』卷五十四「李広蘇建傳」）

贊曰、李將軍恂々如鄙人、口不能道辭。及死之日、天下知與不知、皆盡書為哀。彼其忠實心、誠信於士大夫也。諺曰、桃李不言、下自成蹊。此言雖小、可以喻大。（『蒙求』「陳平多轍・李広成蹊」）

桃李はものを言わないが、美しい花と美味しい実があるために、その木の下には自然に人が集まってきて小道ができるという、無口だが、人徳があるために、人々に敬愛されている李広將軍を讃えるこの故事の意味は、『徒然草』第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章の意味とも、『徒然草』に影響を与えたと思われる『平家物語』や『和漢朗詠集』の漢詩の意味とも明らかに相違している。よつて、こ

ここではこの表現が李広伝の故事「桃李不言」の意味と用法から離れて、懐旧を表すものとして使われるようになった経緯を、中国と日本の漢詩の用例をあげながら考えたい。

中国の漢詩において、時代がはやい用例として『文選』に見られる阮籍の「詠懷詩」があげられる。

嘉樹下成蹊、東園桃與李。秋風吹飛藿、零落從

此始。繁華有憔悴、堂上生荆杞。驅馬捨之去、去

上西山趾。一身不自保、何況恋妻子。凝霜被野

草、歲暮亦云已。（『文選』卷第二十三 阮籍「詠懷詩

十七首之三」）

『文選』李善注では第一句について、『漢書』の李広伝に見られる「桃李不言、下自成蹊」を引いて説明している。この詩句は李広伝の典拠を踏まえているが、その意味をさらに発展させて「桃李成蹊」の故事を使っている。東園に嘉樹の桃と李があるゆえに、自然に小道ができ、にぎやかだったが、秋風が吹いて花が散ってしまうと、誰も来なくなつて、華やかなところもすっかり廃れてしまった。ここでは、懐旧の思いまでにはなっていないが、一種の無常を表す景物として桃李が使われている。

『文選』には「桃李不言、下自成蹊」の故事を詠み込んだ詩はもう一首見られ、謝眺の「和徐都曹」である。詩人が早朝

に友人と郊遊に出かけ、その途中の春景を描いた詩である。阮籍の詩に比べればかなり明るいイメージを帯びている。

宛洛佳遨遊、春色滿皇州。結軫青郊路、迴瞰蒼江

流。日華川上動、風光草際浮。桃李成蹊徑、桑榆陰

道周。東都已倣載、言歸望綠疇。（『文選』卷第三十

謝眺「和徐都曹」）

ここでは阮籍の詩と同じく「桃李不言、下自成蹊」の故事を踏まえているが、春景の美しさを表す表現として取り入れたものである。

このように、『文選』の中に「桃李不言、下自成蹊」の故事を用いた詩は二例見られ、そのいずれも桃李そのものを詠んだ表現であり、人に喩える含意を持つ李広伝においての意味とは異なる。この故事は桃李を取り上げたものであるために、自然に桃李、或いは春の美しさを表すものとして使われることが想定できる。これはつまり謝眺の詩に見られる用法である。そこから一步想像を走らせ、このような美しい桃李の花でも凋落する時が来るということから、この故事を阮籍の詩のように詠懐の意味として使われる用例も表れたのであろう。ちなみに、唐代司馬貞の『史記索隱』に「姚氏云、桃李本不能言、但以華實感物、故人不期而往、其下自成蹊徑也。以喻広雖不能

出辞、能有^レ所感、而忠心信^レ物故^一也」と、桃李はものを言わないが、花と実があるので、人々はそこに行き、その樹の下は自ずから小道ができることを以って、李広將軍は啗弁であるが、その忠心と物を信じる心があるので、人々に慕われることを喻えるという注をつけている。また、唐代顔師古の『漢書注』に「言桃李以^二其華実^一之故、非有^レ所^二招呼^一、而人争帰趣、来往不絶、其下自然成^レ徑、以喻^下人懷^二誠信之心^一、故能潛有^レ所感也」と指摘があり、つまり、桃李はその花と実のために、呼ばれてもいないのに、人々は集まってきて、その樹の下に自然に小道ができることを以って、李広將軍は誠信の心を持っているので、無口であっても人々を感動させることを喻えるという注である。これらの注からもわかるように、李広伝は桃李の花と実と両方取り上げているが、阮籍の詩は散る花から繁華のはかなさを連想するもので、明らかに花のほうに重点を傾けている。ただし、謝眺の詩になると、花か実かどちらかははっきりしないが、明るい春の景色を取り上げる詩句なので、むしろ花だけではなく、実を結ぶ桃李の美しさも含めて詠んだのであろう。そして、唐詩になると、この故事を用いた例がさらに多くなり、意味も多様になってきた。もともとの李広伝での意味として使われた例もいくつか見られるが、この表現を借りて、春の

景色を描いたり、ことばを発する意味を表したりする例も確認できる。その中に一番注意を引かれるのは、懐旧の表現として使われた用例も見られることである。

①金谷千年後、春花發滿園。紅芳徒笑日、穠艷尚迎軒。雨湿輕光軟、風搖碎影翻。猶疑施錦帳、堪歎罷朱紈。愁態鶯吟澁、啼容露綴繁。慙勤問前事、桃李竟無言。(『全唐詩』卷四八八 侯洵「金谷園花發懷古」)

②寂寥金谷澗、花發旧時園。人事空懷古、煙霞此独存。管弦非上客、歌舞少王孫。繁蕊風驚散、輕紅鳥乍翻。山川終不改、桃李自無言。今日經塵路、淒涼詎可論。(『全唐詩』卷四八八 王質「金谷園花發懷古」)

③今日春風至、花開石氏園。未全紅艷折、半與素光翻。点綴疎林遍、微明古徑繁。窺臨鶯欲語、寂寞李無言。谷變迷鋪錦、台余認樹萱。川流人事共、千載竟誰論。(『全唐詩』卷七八二 張公乂「金谷園花發懷古」)

この三首とも「金谷園花發懷古」と題した詩である。そのほかに、「金谷園花發懷古」を題目とした唐詩はもう一首あり、その中に「桃李不言」は見られないが、やはり「桃李」が用いられている。

④春風生_二梓沢_一、遲景映_二花林_一。欲問_二當時事_一、因傷_二此日心_一。繁華人已歿、桃李意何深。澗咽歌声在、雲帰蓋影沈。地形同_二万古_一、笑価失_二千金_一。遺跡応_レ無限、芳菲不_レ可_レ尋。(『全唐詩』卷七八七 無名氏「金谷園花発懐古」)

金谷園は西晋の大富豪石崇の別荘である。当時は奢侈を極めた邸宅であったが、石崇が孫秀の讒言によつて処刑された後は荒れ果てた所になり、懐古の詩によく詠まれる場所である。この四首の唐詩はまさに題目のとおり、花が咲く金谷園を見て懐古の思いを詠んだものである。それから、傍線で示したように、四首ともすっかりさびれた今日の金谷園の春景を描くときに、「桃李無言」あるいは「桃李」の表現を用いている。ただし、金谷園に桃李のイメージを重ねる詩文は早い時代には見られない。石崇自身は、「思婦引序」と「金谷園詩序」という金谷園を描いた詩文を残しているが、その中に桃李の樹についての言及はない。「思婦引序」は『文選』巻第四十五に見られ、「其制宅也、却阻_二長堤_一、前臨_二清渠_一、百木幾_二於萬株_一、流水周_二於舍下_一」として金谷園の風景を描いている。その萬株の木には桃李の樹が入っているかもしれないが、今になっては知る由もない。「金谷詩序」には「有_二別廬_一在_二河南県界金谷澗中_一、或高或下、有_二

清泉茂林、衆果竹柏、藁草之属_一」¹⁾として金谷園の景色を描いているが、やはり桃李についての言及は見られない。また、石崇の友人で、西晋時代の有名な文人の潘岳にも「金谷集作詩」という漢詩を残している。詩の中には、「前庭樹_二沙棠_一、后園植_二烏棗_一。靈囿繁_二石榴_一、茂林列_二芳梨_一」として金谷園の中の樹木について述べているが、桃李の樹についての描写は確認できない。当時、石崇と潘岳を含めて、「二十四友」という文学グループがあり、よく石崇の金谷園に宴遊し、詩文を作っていたが、元康六年(二九六年)に石崇が友人王詡の餞別のために、金谷園に宴会を開き、その時に作られた詩文を収録したものが『金谷集』という詩集であるが、残念なことに、この詩集はすでに散逸して、潘岳の「金谷集作詩」一首しか残っていない。それで、今の我々はこれらの詩文から当時の金谷園の繁華を想像するしかないが、すでに述べたように、その記述の中には桃李についての描写は確認できない。ただし、潘岳は河陽県令を務めた時に、全県で桃の樹を植えるように命じたという有名な逸話があり、桃の花を連想しやすい人物である。時代が下るが、南北朝の詩人の庾信は「枯樹賦」という作品に、「建章三月火、黄河万里槎。若非_二金谷満園樹_一、即是河陽一県花」という文章を書いた。建章宮を焼き尽くした火は三ヶ月も燃え続いており、

その灰燼は筏のように黄河に沿って万里まで流されていく。それらの灰燼は、もし金谷園の樹ではなければ、即ち河陽県の桃の花である。ここでは、金谷園と桃の花を重ねた形で取り上げられている。この文章は白居易の『白氏六帖』にも取り入れられ、菅原為長の『文鳳抄』にも見られる著名なものであり、潘岳と桃、河陽と桃、さらに金谷園と桃李の組み合わせは後の漢詩文にも詠まれるようになった。

さらに、唐詩になると、金谷園と桃李を一緒に詠んだ詩例のはやいものに劉禹錫の「楊柳枝詞」があげられる。

⑤ 金谷園中鶯乱飛、銅駝陌上好風吹。城中桃李須臾尽、
争似^二垂楊無^レ限^レ時。(『全唐詩』卷三六五 劉禹錫「楊柳枝詞九首之四」)

ただし、この桃李は金谷園の中の樹木ではなく、洛陽城の中の景物として詠まれている。金谷園の中に鶯が乱れて飛び合っている、銅駝大通りの上に心地よい風が吹いている時代はすでに過ぎ去った。城中の美しい桃李の花は少しの間に散ってしまっただろうか。なぞ、この桃李の花はやはり懐古の思いを託した景物として取り上げられた。

そして、金谷園懐古のテーマで有名な詩作を残した杜牧の詩

にはじめて金谷園の桃李が詠み込まれた。

⑥ 淒涼遺跡洛川東、浮世榮枯万古同。桃李香消金谷在、
綺羅魂斷玉樓空。往年人事傷心外、今日風光屬^二夢中^一。
徒想夜泉流客恨、夜泉流恨恨無窮。(『全唐詩』卷五二六 杜牧「金谷懷古」)

当時の桃李の香りはすでに消えてしまったが、金谷園の遺跡はまだ残っている。綺羅の衣を着た美人は魂を断つたので、玉楼にはもう誰もいない。ここでは石崇が寵愛した緑珠という妾の話が踏まえている。緑珠の話は『晋書・石崇伝』に見られる¹⁸。石崇の後ろ盾の賈謐が失脚して誅殺された後、政敵の孫秀は石崇に美麗と多才で名高い美人の緑珠を求めたが、断られたため、石崇を恨んで反逆の罪を石崇に被せ、兵を率いて石崇一族を誅殺した。孫秀の軍隊を見る石崇は緑珠に「私はあなたの為になんか罪を得たなあ」と語り、緑珠は「御前で死なせていただきます」と言い、楼閣から身を投げた。この詩では、桃李の花は消え去ったものとして取り入れられ、金谷園が繁栄を極めている時代を象徴したものである。このように、杜牧は桃李の花を金谷園懐古の景物として詩に取り入れたのである。

そして、ほかの用法で使われた「桃李不言」故事の用例にも少し触れたいと思う。たとえば、この故事本来の意味として使

われた用例をいくつかをあげておく。

⑦数奇何以託、桃李自無言。(駱賓王「早秋出塞寄東台
詳正學士」)

詩人は、苦難に満ちた運命を何に託していいかを歎き、李広將軍のように、無言でも人徳があればいつか人に受け入れられるようになる、自分を慰めている。

⑧爾去且勿誼、桃李竟何言。(李白「送薛九被讒去魯」)

あなたが去るとき、多言は無用です。桃李は何も言わなくても人々はその徳をわかってくれるからと、友人に説くこの詩句も李広伝の故事の原意を用いて、慰めの意味を含めて使われている。

⑨嶷嶷瑚璉器、陰陰桃李蹊。(杜甫「水宿遣興奉呈群公」)

ここでは「桃李蹊」とともに、「瑚璉器」という『論語』の典故を用いて、「群公」の人徳を讃えている。

⑩自是桃李樹、何患不成蹊。(李賀「奉和二兄罷使遣馬歸延州」)

これも、桃李の木が美しい花と実があるように人徳があれば、人が集まってこないことを心配する必要はないと、一種の慰め

を込めて兄弟に語りかけている。

さらに、李広伝の故事から離れて、この表現を使って、桃の花の美しさを詠んだ詩例も少なからず見られる。たとえば、

⑪何須命輕蓋、桃李自成陰。(『全唐詩』卷三四 楊師道「春朝閑歩」)

これは、春の朝の散歩で目に入った美しい景色を詠んだ詩句である。輕蓋、つまり輕車に、その花が咲いている小道に行くように命じるまでもなく、桃李の美しさのために人がいっぱい集まってきて、自然に道ができるぐらいだ、という春景の美しさを描いた。

⑫歲去無言忽憔悴、時來含笑吐氛氳。(李嶠「侍宴桃花園詠桃花應制」)

時期が去ると、忽ちに凋落し、時期が来ると、笑顔を綻びて香りを吐き出すこの美しい桃の花よと、桃の花を讃ずるこの詩句も、「無言」という表現を詠みこむことで桃花を暗示している。

⑬応候非争艶、成蹊不在言。(李商隱「賦得桃李無言」)

季節にに応じて咲くから、艶を争うのではない。道ができるのはことばを話せるためではない。この詩も「桃李不言、下自成蹊」の故事を使って春の桃李の妖艶さを讃えていた。

そして、春の景色に限らなくても、「無言」なる「桃李」という表現が李広伝の故事の本意から離れて定型化し、ものを言わないことが桃李の性格のひとつになっていく傾向も見られる。たとえば、

⑭玉不_二自言_一如_二桃李_一、魚目笑_レ之_レ和_レ恥。(李白「鞠歌行」)

玉は桃李のように自分からことばを話すことができないから、卞和は自分が持っている宝の玉を魚の目のように価値のないものに間違えられて恥をかくようなことがあるのだ。ここでは主に卞和の玉のことを話題にしているが、ものを言わないことを表すために「桃李不言」の故事を詠みこんだ。

⑮朝々暮々主人耳、桃李無_レ言_レ管_レ弦_レ咽。(元稹「有_レ鳥_二二十_一章」)

この句も鳥がいつも囀っていることを述べるために、「桃李不言」の故事を巧みに詠み込んだ。

⑯桃李無_レ言_レ難_二自_レ訴_一、黄鶯解_レ語_レ憑_レ君_レ說。(白居易「和_二雨中花_一」)

桃李は口がきけないので、自分で訴えることは難しいが、黄鶯は鳴き声を発するので、君に説得を頼もう。この句は「桃李不言」の表現をもじってことばを発することを話題にしている。

これらの用例を見ればわかるように、「桃李不言」は唐詩においてすでに本意から離れて、その表現だけを取り入れる、いわば一種の修辭法的な用法が成り立つようになっていた。それに、旧邸懐旧というテーマの詩の中に「桃李不言」の故事が使われていることが確認できる。また、李広伝の原典は、花と実両方を取り上げているが、懐旧の意味で使われた用例を見ると、桃李の花だけが描写の対象になっている。原典で取り上げた実の魅力に対して、散る花がもたらした無常の感覚が働いたためであろう。ただし、故事のもとの意味を踏まえて詠んだ「桃李」、春景の美しさを描くために取り入れた「桃李」と、詩句に修辭的に用いられた「無言」なる「桃李」は必ずしも花に限定していない。

唐詩の後、宋詩になっても、大体これらの用法を受け継いでいる。李広伝本来の意味で詠んだもの、李広伝の故事の本意から離れて、春景と桃李の美しさを詠んだもの、さらに、桃李の性格のひとつとしてものを言わないことを詠んだものの例がそれぞれ見られる。たとえば、前述した『盤斎抄』があげた黄庭堅の詩句「桃李無_レ言_レ一再_レ風、黄鸝惟_レ見_レ綠_レ葱_レ葱」について、任淵は「桃李一再_レ経_レ風、無_レ復_二顔_一色、紅紫事_レ退、遽_レ成_二綠_一陰」と注を付けている。つまり、この句は「桃李無言」の表現を借り

て、桃李が散ることを言っている。李広伝の本意と全く異なる修辭的な用法である。また、宋詩の中にも、懐旧の詩にこの典故を用いたものがある。晁公湖の「他郷」と积行海の「寄一貫通」である。「故国山川安在哉、他郷今復見春來」。蓬蒿并興草益茂、桃李不言花自開」という晁詩は、題目の通り、異郷にいる詩人が故郷を懐かしむものである。ここでは、桃李はものを言わないが、自ずから花を咲いていると、「他郷」の春の景物として桃李を描いた。积行海の詩もまた、「身在異郷春又老、夢回弧館雨生寒。江山有待人皆往、桃李無言客自看」というように、故郷を思う詩句である。ここの桃李もまた、異郷の春の景物として詠まれた。この二首の詩の、「桃李不言」の表現を用いて、故郷を思う心情を詠む用法が、唐詩までの懐古の思いを詠む用法を受け継いだものだと思われるが、直接に懐古の思いを詠む詩ではない。

しかし、はやく『和漢朗詠集』文時の漢詩がこの典故の懐旧・懐古の思いを表す用法を取り入れており、さらに、『平家物語』や『徒然草』の表現もその傾向の影響下にある。このような傾向はほかの日本漢詩の中にはどのように受容されているかを用例にそって確認してみたいと思う。

一番用例の多い使い方はやはり李広伝の故事の本意とは異なる

り、その表現を使って春の景色を描いたものである。たとえば、

① 宇宙茫茫。煙霞蕩而滿目。園池照灼。桃李笑而成蹊。

（『懷風藻』 藤原萬里「暮春於弟園池置酒」一首。

并序。」）

これは暮春の庭園の、桃李の花が池を囲んで美しく咲いている風景を描くために「桃李成蹊」の表現を使っている。

② 洛陽城東桃與李。一紅一白蹊自成。（『文華秀麗集』

朝野鹿取「奉和春閨怨」一首。）

これも桃李の花の艶かしさを表すために「桃李成蹊」の表現を詠みこんだ。そのほかに、このような傾向で「桃李不言」の表現を取り入れた用例は以下のように少なからず見られる。

③ 夜雨偷濕、曾波之眼新嬌。曉風緩吹、不言之口先咲。（『本

朝文粹』卷第十 紀長谷雄「仲春奠聽講禮記同賦桃

始華」）

④ 桃李不言多歲意、水泉猶破一宵夢。（『粟田左府尚齒會詩』 坂合部以方「暮春見藤原相山莊尚齒會詩」）

⑤ 桑榆景暮猶應惜、桃李春深豈不言。（『粟田左府尚齒

會詩』 藤原忠輔「暮春見藤原相山莊尚齒會詩」）

⑥ 欲問桃蹊嬌不答、更求梅榦混難尋。（『類聚句題

抄』 大江朝綱「香不知花蕊」）

⑦ 桃艶不言心更懶、梅唇先咲感偏頻。(『類聚句題抄』)

三善文江「花間訪春色」

これらの詩例は「桃李不言」の表現を用いて、美しい春の景色を描いている。その中、「暮春見藤壘相山莊尚齒會詩」を詩題とした二首の漢詩が取り上げた桃李は花か実かどちらかを特定することは難しい以外、ほかの詩例は全部桃李の花を詠んでいる。

また、この故事の本来の意味を用いた例は左のように、いくつか見られる。

⑧ 願以成蹊枝葉下。終天長樹玉階邊。(『凌雲集』 太上

天皇御製「詠桃花」一首。)

この詩句は、どうか桃の木の枝葉の下に自ずから小道ができるほど人々が行き通い、いつまでも宮中の玉階のの辺りに植えておきたいものだ、李広伝の故事を踏まえて桃を詠んだものである。

⑨ 閉徑無歸維隱士、成蹊有託彼將軍。(『経国集』 卷

十一 賀陽豊年「七言賦」桃応令一首)

この句は、道を閉じて帰ることもないこの桃花源の隠士、自ずから人が集まってきて小道ができるということも桃李に託したあの李將軍というように、桃に関する二つの故事を並べて文

章を綴っている。

⑩ 欲知此樹成蹊德、真艷芬芳自可憐。(『経国集』 卷

十一 林娑婆「七言賦」桃応令一首)

この詩は、桃李の成蹊の徳を知ろうと思うなら、その香りが自然に人に愛されることによって知られるという意味で、桃の樹の下に自ずから人が集まって小道ができるということも桃の徳として詠んでいる。

⑪ 桃李不言今在此、霜台早晚遇芳榮。(『江吏部集』

大江匡衡「七言三月三日夜於員外藤納言文亭」 庚

申同賦「桃浦落船花」)

この句は、今ここに咲いている桃李は何も言わなくても、美しい花と美味しい実があるために、自然に人々が集まってくる。

そのようにわたくしもいつかは栄達の日が来るでしょう。

この四首とも李広伝の故事の本来の意味を詠みこんでいる。

さらに、もう一首この意味を逆用した詩例が見られる。

⑫ 桃蹊長掩迹。蒿里忽迎輜。(『文華秀麗集』 菅原清

公「奉和侍中翁主挽歌詞」)

見物の人でいっぱいになっているはずの桃の咲く小道は永遠に人の足跡を覆い隠し、死の里から思いもかけずに靈車を迎える。ここは人が自然に集まってくるという「桃李成蹊」の本来

の意味を逆用して、人が亡くなることを述べている。

そして最後に、日本漢詩の中にも二例だけであるが、金谷園と桃李或いは花と両方を詠みこんだ例が見られることに注目したい。

⑬春女春粧言不及。無量無數滿華庭。心嬌膽小羞
步。声裏微々寿千齡。洛津廻雪當韜影。巫嶺朝雲
歛行。河陽旧縣先亡色。金谷新園無復榮。泣眼看々
不曾厭。徒然奪魂亦損明。還知人間仙路近。重見桃
李目前生。（『凌雲集』 小野岑守「奉和觀佳人蹋歌
御製。」）

⑭彼金谷醉花之地、花毎春句而主不歸。南樓翫月之
人、月與秋期而身何去。（『本朝文粹』卷十四 菅三品
「為謙徳公報恩修善願文」）

⑬と⑭の詩文は「桃李不言」の故事を使っていないが、⑬は潘岳が河陽令になった時に全県に桃花を植えるように命じた故事と、金谷園の繁榮と奢侈の故事を踏まえて対句を作ったこととは前に述べていた漢詩文の影響下にあることが認められる。結句の「重見桃李目前生」は、陶淵明『桃花源記』の仙境を思ひ出させる表現でありながら、前の部分の河陽県と金谷園の桃李のイメージを重ねて詠んだものであろう。⑭はものを言わ

ないという要素が見られないが、前述した「桃李不言春幾暮」詩と同じく菅原文時の作として注目される。『本朝文粹』のこの願文の一文は『和漢朗詠集』巻下・懐旧の部に見られる。春は春ごとに咲き匂うが、金谷園の主人はもう帰らないという発想は『徒然草』第二十五段とまさに軌を一にするものである。

次に注目したいのは、藤原定家に仮託された歌論書『三五記』に見られる「故園桃李看無益、情在旧遊不在花」という漢詩である。この句は「物哀体」に配列しているが、その出典は不明とされている²⁴。しかし、定家の日記『明月記』嘉禄元年（一二二五年）二月二十九日条に「桃李浅深又滿望。過白河辺、只有懐旧之思。昔与旧遊翫花之所、時移事去、花猶毎春不回、古木折尽、堂宇滅亡」という記述があり、荒れ果てる故園にある桃李を見て、昔の友人を偲ぶという懐旧の感概は両者で共通しているだけではなく、「故園桃李」「旧遊」「花」という表現までも両者で一致している。『三五記』が偽書であるため、『明月記』の記事を踏まえて、この漢詩が作られたと考えたほうが妥当であろうが、傍線で示した『明月記』のこの記事の表現は『徒然草』第二十五段にも見られる要素で、『明月記』のこの部分と『徒然草』第二十五段の発想との近似性には看過できないものがある。定家が見ている「白河辺」は、昔の繁榮

を失って、焼亡して荒れ果てる地となった法勝寺の辺りであるが、この情景は場所こそ違うものの、『徒然草』第二十五段で描かれたすっかり廃れてしまった京極殿・法成寺の風景とよく類似していることがわかる。兼好はここで桃李の花を連想したのは、この『明月記』の記事の影響があったことも考えられよう。

四、和歌に詠まれる「桃李不言」

永済注が文時の漢詩に注を付けた時にあげた出羽弁の和歌のように、「桃李不言」という漢籍に見られる故事は、漢詩だけではなく、和歌にも取り入れられた。そこで、最後に、和歌に詠まれた桃李と「桃李不言」の故事の使い方について分析を試みることとしたい。

直接「桃李不言」の故事を詠みこんだものは、前述した『後拾遺和歌集』の出羽弁と弁のめのとの歌が一番早い例である。

世尊寺のものはなをよみはべりける 出羽弁

130 ふるさとのはなのものいふよなりせばいかにかしのこ
とをとほまし

やよひの月りう門にまゐりてたきのもとにてかの
くにかみ義忠がものはなのはべりけるをいかか
みるといひ侍りければよめる 弁のめのと

1056 ものいはばとふべきものをもものはなくよかへたるた
きのしらいと

出羽弁の歌は、この桃と由緒ある地である世尊寺の桃の花はもし口がきけるなら、昔のことをどう問うのだろうと詠んだもので、『平家物語』と『徒然草』の該当部分の旧邸懐旧の主題と一致している。弁のめのとの歌は邸宅と関わらないものの、桃の花はもし口がきけるなら、どれほどの月日を送ったのかと、滝に問うに違いないのにと、桃の花に昔を問うイメージを重ねた。この二首からもわかるように、平安時代中期に、「桃李不言」の表現と故事はすでに和歌に取り入れられたものである。

その後、「桃李不言」故事を詠んだ和歌の用例は多くはないが、下記のようにいくつか見られる。

前述したように、この「桃李不言」故事は『史記』『漢書』に見られ、そして『蒙求』にも取り入れられ、広く知られるようになった。このような漢籍の世界と和歌と繋がる作品として、元久元年（一二〇四）成立の源光行の『蒙求和歌』があげられる。源光行は『源氏物語』河内本の本文を定めたひとりとして知られているが、『百詠和歌』『蒙求和歌』『新樂府和歌』というような漢詩文を和歌に詠む作品を残している。残念なことに、『新樂府和歌』は散佚している。李広伝のこの故事について、『蒙求

和歌』春・桃の部に「李広成蹊」と標題を付け、『蒙求』に見られる李広將軍の説話を和文に記し、その後、「モノイハヌ花モ人メヲサソヒケリミチモサリアヘズモモノシタカゲ」*25という一首の和歌を付している。『徒然草』のような懐旧の思いが見られないものの、「ものいはぬ」ということを桃の花の性質として和歌に詠み込んだ例として注意される。

春廿首

花園左大臣家小大進

543 ももの花物いはずとかききしかばたれすきあふとたはれ

しもせじ（『久安百首』）

この歌は、桃の花はものを言わないと聞いたので、たれかれがその実が酸い、その花を浮かべた酒を飲みあい、恋し合つても、桃の花自身はみだらに戯れたりはしないと詠んだもので、ものを言わないということが桃の花の性質のひとつとして詠まれている。

もも

信実

2414 山吹の色にはあらねどももの花またものいはぬふるさと

の花（『新撰和歌六帖』）

この歌は、くちなしの色と似ている山吹の色ではないが、桃の花も同じくものを言わない、このふるさとの花と、梔子の色に似ている山吹の色を「くちなし」に掛けて、ものを言わない

桃の花を詠んでいる。

からもも

光俊

2425 ことはよもききしらじとやからももの物をばいではな

にのみさく（『新撰和歌六帖』）

この歌は、まさか聞き知らないというのか、からももは口がきけずにただ花だけを咲くと、桃花のものを言わない性質を巧みに詠み込んだものである。

この三首の歌は『後拾遺集』の弁のめのとの歌と同じように、邸宅とは関係のないものの、ものを言わない花として桃の花を詠みこんだ。このように、和歌においても、『史記』『漢書』などの漢籍において、無口の李広將軍を桃李に喩えたように、ものを言わないことが桃の花の性質の一つとして定型化していることが認められる。

時代がさらに下り、『徒然草』の後の時代になるが、左のように、「桃李不言」を詞書きとした歌も見られるようになった。

桃花不言

161 咲く桃の花ものいはば問ひてまし入りけむ山のおくはい

かにと（『師兼千首』）

また、直接に「桃李不言」の影響は見られないが、桃の花を題として、懐旧の思いを込めた詠歌も以下のように、二首見ら

れる。

ふるさとのものはな

14 いろはみなむかしながらも桃の花ふるえやわれをおもひ

いづらん（『寂蓮結題百首』）

故郷桃花

815 ふる里はかきねの桃の花のみやむかしの春を忘れざるら

む（『拾玉集』）

この二首とも故郷の桃の花を題とした歌である。前述した『後拾遺集』の出羽弁の歌にはすでに故郷の桃の花を取り上げたように、この二首もその影響下にあるものと考えられる。特に、故郷の垣根の桃の花だけが昔の春を忘れずにいるのだらうと歌った『拾玉集』の歌は、前述した『平家物語』「少将都還」の該当部分「三月中の六日なれば、花は未だ名残あり。楊梅、桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや」との近似性は看過できない。『平家物語』のこの部分は、「こちふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」という菅原道真の歌を踏まえていることが諸注釈によつて指摘されてきたことである。道真の歌では、春を忘れないうのが梅であるが、慈円の歌になると、桃の花は昔の春を偲はせる景物として詠まれている。『拾玉集』のこの歌は、『平家物

語』「少将都還」の該当部分と、さらに、廃れた邸宅に桃李の花が口をきけないので、誰と昔のことを語らうと嘆いた『徒然草』第二十五段の文意にも通じている所が認められる。また、「桃李不言」の故事を取り入れた出羽弁の歌と太宰府に流された時に都恋いの心情を梅に因んで詠んだ道真の歌と両方を踏まえ、桃を詠んだ慈円の歌からは、無口であるが、忠実な心の持ち主であるために、人々に敬愛されている李広將軍のイメージを読み取るのにはすでに難しいであろう。

これらの歌例が詠んだのは、全部桃の花である。桃の花は従来、春の景色の艶めかしさや三月三日曲水の宴を詠む時に取り上げられた景物であり、また、西王母の三千年の仙桃の話から、桃は三千年の齢を祝う景物として詠まれることが多いが、その中に、『後拾遺集』の時代からは、漢籍の「桃李不言」故事からものを言わない景物としてのイメージも受け継がれて詠まれていた。兼好が『徒然草』第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章を書いた時にも、こういう桃の花のイメージを念頭に置いたのであろう。

五、まとめ

『徒然草』第二十五段は世の無常を説く章段である。どんな

に華やかな所でも、何百年何千年が経ったら、荒れ果てる所となる。そのために、子孫後代のことまで心配して、心を砕くのはむなしなことだと述べたこの章段は、藤原道長の京極殿と法成寺を例としてあげている。権勢の頂点に立つ道長が作った邸宅だから、当時にはいつまでも奢侈を極める所であり続けるだろうと思われたが、兼好の時代にはすでに焼失して、廃れた所になってしまった。このような情景を目にした兼好は、「桃李も言はねば、誰とともにか昔を語らん」と嘆いた。

この文章は『史記』『漢書』李広伝の「桃李不言、下自成蹊」という故事を踏まえているが、無口だが、人徳があるために、人々に慕われている李広將軍を讃えることばとしてのこの故事の原意とは意味も用法も異なっている。そこで、この「桃李不言」という表現は、もともとの意味から離れて、懐旧・懐古の思いを語るものに変遷していく経緯を中国と日本の古典作品に見られる用例にそって考察を行った。

『寿命院抄』から、『徒然草』の諸注釈には、この文章の出典として、『和漢朗詠集』菅原文時の漢詩「桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖」と、『後拾遺集』出羽弁の和歌「ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにかむかしのことを問はまし」をあげている。確かに、『徒然草』のこの文章は、文時の漢詩に見られる

桃李を旧邸懐旧の思いを述べる景物として詠む要素と、出羽弁の和歌に見られる桃と昔のことを語る要素を統合した形で書かれている。また、看過できないことに、朗詠古注の『永済注』はこの文時の漢詩に注をつける時、出羽弁の和歌を用いて説明している。これは『平家物語』に受容され、「少将都還」の巻では、成経が亡父の邸宅でこの漢詩と和歌とを両方口ずさんで懐旧の思いを述べている。『平家物語』が『永済注』の影響を受け、さらに『徒然草』のこの部分に影響を与えたとも想定できるが、『永済注』が直接に『徒然草』に受容されたとも考えられる。いずれかを決める証拠はないが、『徒然草』のこの文章はこういう和と漢を繋げる世界を背景に書かれたことが認められる。

また、「桃李不言」の表現は、無口だが、人徳のある李広將軍を讃えることばとしての李広伝の原意から離れて、懐旧の思いを託した表現として詠む、という漢詩の中に見られる傾向は、かなり早い段階で日本の漢詩にも見られ、文時の漢詩はこのような傾向の中にあるものである。そして、李広伝には桃李の花と実を両方取り上げているが、懐旧の思いを詠む中国の漢詩にはその花だけを詠む傾向が見られ、桃李を詠む日本漢詩においても、花だけが対象として取り入れたものが多い。さらに、和歌にも、春の美しさを表す景物としての桃李や、三千年の齢を

祝う景物としての桃を詠むほかに、ものを言わないことが桃の花のひとつの性質として定型化している傾向が見られ、「桃李不言」の故事を踏まえて懐旧の思いを表す和歌も詠まれていた。このような漢籍の故事を和文に詠み込むものの直接的な用例として、『蒙求和歌』があげられるが、李広伝の故事をそのまま和歌に詠み込んだ『蒙求和歌』に対して、『徒然草』の文章は本章で考察したような和漢の作品世界を行き来する中に変容した意味と用法を取り入れているところに、その文学的完成度の高さが認められる。

以上述べたように、『徒然草』第二十五段は、旧邸懐旧のテーマを語る時に用いた「桃李の言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章の出典になる「桃李不言」という表現は、このように、原典の意味から離れて、中国と日本の漢詩文、さらに和歌においても、懐旧・懐古の思いを詠む用法が現れ、複雑な変遷の経緯を経ている。ここでは、その表現の背景を明らかにする、つまり、兼好の「見聞しうる可能性のある情報網を整理し、検討を加えておくこと」²⁸⁾を試みた。『徒然草』は文章を綴る時に用いた漢籍の故事・表現は、日本の漢詩文や和歌に取り入れ、変容し定型化しているものが多く見られる。「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうな

ぐさむわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇」と第十三段にあるように、兼好は古い書籍を心の友として親しんでいた。具体的な考察は第一章で行われたが、この中に書名があげられた『白氏文集』についても、前述したような、日本の漢詩文や和歌を中間的媒介にした受容方法が見られる。このような間接的・重層的な受容方法は、『徒然草』の漢籍出典を考える時に、看過できないものである。

テキスト

- 和歌の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店 一九八三年）による。私意によって清濁・表記を改めたところがある。
- 渡辺実校注新日本古典文学大系『枕草子』岩波書店 一九九一年
- 吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠出版 一九九六年
- 加藤磐斎古注釈集成『長明方丈記抄・徒然草抄』新典社 一九八五年
- 徒然草古注釈大成『徒然草文段抄』日本図書センター 一九七八年
- 徒然草古注釈大成『徒然草拾遺抄・徒然草野槌』日本図書センター 一九七八年

- 川口久雄・志田延義校注『日本古典文学大系』『和漢朗詠集』岩波書店 一九七三年
- 瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』上海古籍出版社 一九九八年
- 劉尚榮校点『黃庭堅詩集注』中華書局 二〇〇三年
- 伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』大学堂書店 一九八九年
- 川口久雄校注『日本古典文学大系』菅家文草・菅家後集』岩波書店 一九七一年
- 『史記』中華書局 一九六三年
- 『漢書』中華書局 一九六四年
- 『文選』上海古籍出版社 二〇一〇年
- 陳貽欣主編『增訂注釈全唐詩』文化芸術出版社 二〇〇一年
- 王增文校注『潘黃門集校注』中州古籍出版社 二〇〇二年
- 倪璠注・許逸民校点『庾子山集注』中華書局 一九八〇年
- 陳熙晋箋注『駱臨海集箋注』中華書局 一九六一年
- 仇兆鰲注『杜詩詳註』中華書局 一九七九年
- 王琦注『李賀詩歌集注』上海人民出版社 一九七七年
- 徐定祥注『李嶠詩注・蘇味道詩注』上海古籍出版社 一九九五年
- 劉学鍇・余恕誠著『李商隱詩歌集解』中華書局 一九八八年
- 冀勤点校『元稹集』中華書局 一九八二年
- 平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』同朋舎 一九八九年
- 謝思煒『白居易詩集校注』中華書局 二〇〇九年
- 『全宋詩』北京大學出版社 一九九五年
- 小島憲之校注『日本古典文学大系』『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』岩波書店 一九七一年
- 大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系』『本朝文粹』岩波書店 一九九二年
- 群書類従第九輯『粟田左府尚齒會詩』統群書類従完成会 一九二八年
- 本間洋一『類聚句題抄全注釈』和泉書院 二〇一〇年
- 小島憲之『国風暗黒時代の文学中(中)』塙書房 一九七九年
- 小島憲之『国風暗黒時代の文学下I』塙書房 一九九一年
- 群書類従第九輯『江吏部集』統群書類従完成会 一九五九年
- 『明月記』国書刊行会 一九七四年

- * 1 富倉徳次郎『類纂評釈徒然草』開文社 一九五六年
- * 2 田辺爵『徒然草諸注集成』右文書院 一九六九年
- * 3 市古貞次校注・訳新編日本古典文学全集『平家物語』小学館 一九九六年。ただし、『延慶本平家物語全注釈』（汲古書院 二〇〇七年）で確認したところ、文時の漢詩は諸本で異同はないが、出羽弁の和歌は諸本では異同が見られる。延慶本と長門本は「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香にほひける」という『古今集』春上の紀貫之の歌と下句が異なる「人ハイサ心モシラスフルサトノ花ソ昔ニカワラサリケル」という歌を載せており、屋代本・覚一本・中院本は出羽弁の歌を載せている。源平盛衰記は右の『古今集』の歌をそのまま載せているが、四部合戦本はいずれの歌も記さない。
- * 4 『徒然草』第二百二十六段に「この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり」とある。安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店 一九七七年）第二百二十六段の注と解説に詳しい。
- * 5 同注5。
- * 6 同注5。
- * 7 『拾芥抄』（大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇第十三巻類書Ⅱ 汲古書院 二〇〇五年）中・諸名所部第二十に「桃園。同世尊寺南。保光卿家行成卿傳^レ之」とある。
- * 8 『懐風藻』（小島憲之校注日本古典文学大系 岩波書店 一九七一年）に「命^レ駕遊^二山水^一。長忘冠冕情。安得^二王喬道^一。控^レ鶴入^二蓬瀛^一。」という葛野王の五言詩「遊龍門寺」があるように、龍門寺の辺りは鶴に乗って昇天する仙人の王子喬を連想させる仙境として描かれている。
- * 9 『今昔物語集』（馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳新編日本古典文学全集 小学館 一九九九年）巻第十一「久米仙人始造久米寺語第二十四」に「今昔、大和国、吉野ノ郡、竜門寺ト云寺有リ。寺ニ二ノ人籠リ居テ仙ノ法ヲ行ヒケリ。其仙人ノ名ヲバ、一人ヲアヅミト云フ、一人ヲバ久米ト云フ」とある。

* 1 0 『和漢朗詠集』古注釈の系統は伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』（大学堂書店 一九八九年）と相田満「朗詠注釈の和漢」（『和漢古典学のオントロジ』勉誠出版 二〇〇七年）による。

* 1 1 後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注新日本古典文学大系『江談抄・中外抄・富家語』岩波書店 一九九七年

* 1 2 『幽明録』（百部叢書集成 藝文印書館 一九六七年）に「漢明帝永平五年、剡県劉晨、阮肇共入天台山、取谷皮、迷不得返。經十餘日、糧食乏盡、飢餒殆死。遙望山上一桃樹、大有子実。而絶巖邃澗、了無登路。攀葛乃得至。噉数枚而飢止体充。（中略）食畢行酒、有群女来、各持三五桃子、笑而言。賀女婿来。」とある。

* 1 3 同注2。

* 1 4 黒田彰「源平盛衰記と和漢朗詠集永濟注―増補説話の資料」『説話文学研究』十七号 一九八二年

黒田彰「『朗詠古注』管見―永濟注について」『国語と国文学』六十卷十一号 一九八三年

* 1 5 池田利夫『蒙求古註集成』（汲古書院 一九八九年）で確認すると、この部分については、最古注（国立故宫博物院藏上巻古鈔本・宮内庁書陵部藏上巻影鈔本）が「及死之日、天下知与不知、皆盡書為哀。彼其忠実心、誠成信於士大夫也」になっているところは、朝鮮本系注（應安頃刊五山版・国会図書館藏大永五年書写本・龜田鵬齋校「舊注蒙求」刊本・細合方明校「韓本蒙求」刊本・林述齋校「古本蒙求」刊本）では「及死之日、天下皆流涕」になっており、徐子光注（文禄五年刊「徐狀元補註蒙求」）は「及死之日、天下知与不知、皆為流涕。彼其中心、誠信於士大夫也」になっているという異同と増補が見られるが、本論が取り上げる「桃李不言、下自成蹊」の部分については異同は見られない。

* 1 6 『芸文類聚』（中華書局 一九七三年）巻九「澗」の条に逸文が見られる。

* 1 7 『白孔六帖』（『文淵閣四庫全書』電子版）巻七十七に「河陽花。潘岳為河陽令、滿植桃李花。人号曰河陽一県花」とある。『文鳳抄』「花」（本間洋一『歌論歌学集成別巻三』三弥井書店 二〇〇一年）に「潘令県石崇園潘。岳為河陽令トキニ樹ウエ桃李。曰河陽一県花。金谷園、在上」とある。

* 1 8 『晋書』（中華書局 一九七四年）巻三十三に「崇謂緑珠曰、『我今為爾得罪。』緑珠泣曰、『当効死於官前。』因自投

于楼下而死。」とある。

* 19 程樹徳撰・程俊英・蔣見元点校『論語集釈』（中華書局 一九九〇年）に「子貢問曰、賜也何如。子曰、女、器也。曰、何器也。曰、瑚璉也」とあり、『集解』に「瑚璉、黍稷之器。夏曰瑚、殷曰璉、周曰簠簋、宗廟器之貴者也」とある。

* 20 卞和の玉に関する故事は『史記』等の書籍に多く見られる。たとえば、『史記・魯仲連鄒陽列伝』（中華書局 一九七五年）

に「昔卞和献_レ宝、楚王刖_レ之。『集解』応劭曰、卞和得_二玉璞_一、献_二之武王_一。武王示_二玉人_一、玉人曰、石也。刖_二右足_一。武王没、復献_二文王_一、玉人復曰、石也。刖_二其左足_一。至_二成王時_一、卞和抱_レ璞哭_二於郊_一、乃使_二玉尹_一攻_レ之、果得_二宝玉_一」とある。

* 21 「霜台」というのは、彈正台のことであり（『大漢和辞典』、大江匡衡は永觀二年（九八四）に彈正少弼になったことがあるので（後藤昭雄著人物叢書『大江匡衡』吉川弘文館 二〇〇六年）、ここでの「霜台」は自分を指していると理解する。

* 22 小島憲之『国風暗黒時代の文学中（中）』 塙書房 一九七九年

* 23 佐々木信綱編『日本歌学大系四』風間書房 一九七二年

* 24 羅采元『三五記』雑考―所収漢詩句をめぐって（一）―『中世文芸論稿』五号 一九七九年

* 25 章剣『蒙求和歌』校注』溪水社 二〇一〇年。ただし、この和歌は『蒙求和歌』片仮名本のみに残しており、平仮名には見られない。

* 26 『新編国歌大観』で調べる限り、『徒然草』が書かれたと思われる鎌倉末期まで、桃の花が春の景色や三月三日の曲水の宴のテーマの歌と三千年の齡を祝った歌に詠まれた例はそれぞれ三十七首見られる。

* 27 『漢武帝内伝』（原刻景印百部叢書集成 藝文印書館 一九六八年）に「母曰此桃三千歳一生」とある。

* 28 稲田利徳『徒然草』と『宝物集』』徒然草論』笠間書院 二〇〇八年

第三章 灯下読書の和と漢―『徒然草』第十三段をめぐって―

一、はじめに

第一章と第二章ですでに述べたように、『徒然草』の文章と思想は、漢籍による所が大きいことは周知の通りである。「ひとり、灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり」と、第十三段に述べられたように、兼好法師は『文選』『白氏文集』『老子』『莊子』を漢籍の代表としてあげており、長い夜にひとりで灯のもとで読書することを通して、古人との神交を楽しんだ。この短い一章段は『徒然草』の中にも人口に膾炙する名文であり、後世の『徒然草』受容において注目に値するものである。例えば、近世期に『徒然草』は盛んに読まれ、一種のブームといえるほどの読者を獲得したが、伝記の少ない兼好法師の肖像画のほとんどは灯のもとで読書する姿で描かれた。近世にこれだけ注目された灯の

とで読書する場面であるが、実は先行する日本の和文脈の古典作品に例が少ないものである。本章は、中国と日本の漢詩における「灯下読書」の詠まれ方と関わらせながら、物語などの和文の古典作品に見られる「灯のもと」の用法より、『徒然草』第十三段はこれらの漢詩に詠まれた「灯下読書」の場面から影響を受けたことを考察する。

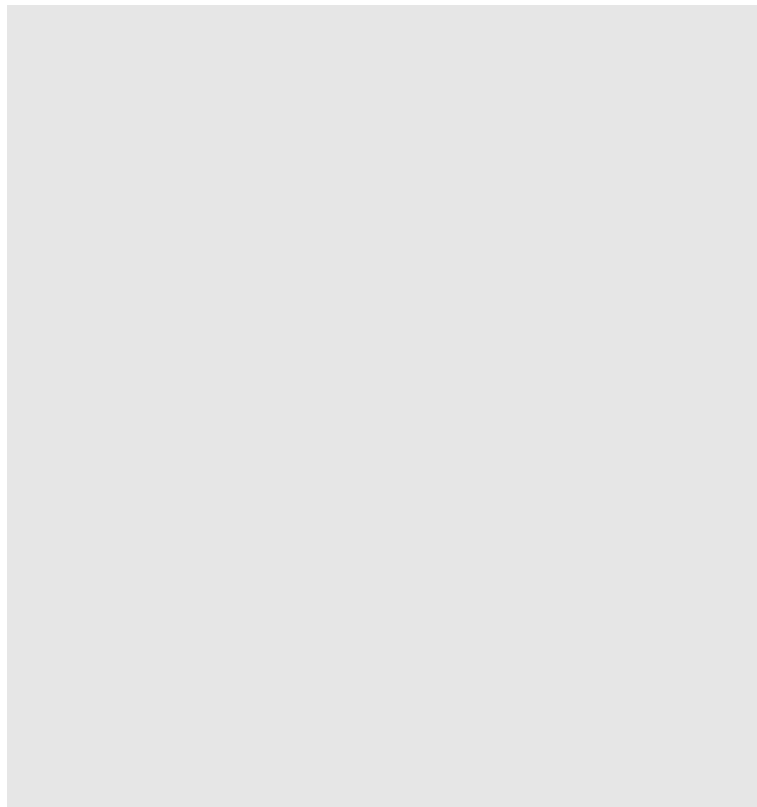
二、「灯下読書」する兼好像

『徒然草』は中世に書かれた書物であるが、広く読まれるようになったのは近世に入ってからである。江戸時代の早い段階から、『徒然草』の版本・注釈書が出版され、挿絵をとまなうものも多く見られた。また、『徒然草』の人気とともに、著者である兼好法師の肖像画も作られるようになった。たとえば、著名なものに、国語の教科書にも掲載された狩野探幽筆の兼好法師

像がある(図一)。今は金沢文庫に蔵せられているこの肖像画には、兼好は墨染めの衣を着ており、頭巾を被って皺をたたんだ痩せ細った姿として描かれている。脇息に肘をかけて、前の書物台に冊子本の書籍が広げられている。図一は兼好の姿が描かれた部分だけを示したものであるが、この肖像画の上部に「すめはまたうき世なりけりよそなからおもひしまゝの山さともかな」という『兼好法師集』八十一番の歌が書かれている。肖像画には明示されていないが、この読書の姿は一般的に『徒然草』十三段の記述に基づいていると言われている¹。

また、同じ金沢文庫にもうひとつの兼好像が蔵せられている。次頁の図二で示したように、墨染めの姿で灯の下で冊子本の書物を広げて読んでいるふつから顔の兼好法師が描かれている。

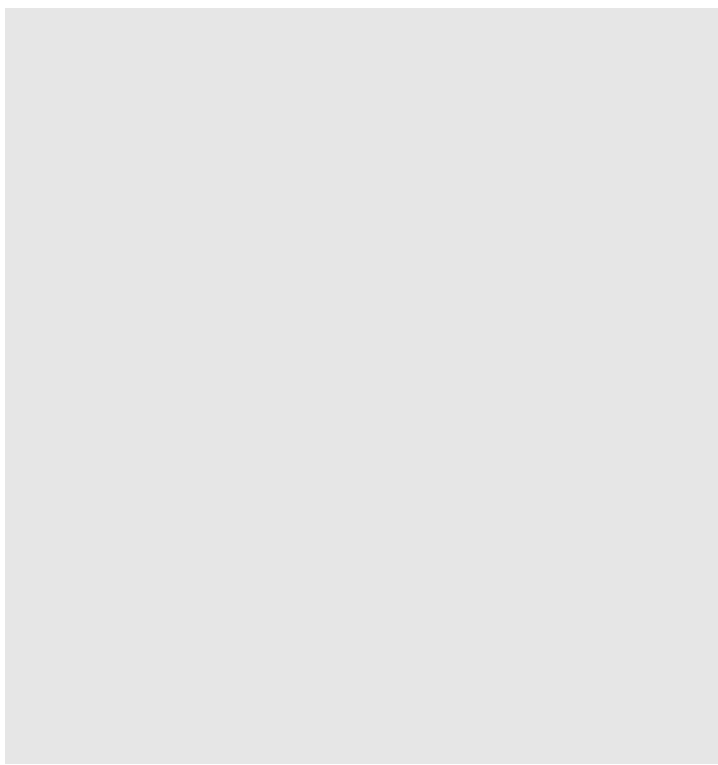
これは元文五年(一七四〇)頃の作で、本図の上部に荻生徂徠門下の儒学者の石島筑波の賛「寂寞对硯終日著編誰問奇聞聊擬草玄庚申之夏 筑波居士題」がある。この賛は「つれづれなるままに、日ぐらし、硯にむかひて」から始まるあの有名な序段



図一 金沢文庫蔵兼好法師像²

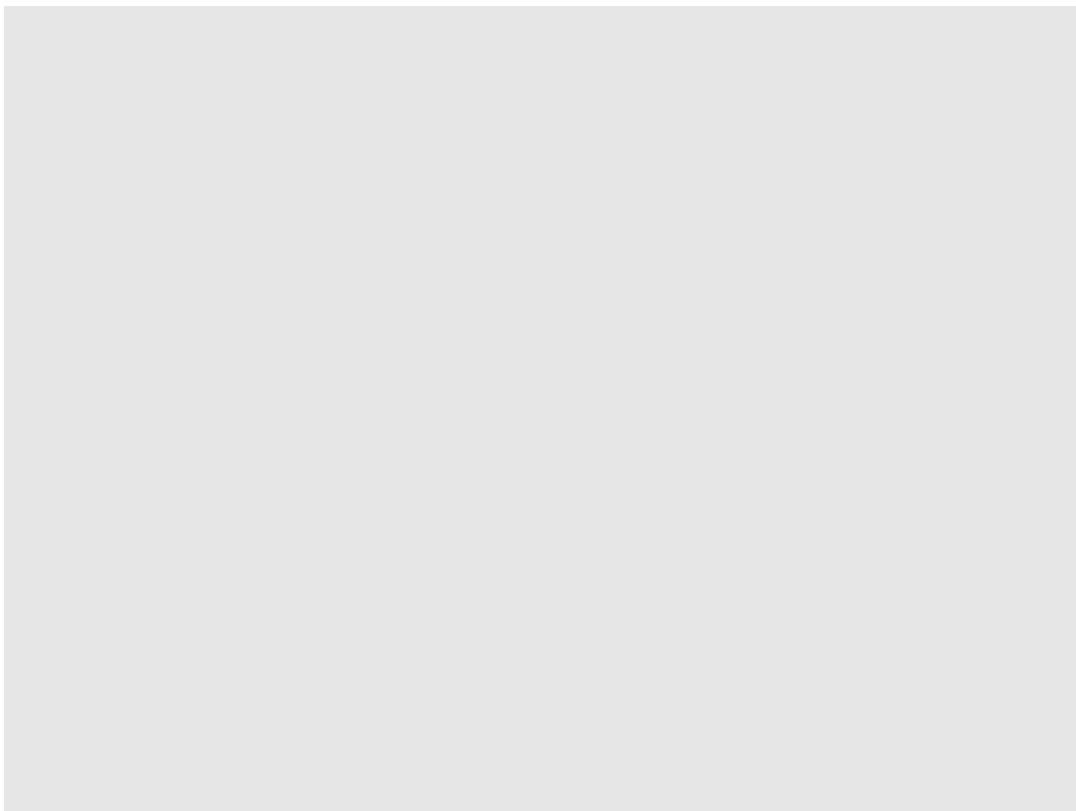
を思い出させるが、図のほうはむしろ執筆の姿ではなく、まさに第十三段の「灯下読書」の兼好法師の姿を表している。

図二 金沢文庫蔵兼好法師像³



このように、第十三段に基づく読書する姿の兼好法師像が定着するようになり、図三のように、江戸時代後期から明治時代に刊行された菊池容齋筆の伝記集である『前賢故実』の巻八に兼好伝の挿絵として、兼好法師の灯の下で読書する姿が描かれ

図三 国文研蔵『前賢故実』兼好像⁴



ている。挿絵の上に「おもひたつ木曾のあさきぬあさくのみ」
そめてやむべき袖のいろかは」という『兼好法師自撰歌集』五
十一番の歌が書かれているが、この図は明らかに第十三段の発
想の基で描かれたものである。

そして、肖像画だけではなく、江戸時代の俳諧や浮世草子な
どの作品にも、読書する姿の兼好法師像が定着していた。例え
ば、『徒然草』の講釈を行い、注釈書『なぐさみ草』を記した松
永貞徳の作品『哥いづれの巻』（『貞徳翁独吟百韻自註』）に「四
九からげたる灯心をときてともしけり」「五〇 くらきにいる、
物の本蔵」と、「ともし」に「物の本」を付けている。この『貞
徳翁独吟百韻自註』は『貞徳俳諧記』（推定寛文三年（一六六三）
刊）・『天水抄』（寛文十年（一六七〇）刊）・『新独吟集』（寛文
十一年（一六七一）刊）に収められているが、『新独吟集』を出
版した寺田重徳は高瀬梅盛門下の俳人であり、梅盛は延宝四年
（一六七六）刊の『俳諧類船集』に「物の本」の付合語として「灯
のもと」を挙げている。

それから、貞門はじめての俳文集、山岡元隣の『宝蔵』（寛文
十一年（一六七一）刊）巻一の一五灯台に「況や文をひろげて
みぬ世の人を友とする、こよなきなぐさみをや」と、『徒然草』
第十三段の文章を引用している。さらに、『徒然草』を愛好した
芭蕉も元禄四年（一六九一）十月の作である『島田のしぐれ』
に「暮て灯火の下にうちころび、矢立取出て物など書付るをみ
て、一会の印を残し侍れとしきりに乞ければ、宿かりて名を名
乗らするしぐれ哉」と灯の下という表現を展開して、行灯の下
で物を書く情景を描いた。そして、安永六年（一七七七）四月
八日に起筆した蕪村の『新花摘』にも「翁は洒掃のほかなすわ
ざもなければ、孤灯のもとに念珠つまぐりて秋の夜の長きをか
こち、余は奥の一間にありて、句をねり詩をうめきみけるが」
と、灯の下に句を吟ずる場面を描いた。

そのほかに、天明三年（一七八三）刊の『万載狂歌集』十四
・雑上に見られる元木網の狂歌に「兼好法師の像に」という詞
書きで「一一一 かきたてて見ぬ世の人をともしびの影となら

びの岡のつれづれ」と詠んでおり、貞享三年（一六八六）発行の『好色五人女』巻三に「左の袖に吉田の法師が面影、ひとり灯のもとにふるき文など見てのもんだん、さりとは子細らしき物好み」と描いている。これらの描写から第十三段を基づいた「灯下読書」する兼好法師像はかなり広まったものと想像できる。

このように、兼好の生涯については未だに不明なところが多いが、近世に入ってから、『徒然草』の流行をともない、偽伝が多く作られた江戸時代に著者兼好法師のイメージも読書する姿として定着し、肖像画に止まらず、第十三段に基づいた灯の下で読書するという表現と人物像は俳諧・狂歌・浮世草子の世界にも看過できない影響を及ぼしている。

三、和文脈における「灯下読書」

『徒然草』第十三段に見られるこのような灯の下で本を読む

場面と表現は『徒然草』の受容とともに、近世の文学に少なからず影響していることは上述の通りであるが、この表現と発想の成立の背景にどのような経緯があるのかについては、以下の部分において考察してみたい。

第十九段に「みな、源氏物語・枕草子などにこと古りにたれど、同じ事、また、いまさらに言はじともあらず」とあり、林羅山の『野槌』に「此草紙のことば大かた枕草紙。源氏物語の躰をうつせり」と述べられているように、『徒然草』の文章表現は先行の王朝文学によるところが多い。「灯の下」という表現は一見珍しいものではないが、『徒然草』に先行する和文脈の古典作品に読書する行為と一緒に用いられた例は見当たらない。

「灯の下」の表現自体は下記のようにいくつか見られるが、灯で足下を照らしたり、灯で手紙や扇を見たりする例であり、いずれも読書する場面の用例ではない。

① ^ひ灯のもとに立ち寄り、歩き、見たまへば、大人四、五人ばかり、小さくてをかしげなる童などなり。（『うつほ

物語』楼の上・上)

例えば、『うつほ物語』には兼雅が灯のそばに立って宰相の上の邸の中の様子を見る場面で、「灯のもと」という表現が使われている。

② 持て参りたるほど、戌の刻も過ぎぬべし。灯のもとにて見たまひて、君も、「いとあはれ」と思ほしたり。(『落窪物語』卷之一)

『落窪物語』の用例は少将道頼が灯のもとで姫君からの返事の手紙を「灯のもと」で読んでいた場面で使われている。

③ 扇の枕上に落ちたるを灯のもとに寄りて見れば、赤き紙に竹に雪の降りたるなど描きたるが塗骨に張りたるに、裏の方に心ばへあることども習ひすさびたる、その人のなりけり。(『とりかへばや物語』卷之二)

『とりかへばや物語』の用例は女主人公の中納言が四の君と密会していた宰相中将が落とした扇を「灯のもと」に近寄って

見るという場面でこの表現を使っている。

以上の三例はいずれも恋いと関連する場面で「灯のもと」が使われており、しかも『徒然草』第十三段は「ともしびのもと」であるのに対して、これらの例はいずれも「ひのもと」という表現となっている。王朝物語では、暗くなった夜に「灯のもと」で行う行為として描かれたのは、読書ではなく、男女の恋愛の場面であるというのは、むしろ物語にふさわしい描かれ方と言えよう。

さらに、『徒然草』第十九段に「言ひつゞくれば、みな、源氏物語・枕草子などにこと古りにたれど」とあるように、『源氏物語』『枕草子』は本書に大きな影響を与えた。『源氏物語』『枕草子』には、「灯のもと」という表現は見当たらないが、「ともしび」「ひ」の用例が見られ、特に下記のように、「ひ」の用例の中、ふみ・物語を見る場面で用いられたものが確認できる。

④ 月も入りぬ。

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿

思しめしやりつつ、灯^{ともしび}火を挑げ尽くして起きおはします。(『源氏物語』桐壺)

これは帝が亡くなった更衣を思い、灯火をかき立てて眠らずにいる場面である。

⑤「よろづに心乱れはべりて世にはべらむことも残りなき心地なむしはべる」と聞こえたまふほどに、灯^{ともしび}火などの消え入るやうにてはたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く。(『源氏物語』薄雲)

藤壺が灯火の消えるように息が絶った場面で「ともしび」が使われたが、これも読書することとは無関係な使い方である。

⑥御脇息に寄りゐたまひて、御心の中には、いとあはれに恋しう思しやられるれば、灯^ひをうちながめて、ことにもものたまはず。文は広がりながらあれど、女君見たまはぬやうなるを。(『源氏物語』松風)

これは源氏は紫の上の前に明石の君からの手紙を処理するが、明石の君を恋しく思い、灯をじっと見つめる場面である。手紙という恋いの定番物とも言えるような道具が出てくる場面で灯と一緒に描かれるのは、前述したように、物語では当然の設定かもしれないが、『徒然草』第十三段のように読書する場面での用例はやはり見られない。

⑦火^ひ近くとり寄せて、この文を見たまふに、げにせきとめむ方ぞなかりける。(『源氏物語』若菜上)

これは明石の君が父である入道からの最後の手紙を灯のもとで読んで悲しむ場面であるが、『源氏物語』で「ともしび」「ひ」のいずれの用例も読書する行為に用いられていないことが確認できる。

⑧虫は(中略)夏虫、いとをかしうらうたげなり。火^ひ近う取り寄せて物語など見るに、草子の上などに飛びありく、いとをかし。(『枕草子』四十一段)

『徒然草』のように、灯の下で古人を友と想像しながら書籍

を読む場面ではないが、『枕草子』にははじめて灯と読書する行為が一緒に描かれたのである。なお、『枕草子』は読書する行為に重点を置いておらず、王朝文学における灯の描かれ方と『徒然草』との差異が認められる。

また、和歌において詠まれた灯の例を分析してみると、下記のようにいくつかの用例が見られるが、やはり灯の下で本を読む場面は詠まれていなかった。

① 清慎公家のさぶらひに、ともし火のもとにさくらの花ををりてさして侍りけるをよみ侍ける

兼盛弟

1050 ひのもとにさけるさくらの色見れば人のくににもあらじ

とぞ思ふ (『拾遺和歌集』卷十六・雑春)

歌の本文ではないが、詞書きに見られるこの「ともし火のもと」という表現の最初の例は桜を照らすものとして詠まれたのである。

② 学問料申し侍りけるをたまはらず侍りける時、
人のとぶらひて侍りける返事に、よみてつかはしける
大江匡範

1084 おもひやれとよにあまれるとともし火のかかげかねたる心

ぼそさを (『千載和歌集』卷十七・雑歌中)

『千載和歌集』に見られるこの例は灯火を用いて大学寮の学生に与えられた学問料のことを喩えて詠んだものである。

③ 題しらず
よみびとしらず

181 草ふかきあれたるやどのとともし火の風にきえぬはほたる

なりけり (『新勅撰和歌集』卷三・夏歌)

『新勅撰和歌集』のこの歌は『和漢朗詠集』・螢の部にも載せられており、このような螢を「ともし火」に見立てる発想は後世に多くの詩文に見られる。その源は『蒙求』の「車胤聚螢」に遡れる⁵⁾。

④道助法親王家五十首歌に、閑中灯 法印覚寛

1155 うきにそふかげよりほかの友もなししばしな消えそ窓の

ともしび (『続後撰和歌集』卷十七・雑歌中)

⑤夜灯 御製 (後嵯峨院)

3238 長き夜の心のやみのしるべせよ猶残りける法のともし火

(『宝治百首』)

⑥夜灯 為氏

3260 長き夜のふけ行く程の影みえて光ぞうすき窓のともしび

(『宝治百首』)

⑦夜灯 少将内侍

3274 明けやらぬ寝覚めに残る灯は長き夜のまの友となりけり

(『宝治百首』)

鎌倉時代以降、「閑中灯」「夜灯」のような歌題も誕生し、⑤のように仏教的文脈で法灯を詠む例も多いが、④⑥⑦のように

長き夜の寂しい情緒を詠んだ歌も見られる。特に、⑥は兼好の

和歌の師である二条為世の父である為氏の詠歌であり、④と⑦は「友」と一緒に灯火を詠み込んだ例として注意されよう。

⑧九十三番右 親行朝臣

157 さ夜ふくるよものあはれはうかひきて心もちらぬ灯のも

と (康永二年(一三四三)『院六首歌合』)

⑨院五首歌合に、秋視聴といふ事を

権大納言公宗女

708 秋の雨のまどうつおとにききわびてねざむるかべにともし

し火のかけ (『風雅和歌集』卷七・秋歌下)

さらに、兼好法師と同時代の頃、⑧のように「灯のもと」を

用いて夜中の哀れな心情を詠んだ例や、⑨のように白居易の「上陽白髮人」を踏まえた例も見られるようになった。

そして、漢籍と和歌と繋がる書物として注意される源光行の

『蒙求和歌』（元久元年（一一二〇四））に夏・螢の部において「車胤聚螢」と標題を付け、次のように記されている。『蒙求』の説話を和文に記す部分において「ともしび」ということばと書籍を讀む行為と一緒に描かれている。なお、これは漢籍の『蒙求』を和文化にするためのものであり、『徒然草』の趣味的な読書と違い、科挙のための苦読の場面を取り上げている。

30 車胤聚螢

車胤、若カリシ時、コノミテ書ヲ誦スルニ、家マ
ヅシクシテ、油ナカリケレバ、螢ヲアツメテ、絹ノ
フクロヲヌヒテ、ホタルヲ入レテ、トモシビトシテ、
フミヲヨミケリ。後ニ、司徒ニ至リニケリ。

ヒトマキヲアケモハテヌニアケリニケリホタルヲトモス
夏ノ夜ノソラ

以上のように、和文脈における「灯のもと」という表現とそれが用いられた場面などの用法を見てきたが、『徒然草』第十三

段のように読書する行為と関連づけて描かれる例は漢籍の『蒙求』を和文化する『蒙求和歌』という特殊な書物の用例以外に見当たらない。ただし、鎌倉時代以降、特に兼好と近い時代に、和歌においては「ともし火」と「友」と一緒に詠み込んで、長き夜の寂寞たる情緒を描く例は見られ、二条派の和歌四天王のひとりである兼好もこのような詠み方から影響を受けた可能性が考えられる。

四、漢文脈における「灯下読書」

前節、和文脈において『徒然草』第十三段に見られる灯のもとで読書する場面について分析したが、本節は日本と中国の漢詩文において、この表現とそれが用いられた場面、およびその発想の源について考察したい。

日本の漢詩に、「灯下読書」の場面を詠んだ例は下記の六例である。

① 316 残灯

耿耿寒灯夜読_レ書、煙嵐度_レ牖欲_ニ何如_一。（『菅家文章』）

② 509 灯滅二絶 その二

秋天未_レ雪地無_レ螢、灯滅抛_レ書涙暗零。（『菅家後集』）

①と②の菅原道真の詩はいずれも灯と読書することを一緒に詠み込んだものであるが、寂寞たる寒い夜に苦読する憂愁な心境を描いたものであり、『徒然草』の古人を友と想像しながら悠然に読書することを楽しむ場面とだいぶ相違するものである。

③ 224 春宵言_レ志

藤原宗光

観_レ枕唯聞残雨韻、披_レ書頻挑暗灯輝。（『本朝無題詩』卷

四）

③の藤原宗光の詩は薄暗い灯の下で苦読している場面を描いており、詩の題目の通り、官運に恵まれない身の嘆きと志を表したものである。①と②の道真の詩のように、『徒然草』第十三

段の読書とは心境が全く違うものである。

④ 294 秋夜閑談

藤原季綱

挑_レ灯先举_レ牖、忘_レ扇漸収_レ奩。旅雁夢難_レ結、寒虫涙易_レ霑。老_レ莊_三兩_レ卷、性懶素閑瞻。（『本朝無題詩』卷五）

①と③の苦読に対して、④藤原季綱の漢詩は秋の長い夜に友人と詩酒の興に乗じ、老莊の書物を手元に置いて時々覗いているという閑淡な心境を描いている。ここで注意したいのは、波線で示したように、平安時代の漢詩において『老子』『莊子』はすでにこのような閑適な読書の場面に用いられたことである。

⑤ 295 秋夜閑詠

法性寺入道殿下

灯為照_レ書儲_二座右_一、情依_レ翫_レ月入_二山西_一。（『本朝無題詩』卷五）

⑤の藤原忠通の詩は同じく秋の夜に読書する閑興を詠んだものであり、ひとり灯のもとで古人との対話を想像しながら「南

華の篇」を含む漢籍を広げた『徒然草』第十三段の情緒とは相通ずるところが認められる。

⑥ 316 初冬書懷

藤原明衡

櫛樟期^レ学齡方暮、灯燭積^レ功漏幾深。開^レ卷雖^レ知^レ三齊物
理、守^レ株独恥^二宋人心^一。(『本朝無題詩』卷五)

⑥の藤原明衡の詩は「灯燭」という表現で学問料を喩えているが、やはり『莊子』は披読した書物として挙げている。第十三段で挙げた漢籍の代表に儒家の經典が見られず、道家の經典である『老子』『莊子』が取り上げられている。また、本段とよく比較される『枕草子』第百九八段は「文は文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文」と漢籍の代表作を列挙しているが、『白氏文集』と『文選』までは『徒然草』と一緒であり、『老子』『莊子』をあげたのはやはり兼好法師独自の趣味のようである。その背後には、これら日本の漢詩文の世界の影響が想定できるのではなからうか。

そのほかに、日本の漢詩において直接に「灯下」ということを詠みこんだ例は下記のようにいくつか見られる。注意されるのは、これらの日本漢詩は「灯下」と一緒に『莊子』由来の典故も詠み込んだものが多いことである。

⑦ 711 灯下言^レ志

後中書王

処^レ身豈羨^二龜多^一智、論^レ命還思^二木不材^一。(『新撰朗詠集』
卷下・述懷)

波線で示したのはいずれも『莊子』由来の故事を用いた表現である。「龜多智」というのは『莊子・秋水』に見られる故事を踏まえている。つまり、龜は死んで占いに使われて神龜として尊ばれるよりは、泥の中で尾を引いて生きていくほうがよいというように、高位高官になって束縛されるよりは、貧しくても自由に暮らすほうを選ぶという莊子が楚王の使者を断る時に用いた寓言である。「木不材」というのは『莊子・山木』に見られる故事を踏まえている。つまり、山の中にある木は木材にならないために伐られることを避けて生き延びたという処世に関

する寓言である⁸。

⑧ 278 秋日即事

藤原通憲

流世光陰灯下暮、生涯榮樂醉中深。空疲鑽仰聚螢業、未
識是非夢蝶心。（『本朝無題詩』卷五）

「是非夢蝶心」というのは「胡蝶の夢」として知られている『莊子・齊物論』の故事を踏まえている。莊周が夢の中に胡蝶となったのか、或いは胡蝶が夢の中に莊周となったのか、夢と現実の区別が付かなくなったという寓言である⁹。

⑨ 222 春夜即事

中原広俊

灯下詩成酌酒盃、瓊筵未卷静徘徊。煙柳暮陰廻岸暗、
風梅曉氣入窓来。（『本朝無題詩』卷四）

⑦と⑧は、いずれも「灯下」ということばを用いながら、『莊子』の故事を以て志を述べた用例であるが、⑨は「灯下」で詩を吟じ、酒宴を行う場面を詠んでいる。注意されるのは、これ

らの詩句には『莊子』由来の故事と一緒に「灯下」ということばが詠まれているが、そのいずれにも読書する行為が詠まれていないことである。

ここまでは日本の漢詩における「灯下」という表現の詠み方を見てきたが、以下は中国の漢詩において、「灯下」はいかに詠まれたかについて考察してみたい。

唐代の漢詩に、「灯下」ということばが詠まれたものは五五首見られ、その中に「灯下」で読書する行為が描かれたのは一首だけである。それで、調査の範囲を「灯」ということばを用いて読書する行為を描いた唐詩に広げ、それでも、全部で下記の四首しか見当たらなかった¹⁰。

① 病起

賈島

灯下南華卷、祛愁当酒杯。（『全唐詩』）

①の賈島の詩は灯の下で南華の巻、つまり『莊子』を愁いを紛らす酒杯に等しいと詠んだものである。賈島の詩集が日本

の早い時代においての受容は不明なところが多く、その影響関係は慎重に考える必要があるが、静かな夜に「灯の下」で読書するという寂寥さに相応しい書物として中国と日本の見ぬ世の古人は『莊子』を挙げたところは興味深い。

② 2451 歲暮寄_二微之_一三首其二 白居易

枕上從_レ妨_二一夜睡_一、灯前讀_レ尽_二十年詩_一。（『白氏文集』卷五十四）

③ 883 舟中讀_二元九詩_一 白居易

把_二君詩卷_一灯前讀、詩_レ尽_二灯殘_一天未_レ明。（『白氏文集』卷五十五）

④ 2907 和_二夢得冬日晨興_一 白居易

照_レ書_二灯末_一滅、煖_レ酒_二火重生_一。（『白氏文集』卷五十八）

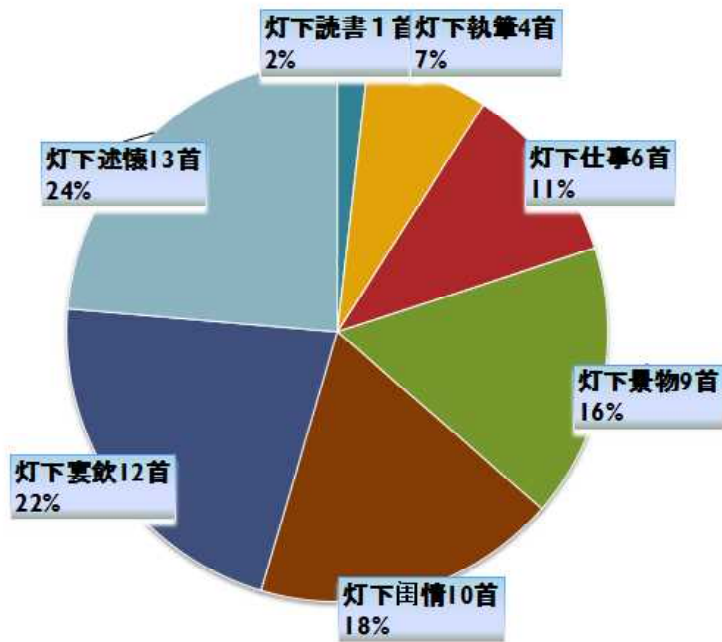
②から④までの白居易の漢詩はいずれも「灯下」ということばを用いていないが、灯の下で読書する場面を描いた詩句の例

である。しかも、三首とも離れている友人を思うものであり、静かな夜に書を読み、古人を友として憧れる『徒然草』第十三段に相通じるところが認められる。

このように、『全唐詩』においては「灯下」ということばが用いられたのは五五例見られるが、その中にわずか一例が「灯下読書」する場面を詠んでいる。そのほかは次頁の図四で示した通り、「苦思搜_レ詩_二灯下吟_一、不_レ眠_二長夜_一怕_二寒衾_一」（魚玄機「冬夜寄_二溫飛卿_一」）のように、灯の下で詩文を書く場面を描いたものは四首で、7%を占めており、「寒衣補_二灯下_一、小女戲_二床頭_一」（白居易「贈_二内子_一」）のように、灯の下で縫い物などの仕事をする場面を描いたものは六首で、11%を占めて、「雨中山果落、灯下草虫鳴」（王維「秋夜独坐」）のように、灯の下の景物を描いたものは九首で、16%を占めている。それから、「画_レ眉_二夫婿_一隴西頭、紅妝女兒_二灯下羞_一」（李頻「春閨怨」）のように、灯の下の闺情を描いたものは十首で、全体の18%を占めており、「楼中別曲催_二離酌_一、灯下紅裙_二間_二綠袍_一」（白居易「江楼宴別」）のよ

うに、灯の下で宴飲する場面を描いたものは十二首で、22%を占めて、「庭前尽日立到^レ夜、灯下有^レ時坐徹^レ明」（白居易「夜坐」）のように灯の下で述懐する場面を描いたものは十三首で、全体の24%を占めている。

図四



それに対して、図五で示したように、宋代の詩になると、「灯下読書」する場面を詠んだものの比率は大幅に増加した。「灯下」ということばを詠んだ百七首の宋詩に三三首も読書する場面を詠んでおり、全体の31%を占めている。これは宋代の木版印刷の盛行と科挙への重視にともない、書籍の流通と閲読が盛んになり、詩の創作の数量、内容や主題にも影響を及ぼしているという見解がある¹⁾。

①曹溪夜観^二伝灯録^一灯花落^二一僧字上^一口占 蘇軾

山堂夜岑寂、灯下看^二伝灯^一。 (『全宋詩』)

①の蘇東坡の詩は詩題の通り、灯の下で伝灯録を読んでいるところ、灯花が本の中の「僧」の字に落ちたという出来事を詠んでいる。なお、法師の身である兼好が灯のもとで読んでいる書物の中に、このような仏書は入っていなかったのだろうか。入っているに違いないが、これら漢籍に対して、兼好は仏書をしみじみと寂寥な心情を味わう夜に心を慰める友として考えていないのではなからうか。つまり、兼好が『徒然草』第十三段

に描かれたのは、創作に当たり、選ばれた書物によって作られた一種の風雅なイメージである。

② 晩秋野興二首其一

陸游

細書灯下幸能読、旧友夢中時與遊。（『全宋詩』）

③ 冬夜読書忽聞二鶏唱一

陸游

天涯懷友月千里、灯下読書鶏一鳴。（『全宋詩』）

②と③の陸游の詩は、波線で示したように、夜に灯の下で本を読みながら、昔の友人を懐かしむ場面を詠んでいる。『徒然草』第十三段の古人を友とする発想とは異なるところもあるが、読書する行為と友人を思う行為と関連付けた例として注意される。また、宋代の詩人の中、陸游は読書に関する詩を大量に詠んでいる。陸游の『劍南詩稿』に、「読書」を題とするものは十七首あり、詩題は「読書」から始まるものは八首で、ほかに詩題に「読書」ということばを含んだものは三十首あり、「読〇〇書」を題とするものは七十三首も見られるという¹⁾。まさに詩文に

読書を詠むことの第一人者というべき存在である。

④ 過二広濟圩二三首其三

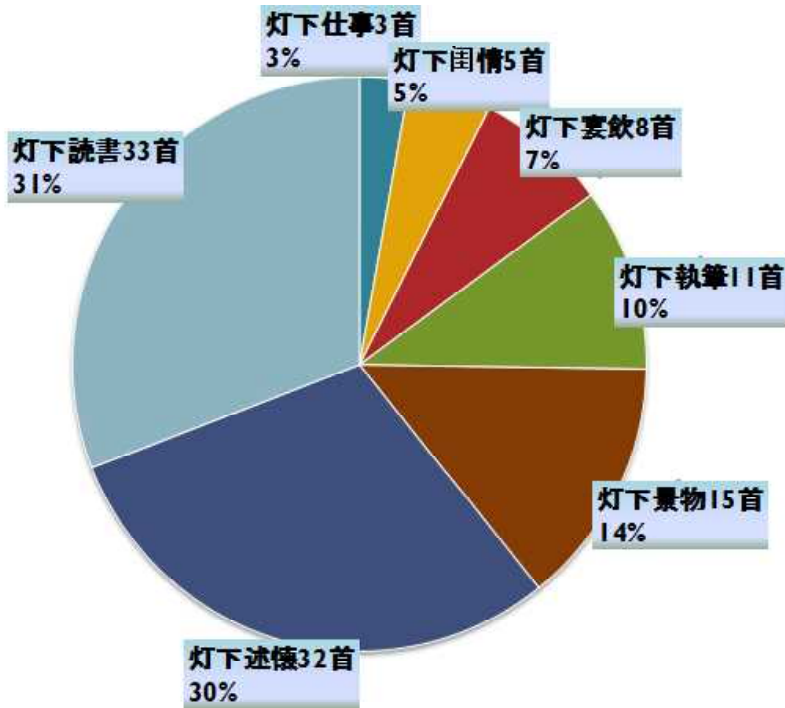
楊万里

詩卷且留灯下看、轎中只好看春光。（『全宋詩』）

④の楊万里の詩句は春の美しい景色を見るように勧めるための対句として述べたものであるが、詩巻は灯の下で見えるものであると、「灯下読書」という場面は一種の美意識として昇華されている。

そのほかに、唐詩と同じように、宋詩には「灯下」ということばを用いて様々な場面を詠んでいる。次頁の図五で示した通り、たとえば、「灯下穿針影伴身、懶将心事訴諸親」（朱継芳「和二顔長官百詠一貧女其の五」）のように、灯の下で縫い物などの仕事をする場面を描いたものは三首で3%を占めており、「那縁灯下見、更值月中人」（崖州女子「詠二花扇二」）のように、灯の下の闺情を描いたものは五首で全体の5%、「酒辺豪氣横二荆楚一、灯下清談雜二晋唐二」（楽雷発「許介之館僕於東溪臨発

贈別」のように、灯の下で宴飲する場面を描いたものは八首で7%、「道旁歳晚貂裘弊、灯下書成鉄硯穿」（陆游「夙興弄筆偶



図五

書」のように、灯の下で詩文を書く場面を描いたものは十一首で10%、「喚来灯下細看レ渠、不レ知真個有レ雪無」（楊万里「灯下和レ雪折レ梅」）のように、灯の下の景物を描いたものは十五首で14%、「一杯淡粥寒灯下、還與三山僧不レ校レ多」（陆游「夙興」）のように、灯の下で述懐する場面を描いたものは三二首で30%を占めている。以上の数字を比べればわかるように、宋詩においては、灯の下で読書する場面を描いたものはその中で一番の比率を占めている。

五、終わりに

以上述べてきたように、ひとり灯の下で書物を読み、古人を友と憧れる『徒然草』第十三段は『徒然草』が大流行を示した近世に多くの人々の心を魅力し、生涯に謎の多い著者兼好法師のイメージにも多大な影響を与えた。しかし、第十三段の表現と発想の源を先行の古典作品に探ったところ、物語・和歌などの和文作品には灯の下と読書する行為と古人を友と憧憬する心

境と関連付ける用例は見当たらない。ただし、和歌作品においては、鎌倉時代以降、「灯火」と「友」と一緒に詠み込んで、長き夜の寂寞たる情緒を描く例は見られ、兼好の創作にヒントを与えた可能性が考えられる。

漢詩作品になると、唐詩には灯の下で読書する行為を詠んだものは僅か四首であるが、『徒然草』第十三段と同じように『莊子』を詠み込んだものも見られ、また、『徒然草』に多大な影響を与えた『白氏文集』には三首も見られるところが注意される。そして、宋詩になると、灯の下で読書する行為を詠んだものは三三首にも増えており、特に、南宋の詩人陸游は大量の読書詩を詠み、『徒然草』のように友と一緒に詠む例も見られる。兼好の時代に陸游の詩文が日本文学における受容はまだ明らかになっていないが、このような文人趣味的な読書行為の一致性は果たして偶然であろうか。『徒然草』およびその時代における宋代の文学・文化を影響を考える上のひとつのヒントになるのではないか。

さらに、日本の漢詩となると、灯の下で読む書物として老荘が多く見られるところが興味深い。『枕草子』の影響を受けながらも、『徒然草』は『文選』と『白氏文集』と並べて老荘を漢籍の代表として加えた理由は、兼好の老荘への傾倒も考えられるが、これら漢詩の世界の影響も看過できない。なお、閑かな夜に、これらの書物を読みながら、遙かなる古人を心の友として憧れるという、読書する行為を思想の面に昇華したのは、『徒然草』がこれら中国と日本の古典作品を重層的に受容した上に作られた独自の世界観である。

このように、漢籍の代表作を列挙した第十三段の表現と発想の源は中国と日本の漢詩に遡ることができ、『徒然草』には宋学の影響は認めがたいと指摘した先行論¹⁾もあるが、第十三段と宋詩の主題と美意識の一致について、今後はさらなる検討が必要ではないかと考える。

テキスト

- 金子金治郎・雲英末雄・暉峻康隆・加藤定彦校注・訳新編日本古典文学全集『連歌集・俳諧集』小学館 二〇〇一年
- 『宝蔵』明治書院 一九三二年
- 井本農一・村松友次・久富哲雄・堀切実校注・訳新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集』小学館 一九九七年
- 雲英末雄・丸山一彦・山下一海・松尾靖秋校注・訳新編日本古典文学全集『近世俳句俳文集』小学館 二〇〇一年
- 棚橋正博・宇田敏彦・鈴木勝忠校注・訳新編日本古典文学全集『黄表紙・川柳・狂歌』小学館 一九九九年
- 暉峻康隆・東明雅校注・訳新編日本古典文学全集『好色一代男・好色五人女・好色一代女』小学館 一九九六年
- 吉澤貞人『徒然草古注集成』勉誠出版 一九九六年
- 中野幸一校注・訳新編日本古典文学全集『うつほ物語』小学館 一九九九年
- 三谷栄一・稻賀敬二・三谷邦明校注・訳新編日本古典文学全集『落窪物語・堤中納言物語』小学館 二〇〇〇年
- 三角洋一・石埜敬子校注・訳新編日本古典文学全集『住吉物語・とりかへばや物語』小学館 二〇〇二年
- 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注・訳新編日本古典文学全集『源氏物語』小学館 一九九四年
- 和歌はすべて『新編国歌大観』（角川書店 一九八三年）による。私意によって表記を改めたところがある。
- 松尾聡・永井和子校注・訳新編日本古典文学全集『枕草子』小学館 一九九七年
- 川口久雄校注日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』岩波書店 一九六六年
- 本間洋一『本朝無題詩全注釈』新典社 一九九二年
- 柳澤良一『新撰朗詠集全注釈』新典社 二〇一一年
- 陳貽欣主編『増訂注釈全唐詩』文化艺术出版社 二〇〇一年
- 平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』同朋舎 一九八九年
- 『全宋詩』北京大学出版社 一九九五年

- * 1 向坂卓也「兼好法師の姿」県立金沢文庫所蔵品を中心に「『特別展徒然草と兼好法師』図録 神奈川県立金沢文庫 二〇一四年
- * 2 『特別展徒然草と兼好法師』図録 神奈川県立金沢文庫 二〇一四年
- * 3 同注1。
- * 4 国文学研究資料館『歴史人物画像（古典キャラクター）データベース』による。
- * 5 『蒙求』（早川光三郎著新釈漢文大系『蒙求』明治書院 一九七七年）「孫康映雪、車胤聚螢」に「家貧不常得油。夏月則練囊盛数十萤火、以照書、以夜繼日焉」とある。
- * 6 久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九九年
- * 7 『莊子・秋水』（『莊子集釈』中華書局 二〇一〇年）に「莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉、曰「願以境内累矣。」莊子持竿不顧、曰「吾聞楚有神龜、死已三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。此龜者、寧其死為留骨而貴乎。寧其生而曳尾於塗中乎。」二大夫曰、「寧生而曳尾塗中。」莊子曰「往矣。吾將曳尾於塗中。」とある。
- * 8 『莊子・秋水』（『莊子集釈』中華書局 二〇一〇年）に「莊子行於山中、見大木枝葉盛茂、伐木者止其旁而不取也。問其故、曰「無所可用。」莊子曰「此木以不材得終天年。」とある。
- * 9 『莊子・秋水』（『莊子集釈』中華書局 二〇一〇年）に「昔者莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志與。不知周也。俄然覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢為胡蝶與、胡蝶之夢為周與。周與胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。」とある。
- * 10 唐詩と宋詩の調査は中国国家図書館の全唐詩分析系統と全宋詩分析系統を使用した。
- * 11 張高評「北宋読詩詩與宋代詩学——從傳播與接受之視角切入」『漢学研究』二四卷二号 二〇〇六年十二月
- * 12 莫砺峰「陸游読書詩的文学意味」『浙江社会科学』二号 二〇〇三年三月

*13

山田栄子 「徒然草に於ける中国思想の受容」 『国文学論考』 一一号 一九七五年三月
曹景惠 「徒然草における論語の受容」 『中世文学』 四八号 二〇〇三年

第二部 異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳

第一章 前期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳

一、はじめに

『徒然草』は中世に書かれた書物であるが、中世においてはほとんど読まれた形跡がなかった。わずか正徹、心敬、東常縁といった歌人、連歌師の著書に言及された程度である。しかし、近世期に入ってから、慶長九年（一六〇四）に古活字本で刊行された秦宗巴の『寿命院抄』を嚆矢として、『徒然草』の注釈書が盛んに刊行され、いわゆる一種の『徒然草』ブームが起こっていた。なお、このような近世期における『徒然草』の受容の重要性は、『徒然草』の主流研究において看過されがちな存在であった。

近年、島内裕子氏が『徒然草』研究において近世期の『徒然草』受容の重要性を提唱した。氏が「ある作品の注釈書が書かれるということは、その作品が「古典」として意識され始めたことを意味する」と述べ、「徒然草文化圏」という概念を提起した。つまり、「文学作品としての徒然草と、兼好の人間像」、「注釈書と近世兼好伝」、「思想家・文人にみる徒然草との響映」、「挿絵・屏風・色紙など、絵画化された徒然草」、「近代文学への浸潤」、「翻訳された徒然草」という諸領域を総合したものである。氏のこの概念は、近世期の『徒然草』受容についての研究を、『徒然草』の本文、注釈書、作者兼好の伝記といった範囲から大きく広げる

こととなった。江戸時代の『徒然草』ブームは、注釈書や作者兼好の伝記の作成に止まらず、当時の知識人の詩歌、文章、さらに絵画まで波紋を及び、さまざまなジャンルにおいて『徒然草』の影響が見られる。本章は、今まであまり顧みられなかった、江戸時代における『徒然草』を漢訳した作品群の一つを取り上げる。江戸時代の『徒然草』の漢訳について、川平敏文氏の「徒然草の漢訳」という論考がある。氏の論考は、『徒然草』全篇を漢文に置き換えた岡西惟中の『真字寂寞草』（元禄二年刊）、中国の『世説新語』に倣い、奇特なる人物たちの伝を漢文体で綴った服部南郭の『大東世語』（寛延三年刊）、『徒然草』の七つの章段を漢訳した宇野明霞『明霞先生遺稿』（寛延元年刊）、南郭の漢訳を酷評し、『徒然草』の文章を七つの文体に漢訳した山本北山『作文率』（寛政十年刊）、という四つの作品を取り上げた。しかし、これらの作品のほかに、『徒然草』を漢訳したものはまだ色々な形で存在している。たとえば、唐代李瀚の『蒙求』の体裁（人名二文字と事跡二文字の四文字を対にした八文字の成句（韻文）で標題が記され、その注を附す）に倣い、日本人の手によって書かれた異種『蒙求』という作品群に、『徒然草』が少なからず用いられた現象である。『蒙求』は幼学書として、中国のみではなく、日本にもよく読まれた書物であるが、中国において、その

編纂された時代から異種『蒙求』という、『蒙求』の亜流というべき作品群が輩出しており、日本においても、特に江戸時代に、出版技術の向上、知識層の拡大、庶民教育の普及などにもない、異種『蒙求』の編纂と出版がピークを迎えた。このように続撰本に「異種」という言葉を用いたのは、ほかには異種『百人一首』などの作品群の存在が知られている⁴。異種『蒙求』については、相田満氏「異種『蒙求』覚え書―日本における『蒙求』享受の一現象」⁵が早い使用例としてあげられる。今現在、日本で編纂された異種『蒙求』は六十二種確認されているという⁶。このような異種『蒙求』作品群に、『徒然草』の話を漢文にしたものが少なからず見られることが興味深い。本章は、日本における異種『蒙求』の主なものを調査し⁷、その中に『徒然草』関連のものを選び出してその叙述法や特徴を分析する作業を行い、江戸から明治期にかけて空前の人気を呼んだ『徒然草』のもうひとつの受容様態を考える。

表一

書名・作者・刊年	兼好徒然	香蚊殉咎、 資朝羨捨	高市直言、 元良高響	基氏切鯉、 実基返牛		
①本朝蒙求 (普亨 1658 〜 1702 延宝七年 1679 自序)	長明方丈					
標題						

二、日本における異種『蒙求』

日本人の手によって編纂された異種『蒙求』の早いものに、三善為康の『童蒙頌韻』があると、早川光三郎氏の論考によって紹介されている⁸。また、相田満氏によると、『和漢朗詠集永濟注』の著者として知られている永濟による『扶桑蒙求』という書物もあつたが、現在は散佚した⁹。つまり、日本において異種『蒙求』が著されたのは江戸時代に入ってからである。

さらに、前述した相田満氏の論考において指摘されたように、江戸時代に代入ってから、明治初期までに、出版事業の発展と受容層の拡大にともない、日本において異種『蒙求』が次々に刊行され、空前の流行ぶり¹⁰を示した。それらの異種『蒙求』を調査し、その中に『徒然草』の内容が取り入れられたものを選出する作業を行った。その結果を左の表一で示した通りである。(四角で示したのは、『徒然草』或いは作者兼好法師の伝記と関連する標題である。)

	⑥皇朝蒙求 (山下直温 1796 ～1879 天保元年 1830 自序)		序) (根岸典則 1758 ～1831 文政元年 1818	⑤扶桑蒙求 (恩田維周 1743 ～1813 書写年代不 明)	④日本蒙求 (堀長 1718 ～1783 明和七年 1770 自序)	③俳諧蒙求 (木下公定 1653 ～1730 宝永七年 1710 序)	②桑華蒙求 (心願雨泥、 陶侃序雪)
周防乞枕	松尼糊紙、 延光心符	範俊竹人	良覺堀池、 護良甲冑	能因下車、 登蓮戴笠	盛親芋頭	愷之甘蔗、 盛親芋頭	心願雨泥、 陶侃序雪
兼好艶簡	黒主撓筆、 能因曬顔	文覺擊顛	静然折腰、 能因車行	孝道麦飯、 盛親芋魁	領使大根	時頼味噌、 孟母断機	禪尼繕障、 孟母断機
法然德音	讚岐絶唱、 宣時秉燭	保忠炙餅、 法然德音	通円遺影、 兼好歴遊	隆国辞退、 時頼儉約	当道清廉、 晏嬰弊裘	時頼殘醬、 晏嬰弊裘	時頼殘醬、 晏嬰弊裘
	実基返牛		武文怒浪	心願雨泥、 凱之蔗境		盛親芋魁、 凱之蔗境	盛親芋魁、 凱之蔗境
	隆尊拗花		忠盛出勢	実基返牯、 子夏冠小		良覺堀大、 子夏冠小	良覺堀大、 子夏冠小
	基氏切鯉	信隆養鶏	禪尼嫌奢	広世献香		実基返牯、 允濟還牛	実基返牯、 允濟還牛

<p>⑦大和蒙求 (日柳政章 1817 ～ 1868 慶応三年 1867 序)</p>	<p>北条喫鼓、 東山点茶</p>						
<p>⑧大日本史蒙求 (吉川剛 江 戸時代末期 明治三年 1870 举例)</p>	<p>禪尼補障、 清女褰簾</p>	<p>藤綱清約、 時頼儉素</p>					
<p>⑨瓊矛余滴 (橋本寧 1845 ～ 1884 明治十年 1877 序)</p>	<p>肖柏習字、 兼好讀書</p>						
<p>⑩瓊矛余滴続編 (橋本寧 1845 ～ 1884 明治十年 1877 序)</p>	<p>頭忠執杓、 時頼索盥</p>						
<p>⑪日本蒙求続編 (堤正勝 1826 ～ 1892 明治十五年 1882 序)</p>	<p>時頼淡薄、 泰時清廉</p>	<p>藤房忠言、 兼好尚友</p>					

十一種類の異種『蒙求』の中に、『徒然草』と関連のあるものが、同 ⑨『瓊矛余滴』の「兼好読書」の四話は『徒然草』の作者兼好法師の伝話を除いて、全部で十八話を数える。その中に、①『本朝蒙求』の「兼好徒然」、⑤『扶桑蒙求』の「兼好歴遊」、⑥『皇朝蒙求』の「兼好艶簡」、話をみると、⑥『皇朝蒙求』までのものと、⑦『大和蒙求』以降のもの

はまず数量上で大きな差異が認められる。『皇朝蒙求』は『徒然草』十話も取り入れており、そのほかの『桑華蒙求』『扶桑蒙求』のいずれも『徒然草』から五話以上の話を取り入れている。それに対して、⑦『大和蒙求』以降の異種『蒙求』はいずれも『徒然草』から一話或いは二話しか取り上げられなくなったことが確認できる。具体的な理由は後述に譲るが、数量上の問題だけではなく、⑥『皇朝蒙求』までの異種『蒙求』と⑦『大和蒙求』以降の異種『蒙求』は内容の面でも大きな相違が見られる。⑥『皇朝蒙求』までの異種『蒙求』は様々な人物・動物の逸話と取り入れているのに対して、⑦『大和蒙求』以降の異種『蒙求』は兼好の伝記以外、『徒然草』第百八十四段に見られる松下禅尼と第二百十五段に見られる北条時頼の儉約の美德を讃えるというような教訓性の強い話しか取り上げていなかった。よって本論文は、天保元年（一八三〇）自序を有し、最初の一巻本は安政五年（一八五八）に刊行された『皇朝蒙求』を境に、前期と後期に分けて異種『蒙求』を考えたい。本章はまず、『皇朝蒙求』までの前期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳の特徴を考察する。

三、『本朝蒙求』について

最初に『徒然草』の話が見られる表一の①『本朝蒙求』については、本間洋一氏が『本朝蒙求の基礎的研究』一書において詳しく考察されて

おり、詳細は割愛させて頂きたいが、その概要を紹介すると、『本朝蒙求』は上中下三巻で、延宝七年（一六七九）の自序と貞享三年（一六八六）の刊記を有しており、つまり、自序を作る時に、作者の菅仲徹（一六五八—一七〇二）は二十二歳の若さで、貞享三年刊行された時にも、まだ三十歳未満の青年であり、仲徹の「少壮気鋭の孜孜とした閲読の賜物と言ってよからう」と本間氏が指摘した通りであるⁱ⁰。菅仲徹については、『国書人名辞典』によると、漢学者で、名は亨、字は仲徹（中徹）、菅由益の男であり、京都の人。父の教えを受け、病弱の中に学に努めた。確認できる著書はこの『本朝蒙求』だけであるⁱ¹。本間氏の論考にも引用されているが、大谷雅夫氏の考察によると、菅仲徹は伊藤仁斎の門人で、良応法親王近侍の学者であったⁱ²。慶応義塾図書館と東京大学付属図書館に『本朝蒙求』の写本が蔵せられており、国会図書館、内閣文庫などに版本が蔵せられる。本稿において用いたテキストは、早稲田大学図書館逍遥文庫所蔵のもので、出版情報は欠けているが、延宝七年の自序と貞享三年に作者の父親である菅由益による跋文を有している。ちなみに、菅仲徹とその父親の菅由益の文芸活動を確認できる資料は多くないが、菅由益の父親である、つまり菅仲徹の祖父に当たる菅得庵は江戸前期の大学者である藤原惺窩と林羅山の高弟であったⁱ³。

『本朝蒙求』には『徒然草』関連の話を四話見られるが、その中の「兼好徒然」は作者兼好法師の伝記と関連するものであり、本論文の第二部

第三章において詳しい考察する予定であるので、本章ではこの一話を除いて、『徒然草』本文の内容から取材する残りの三話を取り上げる。

まずは、『徒然草』第百五十三段に見られる日野資朝についての説話を見てみる。

為兼大納言入道、召し捕られて、武士どもうち囲みて、六波羅へ率て行きければ、資朝郷、一条わたりにてこれを見て、「あな羨まし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」とぞ言はれける。(『徒然草』第百五十三段)

香蚊殉咎、資朝羨擒

香蚊者安康天皇時事_二于大草香皇子_一。皇子即仁徳子也。有背_二安康天皇之命_一、一旦殺_二皇子於是日_一。香蚊父子俱傷_二其君無罪_一。死_レ之、父抱_二君頸_一、二子各執_二君足_一而唱曰、吾君無_レ罪死悲哉。父子三人生事_レ之、死豈不_レ殉、是不臣矣。即自刎死_二於皇尸側_一。衆皆流涕也。

日野黄門資朝者、真夏之後、文章博士亞相俊光之第三子也。正中年中、資朝奉_二後醍醐帝詔命_一、陰謀_レ囚_二鎌倉北條氏_一。事竟終就_二生擒_一、繼貶_二降左土_一、後被_二死刑_一焉。初資朝路過_二六波羅_一時、偶視_下冷泉為兼被_二生擒_一而往_上、歎云、嗚呼、在世者如此則足矣。後果然也。(『本朝蒙求』卷之下)

『徒然草』第百五十三段は、資朝は為兼が捕まえられたところを見て

感慨した話で、この話を取り上げたのは『本朝蒙求』のみである。本書は日本の異種『蒙求』の中にも編纂の早いもので、また、『徒然草』の話を取り上げた最初の異種『蒙求』でもある。後の異種『蒙求』に比べて、教訓性より、人物や動物の珍しい逸話を記す傾向が見られる。対として用いた「香蚊殉死」の話は『日本書紀』にほぼ同文で見られるものであるが、「資朝羨擒」の話は資朝の略歴を記した後、傍線部分のように、和文の『徒然草』を漢文に訳したものである。『本朝蒙求』凡例に「皆随_二事之相似_一也」とあるように、本書はもとの『蒙求』に倣い、事例の近似性を以て対を作っている。資朝の話の対に、主君に忠実を尽した「香蚊殉死」の話を突き合わせたことから考えると、菅亨はこの話を忠臣の話として位置付けたことがわかる。

次の「元良高響」話は『徒然草』第百三十二段に見られるものである。鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の号にはあらず。昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の声、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。
〔『徒然草』第百三十二段〕

高市直言、元良高響

持統帝三月三日将_レ行_二幸伊勢_一、時中納言_二輪朝臣高市麻呂上_一表敢直言、諫争曰、天皇之幸_二伊勢_一、此妨_二於農時_一。帝不_レ聽竟如_二於勢州_一。於_レ是高市麻呂脱_二其冠位_一、擊_二上於朝_一重諫曰、農

作之節車駕未^レ可^二以動^一。帝不^レ從^レ諫也。

兵部王元良者、陽成帝之皇子也。嘗元日在^二大極殿^一朝賀、其奏言聲響甚高、而聞^二鳥羽之道路^一云。(『本朝蒙求』卷之下)

元良親王が元日の朝拝の賀詞を読み上げる声が鳥羽の作道まで響いたという話が『李部王記』に見られるという記事であるが、『李部王記』は現在残欠本のみ伝来しており、その中にはこの話が見られない。なお、『本朝蒙求』はこの説話の対として、「高市直言」という『日本書紀』に見られる高市麻呂が持統帝に直諫するという忠臣の話をあけており、同じ天皇に捧げる「ことば」として、その類似性を認めたのであろう。

次の「基氏切鯉」と「実基返牛」の対話は両方とも『徒然草』に見られるものである。「基氏切鯉」は『徒然草』第二百三十一段に見られる。

園の別当入道は、さうなき庖丁者なり。或人の許にて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、別当入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかがためらひけるを、別当入道、さる人にて、「この程、百日の鯉を切り侍るを、今日欠き侍るべきにあらず。枉げて申し請けん」とて切られける、いみじくつきづぎしく、興ありて人ども思へりけると、或人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、己れはよにうるさく覚ゆるなり。『切りぬべき人なくば、給べ。切らん』と言ひたらんは、なほよかりなん。何条、百日の鯉を切らんぞ」

とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給ひける、いとをかし。(『徒然草』第二百三十一段)

基氏切鯉

藤原基氏、父中納言基家、母白拍子也。在^二順徳後堀河之朝^一任^二参議^一。其家号曰園。及^二四條帝^一時、上^二辞表^一剃髮名曰円空。當時称曰無双庖丁者、嘗自誓切^二鯉魚^一及^二一百日^一矣。(『本朝蒙求』卷之下)

園の別当入道は有名な料理人で、ある人のところで、みごとな鯉が出されて、客人は園の別当入道の包丁技を見たがるが、軽々しく口に出すことを躊躇している。別当入道は気のきいた人で、百日の間に毎日鯉を切るようにしているので、私が切りましようと言って、その鯉を切ったことがあるが、北山太政入道殿はこの話を聞いて、ちゃんと切つて料理できる人がいないなら、私が切りましようと言えばすむ話であろうと語つた、というかなり長い話であるが、対の「実基返牛」の逸話とともに動物に関する話としてあげるために、『本朝蒙求』は傍線で示したように、『徒然草』第二百三十一段の主旨を取らず、いわゆる「断章取義」的に『徒然草』本文の百日の間鯉を切ると誓つたという部分だけを取り入れた。

最後の「実基返牛」は『徒然草』第二百六段に見られる話である。

徳大寺故大臣殿、檢非違使の別当の時、中門にて、使庁の評定

行はれける程に、官人章兼が牛放れて、庁の内へ入りて、大理の座の浜床の上に登りて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師の許へ遣すべきよし、各々申しけるを、父の相国聞き給ひて、「牛に分別なし。足あれば、いづくへか登らざらん。庇弱の官人、たまたま出仕の微牛を取らるべきやうなし」とて、牛をば主に返して、臥したりける畳をば換へられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。

「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る」と言へ

り。『徒然草』第二百六段)

実基返牛

徳大寺右府公孝父曰「実基、為相国。公孝初為庁屋大理、與同僚評議政事、微官人章兼所養之一牛放縦走入庁中、上臥于大理座床。同僚皆謂此蓋恠異凶災之端也。以此牛応與遣乎陰陽家。父相国聴之曰、畜獸無知、有其脚者何処之無登哉。且卑陋少年之官人偶出事於朝、而今豈可奪取一牛與陰陽氏乎。於是乎返牛於章兼。其所臥之座床皆改換之。果無凶災。所謂見恠不為恠、則其恠自壞。信乎言也。〔『本朝蒙求』卷之下）

徳大寺実基は、檢非違使庁舎の中に入り、長官の座る浜床に登って反芻した牛を、凶事として陰陽師に出すことを止めて、持ち主にその牛を

返した話である。『官史記』、『左大史小槻季継記』等の記録類に同話が見られることが先行研究によつて指摘されたことであるⁱ⁴。対の「基氏切鯉」は『徒然草』本文の一部だけを取り上げたのに対して、「実基返牛」の話は最後の兼好の評まで、『徒然草』の原文を忠実に漢訳している。『本朝蒙求』は『徒然草』を最初に取り上げた異種『蒙求』として、対の話を選択する時も、漢訳の文章を綴る時も、様々な工夫を凝らしたことが認められる。

四、『桑華蒙求』について

『桑華蒙求』は別書名『新撰自註桑華蒙求』であり、三巻からなっている。備中足守藩第五代藩主木下公定の著作である。刊行年月は必ずしも明らかではないが、巻頭に「宝永七年庚寅孟夏某日」日付の序文（従五位下守大学頭藤原信篤）があり、巻末の跋文（後学桃原塾沂魯南甫識）には「正徳扶嚮八月初吉」の日付が見られることから考えると、成稿したのは宝永七年（一七一〇）夏以前になるが、印行されたのは正徳年間（一七一〇—一七一六）であろうⁱ⁵。静嘉堂文庫、京都大学付属図書館などにその写本が蔵せられており、無刊記本は内閣文庫、宮内庁書陵部文庫他に、天保十五年（一八三九）刊本は国会図書館、京都大学付属図書館他に蔵せられる。また、明治十六年（一八八三）刊行の、福田宇中箋註・林正躬訂正『箋註桑華蒙求』が無窮会図書館織田文庫など

に蔵せられる。著者の木下公定は元禄十四年（一七〇一）播州赤穂浅野氏改易の時、赤穂城受け取り役を務めた人物としても有名であり、藩校追琢館を創立して文教を振興した藩主でもある。『桑華蒙求』の著述も、藩士の教育を目的としたものであるという指摘が見られる。

最初に『桑華蒙求』に取り入れられた『徒然草』の話は第七十七段の佐々木入道心願の話である。

鎌倉中書王にて御鞞ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、いかがせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積みて、多く奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土の煩ひなかりけり。「取り溜めけん用意、有難し」と、人感じ合へりけり。（『徒然草』第七十七段）

心願雨泥、陶侃廳雪

佐佐木入道心願者、隠岐前司義清嫡男也。嘗仕鎌倉幕府宗尊王。一日王與近臣蹴鞠、時雨餘泥湿。心願遽獻鋸屑數車、地上布之。士議称其平日用意矣。

陶侃字士行、晋成帝咸和中、都督交広荆江等八州軍事、封長沙公。年七十六薨、贈大司馬、諡曰桓。嘗造船、其木屑竹頭皆令籍而掌之。元會大雪始晴、廳事前猶湿。於是所貯木屑布地、其綜理微密皆此類也。（『箋註桑華蒙求』卷之上）

ある日、宗尊親王が近臣と蹴鞠をする時、雨の後で地面は濡れている

ので、心願は木のけづりくず数台分を献じ、地面に敷き、人々はその日の備えの良さに感心したという話である。その対の話に、中国晋代の陶侃の類話が用いられたが、『徒然草』の注釈書、林羅山の『野槌』はこの第七十七段の注に、『晋書』陶侃嘗造船。其木屑竹頭皆令籍而掌之。其後元會大雪始晴庁事前猶湿。於是所掌木屑布地」と、『晋書』に見られる陶侃の説話を用いた。この注は後の『徒然草』注釈書に受け継がれて、後述する浅香山井の『徒然草諸抄大成』にも取り入れられている。

次の松下禅尼の話は、『徒然草』第八十四段に見られる。

相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禅尼、手づから、小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、某男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と申されければ、「その男、尼が細工によも勝り侍らじ」とて、なほ、一間づつ張られけるを、義景、「皆を張り替へ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑らに候ふも見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も、後はさはさとは張り替へんと思へども、今日ばかりは、わざとかくであるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけんためなり」と申されける、

いと有難かりけり。〔徒然草〕第百八十四段)

禅尼繕障、孟母断機

松下禅尼者、秋田城介景盛女、而嫁平時氏、生経時時頼、

襲父職。禅尼為人貞秀清儉、晩節愈堅。一日手自繕補障子

破紙、格眼戸扇糊貼薄紙以取透明謂之明障子時禅尼兄義景來訪、見之曰、賢妹何執鄙

事。我家有糊工、請命完繕全障、成功甚易、為費不多。

禅尼答曰、老婦亦期他日繕修之、凡物補少破則不至大

壞、今日時頼將至、故欲举示以諷曉諷教也焉耳。

鄒孟軻母、其舍近墓。孟子少好遊、為墓間之事。孟母曰、

此非吾所居子也、乃去、舍市傍。其嬉戲乃賈人街賣街賣行也之

事。又曰、此非吾所居子也、復徙舍学宮之旁、其嬉戲乃

設俎豆、揖讓進退。孟母曰、真可以居吾子矣、遂居。及

孟子既学而帰、孟母問学所至、孟子曰、自若也。孟母以刀

断其織曰、子之廢学若吾断斯織也。孟子懼且夕勤学不息、

師事子思、遂成名儒。君子謂、孟母知為人母之道。〔箋註桑華蒙求〕卷之上

松下禅尼が息子の北條時頼に儉約の徳を教えた逸話であるが、『桑華

蒙求』は、松下禅尼の対になる人物として、孟子の母を用いた。浅香山

井の『徒然草諸抄大成』に、「山案此段天下諸侯としては儉約を本とす

べきことを教へたり。(中略)さて、禅尼の時頼の母公たれど、臣にか

はりて教訓し給ふありがたくこそ、彼孟母の三遷思ひ出られ侍る」とあ

るように、この章段について「孟母の三遷」の故事を以て注釈している。

『桑華蒙求』が松下禅尼と孟母を突き合わせたのは『諸抄大成』からヒ

ントを得た可能性が考えられる。「箋註桑華蒙求引書目録」に、「徒然艸

抄」という書名があり、前の心願の逸話の対も『諸抄大成』から影響を

受けた可能性があることから考えると、本書は『徒然草』から取材した

時、これら『徒然草』の古注釈書を大いに参考したことがわかる。また、

「孟母断機」の話は、「箋註桑華蒙求引書目録」に見える『蒙求』(徐子

光新注)の「軻親断機」からの全文引用である。

前述した表一で示したように、『徒然草』二百四十四段の中に、日本

の異種『蒙求』に取り入れられた章段は全部で十四段であり、決して多

いとは言えない。それは異種『蒙求』の内容が人物逸話に限られている

ことも関連するが、それでも、その取捨選択は集中している。特に、『徒

然草』第二百十五段に見られる北條時頼に関する逸話は、その教訓性が

人気を呼んだであろうか、八種の異種『蒙求』に取り入れられ、最も引

用回数が多い話である。この時頼の話をもっと取り入れたのは『桑華蒙

求』である。

平宣時朝臣、老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ば
るゝ事ありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかく

せしほどに、また、使来りて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く』とありしかば、萎えたる直垂、うちうちのまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて持て出でて、『この酒を独りたうべんがさうさうしければ、申しつるなり。肴こそなけれ、人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭さして、隈々を求めし程に、台所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて、『これぞ求め得て候』と申ししかば、『事足りなん』とて、心よく数献に及びて、興に入られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか」と申されき。〔徒然草〕第二百十五段）

時頼残醬、晏嬰弊裘

北條時頼一宵簡召平宣時、而來稍遲、乃馳介曰、夜陰帽服、垢弊何傷、坐俟鼎來。宣時忽至、時頼喜迎曰、我有薄酒欲與君對飲、奈無肴核、請君搜索屋裏可乎。宣時然紙燭走庖厨、乍見架上小盃有未醬国俗釀豆麴呼為未醬益敗類也、殘餘、得之持去、相共飲、夜深去。其節儉如此、豈好奢侈者可不深戒乎。晏嬰字平仲、桓子之子。齊景公以為相、食不重肉、妾不衣帛、一狐裘三十年。越石父賢、在縲紲之中、晏子解左驂贖之、以為上客。太史公曰、假令晏子在、雖為之執鞭、所

忻慕焉。（『箋註桑華蒙求』卷之中）

この話は、儉約の美德を讃え、奢侈を戒めるものとして取り上げられており、その対の話に、同じ儉約の話である「晏嬰弊裘」という中国の説話を突き合わせた。「晏嬰弊裘」の話は「箋註桑華蒙求引書目録」に見える『排韻氏族』（『排韻増広事類氏族大全』）という中国元代の類書からの全文引用である。時頼の話については、傍線部分を『徒然草』の原文に比べればわかるように、宣時を招いたがなかなか来ないので、再び使者を出し、夜も深いため、服装のことは気にしなくてもよい、はやく参れとのこと、宣時が紙燭を持って厨房に入り、棚の上の小皿に味噌を見つけたことなど、話の詳細まで漢文に訳している。

次の盛親僧都の話は『徒然草』第六十段に見られる。

真乗院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふ物を好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝元に置きつゝ、食ひながら、文をも読みけり。患ふ事あるには、七日・二七日など、療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭を選びて、ことに多く食ひて、万の病を癒しけり。人には食はする事なし。ただひとりのみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に売りて、かれこれ三万疋を芋頭の錢と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づつ取り寄

せて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、また、他用に用ゐることなくて、その錢皆に成りにけり。「三百貫の物を貧しき身にまうけて、かく計らひける、まことに有り難き道心者なり」とぞ、人申しける。(後略) (『徒然草』第六十段)

盛親芋魁、凱之蔗境

洛北仁和寺属寺真乘院有盛親僧都者、智徳兼備、得密学蘊奥、衆以為法灯也。為人白皙秀眉、体肥満有膂力、然宏達不羈、不拘礼俗。飢来則飯、劳来則眠、乘興而往興尽而帰。性嗜芋魁、饗飧是供、雖誦經講法之際、無不以喫焉。或罹疾、閉戸謝客、恣食芋魁、果得除瘴。初先師臨終遺囑、授親以旧房與錢二百貫。他日親壳房得一百貫、托諸京城旧識、每乞十貫、為芋魁之資。居數歲貯錢空竭無顧吝色。実安貧寡欲之道人也哉。

顧凱之字長康、小字虎頭、有才氣、工畫而癡、時稱其有三絶、才絶畫絶癡絶也。每食甘蔗、自尾至本云、漸入佳境。晋桓温引為大司馬參軍。(『箋註桑華蒙求』卷之下)

盛親僧都が異様なほどに芋頭を好んだ話であるが、『徒然草』の話の後半にある僧都の容貌、性格などについての部分を前にまとめて、その後半に逸話を語るといふような人物伝記の書き方に改め、作者の工夫が見られる。傍線で示した『桑華蒙求』本文の最後の一句は盛親僧都が師匠

からもらった遺産をすべて芋頭を買う資金に当てたという変わった行爲を、貧しさに安じて欲望の少ない美徳として捉えたが、『徒然草』第六十段の本文の最後の傍線部で示したように、『徒然草』はあくまで盛親僧都を仏道に精進する人として描いた。後の異種『蒙求』に見られる教訓性はここでも確認できる。その対の話に顧凱之が甘蔗を食べる時、尻尾の部分から食べる癖があるという話を用いた。『桑華蒙求』のこの部分の文章表現の出典になる漢文作品は見つからないが、顧凱之のこの話は『晋書』『世説新語』などに見られ、有名な話である。『蒙求』にもその類話が見られる。

次の良覚僧正の話は『徒然草』第四十五段に見られる。

公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。

坊の傍に、大きな榎の木がありければ、人、「榎木僧正」とぞ言ひける。この名然るべからずとて、かの木を伐られにけり。

その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを掘り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池僧正」とぞ言ひける。(『徒然草』第四十五段)

良覚堀大、子夏冠小

良覚僧正、俗姓藤氏、中郎将実俊子也。性忿狷。偶房側有大

榎樹、故人呼稱「榎僧正」。覺惡其目不雅、遂伐其樹。根株尚存、又呼為「伐株僧正」。覺愈惡其稱、穿棄殘株其蹤作「大堀」、仍又稱「堀池僧正」云。

杜欽字子夏、少好經書、目偏盲。茂陵有杜鄴、與欽同姓字、故衣冠謂欽為「盲杜子夏」。欽惡之、乃著小冠、高広才三寸、由是更稱為「小冠杜子夏」、而鄴為「大冠杜子夏」云。（『箋註桑華蒙求』卷之下）

良覺僧正が三度もあだ名を付けられた話である。同じあだ名に関する中国の杜子夏の話に対して突き合わせたが、この話は『漢書』『白氏六帖』『古今事文類聚』などに見られる。

最後の実基が牛を返したという話は、前述した『本朝蒙求』にも見られ、表現の異同が少しあるが、ほぼ同話として認められる。ただし、『徒然草』と『本朝蒙求』では、無知の獣畜に罪はないと言って牛を持ち主の章兼に返したのは実基であるが、『桑華蒙求』では標題では「実基返牯」になっているものの、本文では『本朝蒙求』が「父相国聴之曰」となっているところが傍線で示した「公聴之曰」と誤られ、話の主人公は息子の公孝になっている。

実基返牯、允濟還牛

従一位相国藤実基号「後徳大寺」、子公孝累官為「相国」。公孝初為「大理」時、與「同僚」評「議政事」、会徴士章兼之畜牛、奔逸

入「庁事」、登「臥于大理座牀」。同僚皆謂「不詳」也。応將「此牛」與「陰陽家」。公聴之曰、畜獸無知、且有脚者、何処不登。今徴賤官人、始仕朝廷、寧可奪其牛乎。於是返牛於章兼。後竟無凶災。

隋張允濟為武陽令。元武民、以特牛依婦家、犖十餘犢。將歸、而婦家不與牛。即訴県。県不能決、乃詣允濟。允濟因縛民、蒙其首、過婦家云、捕盜牛者、令尽出牛、質所從來。婦遽曰、此婿家牛。即撤蒙曰、可以牛還主。婦家叩頭伏罪。元武吏大慙。（『箋註桑華蒙求』卷之下）

日本の異種『蒙求』が先行する異種『蒙求』から同話を孫引きするパターンは後にも述べるように、少なからず見られる。これもその一例である。対の話は、同じく牛を返す話として連想しやすいものである。この張允濟の話は『新唐書』『古今事文類聚』などに見られる。

日本の異種『蒙求』の中、二番目に作られた『桑華蒙求』は藩主が編集したこともあり、かなり流布して、後の異種『蒙求』に大きな影響を与えた。その編集にあたって、『徒然草』の古注釈を参照し、独自性を有する文章表現を作る工夫が見られる。また、『徒然草』の逸話の選択は珍話・奇談を選ぶ意趣もあり、後に主流となる松下禅尼と時頼の儉約を讃える教訓性の強い話もはじめて取り入れられている。後の異種『蒙求』に見られるこれらの特徴がすべてそろい、本書は日本の異種『蒙求』

の基礎を作った作品と言える。

五、『俳諧蒙求』について

『俳諧蒙求』は明和七年（一七七〇）の自序があり、三巻からなっている。自筆本は国会図書館に蔵せられ、『加賀能登郷土図書叢刊麦水俳論集』に翻刻がある。著者については、日置謙氏による詳細な考察がある¹⁸。著者の堀麦水は江戸時代中期の俳人であり、麦水はその俳名で、通用の雅号は樗庵であり、貞享期の蕉風俳諧を顕彰したところに特徴がある。俳人のほかに、『慶安太平記』などの実録の作者としても名高い人物である。彼が『俳諧蒙求』を著した理由は、その自序によると、当時において芭蕉の俳風が衰えることを嘆き、『蒙求』に倣い、日本と中国の人物逸話を用いて、蕉風の俳意を述べることである。ただし、この本は『蒙求』という名を用いながら、和文で書かれた俳論書である。基本的に漢文で書かれる異種『蒙求』作品群の中にも特殊な存在である。本論文の主旨から離れるものであるため、ここでは詳しく論述することはないが、本書の上巻に『徒然草』から「愷之甘蔗、盛親芋頭」と「時頼味噌、領使大根」という二つの逸話を取り入れている。このような俳論書に『徒然草』の逸話が俳意を述べる事例として用いられたことに注意したい。貞門俳諧の祖である松永貞徳が『徒然草』の注釈書『慰草』を著し、蕉門十哲の一人である各務支考が『つれづれの讚』を書いたな

ど、近世期俳壇における『徒然草』の影響が看過できない。ここもその一例である。ちなみに、『徒然草』全篇を漢文に置き換えた『真字寂寞草』を記した俳人岡西惟中にも『俳諧蒙求』という著者があるが、本書とは別のものである。

盛親僧都の話について「俳意」を述べる部分に、麦水は盛親僧都の嗜好を「かざらざるの徳」として捉え、句を作る時にも、盛親僧都のように、「ありのままの正風をのべ」るのがよいと説いている。「時頼味噌、領使大根」については、「只其志足りなんには、小土器の味噌も二の膳台のものの奔走にはまさりつべし。こころ合はん友と交るこそ、何くれとなく珠得たるおもひなるべき」というように、この話を儉約の話だけではなく、同じ志を分かち合う友のありがたさを説く話としてもその俳意を認めた。これはほかの異種『蒙求』に見られない麦水独自の読みである。

六、『日本蒙求』について

『日本蒙求』は尾張藩の儒者恩田維周の作品で、三巻からなっている。内閣文庫にその自筆本が所蔵されているが、書写年代は明らかではない。そのほかに、国会図書館、無窮会図書館織田文庫などに蔵せられる。直書の外題は「日本蒙求」となっているが、巻頭の内題は「隸事」である。『名古屋市史人物編』に作者の経歴が確認できる。蕙楼はその号で、名

は維周・宣充であり、字は仲任である。尾張藩主徳川宗勝の五男で、美濃高須藩第七代藩主松平勝当の近侍などを務め、享和二年（一八〇二）継述館総裁兼藩校明倫堂教授となった。著作を多数残している人物であり、『蒙求』に關してだけでも、『日本蒙求』のほかに、『蒙求攷証』、『蒙求贅言』、『蒙求統紹』三書が見られる¹⁾。

最初に本書に取り入れられた『徒然草』に見られる逸話は、鴨長明の『無名抄』にもある登蓮上人の話である。

（前略）人の数多ありける中にて、或者、「ますほの薄、まそほの薄など言ふ事あり。渡辺の聖、この事を伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑・笠やある。貸し給へ。かの薄の事習ひに、渡辺の聖のがり尋ね罷らん」と言ひけるを、「余りに物騒がし。雨止みてこそ」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゝしく、有難う覚ゆれ。人の数多ありける中にて、或者、「ますほの薄、まそほの薄など言ふ事あり。渡辺の聖、この事を伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑・笠やある。貸し給へ。かの薄の事習ひに、渡辺の聖のがり尋ね罷ら

ん」と言ひけるを、「余りに物騒がし。雨止みてこそ」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゝしく、有難う覚ゆれ。（『徒然草』第百八十八段）
能因下車、登蓮戴笠

僧能因與友人車行、忽下步里許。問是何故。曰、今所過伊勢夫人旧居跡爾、隔世雖邈、庭松尚存、名流所居、奈何可輒乘過哉。伊勢詠歌名流、因以己耽好故敬尚焉。

僧登蓮善和歌、衆人会集、蓮亦在座。談及一秘事、或曰渡邊道人知此。蓮即起求雨具。人問何之。蓮曰、欲詣道人許聞秘事爾。皆云、方雨何乃太急。蓮曰、命理奄忽、豈待雨齊。遂戴笠而行。（『日本蒙求』卷之中）

衆人会談及一秘事、或人曰、某許道人知此秘。登蓮法師在坐、即起求雨具。座人問何之。曰、欲詣某許聞秘事爾。皆曰、何乃太急。蓮曰、命理奄忽、那復為人且待雨霽。（『大東世語』）

傍線で示したように、表現を改めたところが少し見られるが、この部分は、寛延三年（一七五〇）刊行の服部南郭の『大東世語』の類話を基にして書かれたことが確認できる。なお、『大東世語』は「某許道人」

としたところを、『日本蒙求』は『徒然草』の本文によるか、「渡邊道人」と改めたのである。対の能因の話もほぼ同文で『大東世語』に見られる。次の「盛親芋魁」の話は前述した『桑華蒙求』と『俳諧蒙求』にも取り入れられたものである。

孝道麦飯、盛親芋魁

妙音相公師長命藤協律孝道、期某日有事必至。其日孝道浪遊都下過期、公索之不得、及晚自至。公怒、急命左右令作麦飯鱒魚。須臾供至、乃使孝道啖食。孝道適飢、举皆尽之。公益怒、命拜伏三千餘回。孝道素健且加餐起伏無艱。公搔首曰、奴已如斯、吾無可奈何。公嘗遠行、遇麦飯鱒魚以人之苦惡莫過此者、故以為罰。世伝為笑。

僧都盛親任達不羈、甚嗜芋魁、談義座側貯盛大盂、且啖且論。有病必挾芋魁殊美者、閉居飽食、病亦誠愈。其師死、遺一坊及錢二百緡、亦壳坊百緡、举託人家稍稍取給辦芋、無用他事、未幾都尽。（『日本蒙求』卷之下）

僧都盛親

居真乘院 能書博學、辨論無敵、稱一宗法灯。飲食晝夜不作節限、獨自任意。

任達不羈、甚嗜芋魁、談義座

側貯盛大盂、且啖且論。未始進人。有病必挾芋魁殊美者、閉居飽食、疾亦誠愈。生平居貧、其師死、遺一坊及錢二百緡、亦壳坊百緡、都将三百緡举託人家、稍稍取給辦芋、無用他事、亦復未幾皆尽。（『大東世語』）

傍線で示したように、服部南郭『大東世語』のほぼそのまま引用しており、「孝道麦飯」の部分についても、『大東世語』の僧都盛親の話の丁にほぼ同文で見られる。『日本蒙求』は文章表現だけではなく、対話を作る時にも『大東世語』を参考したことが認められる。

次はまた『徒然草』第二百五段に見られる時頼の話であるが、その対になる「当道清廉」という阪上当道の話は『日本三代実録』とそれによると思われる『本朝通鑑』の文章を省略した形になっているが、時頼の話については、『大東世語』の文章をほぼそのまま用いている。

当道清廉、時頼儉約

阪上当道、右金吾將軍広野之子、少好武芸、便弓馬。為舍人、累遷大理、処法平正。不避權貴、出為陸奥大守、任滿待代卒。当道家世清廉、輕財重義、在州有清理之称、境内肅然、民夷安之。没後無資、臨斂所有布衾一條耳。遺愛在人、後世見思。

平相州時頼、為政鎌倉、儉約率下卒。宣時老後謂人曰、昔者相州一夕見邀曰、既夜不必裝束、願疾見臨。乃著故袍往。相州挈酒出曰、偶有此物、不可獨酌、聊復迎爾、恨無下物、厨下或有餘食、既已中夜人靜、煩君唯所自得。乃秉燭入厨、徧索無有、僅見度上土器、豆豉著餘、弃在其中。試且举至、相州曰、亦足。乃暢然对酌、遂至歡醉、其

時率如是。〔『日本蒙求』卷之下〕

平宣時北條庶族。大佛氏。陸奥守。老後謂人曰、昔者相州相模守一夕見邀、尋使再至

曰、既夜不二必装束、願疾見臨。乃著二故直垂去。至則相州自

挈レ酒出曰、偶有此物、不可二独酌、聊復迎爾、恨無二下物、

厨下或有二餘食、既已中夜人靜、煩君唯所二自得。乃秉レ燭入

厨、徧索無有、僅見二度上土器、豆豉著餘、弃在二其中。試且

举至、相州曰、亦足矣。乃暢然对酌、遂至二飲醉、其時率如是。

相州為政錄
倉俣薄幸物〔『大東世語』〕

傍線で示した通り、表現を改めた所は少々見られるが、『日本蒙求』の文章はほぼそのまま『大東世語』を用いている。このように、日本の異種『蒙求』は文章を綴る時に、『大東世語』といった当時流行の人物伝記類の書物を参考した傾向が認められる。

七、『扶桑蒙求』について

『扶桑蒙求』は文政元年（一八一八）の序と天保十四年（一八四三）の刊記を有しており、三巻からなっている。刊本は内閣文庫、筑波大学付属図書館などに蔵せられ、また、明治四年（一八七一）の後刷り本もある。作者の根岸典則は歌人で、文化・文政時代に活躍した青梅文芸の中心人物である。名は鳳質・典則で、字は文卿、号は嶮谷・溪雲軒。中原章と井上金峨に師事して、漢学・和歌・禅などを幅広く学び、漢詩集、

和歌集など多数の作品を残している。『扶桑蒙求』は『桑華蒙求』の影響が目立ち、大部分がその抜書きではないかと思われる程であるという指摘（註）もあるが、『徒然草』関連の話で見る限りでは、『大東世語』の影響もかなり大きい。

最初の明雲座主に関する話は『徒然草』第四百四十六段に見られる。

明雲座主、相者にあひ給ひて、「己れ、もし兵杖の難やある」と尋ね給ひければ、相人、「まことに、その相おはします」と申す。「如何なる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、仮にも、かく思し寄りて、尋ね給ふ、これ、既に、その危ぶみの兆なり」と申しけり。

果して、矢に当りて失せ給ひにけり。〔『徒然草』第四百四十六段〕

明雲流矢、護良甲冑

天台座主明雲者、久我雅実孫、六條頭通子。問相者曰、身亦有兵杖之厄乎。相者曰、有之。公身故応無傷害之畏、而今問如斯、是乃其兆耳。果中流矢而没。

護良親王者、後醍醐帝皇子。初入天台為僧、号尊雲。常好勇事武、帶甲冑。有征相陽之志。元弘帝幸和州笠置山、東軍諸將攻困之久而城兵力竭。帝潜遁外時、親王在般若寺聞之、孤身踰躅、露餐草宿、既曆數日。按察法眼好勇、通志武家、探聽親王所在、率五百士卒向般若寺。親王

進退惟谷、潜匿^二経函中、微^二誦隱形呪、率尔免^レ厄。(『扶桑蒙求』卷之上)

天台座主明雲、

久我相国源雅実之孫
六條大納言頼通之子

問相者曰、身亦有^二兵杖之厄乎。

相者曰、有之。或問何以知之。曰、公身故^レ無^二傷害之畏、

而今問如斯、是乃其兆耳。果中^二流矢^一而没。

安藤親占明雲曰、以陰陽占視之。明是日月、而下被雲障、不祥。明雲後

問藤通憲、有兵禍之相乎。藤通憲答云云。

(『大東世語』)

傍線で示した部分の文章表現を比べればわかるように、ほぼ『大東世語』と同文であり、その孫引きであることが認められる。「護良甲冑」の話は『増鏡』、『太平記』などに見られる。『徒然草』の話に見られる人物の対として、南朝の臣下が登場していることに注意しておきたい。もちろん、同じ武道を嗜み、戦乱において命を落とした僧侶として、明雲からは護良親王が連想されやすい人物ではあるが、同時に兼好の南朝と関係深い人物像がその背後に働いたと考える。

次の盛親の話は、前述した『大東世語』と『日本蒙求』の同話を省略した形で引用している。対の能因の話も『大東世語』と『日本蒙求』に見られる。『大東世語』と『日本蒙求』の受容範囲を考えると、『扶桑蒙求』は『大東世語』から影響を受けた可能性が大きいが、もちろん、同じ異種『蒙求』の先行作品である『日本蒙求』を参考した可能性も否定できない。

盛親芋魁、能因車行

真乘院盛親任達不^レ羈、甚嗜^二芋魁、談義座側貯^二盛大盃、且啖且論、未^二始進^レ人。有病必挾^二芋魁殊美者、閉居飽食、病亦誠愈。

能因法師與^二友人^一車行、忽下步里許。友人問^二之。曰、今所過伊勢夫人旧家跡爾、隔^二世雖^レ邈、庭松尚存、名流所^レ居、奈何可^二輒乘過^一哉。待^二樹杪不^レ見而後載行。(『扶桑蒙求』卷之上)

次の心願の話も『桑華蒙求』と同話であり、対の武文の話も『桑華蒙求』に見られる。

心願雨泥、武文怒浪

佐佐木入道心願、隱岐前司義清嫡男也。嘗仕^二鎌倉幕府宗尊王。一日王與^二近臣^一蹴鞠、時雨餘泥湿。心願遽獻^二鋸屑數車、地上布^レ之。士議稱^二其平日用意矣。

元弘元年、南帝在^二和州笠置山、官軍與^二東軍^一戰不利。二年、副元帥平高時矯^二北帝詔^一遷^二南帝於隱州、流^二尊良親王於土州。播多親王有^二妃藤氏、琴瑟克諧。既自^二辰高隔離、朝思暮想、暫無^二止時。随侍唯有^二右右衛門府生秦武武者、親王密諭^二武文^一迎^二藤氏。(後略)(『扶桑蒙求』卷之中)

次の実基の話も前出したもので、『桑華蒙求』とほぼ同文であり、また対の忠盛の話も『桑華蒙求』に見られる。

実基返牯、忠盛出勢

相国藤実基号、後徳大寺、其男公孝累官為相国。初為大理時、與同僚評議政事、会徴士章兼畜牛、奔逸入庁事、登臥于大理座床。同僚皆言不祥也。公聽之曰、畜獸無知、且有脚者、何処不登。今微賤官人、始仕朝廷、寧可奪却一牛乎。於是返牛於章兼。後無凶災。

刑部尚書平忠盛者、桓武帝遠裔、京兆尹正盛男也。祖先中微至忠盛有武備且猷長寿院營構之費、仍知但州、兼授四位升殿。於是公卿妬渥遇、將期五節夜宴暗害忠盛。忠盛豫知其謀、而運智計得免。時公卿諷伶人歌謡曰、伊勢瓶子醋瓶也。猶言伊勢平氏者眇目也。蓋平氏出自勢州、忠盛生得一眼眇故也。(『扶桑蒙求』卷之中)

このように、先行研究で指摘された通り、『扶桑蒙求』は『桑華蒙求』を参考した所がかなり多い。ここでは省略するが、次の松下禅尼の話、良覚僧正の話もそれぞれ『桑華蒙求』と同話である。

また、次の『徒然草』第一百五十二段から取材した話は、標題が「静然折腰」であるが、『徒然草』には日野資朝の逸話群に入っている。

西大寺静然上人、腰屈まり、眉白く、まことに徳たけたる有様にて、内裏へ参られたりけるを、西園寺内大臣殿、「あな尊の気色や」とて、信仰の気色ありければ、資朝卿、これを見て、「年の寄りたるに候」と申されけり。

後日に、尨犬のあさましく老いさらぼひて、毛剥げたるを曳かせて、「この気色尊く見えて候」とて、内府に参らせられたりけるとぞ。(『徒然草』第一百五十二段)

静然折腰、文覚撃顛

西大寺静然上人、扶老而朝、白尾折腰、龍鐘甚苦。西園内府実衡側見、乃起敬曰、嗚呼尊宿哉。藤原資朝從傍、謂曰、是徒年老耳。明日使人牽衰茸一老尨遺内府、曰是可尊尔。

西行風気高邁、兼善雅詠。高雄文覚初聞其名、甚醜之、曰伊既遁世邪、唯当静修仏理、何故嘯詠浮遊、且走高門乎。吾見必当擊碎頭腦。(後略)(『扶桑蒙求』卷之下)

西大寺静然上人、扶老而朝、白尾折腰、龍鐘甚苦。西園内府実衡左府公衡之子官内大臣側見、乃起敬曰、嗚呼尊宿哉。藤原資朝從傍、謂曰、是

徒年老耳。明日使人牽衰茸一老尨遺内府、曰是可尊尔。(『大東世語』)

本文に傍線で示したように、ここも『大東世語』ほぼ全文そのまま取り入れている。

最後の法然の話は『徒然草』第三十九段に見られる。

或人、法然上人に、「念仏の時、睡にかかれて、行を怠り侍る事、いかゞして、この障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊

かりけり。(『徒然草』第三十九段)

通円遺影、法然德音

宇治橋畔有通円者、曾構小店点茶接待。至今店中刻通円法師像安置、稱為通円茶店。

或人問法然上人曰、弟子欲專念佛、唯時為睡所障、何以除之。上人曰、方寤乃念可也。時称德音(『扶桑蒙求』卷之下)。

或問法然上人曰、弟子欲專念佛、唯時為睡所障、何以除之。上人曰、方寤乃念可也。時称德音。(『大東世語』)

傍線部で示したように、法然の話の部分について、『扶桑蒙求』は『大東世語』をほぼそのまま引用している。

以上のように、『扶桑蒙求』は『桑華蒙求』から影響を受けた所が多く見られるが、『大東世語』を参考して作った部分もかなり認められる。異種『蒙求』はこの時期になると、このように独自性を失い、人物伝記類や同じジャンルの異種『蒙求』といったほかの書物から孫引きするというマンネリズムに陥ったのであるが、次の『皇朝蒙求』では、この弊習から脱出する試みが見られる。

八、『皇朝蒙求』について

『皇朝蒙求』は天保元年(一八三〇)の自序を有している。作者の山下直温(一七九六—一八七九)は白河藩の儒者で、文政十年(一八二七)

に藩の儒官となり、藩校修道館で教えたこともある。『西白河郡誌』に

その経歴が載せられている²²。内閣文庫所蔵本には明治十三年十一月にその息子の直太郎が記した凡例が見られる。それによると、三巻からなる本書は、安政五年(一八五八)父が六十三歳の時に、一旦出版されていたが、途中に直温が失明してしまい、本の校正もまだ弱冠になつていない息子が側で読んで、直温が添削を指示する形でしかできない状態であったので、刊行したのは上巻のみであった。これはすなわち宮内庁書陵部と上田市立図書館花月文庫等に蔵せられている一巻本である。本書の完本の出版は直温が亡くなった後の明治十四年(一八八二)になる。

『皇朝蒙求』が最初に『徒然草』から取材したのは、前出した第三十九段の明雲座主の話である。重複になるが、参考のために『徒然草』の本文を引用しておく。

明雲座主、相者にあひ給ひて、「己れ、もし兵杖の難やある」と尋ね給ひければ、相人、「まことに、その相おはします」と申す。

「如何なる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、仮にも、かく思し寄りて、尋ね給ふ、これ、既に、その危ぶみの兆なり」と申しけり。果して、矢に当りて失せ給ひにけり。(『徒然草』第四百十六段)

明雲兵厄、延光心符

明雲、大納言明通之子也、為天台座主。嘗問相者曰、身亦

有_二兵厄_一乎。曰、有。或謂以_レ何知之。曰、公固_レ無_二傷害_一而言_レ如斯、是乃其兆耳。及宇治之役果中_二流矢_一死。

源延光、明王子也、賜_二姓源_一、為_二天曆帝所任用_一。帝謂、相

遇如是、朕若即世卿其思耶。曰、皇恩不可忘。帝曰、時或可

思。曰、千秋之後臣願終身不_レ積_レ喪、因為_二刻心之符_一。〔皇朝

蒙求』卷之上)

『扶桑蒙求』の「明雲流矢」の話に比べて、語句の異同が認められ、その出典になりうる漢文作品は見つかっていない。また、「延光心符」の類話は『今鏡』に見えるが、同じくその出典になる漢文の作品は見当たらない。山下直温が『徒然草』の話に基づいて漢訳したものであるうと思うが、この二つの訳文と『徒然草』の原文を比べればわかるように、『扶桑蒙求』は、相者の答えを聞いた明雲がその相とはどのようなものであるかと聞き返した部分を省略したが、『皇朝蒙求』は省略せずに、漢文に訳している。

次の登蓮法師の逸話も前出したものであるが、同じくその出典になる漢文作品は見当たらない。

登蓮衝雨、能因曬顔

積登蓮、不知_二何所人_一也。嘗衆人会談、及_二一秘事_一、或曰、其道士知_レ此。時在_レ坐、起求_二雨具_一。人問、何之。曰、欲聞_二秘事_一爾。曰、何太急。曰、命理忽諸不可_二少止_一、衝_レ雨行。

能因、初為_二文章生_一、有_二才学_一、世称曰_二肥後々進_一。性嗜_二和歌_一、偶作_二白河秋風詠_一、自謂_二佳絶_一而恨_二其不_レ実_一、乃為_二東遊者_一、匿_二半歳_一、常涉_レ園、顔曬_二風日_一、作_二旅疲之状_一、而示_二人其歌_一曰、都於波霞登共_二立志賀斗秋風曾吹白川関_一。〔皇朝蒙求』卷之上)

歌僧の逸話として、『日本蒙求』と同じく能因の話を用いたが、『日本蒙求』の「能因曬顔」の話は『大東世語』等に見られるものの、『皇朝蒙求』のこの話とは文章表現の一致性が認められない。やはり、『皇朝蒙求』の独自性が注意される。

次の「宣時秉燭」の話は、ほかの異種『蒙求』にも多く取り上げられた『徒然草』第二百五十五段の北條時頼の逸話であるが、それらの話と違い、時頼ではなく、宣時を標題に取り上げた。

保忠炙餅、宣時秉燭

藤保忠、左大臣時平子也、承平中兼_二右近衛大将_一。性仁惠、冬月入_レ朝、懷_二炙餅_一以自温、冷則分_二與従者_一以為_レ常。

北條宣時、武蔵守朝直子也。老後語_レ人昔日相州一夕見_レ迎、

已夜矣、不必_二衣冠_一、願可_二疾来_一。因著_二直垂_一至、則相州自手

酒出_レ曰、偶有_二斯物_一、不可_二独酌_一、然無_二下物_一、厨下或有_二餘食_一。余乃照_二紙燭_一、遍索_二才見_一碟中有_二餘鼓_一、因持_レ来。相州曰、是亦足矣。遂至_二快飲_一、其不_レ拘_レ如此。〔皇朝蒙求』卷之上)

また、その対の話の「保忠炙餅」は『大鏡』に見られるが、『大鏡』にはこの冬の寒さを退くために炙り餅を懐に入れ、冷めたら従者に分ける行為を「いかが思されけむ」と、高く評価していないのに対して、本書には、左の本文に傍線で示したように、「性仁恵」として、その慈しみを評価している。さらに、「宣時秉燭」の部分についても、傍線で示したように、この話を儉約の話としてではなく、時頼の拘らない性格を讃えたものとして捉えた。また、ほかの異種『蒙求』と違い、本書は標題に時頼ではなく、「宣時秉燭」という『徒然草』第二百十五段に話し手として登場する宣時を取り上げ、訳文の中にも、「余乃照紙燭」というように、宣時の視点で訳している。これはほかの異種『蒙求』の同じ箇所に見られない訳し方である。このように、『皇朝蒙求』には作者の独自の工夫が認められよう。

次の「資朝贈犬」と「実基返牛」と二話とも前出した話である。

資朝贈犬、実基返牛

藤原資朝、権大納言俊光子也。嘗與内大臣藤原実衛上直。西大寺僧静然入朝。実衛望見其腰背曲偻、眉毛皓然、有起敬之色。資朝曰、彼老僊耳、敬之者何。他日、縹犬皮毛悴落者贈之。曰、此物亦有可敬之資矣。

藤原実基、左大臣公継子也。嘗入檢非違使庁行事、吏章兼

車牛脱、入庁上床臥。衆以為怪、議当送牛陰陽家禳焉。

実基曰、牛有蹄足、何処不到。厩弱官人、適会公事、被奪一牛、是可憐恤。衆從其議、返牛其主。竟無凶災。〔皇朝蒙求〕卷之中)

廷尉庁行事。吏章兼車牛自脱、入庁上大理牀伏。衆驚以為怪、議当送牛陰陽家禳焉。徳大藤相国実基天臣公継之子独曰、牛無意而有蹄足、何処不到。厩弱官人、適会公事、輒被奪一牛、是可憐恤。遂從其議、返牛其主。竟無凶災。〔大東世語〕

「資朝贈犬」の話について、本書の底本は西園寺内大臣の実衛と誤った表記しているが、『扶桑蒙求』の「静然折腰」と同じ『徒然草』第五十二段に見られる、資朝が年老いた静然上人の姿を尊く思った実衛に老醜の犬を送った話である。ただし、『扶桑蒙求』に比べて、標題になっている人物は静然上人ではなく、『徒然草』本文の主人公である資朝に改め、その文章表現もだいぶ相違する。なお、傍線で示したように、「実基返牛」の話については、ほぼ『大東世語』からの引用であるが、所々表現を改めている。

次の盛親の話も『日本蒙求』、『扶桑蒙求』に既出したもので、同じく前述した『大東世語』の同話と文章表現の一致性が認められる。

盛親嗜芋、隆尊拗花

僧盛親、居真乘院、能書博学、弁論無敵、称一宗法灯。

性任達不羈、甚嗜芋魁。談義坐側則盛大孟、且啖且論、未始與人。有病必挾芋魁殊美者、閉居飽食、疾亦誠愈。生平居貧、其師死、遺一坊及錢二百緡、奉託人家、稍取辨芋、無幾皆盡。

僧隆尊、宮内卿家隆子也。善和歌。嘗東遊、見路傍人家桜花盛開、心甚艷、遂拗一枝去。主人使僮追執之、隆尊意色自若、便詠和歌曰、白波能名波立登底毛吉野川花故沈牟身於婆恨志。主人大感、厚遇之。〔『皇朝蒙求』卷之中〕

僧都盛親同真乘院 能書博學 辨論無敵 粹 清 澆 飲食晝夜不作節限 獨自任意任達不羈、甚嗜芋魁、談義座

側伴盛大孟、且啖且論。未始進人。有病必挾芋魁殊美者、閉居飽食、疾亦誠愈。生平居貧、其師死、遺一坊及錢二百緡、亦売坊百緡、都将三百緡奉託人家、稍稍取給辨芋、無用他事、亦復未幾皆盡。〔『大東世語』〕

傍線で示したように、『日本蒙求』『扶桑蒙求』が取り入れなかった割り注も含めて、『皇朝蒙求』は『大東世語』の盛親僧都の話を省略した形で取り入れている。ここでは、具体的にあげないが、次の基氏が百日間鯉を切る話は前述した『本朝蒙求』の同話からの引用であり、松下禪尼と法然上人の話は『大東世語』の同話からの引用である。『皇朝蒙求』は日本の異種『蒙求』の中に、『徒然草』関連の逸話を一番多く取り入れたものである。本書は先行する異種『蒙求』作品や『大東世語』から

引用する部分は少なくないが、同じ話でも標題に取り上げる人物を変えたり、『徒然草』本文に沿うように他書を参考しながらも表現を改めたりするなど、その文章表現には独自性を目指した部分が認められる。

九、まとめ

以上今回調査した日本人の手によって書かれた異種『蒙求』のうち、『皇朝蒙求』までのいわゆる前期と分類できるものを見てきた。その作者は有名な詩人・歌人・漢学者といったような各分野において活躍した知識人であることは言うまでもないが、恩田維周、山下直温のような官学或は私塾において指導者の立場に居る人物や、木下公定のような藩の文教に熱心を示した藩主がこれらの書物を著したことから考えると、当時の教育において『蒙求』或いは異種『蒙求』の重要性が認められよう。

これら異種『蒙求』の特徴をまとめてみると、『本朝蒙求』は年代の早いものとして、逸話の選択と漢訳する時の文章表現にその独自性が認められる。『桑華蒙求』は『野槌』『諸抄大成』など『徒然草』の古注釈を参照し、また、後の異種『蒙求』に多見する『徒然草』の話を教訓性の強いものとして捉える兆しも本書に見られる。『俳諧蒙求』は俳論書という特別の形式であり、『徒然草』の話について俳論としての独自の読解が見られる。近世期俳壇において『徒然草』の用い方の一例として注意される。『日本蒙求』あたりから、『大東世語』の影響が目立ち、『扶

『桑蒙求』は『桑華蒙求』や『大東世語』を大いに参考して作られている。『皇朝蒙求』になると、同じ話でも、標題の人物を変えたり、ほかの書物から引用する時も、省略したり、表現を改めたりするなど、マンネリズムから脱出して独自性を目指す意匠が見られる。最初に述べたように、『皇朝蒙求』までの異種『蒙求』は『徒然草』から取材する話の数も内容も、それ以降のものと質的な相違が見られ、本章では、『皇朝蒙求』までの、いわゆる前期の異種『蒙求』を俎上に載せ、考察を行った。以上述べてきたように、近世期における異種『蒙求』に、『徒然草』関連の話が十一種類の書物に見られる。これらの異種『蒙求』が和文脈の『徒然草』を漢文脈の『蒙求』に取り入れるときに用いた漢訳する方法として、以下のように、主に四つの特徴が見られる。

一つは、和文脈の『徒然草』を漢訳する時、『徒然草』原文を詳細にまたは忠実に訳すことである。特に最初の『本朝蒙求』『桑華蒙求』は参考できるほかの漢文作品が少ないこともあり、自力に『徒然草』を漢訳する時、このような特徴が見られる。後の『皇朝蒙求』もほかの作品の孫引きではなく、独自性のある訳文を作る時に、『徒然草』の原文に戻って翻訳する箇所が認められる。そして、こういう啓蒙用の書物として多用される方法であるが、原典からではなく、類書、史書、或は『大東世語』といった当代流行の人物伝記類の書物から引用することである。

『桑華蒙求』『日本蒙求』『扶桑蒙求』および次章で述べる『大日本史蒙

求』など、多くの異種『蒙求』がこの方法を用いた。さらに、『扶桑蒙求』が『桑華蒙求』から孫引きするなど、先行する異種『蒙求』から引用する方法も確認できる。最後に、貞享三年（一六八六）作者菅仲徹の父親である菅由益による『本朝蒙求』の跋文に、「是皆俾^下初学蒙士^一知^中古今人物之典故。我本朝文物之固、而豈無^三其人其事之可^二紀載^一耶。然未^レ覩^レ諸述家纂錄者。」や、宝永七年（一七一〇）林鳳岡による「桑華蒙求序」に「和漢人異域殊。行事之実、合符同轍、亦此之謂也。慕^二彼土之風、揚^二我国之美^一」と、天保元年（一八三〇）『皇朝蒙求』の「自叙」に「我東方於^二西土^一也、其国雖^レ小、人材衆多、何讓^二於彼^一」とあるように、これらの書物は中国と日本との対比を強く意識して作られている。

近世期において、『徒然草』の注釈書が多数作られたが、本論文で取り扱った日本人の手によって作られた異種『蒙求』も近世期における『徒然草』受容のもう一つの様態である。このような啓蒙性・教訓性の強い書物に取り入れられたことは、その当時に、『徒然草』が古典として成り立ち、その中の説話が既に人口に膾炙するようになっていたことを物語っている。近世期の『徒然草』受容は、注釈書だけではなく、さまざまなジャンルにその影響を及ぼしていることがわかるのである。

テキスト（表記と訓点は原文に従うが、適宜私に改めた所がある。）

- 『本朝蒙求』 貞享三年跋 早稲田大学図書館逍遙文庫蔵公開画像
- 『箋註桑華蒙求』 明治十六年刊 近代デジタルライブラリー公開画像
- 吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠出版 一九九六年
- 徒然草古注釈大成『徒然草諸抄大成』日本図書センター 一九七八年
- 『麦水俳論集』 昭和四十七年 石川県図書館協会出版
- 『日本蒙求』 書写年代不明 内閣文庫蔵自筆写本
- 『扶桑蒙求』 天保十四年刊 国文学研究資料館蔵公開画像
- 『皇朝蒙求』 明治十四年刊 内閣文庫蔵本
- 『大東世語』 寛延三年刊 国文学研究資料館蔵公開画像

*1 正徹『正徹物語』（歌論歌学集成第十一巻 稲田利徳校注 三弥井書店 一九九九年）に「花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは」と、兼好が書たるやうなる心ねを持たる物は、世間に、たゞ一人ならでは無なり。此の心は生得にて有也」とある。

心敬『ささめ』こと（歌論歌学集成第十一巻 廣木一人校注 三弥井書店 一九九九年）に「兼好法師が曰、「月・花をば目にてのみ見るものは。雨の夜に思ひ明かし、散り萎れたる木陰に来て過ぎにしかたを思ふこそ」と書き侍る、まことに艶深く覚え侍り」とある。

東常縁『新古今集聞書』（荒木尚『幽齋本新古今集聞書―本文と校異―』九州大学出版会 一九八六年）に「兼好法師自書に月はまとかなるをのみよしといふへからす雨後の雲間よりあらはれかねたる又暁かけていつる月に心すむとかけりけにもとおほえて心はつかしく侍り」とある。

*2 島内裕子『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院 二〇〇九年

*3 川平敏文「徒然草の漢訳」『文彩』六号 二〇一〇年三月

*4 異種『百人一首』について、熊谷武至「明治異種百人一首書誌」（『書物展望』十三巻八号 一九四三年八月）、伊藤嘉夫「異種百人一首の成立」

『跡見学園国語科紀要』十九号 一九七一年三月) などの研究が見られる。

- *5 相田満 「異種『蒙求』覚え書―日本における『蒙求』享受の一現象」『中央大学国文』二八号 一九八五年三月
- *6 相田満 「『蒙求』型類書の世界」和漢比較文学叢書第八卷『和漢比較文学研究の諸問題』汲古書院 一九八八年
- *7 日本の異種『蒙求』の書目については、注5と注6の論考にまとめられた「日本における異種『蒙求』書目一覧」を参考した。
- *8 早川光三郎 「蒙求解説」新釈漢文大系『蒙求』明治書院 一九七七年
- *9 同注5。
- *10 本間洋一 「付・編著者菅仲徹とその周辺―覚え書―」『本朝蒙求の基礎的研究』和泉書院 二〇〇六年
- *11 『国書人名辞典』岩波書店 一九九八年
- *12 大谷雅夫 「曼殊院良応法親王と伊藤仁斎・東涯」『国語国文』五一巻二号 一九八二年二月
- *13 同注10。
- *14 滝川政次郎 「徳大寺実基について」『国語と国文学』八巻一号 一九三二年一月
- *15 藤森賢一 「『桑華蒙求』 积文と出典(一)」「高野山大学国語国文』九巻一号 一九八四年十二月
本間洋一 「『桑華蒙求』管見―編纂素材と後続書への影響の一斑から―」『同志社女子大学日本語日本文学』一八巻 二〇〇六年六月
同注15本間氏論文。
- *16 同注15本間氏論文。
- *17 本間洋一 「『桑華蒙求』概略・出典覚え書(下巻)」『同志社女子大学学術研究年報』六五巻 二〇一四年十二月
- *18 日置謙氏の「樗庵表水伝」『表水俳論集』石川県図書館協会 一九三四年
- *19 『名古屋市史人物編下巻』国書刊行会 一九八一年
- *20 松本智子 「九州大学付属図書館蔵『夫木集溪雲抄』について」『夫木和歌抄データベース』国文学資料館 二〇〇六年
- *21 注5相田満氏の論考と注10本間洋一氏の論考に指摘がある。
- *22 『西白河郡誌』名著出版 一九七三年

第二章 後期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳

一、はじめに

前章では、異種『蒙求』が『徒然草』から取材する説話の数量と内容の質の相違から、初版が安政五年（一八五八）刊行の『皇朝蒙求』あたりを境とし、いわゆる前期の異種『蒙求』の特徴を考察した。前期の異種『蒙求』は本章で取り扱う後期のものと比べて、『徒然草』から取材する逸話の数量も圧倒的に多く、その内容も人物・動物に関する奇話など様々な話が見られる。本章は幕末から明治期にかけて制作されたいわゆる後期の異種『蒙求』を考察対象とし、その漢訳方法の特徴を分析する。なお、前章の表一で示したように、後期の異種『蒙求』の中、『徒然草』関連の話が見られるのは⑦『大和蒙求』、⑧『大日本蒙求』、⑨『瓊矛余滴』、⑩『瓊矛余滴続編』と⑪『日本蒙求続編』の五種を数えるが、『瓊矛余滴』の「兼好読書」は作者兼好法師の伝記を取り上げたもので次の第三章に取り上げることとする。本章では、残り四種の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳について考察する。『大日本史』や先行の異種『蒙求』の影響を強く受ける特徴と、その内容は『徒然草』第百八十四段に見られる松下禅尼と第二百十五段に見られる北条時頼の儉約の美

徳、及び兼好法師の読書・尚友の美德の話だけに集中する特徴を考察する。このように、後期の異種『蒙求』になると、『徒然草』から逸話を選択する際に、数量が一書に一話二話程度に激減するだけではなく、その内容も教訓性が強い逸話に限定していく傾向が確認できる。その背景には、川平敏文『徒然草の十七世紀—近世文芸思潮の形成』（岩波書店 二〇一五）が述べたとは無関係ではないと思う。

二、『大和蒙求』について

『大和蒙求』は江戸時代末期の漢詩人日柳政章の作品である。日柳政章は号は燕石、慶応元年（一八六五）に高杉晋作を隠れ、逃亡させた嫌疑を受け、明治元年（一八六八）までの四年間に高松の獄に繋がれた。獄中において、燕石に漢詩の講義を乞うものがあり、これら教生のために、慶応三年（一八六七）に教本として、この『大和蒙求』が作られた。その後、また補足修訂して、書名を『皇和蒙求』に改めたが、いずれも未定稿で、最後の決定稿は散佚している¹⁾。本書はほかの異種『蒙求』と体

裁が違い、人物と逸話をまとめる四字の標題を付ける形式は『蒙求』に倣ったものであるが、その注としては漢文の文章ではなく、七言絶句を一首附している。本書は漢詩の教本として作られたが、こういう『蒙求』の形を取ったのは、『蒙求』は漢詩文の基礎教育に有効的な形式であることを物語っている。また、前章では天保元年（一八三〇）自序、安政五年（一八五八）初刊の『皇朝蒙求』までの前期の異種『蒙求』について論じたが、前期の異種『蒙求』は『徒然草』から取材する時に、人物・動物に関する珍しい説話・面白い説話を取り入れるものが多く確認でき、いわゆる奇譚性が見られる。それに対して、幕末の『大和蒙求』からの後期の異種『蒙求』は教訓性の強い話しか取らなくなった。『徒然草』から北條時頼の儉約の話のみ取り入れた本書はその発端である。

本書に取り入れられた『徒然草』の話は一話のみであるが、第一章においてすでに述べたように、多くの異種『蒙求』に見られる北條時頼の儉約の逸話である。漢詩の形を用いて、時頼の儉約に対して、足利義政の奢侈を批判したものである。

平宣時朝臣、老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ばるゝ事ありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また、使来りて、『直垂な

どの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く』とありしかば、萎えたる直垂、うちうちのまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて持て出でて、『この酒を独りたうべんがさうざうしければ、申しつるなり。肴こそなければ、人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭さして、隈々を求めし程に、台所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて、『これぞ求め得て候』と申ししかば、『事足りなん』とて、心よく数献に及びて、興に入られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか」と申されき。（『徒然草』第二百五五段）

北条喫鼓

留_レ賓夜館一杯伝。

賓を留むる夜館、一杯伝はる。

半_レ碟残壺即盛筵。

半碟の残壺、即ち盛筵なり。

如_レ此家風誰破了。

此の如き家風、誰か破り了ぬ。

肉_レ林酒沼気通天。

肉林酒沼気、天に通ず。

東山点茶

枉_二使_一犬猿争_二国権_一。

枉げて犬猿をして国権を争は

しむ。

將軍自作_二一茶仙_一。

將軍、自ら一茶仙となる。

可^レ知蕭散東山閣。

知るべし、蕭散たり東山閣。

輪^ニ与豪華北野筵^一。

豪華、北野の筵に輪す。

〔大和蒙求〕

「留^レ賓夜館一杯伝。半碟残壘即盛筵」という詩句は、『徒然草』第二百十五段の平宣時が台所の棚にある小さい器に少し味噌が残っているものを見付け、これを北條時頼に見せたら、時頼が「それで十分であろう」と言つて宣時と快く対飲した場面を描いた。燕石は時頼のこの儉素の美德を讃え、詩の後半でこのような家風は誰も破ることができまい、酒池肉林の会飲にも等しい盛宴、この氣風が天に通ずると絶賛した。

三、『大日本史蒙求』について

『大日本史蒙求』は、題目の通り、『大日本史』より取材したものである。作者の吉川剛は江戸時代末期の漢学者で、生没年は未詳、なお、この『大日本史蒙求』の挙例の最後に、明治三年（一八七〇）の日付があることから、本書の書写年代がわかる。吉川剛は字は全節、通称は久勁・勁である。常陸鹿島神宮祠官吉川縫殿林久の家に生まれ、のち江戸に出て昌平黌に入る²⁰。本書は写本のみ伝わってきたものであり、現在は茨城県立歴史館に所蔵されているが、もともとは鹿島神宮大宮司家第六十七

代大宮司鹿島則文（一八三九—一九〇一）の桜山文庫に旧蔵されていた。なお、本文の標題に「時頼儉素」の「素」の字が脱落しているが、目録によって補った。

『大日本史蒙求』に取り上げられた『徒然草』の逸話は第百八十四段松下禅尼と第二百十五段の北條時頼の二話であり、いずれも儉約の美德を讃える説話である。まずは、松下禅尼の話について分析する。

相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禅尼、手づから、小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、某男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と申されければ、「その男、尼が細工によも勝り侍らじ」とて、なほ、一間づつ張られけるを、義景、「皆を張り替へ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑らに候ふも見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も、後にはさはさはと張り替へんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて、心づけんためなり」と申されける、いと有難かりけり。〔徒然草〕

第百八十四段

禪尼補障、清女褰簾

北條時頼母、安達氏、秋田城介景盛女也、称_二松下禪尼_一。

嘗_二為時頼_一設_レ食、兄義景來助_二治具_一、尼方手裁_二小紙_一、

糊_二補紙格_一。義景請命_レ人為_レ之、尼不_レ顧。義景曰、補

之不_レ若_レ新_レ之之省_レ勞。尼曰、我豈不_二之知_一乎。凡物

有小破、宜_レ修_レ補_レ之、欲_レ使_レ兒輩知_二此意_一耳。人謂

時頼克守_二勤儉_一、政理靜寧、亦_レ母教_レ之使_レ然也。卷二百二十四 四列女傳

清少納言、肥後守清原元輔女也。有_二才学_一、与_二紫式部

齊_レ名。一條帝時、仕_二藤原皇后_一、被_二眷遇_一。皇后雪後

顧_二左右_一曰、香炉峰雪想_二如何_一。少納言即起褰_レ簾、時

人歎_二其敏捷_一。皇后特喜_二其才華_一、欲_レ奏_レ為_二内侍_一、遭

藤原伊周等流竄_レ不_レ果。老而家居、屋宇甚陋、郎署年少

見_二其貧窶_一、憫_レ笑_レ之。少納言自_二簾中_一呼曰、不_レ聞有

買_二驂馬骨_一者_上乎。笑者慚而去。著_二枕草子_一、行_二于世_一。

同上（『大日本史蒙求』卷之四）

北條時頼母安達氏、秋田城介景盛女也、称_二松下禪尼_一。

嘗_二為時頼_一設_レ食、兄義景來助_二治具_一、尼方手裁_二小紙_一、

糊_二補紙格_一。義景請命_レ人為_レ之、尼不_レ顧。義景

曰、補_レ之不_レ若_レ新_レ之之省_レ勞。尼曰、我豈不_二之知_一乎。

凡物有_二小破_一、宜_レ修_レ補_レ之、欲_レ使_レ兒輩知_二此意_一耳。

人謂時頼克守_二勤儉_一、政理寧靜、亦_レ母教_レ之使_レ然也。徒然草

（『大日本史』卷二百二十四・列伝五）

清少納言、肥後守清原元輔女也。有_二才学_一、与_二紫式部

齊_レ名。一條帝時、仕_二藤原皇后_一、被_二眷遇_一。皇后雪後

顧_二左右_一曰、香炉峰雪想_二如何_一。少納言即起褰_レ簾、時人

歎_二其敏捷_一。○十訓抄皇后特喜_二其才華_一、欲_レ奏_レ為_二内侍_一、

遭_二藤原伊周等流竄_一不_レ果。枕草子老而家居、屋宇甚陋、郎

署年少見_二其貧窶_一、憫_レ笑_レ之。少納言自_二簾中_一呼曰、不

聞有_二買_レ驂馬骨_一者_上乎。笑者慚而去。古事談著_二枕草子_一、

行_二于世_一。（『大日本史』卷二百二十四・列伝五）

傍線で示したように、松下禪尼の話だけを見ても、『大日本史

蒙求』の本文注は『大日本史』の記述をほぼ全文そのまま引用

していることがわかる。また、対の清少納言の部分も、同じ『大

日本史』巻二百二十四からほぼ全文引用している。これだと、

本書の制作意義が問われるが、本書の最初にある「大日本史蒙

求举例」を見てみると、第一条には「李澣蒙求之例、八句換韻、

平仄互用、而篇末多押_二仄韻_一、亦必序次平上去入、整然不紊、

間有_二重押_一同韻_上者、而不_三復用_二同字_一、格法甚嚴、此編一沿_二

李氏例、不敢做_レ他妄意使_二属对_一者也」とあるように、本書は漢文の韻と人物逸話の対を作ることに重心を置いた教本的な性格を持つものであると想定できる。つまり、本書は写本しか伝わっていないものであり、草稿的な性格が強いものであることから考えると、漢文と人物故事を勉強するための練習として、『大日本史』を題材に、『蒙求』の体裁を倣って標題を作ったものであると考えられる。

次の「時頼儉素」の話も『大日本史』の原文によって書かれたものである。

藤綱清約、時頼儉素

青砥藤綱、上総人、北條時頼挙用為_二引付衆_一、奏授_二左衛門尉_一。嘗夜行過_二滑川_一、誤墜_二十錢於水_一、藤綱遂命_二從者_一、以_二五十錢_一、買_レ炬、照_レ水撈_レ錢、竟悉得_レ之。或嘲_二其失大得少_一、藤綱顰蹙曰、甚矣、子等不用_二意_一。經世也。失_二十錢_一、雖_レ少、失_レ之則永損_二天下之貨_一。五十錢雖_レ損_二於我_一、亦益_二於人_一。彼此六十錢、其為_レ利、不亦大乎。聞者歎服。藤綱歷_二仕時頼及時宗_一、食邑數十所、家富_二於財_一、立身清約、衣食羸惡、刀室不_レ髹、每出一人持_二木刀_一、從_レ後。及_レ授_レ官、応_レ佩_二衛府太刀_一、藤綱不_レ為_二裝飾_一、只加_二弦袋_一而已。性好_レ施、所_レ入俸悉

振_二給貧困_一。其在_レ職、廉潔剛直、不_レ憚_二權貴_一、於是姦吏斂_レ迹、人人自飭、一時風俗、翕然頓改。至_レ今談_二鎌倉美積_一者、咸稱_二時頼時宗_一、蓋藤綱多_レ所_二補益_一云。

卷二百一將
軍家臣傳

北條時頼、性儉素、食不_レ貳味、一夕燕居、会_二族父宣時來_一、時頼手举_レ酒曰、独飲不_レ若_二與_レ卿共之樂_一也。奈_二深夜無_レ下物_一何。宣時即起、照_二紙燭_一、索_二殘醬_一侑_レ之、終夜對飲、尽_レ飲而止、其淡薄如此。上_二〔大日本史蒙求〕卷之五_一

北條時頼、時氏子也、北條系因小名戒寿、称_二五郎_一（中略）

性儉素、食不_レ貳味、一夕燕居、会_二族父宣時來_一、時頼手举_レ酒曰、独飲不_レ若_二與_レ卿共之樂_一也。奈_二深夜無_レ下物_一何。宣時即起入_レ厨、照_二紙燭_一、索_二殘醬_一侑_レ之、終夜對飲、尽_レ飲而止、其澹薄如此。徒然草〔大日本史〕卷二百一・列伝四_一

青砥藤綱、上総人、父曰_二藤満_一。弘長記初時頼詣_二鶴岡齋宿_一、夢神告_レ之曰、汝欲_レ致_レ治、須_レ用_二青砥某_一。既覺、明日下_レ書徵_二藤綱_一、給_二食邑數所_一。藤綱怪問_二其故_一、即告_レ以_レ寔。藤綱辞曰、仏経譬_レ無_二寔相_一、曰_レ如_二夢幻泡影_一、今以_レ夢用_レ僕、他日又以_レ夢斬_レ僕邪。夫無_レ功受

賞、是謂_二国賊_一、臣未有_二微効_一、不敢_二當_一。時頼賢其言、益敬異焉。奏授_二左衛門尉_一、為_二引付衆_一。有人與_二德宗領_一争_二田者_上、其辞直、而衆咸憚_二時頼_一、遂以_二田属_二德宗領_一。時称_二北條氏家督_一曰_二德宗_一。藤綱覆議其事、以其田_二歸_二本主_一。本主喜、裏_二錢三百貫_一、密置_二藤綱庭内_一而去。藤綱忿曰、断_二訟持_二平_一、豈特為_二汝邪_一。苟以_二我公平_一邪、相模殿宜_レ見_二賞奨_一、汝之貨焉得_レ汚_二我邪_一。以_二錢還_二于其家_一。嘗夜行過_二滑川_一、誤墜_二十錢於水_一、藤綱遂命_二從者_一、以_二五十錢_一、買_二炬、照_二水撈_二錢_一、竟得_レ之。或嘲_二其失大得少_一、藤綱輦蹙曰、甚矣、子等不用_二意於經世_一也。失_二十錢_一雖_レ少、失_レ之則永損_二天下之貨_一。五十錢雖_レ損_二於我_一亦益_二於人_一。彼此六十錢、其為_レ利、不_二亦大_一乎。聞者歎服。藤綱歷_二仕時頼及時宗_一、食邑數十所、家富_二於財_一、立身清約、衣食麤惡、刀室不_レ髹、每_レ出一人持_二木刀_一從後。及授_二官、心佩_二衛府太刀_一、藤綱不_レ為_二裝飾_一、只加_二弦袋_一而已。性好_レ施、所_レ入俸悉振_二給貧困_一。其在_レ職、廉潔剛直、不_レ憚_二權貴_一、於_レ是姦吏斂_レ迹、人人自飭、一時風俗、翕然頓改。至今談_二鎌倉美積_一者、咸称_二時頼時宗_一、蓋藤綱多_レ所_二補益_一云。太平記（『大日本史』卷二百一・列伝四）

『大日本史』卷二百一・列伝四「將軍家臣十一」に、北條時頼に続いて青砥藤綱の伝記が見られる。作者吉川剛は『大日本史』の原文から二人の人物の儉約について描いた部分を抜き出して、その順番を逆にして標題を付け、本書に記していたのであろう。『徒然草』の本文は平宣時は「或宵の間に呼ばるゝ事ありしに」、つまり、時頼に呼ばれて時頼に会いに行ったのであるが、『大日本史』は「会_二族父宣時来_一」、つまり宣時はたまたま来たことになっており、それを受けて『大日本史蒙求』も『徒然草』の本文ではなく、『大日本史』と同じ内容になっている。また、『大日本史』に見られる藤綱の伝記はかなり長いものである。つまり、時頼は神のお告げを受け、藤綱に領地を与えようとしますが、藤綱は功勞なしに賞を受けられないと言って断つたという話と、北条家の領田を争う人がいるが、藤綱は道理に従って領田をその人に返し、その人からお礼として置いた錢三百貫も断つたという話、そして、藤綱は川に落としたりした十錢のために五十錢を出し、松明を買って下人に探させた話、および身に付ける刀など衣食裝飾に金銭を費やさないと四つの事例を挙げて藤綱の儉素清約を描いた。それに対して、『大日本史蒙求』はその中の、十銭を取り戻すため自分から五十銭を出したという、自分が損をしても天下の貨幣を損失させない話と、自

分と下人が持つ刀に奢侈な装飾をしない話、および人物についての評贊を取り出し、標題の注として付けたのである。前述した「大日本史蒙求举例」に、「伝註與「本史」、詳略不同、固宜前後錯綜、自為一篇文字」也。若随「手摘録去」、則大損「文体」。故字句間、頗有「與「本史」異者」、読者幸莫「恠」之」とあるように、「大日本史」とは文章の相違があることを説明している。しかし、ここでは詳略の差異はあるものの、文章表現はほとんど『大日本史』そのままの引用である。

このように、『大日本史蒙求』は『大日本史』から人物の逸話を取材し、『蒙求』の体裁に倣って四字の標題を付け、『大日本史』の本文を標題の注として付したことから、『蒙求』の体裁は漢文の基礎教育に故事と音韻の勉強に有効であることが再確認できる。また、『大日本史』に松下禅尼と北条時頼の逸話は両方とも『徒然草』から取材したものと明記しており、前章で述べた前期の異種『蒙求』は『徒然草』から様々な逸話を取り入れたのに対して、幕末から明治期にかけての後期の異種『蒙求』は儉約の美德を讃えるこの二つの逸話しか取らなくなったことから、近世以降の『徒然草』の受容の変遷が読み取れるのである。

四、『瓊矛余滴続編』について

『瓊矛余滴続編』は明治十年（一八七七）に刊行されたものである。内閣文庫、茨城県立歴史館などに蔵せられている。本書の作者は明治十年代を代表する漢詩文作者の橋本寧である。『瓊矛余滴』とその続編のほかにも、『蓉塘詩鈔』などの詩集があり、雑誌『新文詩』、『花月新誌』で活躍した人物である。名は寧で、字は静甫、蓉塘はその号である。上夢香と神田香巖と一緒に「西京の三才子」と謳われた。明治六年（一八七三）頃に式部寮に出仕し、明治十五年（一八八二）に皇典講究所の教授となっている³。『寧斎詩話』『開春詩紀』に、野口寧斎が京都三軒屋に岩谷一六を訪れた際に、偶然蓉塘と対面して、「長身清癯、袴を著けたる人俄に入り来て曰く、君は松陽先生の令息なるか、余は橋本ヤスシなりと、されど余は瓊矛余滴を読みたる時よりして、君が五十前後の人ならんと想像し居たるが上に、寧を子イと音読し居たるを以て、偶然君なりとは想ひ到らず、唯唯として答うるのみなりき、既にして君さりて後、始て當面に錯過したることを悟り、悔ても及ばず」という逸話が見られ⁴、『瓊矛余滴』は当時の文人の間に読まれ、評価されていることがわかる。

『瓊矛余滴続編』に取り上げられた『徒然草』の逸話は最も

引用回数が多い北条時頼の話一話のみである。

頭忠執杓、時頼索醬

藤原頭忠、左大臣時平二子也。天徳中、歴官至右大臣、叙從二位、康保二年薨、年六十八。詔贈正二位、称富小路右大臣。性尚節儉、第宅器物極朴素、盥漱不用盤、自執杓灌洗、雖為大臣、出無前驅、騶從甚尠、方設大饗、治具簡約、堂廡一無所崇飾。初時平與菅原道真、並為左右大臣、構陷道真、道真遂薨於配所。既而時平諸子相繼物故、世謂道真之靈所崇、頭忠深懼之、每夜拜于庭、祈免難、兄弟中唯頭忠官位顯達、立朝最久、人皆以為其畏慎所致。

北條時頼、小名戒寿、称五郎、武藏守泰時之孫、修理亮時氏之子也。寛元四年、兄経時有疾、時頼代為執權、循守泰時式目、内外称治。建長中為相模守、進正五位下、康元元年薨髮、法名道崇、嘗学禪於宋僧道隆、為造建長寺、又造最明寺、於是老於最明寺。以男時宗幼、委其職于北條長時。時頼既解職、恐諸国吏或有挟私害民者、身自毀服、為行脚僧、間行諸国、其所歴之地、察問弁覈、隨其善惡

以行賞罰。由是郡国守宰、人自修飾、風化歸厚、戶口豐安。弘長三年卒、年三十七。臨終、著衲衣、上繩牀、作偈曰、業鏡高懸、三十七年、一槌打破、大道坦然。時頼自奉儉素、食不貳味、一夕燕居、会族父大佛宣時來、時既深夜、時頼手一壺酒曰、独酌不若與卿共之樂也。顧安所得下物、照紙燭、素於度、觀碟有殘醬、取而佐酒、其澹薄如此。〔瓊矛余滴統編〕卷之下)

頭忠、延長承平間歴左右左中弁、叙四位上、任参議。天慶中、進從三位、拜權中納言、兼左衛門督、檢非違使別当。天曆中、陞大納言正三位、兼陸奥出羽按察使、右近衛大将。天徳元年、転左近衛大将、四年叙從二位、拜右大臣、叙從二位、康保二年薨、年六十八。詔贈正二位、称富小路右大臣。公卿補任、大鏡裏書、性尚節儉、第宅器物極朴素、盥漱不用盤、自執杓灌洗、雖為大臣、出無前驅、騶從甚尠。大鏡、古事談、十訓抄、方設大饗、治具簡約、堂廡一無所崇飾。今昔物語、古事談、時平諸子皆壯年而没、世謂道真之靈所崇。頭忠深懼之、每夜拜于庭、祈免難。十訓抄、古事談、兄弟中唯頭忠官位顯達、立朝最久、人皆以為其畏慎所致。大鏡〔大日本史〕卷一

北條時頼、時氏子也、北條系図小名戒寿、称五郎。嘉禎三

年、加首服於祖父泰時第、將軍藤原頼経親為加冠命

名。尋拜左兵衛少尉。東鑑、關東評定傳遷左近衛將監、叙

從五位上。寛元二年、頼経讓職於子頼嗣、四年時

頼代兄経時執權。東鑑、帝王編年記（中略）建長元年、重時転

陸奥守、時頼代為相模守。將軍執權次第、東鑑、帝（中略）康元

元年、時頼嬰病薙髮、法名道崇号覺了、嘗創最明寺

於山内、至是退居養病、以男時宗幼、委其職于武

藏守北條長時、猶參知軍政。東鑑（中略）時頼既解職、

恐諸国吏或有挟私害民者、身自羸服、陽為遊僧、

間行四方、潜察風俗、有人抱冤結者、就問事

状。增鏡、太平記（中略）其餘所歴之地、察問弁覈、隨其善惡、

以行賞罰。由是郡国守宰、人自脩飭、風化歸厚、戶

口豐安。增鏡、太平記弘長三年卒、年三十七。東鑑、關東評定傳時頼深信禪

教、粗通其旨、為宋僧道隆、勅建長寺於鎌倉居

焉。臨終著衲衣、上繩牀、作偈曰、業鏡高懸、三

十七年、一槌打碎、大道坦然。（中略）其在職所施行、一

守貞永式目、遵頼朝父子三代將軍旧制、東鑑士庶歛然

靡服、天下称治矣。增鏡（中略）性儉素、食不貳味、一

夕燕居、会族父宣時来、時頼手拳酒曰、独飲不若

與卿共之樂也。奈深夜無下物何。宣時即起入厨、

照紙燭、索殘醬侑之、終夜对飲、尽飲而止、其澹

薄如此。徒然草（『大日本史』卷二百一・列伝四）

「時頼索醬」の対に、同じ儉約を描いたものとして「顕忠執

杓」を用いた。この二つの話とも、『大日本史』に依拠したこ

ろが多く見られる。傍線で示したように、『瓊矛余滴続編』は前

述した『大日本史』北條時頼の伝記を参考した部分が多く認め

られるが、『大日本史』の文章表現をほぼそのまま標題の注とし

て移した『大日本史蒙求』と比べて、『瓊矛余滴続編』は『大日

本史』の長い伝記を取捨選択し、文章表現も相違する部分が見

られる。なお、『徒然草』から取材する時頼と宣時の逸話につい

て、『瓊矛余滴続編』は『大日本史』の文章表現をほぼそのまま

写している。特に、『徒然草』の本文は前節の『大日本史蒙求』

のところであげたが、『徒然草』の本文中に傍線で示したように、

平宣時は時頼に呼ばれて時頼に会いに行つたのであるが、『瓊矛

余滴続編』は『大日本史』『大日本史蒙求』と同文で、「会族父

宣时来」、つまり宣時がたまたまた来たことになっている。『瓊矛

余滴続編』は『徒然草』より、むしろ『大日本史』『大日本史蒙

求』の本文に近いことがわかる。『大日本史蒙求』の草稿的な性

格と流布が少ない状況を考えると、『瓊矛余滴続編』が依拠したのは『大日本史』と考えたほうが妥当であろう。前述したように、日本の異種『蒙求』は文章を綴る時、当時流行の人物伝記類を参考する傾向が見られる。この部分もその一例である。また、本書は『大日本史』の刊行が当時の文学史に及んだ影響の一例として注意してよいであろう。

五、『日本蒙求続編』について

最後に『徒然草』の内容を取り入れた異種『蒙求』は『日本蒙求続編』である。本書は明治十五年（一八八二）に出版されたものであり、内閣文庫、加賀市立図書館聖藩文庫などに所蔵されている。作者の堤正勝は江戸末期明治期の儒者・幕臣で、字は威卿、号は静斎である。広瀬淡窓、安積良斎等に師事し、江戸で漢学塾を開いて講義をすることもあり、明治十一年（一八七八）に私塾「知新学舎」を開いた。『日本蒙求』のほかに、『農学路志留遍』、『国史要略』、『皇朝史鑑』などの通俗教科書類の著作も残している。岡千仞による『日本蒙求続編』の序文に「近聞縣学病皇朝史籍無完書、吾将梓是書以資童蒙」とあるように、本書は啓蒙的教科書の性格の強い書物である。

『日本蒙求続編』も左の通り、『徒然草』の中の時頼に関する

逸話のみ取り入れている。

時頼淡薄、泰時清廉

北條時頼、時氏子也。称五郎、代兄経時執権。其在職所施行、一守貞永式目、遵鎌倉旧制、士庶翦然靡服、天下称治矣。時頼性儉素、食不重味、嘗夜招族父宣時讌飲。宣時至時頼自挈酒出曰、偶有此物、不可独酌、聊復邀君。爾恨無下物、厨下所有、煩君取之。宣時即起覓之、僅得殘餘豆豉而侷之、終夜相对、酣飲尽、飲而止、其淡薄如此。時頼卒、諸将士無親疎、悲慕慟哭、薙髮者甚衆。下令諸国守護、禁薙髮者。其得士心如此。

北條泰時、義時子也。襲父職執権。為人寛厚温雅、識量過人、在職十八年、政平訟理、衆庶樂業。嘗講究治体、定憲令五十條、謂之貞永式目。泰時清廉自率、無声色娛翫之好、惠愛民物。政子嘗割義時莊園與諸子、命泰時注擬。泰時自取甚薄。政子問之、泰時曰、我不肖忝襲家職、何患不給、唯以撫諸弟為意而已。政子嗟歎。（『日本蒙求続編』卷之上）

北條時頼、時氏子也、北條系図小名戒寿、称五郎。嘉禎三年、加首服於祖父泰時第、將軍藤原頼経親為加冠命

名。東鑑、開東尋拜左兵衛少尉。評定傳、遷左近衛將監、叙

從五位上。東鑑寛元二年、頼経讓職於子頼嗣、四年時

頼代兄経時執權。東鑑、帝王編年記、(中略)後深草上皇遣使弔

喪、諸將士無親疎、悲慕慟哭、薙髮者甚衆。至下

令諸国守護、禁薙髮者。其得士心如此。東鑑其在職

所施行、一守貞永式目、遵頼朝父子三代將軍旧制、

東鑑士庶欽然靡服、天下稱治矣。增鏡(中略)性儉素、食不

貳味、一夕燕居、会族父宣時来、時頼手举酒曰、独

飲不若與卿共之樂也。奈深夜無下物何。宣時即

起入厨、照紙燭、索殘醬侑之、終夜对飲、尽飲

而止、其澹薄如此。徒然草(『大日本史』卷二百一・列伝四)

北條泰時、右京権大夫義時長子也。(中略)及長寛厚

温雅、識量過人。(中略)北條政子將割義時莊園與

諸子、命泰時注擬。泰時多分諸弟、自取甚少。已

而政子問曰、汝何自取甚少也。泰時謝曰、身備執權、

何求之有、唯以撫諸弟為意而已。政子嗟歎久之。東鑑、

太平記、(中略)泰時在職既久、講習治体、聽決平允、與

玄藩允三善康連議定憲令五十條、謂之貞永式目。(中

略)在職十八年、政平訟理、衆庶樂業。(中略)以清

廉自處、無声色娛翫之好。(後略)(『大日本史』卷二

百・列伝四)

傍線で示したように、時頼と対の泰時の伝記の部分は『大日

本史』をもとに書かれたことが確認できるが、かなりの加筆が

行われた。特に、『徒然草』第二百十五段に見られる時頼の逸話

の部分は『大日本史』の本文とはかなりの相違が見られる。前

述した『瓊予余滴続編』は『大日本史』の誤訳を継承し、「或宵

の間に呼ばるゝ事ありしに」という平宣時が時頼に呼ばれたこ

とを「会族父宣時来」、つまり、宣時は偶然来たことと訳して

いる。『日本蒙求続編』は本文中波線で示したように、「嘗夜招

族父宣時謙飲」、つまり、時頼が宣時を招いたこととなってお

り、むしろ『徒然草』の原文に近い形である。

後期の異種『蒙求』は『大日本史』の影響を強く受ける『大

日本史蒙求』と『瓊予余滴続編』を経て、最後に『徒然草』の

逸話が見られる『日本蒙求続編』になると、再び『大日本史』

の影響から脱出し、独自性を有する訳文の試みが見られるよう

になった。なお、『徒然草』の中から取り上げた内容はやはり教

訓性の強い松下禅尼と北條時頼の儉約の逸話だけに限定されて

いく。川平敏文氏は十七世紀を『徒然草』の世紀とし、当時の

時代思潮の影響下で、十七世紀とそれ以降の『徒然草』への理

解は「静」と「動」、「情」と「理」の相違が見られると述べた⁶⁰。氏によると、『徒然草』の注釈書は享保三年（一七一九）刊行の増穂残口の『つれづれ東雲』までほぼ終わっているが、『徒然草』の注釈書と当時の学者の『徒然草』に対する認識が異種『蒙求』を含む当時の様々な学問の分野に影響を与える時間差を考えると、天保元年（一八三〇）自序で安政五年（一八五八）刊行の『皇朝蒙求』あたりを境とする前期と後期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の逸話の数量と内容の差異は、こういう当時の学者が『徒然草』に対する理解の相違の波紋が、近世期『徒然草』の受容のひとつでもある漢訳に及ぼした影響ではないかと考えられる。

先行研究によると、異種『蒙求』の出版数をもっとも多いのは明治十年代である⁶¹。その中には『箋注桑華蒙求』のように、江戸時代に出版されたものの再版も多く含まれているが、本章の第四節で『瓊矛余滴続編』の作者の橋本寧の逸話として紹介した『寧斎詩話』に見られる話のように、明治期に野口寧斎のような文人の間に異種『蒙求』が読まれたことが確認できる。また、この『寧斎詩話』と同じ明治三十八年（一九〇五）に出版した夏目漱石の『吾輩は猫である』に、「『老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求に是非入れたいよ』と迷亭君例の如く

長たらしい注釈をつける」とあり、漱石は架空の異種『蒙求』である『新撰蒙求』をあげている⁶²。このように、随筆や小説に取り上げられる程、明治期に異種『蒙求』が盛んに読まれていた。『徒然草』が異種『蒙求』に多く見られるのは前期の異種『蒙求』であり、明治期に作られた後期の異種『蒙求』には『徒然草』から教訓性の強い松下禅尼と時頼の逸話しか取り上げられなくなつたのである。その原因として、前述した『徒然草』に対する認識の変化のほか、明治時代の国民教化の教育方針と、漢文教育の大衆化などが考えられるが、詳しい考察は今後の課題とさせて頂きたい。

七、まとめ

このように、『徒然草』から取材した日本の異種『蒙求』を前期と後期に分けて十一種を見てきた。本章は幕末の『大和蒙求』からの後期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳を考察した。『大和蒙求』は七言絶句という特別な体裁を用いており、漢訳の観点から考えるとほかの異種『蒙求』とは性格が異なるが、その前の『皇朝蒙求』が『徒然草』から十話も取り入れたのに対して、『大和蒙求』からの異種『蒙求』は『徒然草』から一話二話しか取らなくなった。本書は松下禅尼と北条時頼の儉約

を讃える教訓性の強い話しか取らなくなった後期の異種『蒙求』の発端でもある。『大日本史蒙求』は『大日本史』をもとに書かれた草稿的な性格を持つ書物であるが、標題に重心を置いたと思われる本書は異種『蒙求』が漢文基礎教育に役立つ書物としての性格を物語っている。『瓊予余滴続編』も『大日本史』からの影響が目立つが、その後の『日本蒙求続編』は『大日本史』を参考しながらも、独自性を有する訳文を目指す試みが見られる。

前章において、これら異種『蒙求』が和文脈の『徒然草』を漢文脈の『蒙求』に取り入れる時に用いた漢訳の方法として、主に四つの特徴をまとめたが、本章で取り扱う後期の異種『蒙求』は主に原典からではなく、類書、史書、或は当代流行の人物伝記類などの書物から引用する特徴が見られる。これもこういう啓蒙用の書物に多用の方法であるが、前期の異種『蒙求』は主に『大東世語』を参考したのに対して、『大日本史蒙求』『瓊予余滴続編』と『日本蒙求続編』などの後期の異種『蒙求』は『大日本史』の影響を大いに受けた。

これら日本の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の逸話は全部で十五話あるが、前章で取り扱った前期の異種『蒙求』には十五話すべて出現したのに対して、本章で考察した後期の異種

『蒙求』は二話しか見られない。つまり、前期の異種『蒙求』は『徒然草』から人物・動物に関する様々な逸話を取り入れ、いわゆる趣味性・奇譚性が見られるが、後期の異種『蒙求』は『徒然草』から教訓性の強い話を求めた。

近世期において、『徒然草』の注釈書が多数作られたが、本文で取り扱った日本の異種『蒙求』も近世期における『徒然草』受容のもう一つの様態である。このような当時知識人の学問の基礎になる書物に取り入れられたことは、近世期に、『徒然草』が古典として成り立ち、その中の説話が既に人口に膾炙するようなものになっていることを物語っている。近世期の『徒然草』の受容と影響は、注釈書だけではなく、さまざまなジャンルに影響を及ぼしていることがわかる。当然のことではあるが、これらの異種『蒙求』の内容の取捨選択は当時の時代思潮に影響される。『徒然草』の注釈書は享保三年（一七一九）刊行の増穂残口の『つれづれ東雲』あたりまで盛んに作られていたが、その後は簡単な傍注を付けた『徒然草』本文の刊行は行われるものの、学術的な注釈書はほとんど見られなくなった。つまり、「徒然草享受の質自体がこの時期辺りを境にして変容した」という川平敏文氏の論述がある。異種『蒙求』の前期と後期で『徒然草』から取材し漢訳する説話の数と内容に質的な変遷が見られ

る背景には、このように江戸時代において『徒然草』自身の受容に変化が生じたことがあると考えられる。

テキスト（表記と訓点は原文に従うが、適宜私に改めた所がある。）

○『大和蒙求』 『日柳燕石の研究（その一）』明石印刷株式会社 一九六七年

○『大日本史蒙求』 明治三年写 国文学研究資料館蔵茨城県立歴史館蔵本のマイクロフィルム

○『瓊矛余滴』 明治十年刊 国文学研究資料館蔵加賀市立図書館蔵本のマイクロフィルム

○『瓊矛余滴続編』 明治十年刊 国文学研究資料館蔵加賀市立図書館蔵本のマイクロフィルム

○『日本蒙求続編』 明治十五年刊 国文学研究資料館蔵実践女子大図書館山岸文庫蔵本のマイクロフィルム

○『大東世語』 寛延三年刊 国文学研究資料館蔵公開画像

○『大日本史』大日本雄弁会 一九二八年

- * 1 相原言三郎「大和蒙求」『日柳燕石研究（その一）』明石印刷株式会社 一九六七年
- * 2 『国書人名辞典』岩波書店 一九九八年
- * 3 板倉環「橋本蓉塘年譜稿」『江戸風雅』四号 二〇一一年
- * 4 野口寧斎『寧斎詩話』博文館 一九〇五年
- * 5 『日本人名大辞典』講談社 二〇〇一年
- * 6 川平敏文「「つれづれ」の季節―十七世紀の時代思潮」『徒然草の十七世紀―近世文芸思潮の形成』岩波書店 二〇一五年
- * 7 相田満「幕末・明治期の「蒙求」」『国際日本文学研究集會會議録第一八回』国文学研究資料館 一九九五年十月
- * 8 相田満「夏目漱石と『蒙求』」第三十三回和漢比較文学会大会発表資料 二〇一四年九月
- * 9 川平敏文「舌耕徒然草―『諸抄大成』以降諸注釈の展開―」『雅俗』二号 一九九五年一月

第三章 漢訳される『徒然草』の方法―近世期兼好伝との関わり―

一、はじめに

本論文第二部の第一章と第二章において、安政五年（一八五八）初版刊行の『皇朝蒙求』あたりを境として前期と後期に分けて異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢訳を考察し、その漢訳の方法の特徴と、前期と後期の相違の背景を考えた。本章は、これら異種『蒙求』の中に漢訳され、取り入れられた『徒然草』の作者兼好法師の伝記と関連する逸話を取り上げる。川平敏文『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』（平凡社 二〇〇六）などの先行研究において指摘された近世期に作られた兼好法師の伝記と『徒然草』の注釈・評釈資料に見られる兼好の人物像が定着する背景と関わらせながら、このような兼好の人物像が異種『蒙求』の人物の対偶の組み合わせに影響を与えたことを考察する。

第一章と第二章において分析した日本の異種『蒙求』の中に、『徒然草』本文の内容から取材したものが十一種見られるが、本章において取り扱う兼好法師の伝記と関連する異種『蒙求』は五種確認できる。

『徒然草』は今、人口に膾炙する書物であるが、その作者兼

好法師の伝記については意外に解明されていない所が多い。しかし近世期には、『崑玉集』『吉野拾遺』『園太暦』の偽文など、不明な作者によって作られた兼好の偽伝のもと、『種生伝』や『兼好諸国物語』『奈良比野岡』といった兼好法師の伝記がたくさん作られた。それらの多くが偽伝であることは既に今の研究によって明らかにされたことである。しかし、当時にはこれらの伝記はそのまま信用され、今とはかなり違う、当時の兼好像の形成に大きな影響を与えた。詳しい考察は川平敏文氏や島内裕子氏の研究¹を参考して頂きたいが、簡単にまとめてみると、『徒然草』が広く読まれるようになった江戸時代に、凡そ三系統の兼好像が流行していた。つまり、『兼好法師集』や『正徹物語』、『吉野拾遺』および近世の一連の隠遁伝に見られる世を逃れた隠遁者という人物像と、『太平記』の「艶書代筆事件」を嚆矢とする「好色法師」という人物像、そして「儒学的憤世矯俗の志」を持ち、南朝と深い関わりがある人物像である。今の我々が熟知する『徒然草』の作者としての兼好のイメージとはズレがある、これらの兼好像は、異種『蒙求』に見られる兼好に関する記述に大いに影響を与えた。

二、『本朝蒙求』に見られる兼好伝

『本朝蒙求』とその作者については第一章にて詳しく紹介したので、そちらをご参考いただきたいが、本書は上中下三巻からなり、延宝七年（一六七九）の自序と貞享三年（一六八六）の刊記を有している。

本書には、兼好のと対の人物として鴨長明をあげている。二人の伝記の内容は、『尊卑分脈』の「卜部系図」、「鴨氏系図」、「本朝遯史」、「扶桑隱逸伝」、「十訓抄」、「方丈記」などに見られるが、いずれも表現の異同が大きく、直接の典故と認められるような先行する漢文作品は見当たらない。第一章においても述べたように、本書は『徒然草』の本文から取材した最初の異種『蒙求』でもあり、その訳文の文章表現はほかの漢文作品に抛らず、独自性を有するものが多いである。

兼好徒然、長明方丈

兼好者、鎌子之苗裔。以ニ卜部ニ為ニ其姓ニ。父兼頭世為ニ吉田神官ニ。兼好嘗官ニ仕于後宇多帝ニ、官至ニ左武衛次將ニ。迨ニ後宇多帝之崩ニ而離レ家逃レ世為ニ隱逸之徒ニ。所レ著書自扁曰ニ徒然中ニ。

鴨社氏菊大夫長明者、家世祠官。好吟ニ倭歌ニ、膾ニ炙世

口ニ。常與ニ縉紳家ニ交按。所ニ著述ニ書編亦不レ少。願レ為ニ社中之総管司ニ而不レ被レ許。一旦謝レ榮遺レ世、終レ身無ニ妻子官祿之累ニ。性耽ニ淡閑ニ、平素静居。卜ニ幽於大原山ニ、隱栖幾ニ許于茲ニ。順德帝建曆中、齡及ニ耳順ニ、誅ニ茅於洛南日野之外山ニ。以結ニ小菴一間ニ、然亦不レ定ニ其居ニ。恒以ニ三車ニ輶ニ、載ニ其竹木ニ、隨ニ心所ニ之構ニ結之ニ以爲レ居。其広方丈、高不レ過ニ七尺ニ。不レ定ニ其所ニレ居。若其地有ニ不レ称レ意者ニ、則移去而之レ他。因自作ニ倭字之記ニ、曰ニ方丈記ニ也。（『本朝蒙求』卷之上）

注意したいのは、ここで、兼好の対になる人物として、同じ『本朝遯史』『扶桑隱逸伝』などの隱逸伝記に見られる長明があげられたことである。『本朝蒙求』の凡例では、標題の対を作る時に、「皆随ニ事相似ニ也」とあることからわかるように、ここでは、兼好の隱者としてのイメージが対を作る時のヒントになっている。『本朝蒙求』は日本の異種『蒙求』の中に編纂の早いものであり、『徒然草』本文の内容を取り入れた最初の異種『蒙求』でもある。参考できる同じジャンルの先行作品が少ないこともあり、その文章表現は独自性を有していることは当然なことでもあるが、作者の工夫と漢文教養の一斑がのぞける。

また、『本朝蒙求』では、兼好の略伝が記されているが、この

簡潔な略伝は主に『正徹物語』と『尊卑分脈』「卜部系図」などに見られる一番基本的な情報が記されただけである。『尊卑分脈』「卜部系図」では、兼好のところに「左兵衛佐以俗名爲法名」とあり、父親は兼頭とされている。それから、江戸時代以前に、兼好法師の伝記について記した資料の中、一番古いものに『正徹物語』がある。正徹（一三八一〜一四五九）は今現在確認できる『徒然草』最古の写本を残した人物で、室町時代中期の歌僧である。「兼好は、俗にての名なり。久我か徳大寺かの諸大夫にてありしなり。官が滝口にてありければ、内裏の宿直に参りて、常に玉体を押し奉りけり。後宇多院崩御なりしによりて、遁世しけるなり。やさしき発心の因縁なり。随分の歌仙にて、頓阿・慶運・浄弁・兼好とて、そのころ四天王にてありしなり。つれづれ草のおもふりは、清少納言が『枕草子』の様なり」と、兼好の在俗時代の経歴と出家の原因について言及している。後宇多院の崩御は正中元年（一三二四）であるが、昭和十九年に岩橋小弥太氏『史料採訪』によって紹介された『大徳寺文書』に正和二年（一一三三）九月一日付の兼好宛六条有忠書状に「兼好御房」とあることから、兼好の出家は後宇多院の崩御とは無関係のことであるというのは、学界の定説になっている。なお、『本朝蒙求』が編纂された近世前期は、『園太暦』偽文など、兼

好伝記の偽伝が世に流布しはじめた時代である。たとえば、同じ延宝七年（一六七九）に俳諧師菊岡如幻が著した伊賀の地誌『伊水温故』に「兼好塚」に関する記述として、「園太暦十八日、兼好法師、父卜部兼頭、始之名者左兵衛兼行、又改兼好。後、為後宇多院之北面。多病而好レ仏故、不レ継レ家。剃髮以後、以兼好^一為^二法名^三。住^三吉田山^二、好^三尋^二所々名跡^一。伊賀守橋成忠、與^二兼好^一交好。依^三成忠招^二、趣^三伊賀国^一、結^二庵国見山麓田井庄^一。成忠娘十七八歳、通^二兼好^一数年也」と『園太暦』の書名をあげ、兼好の略伝の後に伊賀守橋成忠の娘に恋をする「好色法師」兼好の逸話を記している²⁾。『本朝蒙求』に見られる兼好の伝記はこのような時代に作られたものであるが、『園太暦』偽文などによって新たに膨らまれた兼好の伝記における好色法師のイメージも、諸国を遊歴する隱者のイメージも見られない。あくまでも『徒然草』の作者の伝記として、『正徹物語』や『尊卑分脈』の「卜部系図」など当時には確実に信頼される資料によって簡潔に記されている。ただし、近来この『尊卑分脈』の「卜部系図」に見られる兼好に関する記述も小川剛生氏の論考³⁾によって疑問視されるようになった。

三、『扶桑蒙求』に見られる兼好伝

次に兼好伝記関連の話が見られるのは、文政元年（一八一八）の序と天保十四年（一八四三）の刊記を有する『扶桑蒙求』である。作者の根岸鳳質（一七五八〜一八三一）は歌人で、文化・文政時代に活躍した青梅文芸の中心人物であり、漢詩集、和歌集など数多くの作品を残している⁴。『扶桑蒙求』は先行の異種『蒙求』である『桑華蒙求』の影響が目立ち、大部分がその抜書きではないかと思われる程である⁵という指摘もあるが、第一章で考察したように、『徒然草』の本文内容と関連する話を見る限りでは、『大東世語』の影響もかなり大きい。なお、本章で取り扱う兼好伝記関連の話は、『本朝遯史』からの引用が確認できる。

本書は藤原隆国を兼好の対になる人物としてあげている。隆国も隠者として知られた人物で、林読耕斎の『本朝遯史』（万治三年（一六六〇）自序、寛文四年（一六六四）刊）等の隠者伝にその伝記が見られる。

隆国辞退、兼好歴遊

藤原隆国者、大納言顕基之弟也。長暦元年叙^二從^二二位^一、長久四年任^三權中納言^一、康平四年春辞退。朝参之暇、屢^レ赴^三宇治別業^一、構^三茶店^一、呼^レ聚往還之過客^一、使^レ啜^二甌之茗^一、而談^二和漢之故事^一、既而輯成^二草子^一。後冷泉

帝之時最蒙^二眷遇^一。

吉田兼好者、兼顕之子、後宇多院北面之臣也。任^三左兵衛佐^一。帝崩後出塵嘉遯。有^二文才^一、善^二和歌^一、遊^三高師直之家^一、亦歴^三遊諸国^一、暇日著^三徒然草^一、其憤^三世俗^一、觀^二生死^一、感^二時序^一、摸^二風景^一、說^二人情^一、抒^二私見^一、固是倭文之尤者也。（『扶桑蒙求』卷之上）

隆国

其弟隆国初名^レ宗国、叙爵任^三侍從^一之後、寛仁二年、改名^二隆国^一。歴任。而長元七年七月任^三参議^一、叙^二從三位^一。長暦元年十一月、叙^二從二位^一。長久四年九月、任^三權中納言^一。康平四年二月辞退。治暦三年二月、更任^三權大納言^一。朝参之暇、屢^レ赴^三宇治別業^一、構^レ茶店、呼^レ聚往還之過客^一、使^レ啜^二甌之茗^一、而談^二倭唐之一故事^一、既而輯成^二草子^一、所謂宇治大納言物語是也。（中略）後冷泉帝之時隆国最蒙^二眷遇^一。（後略）（『本朝遯史』卷之下）

吉田兼好

兼好者、兼顕之子、後宇多院北面之臣也。任^三左兵衛佐^一。帝崩之後出^レ塵嘉遯。有^二文才^一、善^二倭歌^一、当時與頓阿浄弁慶運其名相比、世称^二之倭歌四天王^一也。往往遊^二武

藏守高師直之家、又歴遊他国、曾過木曾路、有詠歌且暇日作倭語草子、号徒然草、其憤世俗、觀生死、感時序、摸風景、説人情、抒私見、固是倭文之尤者也。(『本朝遼史』卷之下)

右に傍線で示したのは、『扶桑蒙求』と『本朝遼史』に見られる隆国と兼好の伝記の表現が一致する部分である。『扶桑蒙求』のこの部分のほとんどが『本朝遼史』からの引用であることが確認できる。この部分もやはり、隠者である兼好の人物像が対の発想のヒントになっている。

ここで注意したいのは、『本朝遼史』と『扶桑蒙求』の文章は、兼好が高師直の家に出入りしていたことに言及しているが、『太平記』に描かれた有名な艶書代筆事件、つまり、兼好は師直のために、塩冶高貞の妻への艶書を代筆したが、断られて、師直邸への出入りを禁じられた、という逸話には一筆も触れていなかった。なお、『本朝遼史』は本文の後の賛に、「信一生之過錯也、可慨惜焉」と、この事件は兼好一生の誤りであると慨嘆しているが、『扶桑蒙求』は全くこの事件に言及していない。また、『徒然草』の文章を「其憤世俗、觀生死、感時序、摸風景、説人情、抒私見、固是倭文之尤者也」として描いた『本朝遼史』は、明らかに『野槌』巻頭の文章「世俗をい

きとほり、生死無常を觀じ、時序を感じ、風景をうつし、男女の情をいひて、己がこころざしをのべたり、まことに和語の文章にをいて、殊にすぐれたる者也」を漢文に訳したものである。

『野槌』において、林羅山は兼好が「世俗をいきとほり」、「己がこころざしをのべ」るために『徒然草』を記したと述べている。前述した川平敏文氏の論考は、羅山のこの捉え方を「兼好発憤説」の発端として位置づけられている。兼好の伝記を記した時、『本朝遼史』もこの捉え方を踏襲しており、さらに、異種『蒙求』である『扶桑蒙求』は『本朝遼史』から引用する時、その表現を改めたところが見られるが、この林家の兼好の人物像についての捉え方を受け継いでいる。

四、『皇朝蒙求』に見られる兼好伝

『皇朝蒙求』は天保元年(一八三〇)の自序を有しており、安政五年(一八五八)直温が六十三歳の時に、初版が出版されていたが、途中に直温が失明してしまい、本の校正もまだ弱冠になっっていない息子が側で読んで、直温が添削を指示する形ではかできない状態であったので、刊行したのは上巻のみであった。これはすなわち宮内庁書陵部と上田市立図書館花月文庫等に蔵せられている一巻本である。本書の完本の出版は直温が亡

くなった後の明治十四年（一八八一）になる。

本書に見られる兼好伝に関する話に、その対になる人物として、『古今集』六歌仙の一人である大伴黒主をあげている。

黒主攙筆、兼好艶簡

大伴黒主者、為三円城寺之地主^一、号三志賀黒主^二。善^三和歌^一。紀貫之曰、黒主之歌、古猿丸大夫之亞也。頗有^二逸興^一、而体甚鄙、如^三田夫息^二花前^一也。世伝延喜之間大内鬪歌、朝議以^三黒主^一與^二小野小町^一相偶。黒主恐^二其難^一敵、夜竊入^二其室^一、側^二耳壁後^一。小町灯下沈思、詠^二其賜題^一。既而得^レ之、高吟者数四。黒主帰而攙^二筆之於其所^レ蔵之萬葉集中^一。明日與^二小町^一坐^三于帝前^一、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等侍焉。帝使^下貫之^一先誦^中小町歌^上。其歌曰、云々。一吟驚^レ坐、衆皆避易。黒主独有^二不屈之色^一、進而上奏曰、是萬葉古歌耳。小町色変、謂曰萬葉七千首、妾略誦^レ之、未^レ有^二如^レ此之歌^一、君何誣之甚也。黒主奔^二三人於家^一、取^二萬葉集^一。其歌具在焉。小町洗^二其書於銀盤^一、墨痕撒去、不^レ留^二微点^一。黒主愧欲^二自殺^一、帝使^下左右^一止^上之。且慰^レ之曰、争^二勝負^一者、志^三於歌道^一厚之所^レ致耳、不^レ足^二深咎^一。於是使^下小町^一立舞、黒主坐歌^上、置酒入^レ夜、極^レ飲而罷。

卜部兼好、兼頭子也。居^二吉田^一焉。幼而聡悟、好読^二老荘^一。有^二三文才^一、善^二和歌^一、兼工^レ書。仕^二後宇多帝^一、任^二左衛門尉^一。嘗為^二高師直^一、代作^二艶簡^一、挑^二冶高貞妻^一。妻不^レ聴、師直怒謂^二左右^一曰、翰墨不^レ足^レ用、勿^レ使^下此曹^一往^中還吾門^上。識者以^レ此頗少焉。兼好嘗曰、昔日雪朝、貽^二書友人^一、艸卒不^レ及^二雪状^一。其人答書曰、不^レ問^二此雪如何^一、子非^二吾友^一。其人已逝、猶不^レ可^レ忘。所^レ著有^二徒然艸^一、盛行^二于世^一。（『皇朝蒙求』卷之下）

兼好卜部兼頭子左兵衛曰、昔日雪朝、属^レ有^レ託^レ事、貽^二書友人^一、草卒不^レ及^二雪状^一。其人答書曰、不^レ問^二此雪如何^一、子非^二吾友^一。其人已逝、於^レ今不^レ可^レ忘。（『大東世語』卷之四・傷逝）

黒主の話については、傍線部は『古今集』真名序に見られ、前述した『本朝蒙求』や『本朝遼史』にも受け継がれたものである。後半の黒主と小町の逸話は謡曲「草子洗小町」を典拠するが、この話を漢文に訳した作品はほかに見当たらないので、おそらく『皇朝蒙求』が最初であろう。

兼好の話は、前述した、『太平記』に見られる高師直の代筆で艶書を記した逸話と、『徒然草』第三十一段に見られる、雪の朝、

友人に送った手紙に雪のことに触れていなかったため、その友人に責められた説話を組み合わせたものである。『太平記』に見られるこの艶書代筆の話は近世期兼好の伝記として定着したものであるが、本書のこの部分と一致する表現を有する漢文作品は見当たらない。なお、傍線部の『徒然草』本文の逸話に関する部分は、服部南郭の『大東世語』（寛延三年（一七五〇）刊）をほぼそのまま引用している。『皇朝蒙求』のほかの話を見ても、他の書物に見られない表現が目立ち、独自性を有する作品である。ここも、『徒然草』本文内容と関連する部分は『大東世語』からの引用であるが、前半の兼好伝記の部分は、同じ表現を有する先行作品が見当たらず、近世期に流行していた兼好伝関連の書物をもとに、作者の直温が漢訳したものであろう。また、先行する異種『蒙求』に見られなかった『徒然草』第三十一段の雪の朝の話を取り上げ、艶書代筆の事件も取り入れ、さらに、この艶書事件を標題に出し、『本朝蒙求』における『徒然草』の作者としての兼好や、『扶桑蒙求』における「遊歴」する隠者の兼好、さらに後述する『瓊矛余滴』における「読書」する兼好など、ほかの異種『蒙求』と違う兼好のイメージを彷彿させる意匠が読み取れる。

五、『瓊矛余滴』に見られる兼好伝

『瓊矛余滴』は明治十年（一八七七）に刊行されたものである。本書の作者は明治十年代を代表する漢詩文作者の橋本寧である。『瓊矛余滴』とその続編のほかにも、『蓉塘詩鈔』などの詩集があり、雑誌『新文詩』、『花月新誌』で活躍した人物である。名は寧で、字は静甫、号は蓉塘である。書名の「瓊矛」は玉で飾った矛の意味で、伊弉諾・伊弉冉が国産みに用いた「天之瓊矛」のことを指していると思われる。野口寧齋の『寧齋詩話』に、偶然蓉塘と対面したが、その時にはわからず、後になってそれがあの『瓊矛余滴』の作者の橋本寧だったことを知り、「悔ても及ばず」という逸話が見られ、『瓊矛余滴』が当時に高く評価されていることがわかる⁷⁷。

本書も『本朝遯史』、『扶桑隱逸伝』等の隠逸伝に取り上げられた肖柏を兼好の対の人物としてあげている。

肖柏習字、兼好読書

源肖柏号ニ夢庵一、以三性愛ニ牡丹一、又号ニ牡丹花老人一、太政大臣具通之後也。幼穎敏、善三連歌一、甫八歳、憑レ几習レ字、或自ニ背後ニ戯レ之曰、母乃袁毛以波傳、毛能那良布比登、肖柏即把レ筆書曰、久知南志能、波奈能以呂波也、宇都寸羅卒。其人感嘆而去。年既長、師ニ事僧宗

祇^一、名声益著、常愛^二酒香花三物^一、著^三愛記^一、後柏原帝聞^二其名^一、召^二見便殿^一、詠^三發句并連歌^一、時人榮焉。其在^二京師^一、家畜^二青牛^一、每^二出遊^一、塗^三金于角^一、騎而行、遇者群集嗤笑、肖柏亦笑。大永七年死^二于和泉堺浦^一、年八十五。初俳歌人以^二牡丹^一附^二晚春題^一、至^二肖柏^一有^二波留差加奴、伴南迺許許路也、布加美俱左之句^一、遂附^二之首夏^一。永正中、禁中御会、肖柏詠^二二十五夜月^一曰、曾良仁於伎氏、美牟與邪以久豫、阿幾能都幾。遭^二二年大旱^一、祈^レ雨曰、楚良仁志類也、安免乎能蘇美酒、阿幾能久母、世傳^二誦之^一。

卜部兼好、神祇大副兼茂曾孫也。居^二吉田^一、幼而聰悟、有^二文才^一、善^二和歌^一、兼工^レ書、仕^二後宇田帝^一、任^二左兵衛尉^一、帝崩、剔^レ髮入^二修學院^一、後遊^二木曾^一、愛^二其山水^一、結^レ廬居焉。一日国守帥^レ衆獵^二其地^一、兼好厭^二其喧擾^一、賦^二和歌^一曰、古古毛麻多、宇伎與奈利計利、與曾奈賀良、於毛此志麻麻能、邪麻奢刀毛我那。乃還^二郷里^一、歌詠自娛。常自謂曰、灯下読^レ書、尚^二友古人^一、樂莫^レ過^レ焉。当時公卿大夫、皆愛^二其為^一人、與^レ之遊者甚多。兼好嘗為^二高師直^一作^レ書、挑^二冶高貞妻^一、頗為^二清議所^一鄙。〔瓊矛余滴〕卷之下)

卜部兼好、神祇大副兼茂曾孫也。居^二吉田^一、卜部兼好幼而聰悟、好読^二老莊之書^一、有^二文才^一、善^二和歌^一、兼工^レ書、仕^二後宇田帝^一、任^二左兵衛尉^一、稍被^二親昵^一、帝崩、兼好剔^レ髮入^二修學院^一、參取卜部系因、正後遊^二木曾^一、愛^二其山水^一、結^レ廬居焉。一日国守帥^レ衆獵^二其地^一、兼好厭^二其喧擾^一、賦^二和歌^一曰、古古毛麻多、宇伎與奈利計利、與曾奈賀良、於毛此志麻麻能、邪麻奢刀毛我那。乃還^二郷里^一、歌詠自娛、吉野拾遺常自謂曰、灯下読^レ書、尚^二友古人^一、樂莫^レ過^レ焉。徒然草当時公卿大夫、皆愛^二其為^一人、與^レ之遊者甚多。正徹物語兼好嘗為^二高師直^一作^レ書、挑^二冶高貞妻^一、妻不^レ從、師直怒而絶^レ之。論者以^レ此少^レ之。太平記〔大日本史〕卷二百二十一・列伝五)

肖柏の部分については、その出典となる漢文作品は見当たらないが、兼好の部分については、前述した『皇朝蒙求』や、『大日本史』卷二百二十一・列伝五「卜部兼好」の部分によるところが大きい。傍線で示したように、文章表現は少しの異同が見られるが、和歌を表示する真字も一致するなど、『大日本史』が出典であることが確認できる。

兼好が木曾の山水を愛し、その地に庵を構えて住んでいたが、国守が狩りに来る騒がしさに厭い、和歌を詠んでその地を去ったという説話は、『吉野拾遺』に見られる。

おなじ頃、兼好法師が玉津島に詣でたまへるとて、たづねおはせしに、いにしへ深くしり中なりければ、いとうれしくて、むかし今のものがたりしけるに、(中略)

我一とせ木曾の御さかのあたりにさすらひ侍りし時、山のたたずまひ、川のきよきながれに、こころとまり侍りしかば、ここにぞおもひとどまりぬべき所にこそ侍れ、とて、

思ひたつ木曾のあさぎぬあ浅くのみ染めてやむべき袖の色かは

と詠じて、庵を引結びて、しばし候ひしに、国のかみの鷹狩に、人あまた具し給うて、山ふかき庵のほとりまでいまして、かりし給ふさまの、浅ましく堪へがたかりければ、

ここもまたうき世なりけりよそながら思ひしままの

山里もがな

とながめ捨てて出で侍りき。それよりいづかたへこころとむべくもあらずと思ひとりて、ふるさとに立帰りて侍

れば、世の中のみだれけるほどに、和歌をともしひとして、心をすまし侍らんよりほかはあらじと、おもひ侍るにこそ。(『吉野拾遺』巻下)

兼好が木曾の山水を愛し、その地に庵を構えて住んでいたが、国守が狩りに来る騒がしさに厭い、和歌を詠んでその地を去ったという説話は、『吉野拾遺』に見られる。『吉野拾遺』は南朝の君臣の逸話を集めたもので、その奥書によれば、南朝の遺臣松翁の著書で、室町初期の成立という。その収録の話は虚構性が強く、現在は説話集として位置付けられているが、近世期には史書として扱われたこともある。兼好が木曾に隠居したという逸話は、まさに『大日本史』編纂の史料として用いられ、さらに異種『蒙求』である『瓊矛余滴』にも取り入れられた。高師直の艶書代筆事件に関して、『大日本史』は『皇朝蒙求』と同じ表現になっているが、『瓊矛余滴』は高貞の妻が艶書の受け取りを断り、師直が怒って兼好の出入りを禁じたという事件の結末を省略し、「論者以^レ此^レ少^レ之」という評語を「頗^レ為^二清議所^一」に改めている。『大日本史』は『尊卑分脈』「卜部系図」や『正徹物語』によって出自や出家など兼好伝の基本情報を記し、『徒然草』の内容から兼好の学問について触れ、そして『太平記』『吉野拾遺』によって兼好の遁世と遊歴および艶書代筆事件

などの逸話を記した。まさに兼好伝の集大成とも言える資料であるが、注意されるのは、これら人物伝記類の資料に、前述した『園太暦』を嚆矢とする成忠の娘との恋愛譚や、伊賀に庵を結び、最後にこの地に亡くなったといった偽伝類の言及は見られない。

六、『日本蒙求続編』に見られる兼好伝

最後の『日本蒙求続編』二巻は明治十五年（一八八二）に出版されたものである。その前年の明治十四年（一八八一）に『日本蒙求』二巻が刊行されていた。刊本は内閣文庫、加賀市立図書館聖藩文庫などに所蔵されている。作者の堤正勝は江戸末期明治期の儒者・幕臣で、字は威卿、号は静斎である。広瀬淡窓、安積良斎等に師事し、江戸で漢学塾を開いて講義をすることもあり、明治十一年（一八七八）に私塾「知新学舎」を開いた。『日本蒙求』のほかに、『農学路志留遍』、『国史要略』、『皇朝史鑑』などの通俗教科書類の著作も残している。

ここでは、兼好の対になる人物として、『太平記』『吉野拾遺』などに見られる南朝の忠臣である藤原藤房をあげている。

藤房忠言、兼好尚友

藤原藤房、宣房長子。事_二後醍醐帝_一、出雲守護塩冶高

貞、獻_二千里馬_一、骨相異常、帝大悦、呼為_二天馬_一、群臣称_レ賀。藤房上言、其略曰、臣聞周穆王愛_二八駿_一而政衰、漢文卻_二千里馬_一而国昌。二者取捨之跡、治乱之效、可_二以見_一矣。天馬之出_二於聖朝_一、臣愚竊謂由_三時多_二秕政_一、天将_下生_二尤物_一以蕩_中其心上也。何則当今之政、不_二啻賞罰失_レ当、将_三俾綸旨有_二翻覆之譏_一。陛下之政如_レ斯、而此馬適至、是殆胎_レ禍階_レ乱、恐非_二祥瑞_一。設有_二不逞之徒_一、乘_二朝綱之弛_一、作_二乱輦轂之下_一、則此馬適足_三以為_二告_レ急之資_一也。帝大不_レ悦而罷後屢上言、不_レ聽、藤房遂遁去。及_二足利尊氏反_一敕遣_下人乘_二天馬_一、召_中新田義貞於尾張_下、途斃。果如_二藤房之言_一。

卜部兼好、幼而聡悟、好読_二老荘之書_一、有_二文才_一、善_二和歌_一、兼工_レ書。居_二吉田_一、後遊_二木曾_一、愛_二其山水_一、結_レ廬居焉。一日国守帥_レ衆獵_二其地_一、兼好厭_二其喧擾_一、賦_二和歌曰_一、古古毛麻多、宇伎與奈利計利、與曾奈賀良、於毛此志麻麻能、邪麻奢刀毛我那。乃還_二郷里_一、歌詠自娛、常自謂曰、灯下読_レ書、尚_二友古人_一、樂莫_レ過_レ焉。當時公卿大夫、皆愛_二其為_レ人、與_レ之遊者甚多。兼好嘗為_二高師直_一作_レ書、挑_二治高貞妻_一、妻不_レ從、師直怒而絶_レ之。論者以_レ此少_レ之。（『日本蒙求続編』卷之上）

藤原藤房、初名惟房、権大納言宣房之長子尊卑分脈。事_二後醍醐帝、任_二左大辨（中略）。出雲守護塩冶高貞、獻_二千里馬、骨相異常、且出_二本州、暮到_二京師。帝大悦、養于左馬寮、呼為_二天馬、一日幸_二馬場殿、（中略）群臣称_レ賀。藤房後至、帝又問_レ之、對曰、臣聞周穆王愛_二八駿、而政衰、漢文光武卻_二千里馬、而国昌。一者取捨之難、治乱之效、可_二以見_レ矣。天馬之出_二於聖朝、臣愚固不_レ足以知_二其応何在、然竊謂蓋由_三時多_二秕政、天将_三下生_下尤物_上以蕩_二其心_一者也。何則（中略）。当今之政、不_二啻賞罰失_レ当、将_レ俾_三綸旨有_二翻覆之譏_一。陛下之政如_レ斯、而此馬適至、以_レ臣觀_レ之、是殆胎_レ禍階_レ乱、恐非_二祥瑞（中略）。設有_二不逞之徒、乘_二朝綱之弛、作_二乱輦轂之下、則此馬適足_三以為_二軍国告急之資_一也。伏願裁_二玩_レ物之志、而施_二博濟之仁。帝大不_レ悦而罷。後屢上言不_レ聽、藤房（中略）入_二北山岩藏、為_レ僧太平記（中略）。及_二足利尊氏反、敕遣_レ人乘_二天馬、召_二新田義貞於尾張、半道而斃。果如_二藤房之言（『大日本史』卷一百六十三・列伝三）。

卜部兼好、神祇大副兼茂曾孫也。居_二吉田（卜部系図）兼好幼

而聰悟、好読_二老莊之書、有_二文才、善_二和歌（徒然草）、兼工_二書（太平記）。仕_二後宇田帝、任_二左兵衛尉、稍被_二親昵、帝崩、兼好剔_二髮入_二修学院（参考卜部系図、正徹物語、吉野拾遺）。後遊_二木曾、愛_二其山水、結_レ廬居焉。一日国守帥衆獵_二其地、兼好厭_二其喧擾、賦_二和歌曰、古_二古毛麻多、宇伎與奈利計利、與_二曾奈賀良、於_二毛此志麻麻能、邪麻奢刀毛我那。乃還_二郷里、歌詠自娛（吉野拾遺）。常自謂曰、灯下読_レ書、尚_二友古人、樂_レ莫_レ過_レ焉（徒然草）。當時公卿大夫、皆愛_二其為_レ人、與_レ之遊者甚多（正徹物語、兼好歌集）。兼好嘗為_二高師直作_レ書、挑_二治高貞妻、妻不_レ從、師直怒而絶_レ之。論者以_レ此少_レ之（太平記）。『大日本史』卷二百二十一・列伝五)

『大日本史』藤房と兼好の伝記の部分と本書の「藤房忠言、兼好尚友」の部分で傍線で示したように、この二つの話とも『大日本史』の原文を省略した形で記したものである。話の最後に見られる高師直の艶書代筆事件から連想して、藤房を兼好の対の人物としてあげた可能性も考えられるが、その背景に、当時における『徒然草』と『太平記』の平行の受容様相、および前述した川平敏文氏の一連の研究によって指摘された兼好は南朝と深い関わりを持つ人物である、つまり「兼好南朝忠臣説」の

流行¹⁾も影響しているのではないかと思う。史実はともあれ、川平氏が指摘したように、近世期には、『吉野拾遺』『塵塚物語』など南朝関係の説話集や『園太暦』偽文および艶書代筆事件をめぐって『太平記』『徒然草』の注釈・評釈における兼好に対する批評と弁解といったものから生まれた、兼好は南朝に心を寄せていたという説が流布していた。本書のこの部分は、同じ南朝に仕えた臣下の話として藤房と兼好を対とした意識が読み取れる。また、『本朝遯史』には兼好の伝記の前に藤房の伝記があげられており、表現の一致性は認められないものの、対を作る時の発想はこういった隠逸伝から影響も受けたものだと考えられる。

七、まとめ

近世期には、兼好の伝記がいくつか作られたが、その多くが偽伝であることは既に今の研究によって明らかにされたものである。しかし、当時にはこれらの伝記はそのまま信用され、今とは違う、当時の兼好像の形成に大きな影響を与えた。たとえば、川平氏の論考によって指摘された、兼好は志を持つ人であるが、乱世の世情を憤り、『徒然草』を記した、いわゆる「兼好発憤説」や、兼好は南朝の忠臣であり、スパイとして働いたと

いう「兼好南朝忠臣説」などである。氏によれば、『吉野拾遺』や『園太暦』の偽文に、兼好と南朝を結び付けて論じる傾向が見られ、元禄・宝永といった時期までに、兼好と南朝との関係、兼好の当世批判意識などという、兼好南朝忠臣説を形作る諸要素は、既に形成されていた。それを忠臣の兼好像として組み上げたのが、安永期の土肥経平の『春湊浪話』であった。本書に、兼好の一生の誤りとして批判されていた、兼好が師直のために塩冶高貞の妻に艶書を書いたことについても、それは兼好が足利家を攪乱させる為の策略であり、南朝への忠心からの行為であると述べている。天保元年自序の『皇朝蒙求』はまさにその後に登場している異種『蒙求』である。その前の『扶桑蒙求』が取り上げなかった艶書代筆事件を取り入れた背景に、作者の山下直温が独自性を目指して、新しい表現と人物像のイメージを創出する意匠のほか、この艶書代筆事件をめぐって当時の論争の流行が影響している可能性も考えられる。ただし、この事件を南朝への忠心の表れとして捉えるというような、兼好の南朝と深い関わりを持つ人物であるイメージは『皇朝蒙求』に見られない。

また、このように、『徒然草』と作者兼好の伝記を政治的な要素に結びつけて論じる背景に、近世期前期から、『徒然草』と『太

平記』とは同じ受容層を有していることが考えられる。松永貞徳の『慰草』の跋文に、慶長年間に、貞徳は『徒然草』を、遠藤宗務は『太平記』を講釈したという記事があるように、近世期における『徒然草』と『太平記』の流行は、儒学・医学の徒輩を中心とした共通の「場」を起点としている¹²。『太平記』のこの艶書代筆の逸話は、『徒然草』と共有する流布の場を通して、近世期兼好伝の形成に大きな影響を与えた。日本の異種『蒙求』の作者たちもまたその影響下に、兼好の伝記を記した。

さらに、南朝との深い関係を示しながら、兼好が諸国を遍歴し、木曾に庵を結んだ隠者であることが、『吉野拾遺』に見られて以来、『本朝遯史』、『扶桑隱逸伝』など近世期の隠者伝記や、『種生伝』、『兼好諸国物語』など近世期の兼好伝、『大日本史』などの史書に受け継がれてきて、広く世に出回っており、兼好の隠遁者としてのイメージが定着していた。これらの異種『蒙求』はこの隠遁者のイメージを大いに受け継いでいる。

以上のように、近世期において、兼好は南朝と深い関わりを持つ人物である、そして世を逃れ、諸国を遍歴した隠遁者である、というようなイメージが定着しており、異種『蒙求』の人物の対偶の組み合わせに影響を与えたことが認められる。ただし、兼好の伝記として近世初期以降、世に大いにし出回った『園

太暦』偽文の影響は異種『蒙求』の兼好伝記にはほとんど見られない。異種『蒙求』が依拠したのは、むしろ『太平記』や『正徹物語』、『尊卑分脈』「卜部系図」、『吉野物語』といった当時は確実とされている資料であることから、異種『蒙求』の編纂態度が窺われる。

それから、前述する分析から、『扶桑蒙求』は『本朝遯史』の同じ逸話を引用する。『皇朝蒙求』は『大東世語』から引用する。『瓊矛余滴』と『日本蒙求続編』は、『大日本史』の記事を引用するなど、日本の異種『蒙求』は先行する異種『蒙求』や、当時流行の人物伝記、史書から大いに影響を受けたことも確認できる。近世期において、『徒然草』及びその作者兼好法師に対する認識はこのように、当時の知識人の学問の基礎になる書物である異種『蒙求』に取り入れられて、さらに学問の基本教育の中で広がっていき、近世期兼好像の形成に影響を与えたことが認められる。

第一章と第二章においてすでに述べたように、近世期における『徒然草』の受容の様相の変遷は、前期と後期の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の逸話の数量と内容の変化と無視できない関連が認められる。本章で取り扱うこれら異種『蒙求』に見られる兼好の伝記の漢訳も、当時の兼好伝から大いに影響を受

けて作られたのである。近世の兼好伝における兼好の人物像は現在我々が親しんだ兼好のイメージとはかなりのズレが見られ、これらの資料の偽伝的性格はすでに近代以降の研究によって学術的に証明されたが、当時には人々に信用され、このように漢文教育の基礎書物にも波紋を及ぼしたことから、その影響力の大きさと広さは確認できる。異種『蒙求』はこのように、当時の文芸思潮・文化思想を読み取れる書物として、その資料的な価値が認められる。

- 『皇朝蒙求』 明治十四年刊 内閣文庫蔵本
- 『瓊矛余滴』 明治十年刊 国文学研究資料館蔵加賀市立図書館聖藩文庫蔵本のマイクロフィルム
- 『大日本史』大日本雄弁会 一九二八年
- 『日本蒙求続編』 明治十五年刊 国文学研究資料館蔵実践女子大図書館山岸文庫蔵本のマイクロフィルム
- 校註日本文学大系第十八卷『吉野拾遺』国民図書館株式会社 一九二五年

テキスト（表記と訓点は原文に従うが、適宜私に改めた所がある。）

- 『本朝蒙求』 貞享三年跋 早稲田大学図書館逍遙文庫蔵公開画像
- 『尊卑分脈』 黒板勝美編『新訂増補国史大系』吉川弘文館 一九六六年
- 稲田利徳校注歌論歌学集成第十一卷『正徹物語』三弥井書店 一九九九年
- 『扶桑蒙求』 天保十四年刊 国文学研究資料館蔵公開画像
- 『本朝遯史』 寛文四年刊 国文学研究資料館蔵公開画像
- 吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠出版 一九九六年

- * 1 川平敏文『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』平凡社 二〇〇六年
川平敏文『近世兼好伝集成』平凡社 二〇〇三年
島内裕子『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院 二〇〇九年
- * 2 川平敏文「兼好伝の造型——『園太暦』偽文を読む——」（『熊本県立大学文学部紀要』九卷二号 二〇〇三年三月）および注1
『近世兼好伝集成』に詳しい。
- * 3 小川剛生「卜部兼好伝批判——「兼好法師」から「吉田兼好」へ——」（『国語国文学研究』四九号 二〇一四年三月）
- * 4 『国書人名辞典』岩波書店 一九九八年
- * 5 相田満「『蒙求』型類書の世界」『和漢比較文学叢書八』汲古書院 一九八八年
本間洋一「『桑華蒙求』管見——編纂素材と後続書への影響の一斑から——」（『同志社女子大学日本語日本文学』一八号 二〇〇六年六月）
- * 6 川平敏文「元禄—享保期の徒然草注釈——兼好発憤説と述志の文学——」（『語文研究』八一号 一九九六年六月）
- * 7 板倉環「橋本蓉塘年譜稿」（『江戸風雅』四号 二〇一一年）
- * 8 岡田多希子「『吉野拾遺』研究」（『国文学研究叢書』七号 一九九一年）
- * 9 『園太暦』偽文については注1川平敏文『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』、『近世兼好伝集成』に詳しいが、たとえば、「終結^二庵於伊賀国国見山麓田井庄^一、遂^二往生素懐^一。六十八」、「伊賀国分寺被^レ勤^二葬事^一云々」のような「伊賀終焉説」は異種『蒙求』の兼好伝に全く見られない。
- * 10 『日本人名大辞典』講談社 二〇〇一年
- * 11 注1川平氏『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』第五章「兼好と南朝——イメージの形成と『太平記秘伝理尽鈔』」、第六章「南

朝忠臣説の構造―土肥経平の思考回路―などをご参照下さい。

*12

小秋元段「近世初期における『太平記』の享受と出版―五十川了庵と林羅山を中心に―」『中世文学の展開と仏教』おうふう
二〇〇〇年

川平敏文「慶長文壇と徒然草」『熊本県立大学国文研究』四七号 二〇〇二年

第三部 近現代中国における『徒然草』の中国語訳

第一章 近現代中国における『徒然草』の中国語訳

一、はじめに

第一部と第二部では、『徒然草』の漢籍受容と近世以降の漢訳について考察した。『徒然草』は中国の古典籍から受けた影響は、文章レベルに止まらず、思想内容にまで及んでいることは今までの研究において議論されてきたことであるⁱ。『徒然草』が広く読まれて、古典として「発見」された江戸時代から、本書と漢籍との関係が注目された。『徒然草』最初の注釈書である『徒然草寿命院抄』（慶長九年（一六〇四））から、「兼好得道ノ大意ハ、儒釈道ノ三ヲ兼備スル者歟。草子ノ大体ハ、清少納言枕草子ヲ模シ、多クハ源氏物語ノ詞ヲ用。作意ハ、老仏ヲ本トシテ、無常ヲ観シ名聞ヲ離レ、専ラ無為ヲ樂ン事ヲ勸メ、傍ラ節序ノ風景ヲ翫ヒ、物ノ情ヲ知ラシムル者乎」というように、『徒然草』は儒釈道の三教を兼備する書物として捉えられており、和文の書物でありながら、漢籍的な性格が強い書物として認識されていた。また、元和七年（一六二一）成立の林羅山による『徒然草』の注釈書である『野槌』に「此草紙の言葉大かた枕草紙、源氏物語の体をうつせり。兼好は、天台の教を学ひて、又老荘の道をもうかかふと見えたり」と、『寿命院抄』と同じように、『徒然草』の思想は老荘によるところがあると述べている。つまり、和文に書かれた『徒然草』に、漢籍の表現と思想が多く受容さ

れており、いわゆる漢籍的な性格が本書に見られるのである。

これが一因であろうか、十七世紀中期頃から、日本人の手によって和文の『徒然草』を漢文に訳したものが現れた。この問題について、前述した川平敏文「徒然草の漢訳」ⁱⁱは岡西惟中の『真字寂寞草』（元禄二年（一六八九）刊）、服部南郭の『大東世語』（寛延三年（一七五〇）刊）、宇野明霞『明霞先生遺稿』（寛延元年（一七四八）刊）、山本北山『作文率』（寛政十年（一七九八）刊）、という四つの作品を取り上げた。この論文において川平氏は、『徒然草』が漢訳された原因を「徒然草の内容そのものに求めるしかない。（中略）徒然草の内容あるいはその文体が、漢籍に大きな影響を受けていたことと無関係ではないであろう」と述べたように、『徒然草』が日本において早くから漢文に訳されたことは、本書に含まれた漢籍的な性格を物語っている。

川平氏が取り上げた四つの作品のほか、江戸時代以降の日本において、『徒然草』の話を漢文に訳した作品は少なからず確認できる。たとえば、本論文の第二部において考察した『本朝遯史』『大日本史』といった史伝や、中国唐代の幼学書『蒙求』の体裁に習い、日本で編纂された異種『蒙求』という当時の漢文基礎教養の書物などに見られる漢訳された『徒然草』である。

その一方、中華民国時代以来、周作人や郁達夫などの日本文化に心を傾けた中国の文人は『徒然草』を中国語に訳していた。また、一九八〇年代以降、日本の古典文学作品が中国大陸において盛んに翻訳される中、『徒然草』も五種類の訳本が出版された。

近年、島内裕子氏は「徒然草文化圏」という概念を提起し、翻訳された『徒然草』もこの「徒然草文化圏」の一部と述べた³⁾。島内氏は『徒然草』の英語訳を十九世紀末から二十世紀初期までの「抄訳・紹介期」と二十世紀初期以降の「全訳・研究期」との二期に分けて、欧米における『徒然草』の翻訳状況を紹介した。氏が「翻訳というカテゴリーを『徒然草文化圏』に導入することは、世界文学としての徒然草という新たな視点の設定にもつながる」と述べたように、『徒然草』の影響という問題を考える時に、翻訳は大事な視点である。とくに、英訳の問題に比べて、前述した本書の漢籍的な性格を念頭に置くと、『徒然草』が漢文・中国語に訳されること自体が、本書の本質と理解に関わる複雑な問題を含んでいる。

本論文は第二部において、日本人の手によって『徒然草』を漢訳した異種『蒙求』作品群の特徴を考察したが、本章においては、『徒然草』が中国人の手によって白話或いは現代中国語に訳したものを取り上げ、周作人以来、中国語に翻訳された『徒然草』を中心に、これらの翻訳の章段の取捨選択の意図と、訳文の文体・文章表現の特徴を考察する。一

九二五年に周作人が『徒然草』の中から十四の章段を選んで翻訳したが、その前後の小引・附記と訳文の内容、および彼のほかの作品に見られる『徒然草』についての言及を考察することによって、彼の翻訳手法と『徒然草』観を明らかにしたい。

また、一九三六年に周作人と同じ日本文化に関心を持つ著名な小説家である郁達夫も『徒然草』から七つの章段を選訳し、本書が「東方固有思想を代表するに値する哲学書」であると、その思想性を絶賛した。周作人訳と郁達夫訳と一九八〇年代以降の現代中国語訳とを比較することによって、『徒然草』が中国語に翻訳される時の特徴と問題点を探求したい。

最後に、江戸・明治期の漢文基礎教養書である異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢文訳と現代中国語訳の訳文の特徴の比較に触れる。『徒然草』は日本と中国の文人の間で愛読され、訳されていたが、両者の異同を分析する作業を通して、日本と中国での本書に対する認識の差を確認し、『徒然草』の漢籍的な要素という問題を考える。

二、周作人と郁達夫の中国語選訳

中国において最初に『徒然草』を翻訳したのは、魯迅の弟で、有名な作家でもある周作人である。周作人は一九二五年四月十三日に『語糸』という週刊雑誌の二十二号に『徒然草』の中から十四の章段を選んで訳

し、その前に小引、その後には附記を付した。周作人は各章段に数字番号だけではなく、内容をまとめる名前も付け、所々に注を入れている。小引において、周作人はまず『徒然草』の成立と作者兼好法師の略伝を紹介した。

徒然草は日本南北朝時代（一二三二～一三九二）の代表文学作品。著者兼好法師（一二八二～一三五〇）本姓卜部、居於京都之吉田、故通称吉田兼好。初事後宇多院上皇、為左兵衛尉、一三二四年上皇崩後在修学院出家、後行脚各処、死於伊賀、年六十九歳。今川了俊命人蒐其遺稿、於伊賀得歌稿五十紙、於吉田之感神院得散文隨筆、多貼壁上或写在經卷抄本の後面、編集成二卷凡二百四十三段、取開卷之語定名徒然草。近代学者北村季吟著疏曰徒然草文段抄、有這一節可以作為全書の解題。

「此書大体做清少納言之枕草紙、多同源氏物語之詞。大抵用和歌辞句、而其旨趣則有說儒道者、有說老莊之道者、亦有說神道仏道者。又或記掌故儀式、正世俗之謬誤、説明故実以及事物之縁起、叙四季物色、記世間人事、初無一定、而其文章優雅、思想高深、熟読深思、自知其妙。」

（筆者訳 『徒然草』は南北朝時代（一二三二～一三九二）の代表的な文学作品である。著者の兼好法師（一二八二～一三五〇）は本姓は卜部で、京都の吉田に住んでいた故に、通称は吉

田兼好である。初め後宇多院上皇に仕え、左兵衛尉であった。一三二四年に上皇が崩御した後、修学院に出家した。後に各地を行脚し、伊賀で死した。享年六十九歳である。今川了俊が人命じて、その遺稿を集めさせた。伊賀で歌五十紙を得て、吉田の感神院で散文隨筆を得た。その多くは壁に貼られたり、或いは經卷抄本の裏面に書写されたもので、全部で二卷二百四十三段に編集し、開卷の言葉を取って『徒然草』と命名した。近代の学者北村季吟の著した疏である『徒然草文段抄』に、次のような一節があり、全書の解題とすることができる。

「尤此草紙の詞は源氏物語をも用ひ、其体枕草子のをうつせる所もあり。すべて和歌の詞を用ひて、その心ばへは儒道をかける所もあり。又莊老の道を以てかける所もあり。尤神道仏道を以てかきたる所もあり。又有職公事のかたをもしるし、世俗のあやまれる詞をただし、物の故実ををしへ、事の起りをあらはし、時節の風景をかきつらね、世上のものがたりをかきのせなど其さま一概にあらねど畢竟は為人の心ざしあらはに待るにや。その文章は優雅にして、思想は高深である。熟読して深く考へると、自ずからその妙味を知る。」⁴

周作人は北村季吟の『文段抄』の一節をあげて『徒然草』の解題とすべきと述べた。『文段抄』のこの一節が『徒然草』の文章表現は『源氏

物語』『枕草子』と和歌の世界を継承し、その思想内容は儒仏老荘や、有職故実・自然風景・世間人事など様々な面に及んでいとまとめたのは、先行する『寿命院抄』『野槌』などの注釈書の指摘を受けて、的を射た捉え方と言える。後にも述べるが、周作人の興味を引いたのはまさに『徒然草』のこのような多様性・柔軟性である。

また、周作人が翻訳する際に使用したテキストについて、潘秀蓉氏は『徒然草文段抄』、伊藤平章『徒然草講義』(明治二十六年(一八九三))、逸見伸三郎・神崎一作『文法附注徒然草要義』(明治二十九年(一八九六))をあげ、韓玲姫・綿拔豊昭両氏は潘氏の考察を踏まえて、さらに鈴木春湖『徒然草文段抄校注』(明治十五年(一八九二))、鈴木弘恭増補『徒然草文段抄』(明治二十七年(一八九四))、内海弘蔵『徒然草評釈』(明治四十四年(一九二一))、塚本哲三『徒然草解釈』(大正十四年(一九二五))の四書をあげた。ただし、韓・綿拔両氏の論文の中にも指摘があるように、周作人の日記によると、彼が購入した『徒然草』関係の書物は「一九二四年一月『徒然草』(著者、出版社不明)、一九二五年三月『徒然草評釈』(内海弘蔵、明治書院、明治四十四)、一九二五年十二月『徒然草解釈』(塚本哲三、有朋堂、大正十四)、一九二七年八月『絵本徒然草』(和田万吉、出版社不明)」であり、内海弘蔵『徒然草評釈』と塚本哲三『徒然草解釈』の購入は翻訳作業の後のことである。この両書の趣味性を重視する『徒然草』観は後に周作人に影響を与えたこ

とが想定できるが、一九二五年『徒然草』を選択する時の参考書については、ほかの書物を考える必要がある。ここでは、周作人が小引に紹介した兼好の伝記に注目したい。前述した論文で、潘氏は小引の兼好の生没年の記述を考察し、『文段抄』の影響を指摘したが、季吟の『文段抄』本文には兼好が伊賀に没し、その遺稿を今川了俊が伊賀と吉田の感心院で集めた云々の記事が見られない。鈴木弘恭増補の『文段抄』には「兼好法師伊賀国見山の麓奈保村に於て入寂す」と伊賀の地名が出てくるが、遺稿に関する記述は確認できない。

ところで、『文法附注徒然草要義』最初の「徒然草と兼好法師」に、今川了俊が人を命じて「吉田の感心院へは命松丸を遣し、伊賀の草庵へは、従者伊豫太郎光貞といふ者、歌の志ありとて遣されしが、歌の集は伊賀の草庵にて、五十枚ばかり集め、つれづれ草は吉田にて多く壁にはられ、あるは経巻などを写せる裏書にてありしを、取り来りぬ」と『崑玉集』の記事を引用している。つまり、周作人があげた兼好法師の伝記は近世期に作られたいわゆる偽伝の系統を引くものである。

關於兼好人品後世議論紛紛、迄無定論。有的根拠太平記二十一卷の記事、以為他替高師直写过情書去挑引塩冶高真的妻、是個放蕩不法的和尚、或者又說太平記是不可靠的書、兼好実在高僧、又或者說他是憂国志士之遯跡空門者。這些爭論我們可以不

用管他、只就徒然草上看来他是一個文人、他的個性整個地投射在文字上面、很明了地映写出来。他的性格的確有点不統一、因為兩卷書裏禁欲家與快樂派的思想同時並存、照普通說法不免說是矛盾、但我覺得也正在這個地方使人最感到興趣、因為這是最人情的、比傾向任何極端都要更自然而且更好。徒然草最大的價值可以說是在於它的趣味性、卷中雖有理知的議論、但決不是乾燥冷酷的、如道學家的常態、根底裏含有一種溫潤的情緒、隨處想用了趣味去觀察社會万物、所以即在教訓的文字上也富於詩的分子、我們讀過去、時時覺得六百年前老法師的話有如昨日朋友的對談、是很愉快的事。徒然草文章雖然是模古的、但很是自然、沒有後世復古典派的那種扭捏毛病、在日本多用作古典文入門的讀本、是讀者最多的文學作品之一。以下所記十四節是我覺得最有趣味的文章、形式雖旧、思想却多是現代的、我們想到兼好法師是中國元朝時代的人、更不能不佩服他的天才了。

（筆者訊 兼好的人格について後世は議論紛々であり、未だ定論はない。『太平記』二十一卷の記事によって、彼を高師直のたぬに艶書を書き、塩冶高真の妻を挑発し、放蕩不法の法師とい

う人も居り、『太平記』は頼りにならない本であり、兼好は高僧であるという人も居る。また、彼は国を憂う志のある出家遁世の者という人も居る。これらの論争はさておき、『徒然草』から見ると、兼好はひとりの文人であり、彼の性格は彼の作品に明らかに表れている。彼の性格は確かに少し統一性に欠けている。『徒然草』という二巻の書に、禁欲家と快樂派の思想が併存しており、矛盾していると言われるのは免れない。ただし、この矛盾は最も興味のあるところであると思う。この矛盾は最も人間味があり、いずれの極端に傾けるよりも自然でよいものである。『徒然草』の最大の価値は趣味性にあるといえる。本書には理知的な議論はあるが、決して道徳家の常態のような乾いた冷酷なものではなく、その根底には温潤な情緒が見られる。兼好は趣味的な目線で社会万物を観察しているため、教訓的な文章も詩的な分子を含めている。われわれはこの本を読んでいると、時々六百年前の老法師の言葉は昨日友人との対談のようによ愉快なことである。『徒然草』の文体は擬古的であるが、なめらかな書きぶりで、後世の偽古典派のような不自然な癖がない。

日本では古典文学の入門書として用いられることが多く、最も読者数が多い文学作品のひとつである。以下訳した十四の章段は最も趣味性のある文章と思う部分である。形式は古いが、思想は現代的である。兼好法師は中国では元の時代の人であると思うと、彼の天才に敬服するばかりである。）

まず注目したのは、周作人は兼好の人格について、後世は議論紛紛であり、まだ定まった説はないとし、本論文の第二部第三章に述べた『太平記』に見られる艶書代筆事件を以て兼好を好色法師と評価した説と、「高僧」、「憂国志士之遯跡空門者」という近世期以来三系統の兼好像に全部言及していることである。これら近世の兼好伝の影響力が窺える。また、彼が『徒然草』から十四の章段を選んで中国語に訳した際、各章段に「憂患」「長生」「中年」「女色」「訶欲」「好色」「独居」「飲酒」「自然之美」「秋月」「読書」「法蹟的故事」「愛生物」「人生大事」という題目を付けたが、その選訳した章段の内容を見ても、あるいは風月の情緒を談じ、あるいは四季と生物を愛憐するものに集中している。右で引用した小引の傍線部分のように、周作人は『徒然草』に趣味性を見だし、この趣味性を『徒然草』の最も魅力的な所であると論じた。彼は兼好をひとりの文人として認識し、『徒然草』には禁欲家と快樂派の矛盾する

思想が併存しており、この矛盾にこそ興味と人間味があるとしている。また、『徒然草』の文体について、擬古的な文体であるが、なめらかな書きぶりで、後世の偽古典派のような不自然な癖がないと評価した。『徒然草』のこの人間味のある矛盾は現代の『徒然草』研究においてもよく指摘されることで、中国で最初に『徒然草』を翻訳した周作人は兼好のよき理解者と言えよう。彼が最後に「兼好法師は中国では元の時代の人であると思うと、彼の天才に敬服するばかりである」と兼好への傾倒を語っている。

ところで、周作人が『徒然草』に趣味性を見出し、そこに重点を置いてこの十四段を選んだことは偶然ではない。彼の随筆『笠翁與隨園』（一九三五年）に「趣味」についてこのように述べた箇所がある。

我很看重趣味、以為這是美也是善、而沒趣味則是一件大壞事。

這所謂趣味裏包含着好些東西、如雅・拙・朴・澁・厚重・清朗

・通達・中庸・有別扱等。反者都是沒趣味。

（筆者訳）私は非常に趣味を重視している。これこそ美であり、善であると思う。趣味がないのは一大悪事である。ここでの趣味には、いくつかの意味が含まれている。たとえば、雅・拙・朴・澁・厚重・清朗・通達・中庸・選別力があることなどである。これらに反するものはすべて趣味がないというのである。）

周作人の作品と彼の思想を考える時、「趣味」という言葉は非常に重

要なキーワードであることが、周作人研究においてしばしば指摘されている。彼が持つこのような趣味性を大事にするものの考え方が、彼が『徒然草』に興味を持ち、これらの章段を選訳した一因でもあり、一九六五年に周作人が友人の鮑耀明宛に書いた手紙に「我所受日本の影響、説起来最顕著的可以算是兼好法師、不過説到底他乃是貫通儒積道の人物、所以或者不能說是日本的也未可知。（筆者訳 私の受けた日本の影響といえば、最も顕著なのは兼好法師からのものだと言えるだろう。しかし、根底から言えば彼は儒仏道に通じる人であり、日本の影響とは言えないかもしれない。）」と彼自身も述べたように、周作人が見る兼好の思想の根底は儒仏道を兼備する中国的なものであるが、『徒然草』との出会いが後に周作人の文学創作と思想の形成に大きな影響を与えたこととなる。ちなみに、前述したように、『周作人日記』によると、内海弘蔵『徒然草評釈』と塚本哲三『徒然草解釈』を購入したのは翻訳が終わった後のことであり、直接的な影響関係は確認できないが、周作人が『徒然草』を翻訳した二十世紀初期頃に、日本の『徒然草』研究においても、内海弘蔵『徒然草評釈』に「兼好が趣味論」という論文が載せられているように、「趣味」というキーワードで『徒然草』を読み解く傾向が見られ、周作人も少なからずその影響を受けたのであろう。

左の引用のように、周作人は選訳の最後の附記において、訳文の文体

について触れていた。中国語の古典文体で訳すつもりはないが、無意識的に夾んだことはある。周作人はいわゆる「半文半白」という文語を夾んだ白話の文体で『徒然草』を訳していた。これは当時の中国の文化風潮と関係する説明である。つまり、白話を提唱する「新文化運動」が盛んに行われる中、純粋な白話で訳していないことを周作人が説明しているわけであるが、『徒然草』の本文に合わせて文体を選んでいる彼の翻訳態度が読み取れる。

上辺十四篇中有九篇係去年旧稿、其余均係新訳。原文雖係古文、我却不想用古文去訳他、但終因此多少無意地夾進一点文言去、這個我也不復改去、因為要用純粹白話來訳也似乎是不大可能的。十四年三月六日訳校竟記。

（筆者訳 上の十四篇の中、九篇は去年の旧稿であり、ほかは新しく訳したものである。原文は日本語の古文であるが、中国語の古文（文言）で訳すつもりはない。しかし訳す時には、無意識的に多少古文を夾んだことがあるが、これを改めることはしない。純粋な白話で訳すのも不可能に近いからである。十四年三月六日訳の校正が終わりて記す。）

周作人の翻訳方法については、前述した潘秀蓉氏や劉岸偉氏¹⁾の先行

論がある。十九世紀末期と二十世紀初期に活躍した中国の思想家・翻訳家である嚴復の「信達雅」説を重視し、発展させた形である。「信達雅」とは、原文に忠実であること、訳文の文章が流暢であること、表現が優雅であることの三つであるが、一九四四年に周作人は「談翻訳」の一文においてこのように述べた。

抛我看来、翻訳当然应该用白話文、但是用文言却更容易討好。自從嚴幾道發表宣言以來、信達雅三者為訳書不刊的典則、至今懸之國門無人能損益一字、其權威是已經確定的了、但仔細加以分析、達雅重在本國文方面、信則是與外國文有密切關係的。必須先將原来的文字與意思把握住了、再找適合的本國話來傳達出來、正當的翻譯的數似應這樣的打法、即是信五分、達三分、雅二分。假如真是為書而翻譯、則信達最為重要、自然最好用白話文、可以委曲也很辛苦地傳達本來的意味、只是似乎總缺少點雅、雖然抛我說來自話文也自有其雅、不過與世俗一般所說不大同、所以平常不把他當作雅看、而反以為是俗。若是要想為自己而翻譯的話、那麼雅便是特別的要緊、而且這還是俗受的雅、唯有用文言才能達到目的、不、極容易的可以達到目的。……

(筆者訳 私からみると、翻訳は当然に白話文を用いるべきだが、ただし文言を用いたほうが好まれる。嚴幾道が宣言して以來、信達雅の三つは翻訳の動かぬ原則となり、今でも城門に懸

けるのに一字たりとも損益できない。その權威は確実なものである。但し、詳しく分析を加えると、達と雅は本國語で重んじるもので、信は外國語と密接な關係がある。まず原来の文字と意味を把握して、それから適切な本國語を探して表現する。正しい翻訳の配分はこのようにすべきである。つまり、信は五分、達は三分、雅は二分。本のための翻訳ならば、信と達が最も重要で、白話を用いたほうが一番だ。苦しいが婉曲に本来の意味を伝えることができる。但し、少し雅に欠ける所がある。私からいうと、白話文もその自身の雅があるが、世間一般のいう雅とは少し違うので、普段は雅と見なされず、俗とされている。もし自分のための翻訳ならば、雅は特別に重要なことであり、しかも、世間一般にいう雅であるので、文言でしか目的に達することができない。いや、容易に目的に達することができる。)

つまり、周作人は翻訳を本のための翻訳と自分のための翻訳に二分している。本のための翻訳、つまり書物として出版するための翻訳は意味を讀者に伝えることが大事であるので、俗文だと世間に批判される恐れがあるが、白話を用いるべきである。自分のための翻訳ならば、雅が大であるので、文言を用いるべきだと、「信達雅」を翻訳の典則としながら、翻訳の目的によってはその割合を調整すべきだと、独自の翻訳理論を作り上げた。

周作人の選訳から十年ほどが経ち、一九三六年に周作人と同じように日本に渡ることがあり、日本文学に多大な関心を持つ中国の文学者である郁達夫が『徒然草』の一部を中国語に訳したことがある。一九三六年二月出版の半月刊『宇宙風』第十期に載せられた『徒然草』の序段・第一段・第三段と第五〜八段までの七つの章段の選訳である。選訳の後に左のような附記が付され、『徒然草』の思想内容を紹介し、翻訳の経緯と方法を説明している。

徒然草、為日本兼好法師の随筆集。法師生長於建武中興の時代（当十四世紀中葉、我国元順帝時）、実為吉野朝一大学者、兼通神儒仏道、而行文又能將漢文和語、融冶一炉。思想脱胎老莊、但文体則於清少納言之枕草紙為近似。徒然草在日本、為古文学中最普遍伝誦之書、比之四子書在中國、有過之無不及。日本古代文学、除源氏物語外、当以随筆日記為正宗、而徒然草則又随筆集中之錚錚者、凡日本人之稍受教育的人、総沒有一個不讀、也沒有一個不愛他的。我在日本受中等教育的時候、亦曾以此書為教科書、當時志高氣傲、以為他只拾中土思想家之糟粕、立意命題、并無創見。近来馬齒加長、偶一翻閱、覺得他的文調的諧和有致、還是余事、思路的清明、見地的周到、也真不愧為一部足以代表東方固有思想的哲学書。久欲把它翻譯出來、以自消磨空閑歲月、無如懶惰性成、訳不到一個鐘頭、就想擱筆。而原

文文調的鏗鏘、实在也是使我望而却步的一大原因。現在先将頭上的几段、勉強訳作時文、深望海内外的同好者、有以教我。

徒然草的注釈書、在日本同源氏物語的注釈本一樣、真是汗牛充棟、不知有幾百幾千。大致以文段抄為最簡明。這幾段訳文所根據的原書、也就是這個本子。

（筆者訳 『徒然草』は日本の兼好法師の随筆集である。法師は建武中興の時代に生き（十四世紀中葉、わが国元順帝の時に当たる）、実には吉野朝の一大学者である。神道、儒教、仏教、道家を兼学し、文章は漢文和語をよく融合できる。思想は老莊より脱胎し、ただし文体は清少納言の『枕草紙』に近い。『徒然草』は日本において古典文学の中に最も一般的に読まれた書物で、四書が中国における地位に比べてもこれを過ぎて及ばないものはないといえる。日本の古典文学は、『源氏物語』を除いては、随筆日記を正宗とすべきで、『徒然草』は随筆集の中の錚錚たるものである。日本人の中に教育あるものは必ず一読し、かつ愛読しないものはない。私も日本で中等教育を受けた時に、この書を教科書としていた。当時は志が高く傲慢であったので、この書をただ中国の思想家の糟粕を拾ったもので、主旨、命題ともに創造的な知見がないと思った。近来、年を取るにつれて、たまたまにこの書を閲読し、その文調が美しいだけでなく、思

考も清明であり、見地が周到であること、まさに東方の固有思想を代表できる哲学書と言えるのである。閑な歳月を消耗するため、この書を翻訳したいと前々から思っていたが、ものぐさな性格であり、一時間も訳していないうちに筆を置いてしまった。それから、原文の文章は難しく、これも私が引いてしまった一大原因である。今回はまず最初の幾つかの章段を辛うじて今の文体に訳して、中国内外の同好の士が私に（訳の巧拙を）教えてくれるよう深く望む次第である。

『徒然草』の注釈書は日本において『源氏物語』の注釈書と同じく汗牛充棟で、その数は何百何千か知ることができない。その中では『文段抄』が最も簡明であり、この幾つかの訳文の底本も本書によったのである。）

附記の本文と訳文に傍線①で示したように、郁達夫も『徒然草』と中国の思想、特に老荘の思想との近似性と、文章が和漢を融合した形になっていることを指摘している。郁達夫は日本で中等教育を受けた時に¹²、『徒然草』を中国の思想家の糟粕を拾っただけのものだと高く評価しなかった。それから十数年の時が経ち、一九三六年に本書を翻訳した時に、「まさに東方の固有思想を代表できる哲学書」と『徒然草』の思想性を

絶賛した。周作人は兼好法師を「貫通儒積道の人物」「文人」とし、郁達夫は「一大学者」と評価したのは、つまり、周作人と郁達夫が『徒然草』に見たものは、中国的な思想性、いわゆる漢籍の強い影響を受けて生じた本書の漢籍的な性格であると言える。

訳文の文体について、傍線部②で彼自身も述べたように、周作人の「半文半白」と異なり、郁達夫は『徒然草』を「時文」、つまり当時の白話に訳している。また、翻訳のテキストについては、『文段抄』を用いたと明言している。

在中日外交紛紜の今日、將這種不符合实用的閑書翻訳出来、或者要受許多愛國者的指摘。但一則足以示日本古代文化如何的曾受過我國文化的影响、再則也可以曉得日本人中原也有不少是酷愛和平、不喜侵略、如我國的一般只知讀書樂業的平民、則此舉也不能全說為無益。假使世界太平、生活安定、而我個人的身體康健的話、我倒很想在這一二年中、靜心訳出幾部日本中古以後的日記隨筆集來、以饜讀者、這或者比空言親善、濫說文化溝通等外交辭令、總要比較得實在一點。一九三六年一月十日訳後記

(筆者訳 中日の外交において紛糾の絶えない今日、この実用

的ではない書物を翻訳することについて、愛国者より指摘を受けることであろう。ただし、ひとつには日本の古代文化がいかに我が国の文化に影響されているかを示し、ひとつには日本人の中にも、我が国のただ書を読み業を愛することを知る人々のように、平和を愛し、侵略を好まない人が少なからずいることが分かるのであり、この挙もまた全くの無益とも言えないであろう。たとえ世界が平和になり、生活が安定し、個人の体が健康であれば、この一二年の中に、日本の中古以降の日記随筆集を幾つか翻訳し、読者に捧げたいと思う。これは口先の親善や文化交流などの外交辞令をいたずらに言うよりは、かなり実を伴うものであろう。一九三六年一月十日訳後記)

郁達夫が一九三六年という中日戦争が勃発する前夜の時代に『徒然草』

表一

を中国語に訳したことは、容易なことではなかったのである。末尾の附記に『徒然草』を訳したのは中国文化が日本文化に与えた影響の大きさと、日本人の中にも平和を愛する人がいることを示すためであると弁明したのも、このような時代背景の下でせざるを得なかったことかもしれない。近藤春雄「郁達夫と徒然草選訳」には「凡そ其の選訳の本とは縁の遠いかゝる弁解を敢て試みざるを得なかったのである。否、愛国者よりの誤解を避ける為にはこれだけの効能を書きたて、弁解を敢てしなければ、彼自身、枕を高くしては寝られなかったのである。雑誌検閲の殊にやかましい中国に於て、而も国防文学論はなやかなりし当時としては、之も亦已むを得ない事であったのである」と事情を説明している。参考のため、周作人訳と郁達夫訳の『徒然草』の章段と主旨を示した表一を附する。章段の主旨は筆者がまとめたもので、括弧内は周作人が付けた章段名である。

表三

第九段	第八段	第七段	第六段	第五段	第三段	第一段	序段	『徒然草』
色欲の誡め（訶欲）	色欲の誡め（女色）	人生の無常（長生）	子孫不要論	落魄の心持ち（憂患）	好色の風情（好色）	世人の欲望	執筆の原因	章段の主旨
○	○	○		○	○			周作人訳
	○	○	○	○	○	○	○	郁達夫訳

第二百二十二段	秋月の趣（秋月）	○	
第一百九十段	婚姻の有るべき方（独居）	○	
第一百七十五段	酒の好し悪し（飲酒）	○	
第二百二十三	簡素の志向（人生大事）	○	
第二百一十一段	生物愛惜論（愛生物）	○	
第一百十三段	見苦しき事（中年）	○	
第八十四段	人情の暖かみ（法顯的故事）	○	
第二十一段	自然の礼賛（自然之美）	○	
第十三段	読書の慰め（読書）	○	

表一で示したように、周作人の訳と郁達夫の訳では第三・五・七・八段の四つの章段が重なるだけであるが、これは周作人に比べて、郁達夫

の訳は『徒然草』の章段に沿って選んでいることと関連するかもしれない。本論文の第二部において述べた日本人の手によって漢訳した『徒然

『徒然草』を比べてみると、その差異の大きさがわかる。つまり、『徒然草』の中から奇譚性・教訓性を求めて人物の逸話を選んで漢訳した日本の異種『蒙求』に対して、ふたりの中国人文学者が目を向けた『徒然草』の内容は、いずれも人間の内面に問いかける、思考的な章段である。その中には、第八十四段法顕の故事というような人物逸話も見られるが、これも法顕の話から人情の暖かみという、周作人が附記にいう「温潤的情緒」を見いだす章段であり、やはり逸話の面白みではなく、人間の内面に重心を置いている章段である。

最後に、両者ともに選ばれた第七段と第八段の一部を例に、周作人訳と郁達夫訳の訳文の特徴を考察してみたい。

●『徒然草』第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

●周作人訳「二、長生」

倘仇野之露沒有消時、鳥部山之煙也無起時、人生能夠常住不滅、恐世間將更無趣味。人世無常、倒是很妙的事罷。

●郁達夫訳「第七段」

愛宕山野の朝露、鳥部山麓の青煙、若永無消失的時候、為人在世、也象這樣的長活下去、那人生的風趣、還有什麼。正唯其人世之無常、才感得到人生的有味。

第七段は長寿を貪る人は無常の醍醐味を知らないと、兼好の無常観について述べた章段であるが、周作人は「長生」という章段名を付けた。傍線部分について、『徒然草』原文は「鳥部山の煙がいつまでも立ち去らないように（人の命が常住不滅であるならば）」という表現であるが、周作人は「鳥部山の煙が起つ時がないように（人の命が常住不滅であるならば）」とそれとは別の解釈で訳している。この箇所について、謝立群氏は周作人の訳を「充分理解原著的基礎上采取了符合中国人的習慣的訳法（筆者訳 原著を充分理解した上に中国人の習慣に合わせた訳を取った）」と指摘した¹⁴。たしかに、鳥部山というような火葬地で煙が立たないのは人が死なないことと連想されやすいが、郁達夫訳のように、あだし野の露と併せて、鳥部山の煙が消えないことで命の常住不滅を表す考え方も理解できないわけではない。『徒然草』の注釈書を確認したところ、周作人訳と同じような理解を示したものは見られない。周作人のこの誤訳とも言えるような訳し方を理解するには、『あだし野の露き

ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらで』は対句法の精格なり」という、前述した『文法附注徒然草要義』の一文がヒントになるのではないか。この章段の訳文の最後に、周作人は「仇野是墓地之名、鳥部山為火葬場所在地」と注しており、つまりここでは、命の常住を表すために、墓地の消えない露に対して、火葬場の立たない煙を対句として付けたのである。前出した潘秀蓉氏の論文では、『徒然草』第三段の翻訳を例に、周作人が『文法附注徒然草要義』などの注釈書を参考に、自分の好みを加えて、翻訳というより創作とも言えるような特異の訳文を作り上げたことについて論じたが、第七段のこの訳文も彼のこのような翻訳態度を表している。

●『徒然草』第八段

世の人のこころまどはす事色欲にはしかず。人のこころはおろかなる物かな。

にほひなどはかの物なるにしばらく衣裳にたきものすとしりながら、えならぬにほひには必こころときめきするものなり。久米の仙人のものあらふ女の脛のしろきを見て通をうしなひけんは、まことに手あしはだへなどのきよらに肥あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。^{・15}

●周作人訳「四、女色」

惑乱世人之心者莫過於色欲。人心真是愚物。色香原是假的、但衣服如經過薰香、雖明知其故、而一聞妙香、必会心動。相伝久米仙人見浣女脛白、失其神通、實在女人的手足肌膚艷美肥沢、與別的顔色不同、這也是至有道理的話。

案：『元亨積書』卷十八云、「久米仙人者和州上郡人、入深山学仙方、食松葉、服薜荔。一日騰空飛過古里、会婦人以足踏浣衣、其脛甚白、忽生染心、即時墜落。」

●郁達夫訳「第八段」

人世上惑人之事、無如色欲、人心真是愚妄的東西。香料的薰添、本属仮暫、明知衣上的濃香、為時不久、但對於難耐的芳馨、也必勢難自禁、少不得鹿衝心頭。久米仙人見了水辺洗物的女人白腿、便失神通、實在是為了手足皮膚的純美、肥白光鮮、不同凡響、他的從空下墜、也是應該。

(注) 元亨積書十八：久米仙人、和州上郡人。入深山、学仙法、食松葉、服薜荔。一旦騰空、飛過故里、会婦人以足踏浣衣、其脛

甚白、忽生染心、即時墜落。¹⁶

傍線で示したように、周作人訳は「愚物」「浣女」という古文体の言葉を選んだのに対し、郁達夫訳は「愚妄的東西」「水辺洗物的女人」という説明的な、いわゆる俗的な言葉に訳している。全体の文章を見ると、周訳の古文体の雅に対して、郁訳の白話の俗的な訳文もいきいきと味わいのある文章となっている。

三、現代の『徒然草』中国語訳

周作人と郁達夫の選訳の後、新中国になってから、一九八〇年代にはじめて『徒然草』の全訳本が出版された。その後、特に二〇一〇年以降、『徒然草』の訳本が集中的に出版されており、今現在、中国において『徒然草』の全訳本は全部で下記のように五種類確認できる。

- 周作人・王以鏄訳『枕草子・徒然草』（人民出版社 一九八八年）
- 李均洋訳『方丈記・徒然草』（河北教育出版社 二〇〇二年、法律出版社 二〇一二年再版）
- 文東訳『徒然草』（中国長安出版社 二〇〇九年、中信出版社 二〇一四年再版）
- 王新禧訳『徒然草・方丈記』（長江文芸出版社 二〇一一年）

○田偉華訳『徒然草』（湖南人民出版社 二〇一二年）

前節において、第七段と第八段を例に周作人訳と郁達夫訳の訳文の特徴を分析したが、本節も、第八段を例に、これらの現代中国語訳文の特徴を考察する。『徒然草』第八段の本文は前節参照。

- ①王以鏄訳：昔久米仙人見浣女足脛潔白而失其神通力。蓋手足之肌膚豐艷如凝脂、此乃肉身本來色相、其為感宜也。
- ②李均洋訳：久米仙人看見浣洗女郎的白生生小腿、頓時失去了神力、這的確是因為手足、皮膚等的清麗、以及豐滿、油光、而非其他的美色所致。
- ③文東訳：昔年有位久米仙人、能够御空而行。当他飛過家鄉時、看見河邊洗衣女用双脚踏踩衣物、裸露出雪白的小腿、心中起了色欲、頓時喪失神通之力、從天上掉了下來。不過女人手足的豐滿美艷如凝脂、是其天然的本色、能够讓人心迷惑、倒在情理之中。
- ④王新禧訳：昔有久米仙人、見河邊浣女脛白如雪、遂失神通。蓋因女子手足潔美、光澤豐凝、非同凡色。故惑人下墜、也自有其理。
- ⑤田偉華訳：昔年有位能御空而行的久米仙人、看見河邊洗衣女用双脚踏踩衣物、裸露出雪白的小腿、心中起了色欲、頓時喪失神通之力、從天上掉了下來。手足肌膚豐滿美艷如凝脂羊羔、這僅

僅是肉身天然的本色、就足以讓人心迷惑了。

『徒然草』第八段の「ものあらふ女」について、前節で周作人は「浣女」という文語を用いたのに対して、郁達夫は「水辺洗物的女人」、つまり「水辺で物を洗う女」という説明的な俗語に訳していることを述べた。この両者の訳文を受けて、現代中国語訳の五種は①王以鑄訳と②李均洋訳は「浣女」「浣洗女」と周作人訳文に近いのに対して、③文東訳と⑤田偉華訳は「河辺洗衣女」と郁達夫訳の系統を受けたものである。④王新禧訳は「河辺浣女」と両者の中間的な訳語を取っている。文体については、①王以鑄訳と④王新禧訳は文語の文体を取っており、「雅」の訳文と言えるが、読者には難解な文章であると批判されることもある。②李均洋訳は流暢な現代中国語の文章で訳しており、③文東訳と⑤田偉華訳はさらに『徒然草』原文に見られない『元亨釈書』の久米仙人の伝説の詳細を訳文に加えて、周作人の言う「為書而翻訳」、読者のための翻訳という点で評価される訳文と言える。

また、「外の色ならねば」、つまり、『徒然草』第八段原文の最初の部分に出てくる衣服に焚く薫き物、香りのように一時的に外から添加された魅力ではない、肌と肉体そのものの美しさという表現に注目してみたい。周作人は「與別の顔色不同（ほかの色と違う）」と訳しており、郁達夫は「不同凡艷（普通の艶とは違う、つまり美しさ）」と訳している。

周作人訳は字面の意味を直訳して意味が取りにくい所となっている。郁

達夫訳は意識であるが、前後文章の統合性がとれて意味もわかりやすい訳し方と言える。

王以鑄以降の全訳本を見ると、①王以鑄訳は「此乃肉身本来色相（これは肉身本来の色相）」と説明的な文章に訳している。王以鑄の文語性の強い文体に対して、②李均洋訳は口語体の文章で訳しており、「而非其他的美色所致（ほかの美色がもたらしたのではない）」と訳している。その後の③文東訳は、「是其天然的本色（その自然の本来の色である）」と説明的な口語体で訳している。④王新禧訳はまた古文体のものになり、「非同凡色（普通の美色と違う）」と、郁達夫の訳と似ている。⑤田偉華訳は「這僅僅是肉身天然的本色（これただ肉体自然の本来の色のみ）」と③文東訳と近似している。『徒然草』の本文「外の色ならねば」という部分は、もともと難解な所で、『寿命院抄』や『野槌』など『徒然草』の古注釈書は「仮色迷_レ人猶若_レ是、真色迷_レ人応_レ過_レ此。」（『白氏文集』巻四・諷諭四「新樂府・古塚狐」0169）」という白居易の詩を踏まえて、外より飾りたる仮の色ではない、真の色であると、第八段の最初の薫き物の部分と関わらせながら解釈している。『徒然草』を読者が理解しやすい中国語の文章に翻訳するには、本書のこのような表現手法に目を配る必要がある。

最後に、第二部で取りあげた江戸・明治期の漢文基礎教養書である異種『蒙求』に見られる『徒然草』の漢文訳とこれら現代中国語訳の訳文

を比較して、両者の特徴と『徒然草』の翻訳の問題点に触れたい。前述したように、江戸時代に日本人の手によって、和文の『徒然草』が漢文に訳されたものがいくつか見られるが、その漢訳に選ばれた内容を見ると、人物伝記類の話がほとんどであり、周作人訳・郁達夫訳とはいずれも重なる部分が見られない。周作人訳・郁達夫訳と江戸時代の『徒然草』漢訳の同じ章段を比較することができないのは残念であるが、ここでは異種『蒙求』において訳された『徒然草』の章段の中で最も漢訳回数が多い第二百十五段の一部を取り上げ、現代に出版された中国語訳の『徒然草』との比較を試みる。

● 『徒然草』第二百十五段

平宣時朝臣、老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ぶる事ありしに、『やがて』と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また、使来りて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く』とありしかば、萎えたる直垂、うちうちのまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて持て出でて、『この酒を独りたうべんがさうさうしければ、申しつるなり。肴こそなけれ、人は静まりぬらん、さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭さして、隈々を求めし程に、台所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて、『これぞ求め得て候』と申ししかば、『事足りなん』とて、心よ

く数献に及びて、興に入られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか」と申されき。

① 『箋註桑華蒙求』巻之中「時頼残醬、晏嬰弊裘」（正徳年間（一七一―一七一六）成立、明治十六年（一八八三）後刊）

其節儉如此、豈好奢侈者可不深戒乎。

② 『日本蒙求』巻之下「当道清廉、時頼儉約」（成立年代不明、十八世紀後半十九世紀前半）

其時率如是。

③ 『皇朝蒙求』巻之上「保忠炙餅、宣時秉燭」（天保元年（一八三〇）自序）

其不拘如此。

④ 『大日本史蒙求』巻之五「藤綱清約、時頼儉素」（明治三年（一八七〇））

其淡薄如此。

⑤ 『瓊矛余滴続編』巻之下「頭忠執杓、時頼索醬」（明治十年（一八七七））

其澹薄如此。

⑥ 『日本蒙求続編』巻之上「時頼淡薄、泰時清廉」（明治十五年（一八八二））

其淡薄如^レ此。

⑦王以鏘訳：蓋當時之風尚如此。

⑧李均洋訳：那年頭、就是這個樣子。

⑨王新禧訳：彼時世風即如此。

⑩文東訳：當時的風尚便是如此。

⑪田偉華訳：當時的風尚便是如此。

『徒然草』第二百十五段は北條時頼の儉約の美德を讃えた章段で、その教訓性が人気を呼んだのであろうが、異種『蒙求』において最も漢訳された回数が多い『徒然草』の説話である。右にあげたように、『徒然草』の原文「その世には、かくこそ侍りしか」について、異種『蒙求』は②『日本蒙求』を除いて、「節儉」「不拘」「淡薄」「澹薄」といった時頼の儉約を賞賛する言葉でこの逸話に対する兼好の評語をまとめていく。これらの異種『蒙求』は漢文の学習に重点を置いており、いずれも『徒然草』の話を漢文で読者に伝えようとする姿勢は希薄である。むしろ逆に『徒然草』に見られる時頼の説話は当時には人口に膾炙するものであり、これらの書物はこの話を用いて漢文基礎の教育を試みたものといえる。この箇所についても、『徒然草』を忠実に漢文に訳するのではなく、この話の教訓性を強調して、最後にこのような言葉でまとめたのである。

それに対して、⑦以降の現代中国語訳はいうまでもなく、『徒然草』

の内容を知らない中国の読者にこの説話がわかるように訳する必要がある。この箇所についてはいずれも『徒然草』の原文に沿った訳文である。

また、『徒然草』の原文では、平宣時が夜に突然主君の時頼に呼ばれて、「直垂」、つまり武士の正服が準備できておらず困っているという場面があるが、江戸時代の日本の読者には「直垂」を説明する必要がないので、異種『蒙求』は「帽服」「装束」「衣冠」というような衣服を指す一般的な語彙を用いたが、日本の「直垂」は中国に対応する物がないため、これら現代中国語の訳文は処理するのに苦心した。⑪田偉華訳は「武士服」とその意味を訳して、ほかの訳本はいずれも「直垂」と直訳し、「当時の武士の常服」の注を付けている。

四、おわりに

以上のように、和文脈の『徒然草』を漢文・中国語に訳した資料を見てきた。『徒然草』がこのように日本と中国において漢文・中国語に訳されること自体、本書の漢籍的な性格という内的特質を物語っている。周作人は「以下訳した十四の章段は最も趣味性のある文章と思う部分である」と訳文の附記に述べたように、撰訳の標準は趣味性にあるとしているが、彼が付けた各章段名を見てもわかるように、その趣味性という

のは、むしろ思想性と言ったほうが妥当である。郁達夫も『徒然草』が「東方固有の思想を代表するに値する哲学書」と絶賛しており、当時の中国の知識人が『徒然草』に見いだしたものは美意識や人生論、儒仏道が兼在する中国的な哲学思想であり、いわゆる中国古典の影響を受けて生じた漢籍的な性格である。これは江戸時代以降の『徒然草』古注積書にも通ずる認識であるが、本章はこれらの中国語訳について考察することによって、『徒然草』が漢籍受容を通して獲得した漢籍的な性格を再確認し、『徒然草』のもうひとつの受容様態を提示した。

○平岡武夫・今井清校定『白氏文集』同朋社 一九七三年

テキスト

○吉沢貞人『徒然草古注積集成』勉誠出版 一九九六年

○北村季吟古註積集成18『徒然草文段抄』新典社 一九七九年

○周作人『徒然草』抄『語糸』合訂本 上海文芸出版社 一九八二年

○郁達夫『徒然草』選訳『宇宙風』第十期 一九三六年二月

- * 1 『徒然草』における漢籍の受容という問題について論述した先行論文は多数あり、総論的なものをいくつか列挙する。たとえば、久保田淳「出典・源泉・先蹤」(『諸説一覽徒然草』明治書院 一九七〇年)、川口久雄「徒然草の源泉―漢籍」(『徒然草講座四』有精堂 一九七四年)、古沢未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」(『日本漢文学史論考』岩波書店 一九七四年)などである。
- * 2 川平敏文「徒然草の漢訳」『文彩』六号 二〇一〇年三月
- * 3 島内裕子「徒然草の翻訳と研究」『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院 二〇〇九年
- * 4 『文段抄』(北村季吟古註釈集成18 新典社 一九七九年)の原文による。表記は私に改めた所がある。ただし、「而其文章優雅」から始まる最後の一文は『文段抄』原文に見られない。
- * 5 潘秀蓉『徒然草』と周作人―その特異な訳文をめぐって―『和漢比較文学』二九号 二〇〇二年八月
- * 6 韓玲姫・綿拔豊昭「周作人における『徒然草』受容―兼好の影響を中心に―」『図書館情報メディア研究』九巻一号 二〇一二年
- * 7 近世期兼好法師の伝記について『近世兼好伝集成』(東洋文庫 二〇〇三年)、『兼好法師の虚像… 偽伝の近世史』(平凡社 二〇〇六年)など川平敏文氏の一連の研究がある。
- * 8 周作人『苦竹雜記』岳麓書社 一九八七年
- * 9 鮑耀明『周作人與鮑耀明通信集』河南大学出版社 二〇〇四年
- * 10 劉岸偉「周作人の文体と漢文訓読」(『比較文学研究』九六号 二〇一一年六月)に、一九三二年一月『東方雜誌』二九卷二期に掲載された柳田国男著『遠野物語』の翻訳について、白話文語混淆文を用いたのは原文の文体に合わせた当然の選択ではあったが、文語の魅力を読者に伝え、自らの文体構築の糧にする意図も見られると、「こうした翻訳実践を通して、周作人は独自の口語表現を練り上げ、また古文を現代に蘇らせる道筋を見つけたのである」と指摘した。このような白話文語混淆文で翻訳する試みははやくも一九二五年の『徒然草』選訳の時に見られる。
- * 11 周作人「談翻訳」『苦口甘口』河北教育出版社 二〇〇二年

* 1 2 郁達夫は一九一三年に日本に留学しており、「中等教育」というのは一九一九年東京帝国大学経済学部に入學する前のことか。一九三六年の『徒然草』翻訳との間に十数年の時が経ったこととなる。

* 1 3 近藤春雄「郁達夫と徒然草選訳」日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』有精堂 一九七一年

* 1 4 謝立群「關於『徒然草』漢訳的幾点考証」『日語學習與研究』一三七号 二〇〇八年四月

* 1 5 周作人と郁達夫が参考したテキストを考えて、『徒然草』の本文は注4の『文段抄』による。

* 1 6 本注は訳者郁達夫による注釈。

附章 資料：周作人『徒然草』抄と郁達夫『徒然草』選訳

参考のために、周作人と郁達夫が選訳した『徒然草』全文を附す。は『語糸』合訂本（上海文芸出版社 一九八二年）を用いる。郁達夫『徒然草』選訳は『宇宙風』第十期（一九三六年二月）を用いる。字体は中国語の繁体字を日本の新字体に改めた。句読点などは日本語の習慣に従って適宜に改めた所がある。

一、周作人『徒然草』抄

徒然草是日本南北朝時代（一三三二～一三九二）的代表文学作品。著者兼好法師（一二八二～一三五〇）本姓卜部、居於京都之吉田、故通称吉田兼好。初事後宇多院上皇、為左兵衛尉、一三二四年上皇崩後在修学院出家、後行脚各処、死於伊賀、年六十九歲。今川了俊命人蒐其遺稿、於伊賀得歌稿五十紙、於吉田之感神院得散文隨筆、多貼壁上或写在經卷抄本的後面、編集成二卷凡二百四十三段、取開卷之語定名徒然草。近代學者北村季吟著疏曰徒然草文段抄、有這一節可以作為全書的解題。

「此書大体做清少納言之枕草紙、多用源氏物語之詞。大抵用和歌辭句、而其旨趣則有說儒道者、有說老莊之道者、亦有說神道仏道者。又或記掌故儀式、正世俗之謬誤、說明故實以及事物

之緣起、叙四季物色、記世間人事、初無一定、而其文章優雅、思想高深、熟讀深思、自知其妙。」

關於兼好人品後世議論紛紛、迄無定論。有的根拠太平記二十一卷的記事、以為他替高師直寫過情書去挑引塩冶高真的妻、是個放蕩不法的和尚、或者又說太平記是不可靠的書、兼好實在是高僧、又或者說他是憂國志士之遯跡空門者。這些爭論我們可以不用管他、只就徒然草上看來他是一個文人、他的個性整個地投射在文字上面、很明了地映寫出來。他的性格的確有點不統一、因為兩卷書裏禁欲家與快樂派的思想同時並存、照普通說法不免說是矛盾、但我覺得也正在這個地方使人最感到興趣、因為這是最人情的、比傾向任何極端都要更自然而且更好。徒然草最大的價值可以說是在于它的趣味性、卷中雖有理知的議論、但決不是乾燥冷酷的、如道學家的常態、根底裏含有一種溫潤的情緒、隨處想用了趣味去觀察社會萬物、所以即在教訓的文字上也富於詩的分子、我們讀過去、時時覺得六百年前老法師的話有如昨日朋友的對談、是很愉快的事。徒然草文章雖然是模古的、但很是自然、沒有後世復古典派的那種扭捏毛病、在日本多用作古典文入門的讀本、是讀者最多的文學作品之一。以下所訳十四節是我覺得最有趣味的文章、形式雖旧、思想却多是現代的、我們想到兼好法

師是中國元朝時代的人，更不能不佩服他的天才了。

一 憂患

有遭逢憂患感到悲傷的人，不必突然發心剃髮出家，還不如若存若亡的閉着門別無期待地度日更為適宜。顯基中納言曾云，「願得無罪而賞謫居之月，」其言至有味。

二 長生

倘仇野之露沒有消時，鳥部山之煙也無起時，人生能夠常住不滅、恐世間將更無趣味。人世無常、正是很妙的事罷。

遍觀有生、唯人最長生。蜉蝣及夕而死、夏蟬不知春秋。倘若優游度日、則一歲的光陰也就很是長閑了。如不知厭足、雖過千年亦不過一夜的夢罷。在不能常住的世間活到老醜、有什麼意思。語云、「壽則多辱。」即使長命、在四十以內死了最為得體。過了這個年紀便將忘記自己的老醜、想在人群中胡混、到了暮年還溺愛子孫、希冀長壽得見他們的繁榮、執着人生、私欲益深、人情物理都不復了解、至可歎息。

案仇野是墓地之名、鳥部山為火葬場所所在地。

三 中年

年過四十而猶未能忘情於女色的人，若只蘊藏胸中、亦非得已、但或形諸言詞、戲談男女隱密以及人家閨闈、則與年歲不相應、至不雅觀。大抵難看難聽的事有這幾種、老人混在青年中間、妄說趣話。卑賤人說世間權貴和自己如何要好。窮人好酒宴、鋪張齣客。

四 女色

惑亂世人之心者莫過於色欲。人心真是愚物。色香原是假的、但衣服如經過薰香、雖明知其故、而一聞妙香、必會心動。相伝久米仙人見浣女脛白、失其神通、實在女人的手足肌膚艷美肥沢、與別的顏色不同、這也是至有道理的話。

（案『元亨積書』卷十八云、「久米仙人者和州上郡人、入深山學仙方、食松葉、服薛荔。一日騰空飛過古里、會婦人以足踏浣衣、其脛甚白、忽生染心、即時墜落。」）

五 訶欲

女人豐美的頭髮特別容易引人注意。人品性質、只聽說話的樣子、就是隔着障壁也可以知道。有時單是尋常起居動作、亦足以迷亂人心。即使女已心許、却總還不能安睡、毫不顧惜自己、能受不可忍的苦辛、這都是為戀愛的緣故。

愛着之道根深源遠。六塵之樂欲雖多、皆可厭離、其中唯有色欲難以抑止、老幼智愚莫不如是。故諺曰、以女人髮作繩、能繫大象、以女人屐作笛、能招秋鹿。所當自戒、心恐懼謹慎者、即此惑溺也。

(案『大威德陀羅尼經』云、「乃至以女人髮作為綱維、香象能繫、況丈夫輩。」吹笛引鹿係日本傳說。)

六 好色

男子雖多才芸而不知好色、至為寂寞、殆如玉卮之無當也。濡染霜露、彷徨道途、父母之訓誡、世人之譏評、悉不暇聽聞、儘自胡思亂想、然而終於仍多獨宿、夜不成寐、如此生涯、至有風

趣。但亦非一味游蕩、須不為女子所輕、斯乃為佳耳。

七 獨居

妻之為物蓋非男子所应有者。聽人說是永久獨居、獨為愉快。

偶聞人言某已入贅、或某娶某女、已同栖了、令人對於男子生卑下想。如娶尋常女子、人將輕蔑曰、「這樣的女子也好、所以便配合了。」如女稍佳、又曰、「男子一定非常珍重、当作菩薩供養罷。」若真是美人、人言亦愈有因。且管理家務的女子至可惋惜、有了兒童、提携愛撫尤為煩苦。男子死後、留下女子剪髮為尼、漸即老醜、是即在死後尚極不愉快也。無論如何女人、朝夕相對、恐亦將厭足疏遠、在女子亦當感到冷淡。不如分居、男子時往聚會、雖歷時久遠、交情可以永統。偶爾往訪、輒復留連、亦殊有情趣。

(案這所說的弁法與近來藹理斯夫人所主張的「半分離的結婚」(Semi-detached Marriage) 相似、不過更是浪漫的罷了。『徒然草』第二百四十段中反對父母之命媒妁之言所結合的夫婦、他說、「不知他們第一句是說什麼話。」這真是大家都想問的一件事。他以為只有情人团聚、「互說往昔相思的苦辛、約會的艱難、這才有不尽

的情話。」此節更反對結婚、老法師的波希米人性質益發現無遺了。）

八 飲酒

在現世間飲酒則多過失、喪財、招病。雖云酒為「百藥之長」、百病皆從酒生。雖云酒可忘憂、醉人往往想起過去憂患至於痛哭。又在來世喪失智慧、破壞善根、有如火燒、增惡破戒、墮地獄。佻說、「與人飲酒者五百世無手。」

酒雖如是可厭、但亦有難捨之時。月夜、雪朝、花下、從容談笑、偶飲數杯、能增興趣。獨坐無聊、友朋忽來、便設小酌、至為愉快。：冬日在小室中、支爐煮菜、與好友相對飲酒、舉杯無算、亦快事也。

（案此篇係第一百七十五段之一部分、原文頗長、故從摘記。）

九 自然之美

無論何時、望見明月便令人意快。或云、「無物比月更美、」又一人與之爭曰、「露更有味、」其事殊有趣。其實隨時隨地無有一物不美妙也。

花月無論矣、即風亦足動人。衝岩激石、沅湘之流水、其景色亦至佳美。曾見詩云、「清溪月夜東流去、不為愁人住少時、」覺得很有興味。嵇康曾云、「游山沢、觀魚鳥、心甚樂之。」在遠離人居水草清佳之地、獨自逍遙、可謂最大之悅樂。

十 秋月

秋月特佳。或云、「月綵是如此、」不能弁別、殊乏雅趣。

十一 讀書

獨坐灯下、披卷誦讀、與古人為友、是最上的慰安。其書則文選之妙文、白氏文集、老子之書、南華之篇、以及此土學者所作、在古文學中多有妙品。

十二 法顯的故事

或聞法顯三藏往天竺、見故鄉之扇而悲、又臥病思得漢食、曰、「如此高人、奈何示弱于異國。」弘融僧都却稱歎曰、「真是多情和尚。」此言殊無法師氣、一何蘊藉乃爾。

十三 愛生物

家畜中有牛馬、加以羈絆雖亦可憫、唯係日用必需之物、亦屬無可如何。狗能防守、視人為勝、也不可缺、但他家多畜此物、偶不畜養別無妨礙。此外鳥獸皆屬無用之物。禁走獸於檻中、加以鎖繫、剪飛禽之羽翼、閉諸樊籠、使其懷念天雲、眷念山野、憂悶悵望、無時或已。設身處地、不能忍受、有情之人豈忍以此為樂乎。虐待生物、用以娛目、此桀紂之心耳。王子猷愛鳥、但觀林中飛鳴之鳥以為逍遙之友伴、不捕而凌虐之也。「珍禽奇獸不畜於國、」尚書亦云。

十四 人生大事

為無益之事而費時日者謂為愚人可、謂為謬人亦可。對於君國應為之事已多、其余暇日無幾。人所不得不營求者、一食、二衣、三住居。人生大事不過此三者。不飢、不寒、不為風雨所侵、閑靜度日、即為安樂。但人皆不免有病。如為疾病所犯、其苦痛殊不易忍、故醫藥亦不可忽。三者之上、加藥成四。凡不能得此四事者為貧、四事無缺者為富、四事之外更有所營求者為貪。如四

事節儉、無論何人當更無不足之慮也。

上辺十四篇中有九篇係去年旧稿、其余均係新訊。原文雖係古文、我却不想用古文去訊他、但終因此多少無意地夾進一点文去、這個我也不復改去、因為要用純粹白話來訊也似乎是不大可能的。十四年三月六日訊校竟記。

二、郁達夫「『徒然草』選訊」

序段

信无聊的自然、弄筆硯以終永日、將印上心来的无聊瑣事、渾渾沌沌、写将下来、希奇古怪、倒着寔也有点兒疯狂的別趣。

第一段

却说、人生斯世、谁也免不了有万千的願望。天皇位居至尊、寔在是誠惶誠恐、高不敢攀。皇族的枝枝葉葉、决非人間的凡種、其尊其貴、也是当然。一人之下、万人之上的攝政關白（朝廷重

鎮、以現代官制來翻訊、應是執掌全權的內閣。補成王的周公、挾天子的曹操、庶幾可以當得。）的行狀、更可不必提起。就是尋常的朝貴、凡由天子敕賜隨身護衛之臣的、都是尊嚴無比之屬、他們的子々孫々、即使淪落、也總帶有些嬌羞的風趣、別著幽閑。自此以下、若隨他風雲的身分、逢時得令之輩、則雖裝得滿面驕矜、自鳴得意、由旁邊的冷眼看來、可真一無足取了。

像做僧侶的法師那麼不為人所欣羨的人、世上原也很少。清少納言（枕草紙的作家、清原元輔之女、仕一條天皇皇后定子、與日本有數之女詩人紫式部齊名。）所說的「被人家視同木屑」之話、真是一點兒也不錯。假令聲勢喧赫、即使做了有官有位的紅僧、也不見得怎麼樣的了不得。正如增賀（參議橘恒平之子、系大和多武峰的高僧。）聖僧之所言、徒囿役于世上的名聞、得毋背於仙翁的御教。不過一心專念、修道棄世之人、倒也頗有為我們所欣羨的地方。

容貌豐采的超群、原是凡人都在願望的盛事。發言有致、而趣味津津、適不多談、而使人相對不厭、豈非很好。至若外貌堂堂、

而語言乏味、終於被人看出下劣的本性、那又是痛心的恨事了。

人品容貌原是天生成的、可是人的心、却為什麼不可以賢之更賢、精益求精地改移呢。本來是容貌根性都好的人、若沒有了才學、交錯入人品不高、容顏卑惡的群中、並且還更比他們不上而被壓倒的時候、這才真是意外的醜事。

真正的可貴可慕之事、是有用的實學、文字的制作、和歌的賦詠、音樂弦管的才能、故實禮儀的精通與夫朝廷典禮的諳熟、要使都足為人家的模範、才有意思。手筆佳靈而流利、歌聲嘹亮而中拍、逢人勸酒、謙讓有加、一若非辭不可的苦事、但結果倒也能傾吞下三杯兩盞的男子、才是真真的好漢。

第三段

凡百事情樣々堪能、而獨不解好色的男子、實在是太孤冷的人、大約同一只玉杯的無底、是一樣的風情。要每被晨霜朝露所淋沾、彷徨漂泊無定所、心懷着父母的訓誡、社會的譏訕、時時刻刻方寸不安、並且還要常常也成獨宿的孤眠、而不能安睡終宵者、才

覺得其味無窮。可是，也不要一味的惑於女色，由女人看來覺得也不是輕易可以到手的男子，那才是更妙更佳的神技。

第五段

並非是為了身逢不幸、沈入憂思、即便毫無遠慮地落髮而為僧、但將禪門常閉、使人不知主人的在否、別無期待、只一個人朝朝暮暮在那里過活下去、就此行徑、豈不甚美。善哉顯基中納言（即權中納言源頭基、為大納言俊賢之次子、仕後一條天皇、皇崩後、在大原出家為僧。）之言、他似乎這麼的說過「要並無罪名、而在極邊的徒流之所、看天而翫月。」這話實在說得不錯。

第六段

無論己身高貴的人、更況且並不足道的常人、總還是沒有兒子的。前中書王（即兼明親王、醍醐天皇的皇子、善詩文、仕至中務卿、故曰中書。）九條的太政大臣（即藤原伊通、仕二條天皇、有二子、俱早歿。）花園的左大臣（即源有仁、輔仁親王之子、歷仕鳥羽、崇德、近衛的三朝、保延二年進位左大臣。）都願意沒有

子孫。大鏡的作者、也借世繼翁所談的故事、評染殿的大臣說「子孫總是没有的好、後代的不振、實在是一件坏事。」聖德太子（用明天皇的長子、入承推古天皇、為皇太子、日本佛教的興隆、聖德太子一人之功。）於生前築生壙的時候、據說也會這樣的說過「這兒把我切了、那兒把我開斷了、我原不想有子孫的。」

第七段

愛宕山野的朝露、鳥部山麓的青煙、若永無消失的時候、為人在世、也像這樣的長活下去、那人生的風趣、還有什麼。正唯其人世之無常、才感得到人生的有味。

統觀生物、只有人最長命。蜉蝣不知朝暮、夏蟬不識春秋。胸懷曠達、悠悠而但過一年、也已經是無上的妙境了。貪多無厭、雖過千年、也不過像是一宵的短夢。在這一個人住不到頭的世界、徒贏得了衰遲的醜相、終於有何益處。壽命長了、耻辱也多。最多是活上了將近四十而死、那便是頂漂亮的處置。

過了這一個年紀、就再也没有自慚形穢之心、只想在人前露面、

直到夕陽的晚境、還愛子孫、予測着兒孫的騰達飛黃、徒深貪圖苟活的心思、凡百的情趣、一概不知、老年醜態、就將畢露了。

第八段

人世上惑人之事、無如色欲、人心真是愚妄的東西。香料的熏添、本屬短暫、明知衣上的濃香、為時不久、但對於難耐的芳馨、也必勢難自禁、少不得鹿衝心頭。久米仙人見了水邊洗物的女人白腿、便失神通、實在是為了手足皮膚的純美、肥白光鮮、不同凡艷、他的從空下墜、也是應該。

(注) 元亨積書十八：久米仙人、和州上郡人。入深山、學仙法、食松葉、服薜荔。一旦騰空、飛過故里、會婦人以足踏浣衣、其脛甚白、忽生染心、即時墜落。

徒然草、為日本兼好法師的隨筆集。法師生長於建武中興的時代(當十四世紀中葉、我國元順帝時)、實為吉野朝一大學者、兼通神儒之道、而行文又能將漢文和語、融洽一爐。思想脫胎老莊、但文体則於清少納言之枕草紙為近似。徒然草在日本、為古文學

中最普遍傳誦之書、比之四子書在中國、有過之無不及。日本古代文學、除源氏物語外、當以隨筆日記為正宗、而徒然草則又隨筆集中之錚錚者、凡日本人之稍受教育的人、總沒有一個不讀、也沒有一個不愛他的。我在日本受中等教育的時候、亦曾以此書為教科書、當時志高氣傲、以為他只拾中土思想家之糟粕、立意命題、並無創見。近來馬齒加長、偶一翻閱、覺得它的文調的諧和有致、還是余事、思路的清明、見地的周到、也真不愧為一部足以代表東方固有思想的哲學書。久欲把它翻譯出來、以自消磨空閑歲月、無如懶惰性成、諷不到一個鐘頭、就想擱筆。而原文文調的鏗鏘、實在也是使我望而却步的一大原因。現在先將頭上的几段、勉強譯作時文、深望海內外的同好者、有以教我。

徒然草的注積書、在日本同源氏物語的注積本一樣、真是汗牛充棟、不知有幾百幾千。大致以文段抄為最簡明。這幾段譯文所根據的原書、也就是這個本子。

在中日外交紛紜的今日、將這種不符合实用的閑書翻譯出來、或者要受許多愛國者的指摘。但一則足以示日本古代文化如何的曾受過我國文化的影響、再則也可以曉得日本人中原也有不少是

酷愛和平、不喜侵略、如我國的一般只知讀書樂業的平民、則此舉也不能全說為無益。假使世界太平、生活安定、而我個人的身體康健的話、我倒很想在這一二年中、靜心讀出幾部日本中古以後的日記隨筆集來、以饗讀者、這或者比空言親善、濫說文化溝通等外交辭令、總要比較得實在一點。一九三六年一月十日訊後記

以上、『徒然草』の漢籍受容と漢訳という問題をめぐって考察を加えた。『徒然草』の漢籍受容は、先行する日本の古典作品に取り入れられた漢籍の表現の影響を受けるものが多く見られ、これらの表現を取り入れる際に、漢籍の原典および中間的媒体をも受容し、しかもその文章から離れて、自在に自身の文章に絶妙に溶け込むように工夫している。つまり、『徒然草』に先行する中国と日本の古典文学作品という中間的な媒体を通じた間接的・重層的な漢籍受容の方法が認められる。漢籍が中国から日本に伝来した後に、日本の古典作品に用いられる中でその意味と用法は変容したが、そうした日本化して行く過程において、『徒然草』の漢籍受容を位置づけることができる。

また、『徒然草』が広く読まれ、再発見されたとも言える近世以降には、こういう漢籍の受容を通して獲得した漢籍的な性格が改めて注目され、異種『蒙求』という作品群の中に和文の『徒然草』を敢えて漢訳して受容する例が認められる。これら異種『蒙求』に見られる『徒然草』の逸話は、数量上と内容上の違いから、十九世紀中葉頃を境に前期と後

期に分けることができる。これは川平敏文氏が指摘したが近世期の『徒然草』受容の様相の変遷と軌を一するものである*1。近世における作者兼好の偽伝の流布状況も考え合わせてみると、異種『蒙求』に見られる『徒然草』と作者兼好の伝記とに関連する話の漢訳はこのような近世の時代風潮の中に位置づけることができる。漢訳という近世期に盛んに行われた『徒然草』の注釈・評釈以外のもうひとつの受容様態を提示し、近世期『徒然草』受容の一端を明らかにした。第三部では、中華民国時代に中国の文人が翻訳した『徒然草』の中国語訳について考察を加えた。その訳する章段の取捨選択と、日本の異種『蒙求』に見られる『徒然草』の章段の取捨選択とを比較すると、近世期の『徒然草』の受容には奇譚性・教訓性の重視、中国語訳の思想性の重視といった傾向が浮かび上がる。

本論文は受容と影響という二つの視点から、『徒然草』は、漢籍由来の知識を原典から受容するとともに先行する古典文学作品の中で日本化された表現なども重層的に受容している。こうした漢籍受容を通して

獲得した一種の准漢籍的な地位を背景に江戸時代には漢訳されて享受される事例のあったことを指摘し、そうした享受の方法を考える際に重要な作品群であった異種『蒙求』の歴史の変遷とその内容について考察した。『徒然草』という書物の古典としての成り立ちの一端を明らかにできたと思う。『徒然草』と漢籍との関係を考える際に、これまで積み重ねてきた本書の出典研究を踏まえて、漢籍が日本に伝来した過程において生じた変容に焦点を当て、『徒然草』に見られる中間的な媒体を通して間接的・重層的な漢籍受容の方法という総体的な方法論に辿り着いた。『徒然草』は日本の和文・漢文作品を通して重層的に漢籍を受容したが、この過程において和文と漢文作品の位相差を融合して、漢籍的な性格を獲得しており、独自の文体表現を織り成した。これは本書が長く愛読され、人口に膾炙する古典作品として成り立った一因でもある。和文の『徒然草』が「吾国之魯論」*2、つまり日本の『論語』と言われるほど、漢籍的な性格が強く見られ、いわゆる「和文の漢籍」*3たる書物であると評された理由でもある。日本と中国において漢文と現代中国語に訳されたことは、本書のこのような性格を物語っている。今後、和と漢の間の比較文学の問題を考える時、単に漢から和へ、或いは和から漢へと一方的な影響関係のみではなく、両者の背後にある文化的な背景にも注意し、和漢を行き来する過程における表現の受容と変容も考慮しなければならぬと思う。

* 1 川平敏文「徒然草をめぐる儒仏論争―中世的学知の再編」『徒然草の十七世紀―近世文芸思潮の形成』岩波書店 二〇一五年

* 2 藤井懶齋『徒然草摘議』（貞享五年（一六八八）刊）序文に「徒然草者、逸民卜部兼好之所^二筆述^一。而百余年来、盛行於世^一。読者或謂吾国之魯論也。是以初学之徒不^レ察^下其説之良毒相雜而有^レ使^中人暗受^レ病者^上、靡然相伝習矣^一」と儒者の立場で本書の老仏思想を批判しているが、当時において本書がいわゆる準漢籍的な書物として流行していたことが窺われる。

* 3 川平敏文「徒然草の「発見」―慶長文壇史の一齣」『徒然草の十七世紀―近世文芸思潮の形成』岩波書店 二〇一五年